ガールズ&パンツァー
GIRLS und PANZER der FILM
劇場版
下
鈴木貴昭
杉本功
カバーイラスト
柳野啓一郎
扉・本文イラスト
才谷屋龍一
原作
ガールズ&パンツァー劇場版製作委員会
MF文庫
J

ガールズ&パンツァー
GIRLS und PANZER der FILM
劇場版
下
鈴木貴昭
カバーイラスト
杉本功／柳野啓一郎
扉・本文イラスト
才谷屋龍一
原作
ガールズ&パンツァー
劇場版製作委員会

大学選抜
チーム
車長
ルミ
車長
アズミ
車長
島田愛里寿
車長
メグミ
PANZER
A41センチュリオン ほか
黒森峰
女学園
黒森峰
車長
逸見エリカ
車長
西住まほ
PANZER
ティーガー、ティーガーII、パンター×2

サンダース大付属高校
あさがおチーム
砲手 ナオミ
車長 ケイ
車長兼通信手 アリサ
» PANZER M4シャーマン、M4A1、シャーマン・ファイアフライ
知波単学園
あさがおチーム
車長 名倉
車長 細見
車長 玉田
車長 寺本
車長 福田
車長 西絹代
車長 池田
» PANZER 新砲塔九七式中戦車チハ×2
旧砲塔九七式中戦車チハ×3、九五式軽戦車
プラウダ高校
ひまわりチーム
装填手 ニーナ
車長 クラーラ
車長 カチューシャ
車長 ノンナ
» PANZER T-34/85×2、IS-II、KV-2

聖グロリアーナ女学院
たんぽぽチーム
ST.G.GC
装填手
オレンジペコ
砲手
アッサム
車長
ダージリン
車長
ローズヒップ
» PANZER
チャーチル、マチルダ、クルセイダー
アンツィオ高校
たんぽぽチーム
操縦手
ペパロニ
車長
アンチョビ
砲手兼通信手
カルパッチョ
» PANZER
カルロ・ヴェローチェCV33
継続高校
たんぽぽチーム
継
砲手兼装填手
アキ
車長
ミカ
操縦手
ミッコ
» PANZER
BT-42

ガールズ＆パンツァー　劇場版（下）

鈴木貴昭

原作：ガールズ＆パンツァー劇場版製作委員会

GIRLS und PANZER der FILM

CONTENTS

扉・本文イラスト／才谷屋龍一

原画／杉本功　仕上／原田幸子　特効／古市裕一　ＣＧ／柳野啓一郎（グラフィニカ）

CONTENTS

序章　各校色々

海上に浮かぶ巨大な学園艦、側面にきつい角度が付いた逆ピラミッド形をした特徴的な後続は、聖グロリアーナ女学院のものであった。その巨大な学園艦の艦首部は広大な森となっており、森の中には、英国の名門ホテルをベースに多少コロニアル様式が入ったような、瀟洒（しょうしゃ）な洋風建築が建っている。

紅茶の園。

この建物の通称である。

本来はヴィクトリアン・ホールという名前があったのだが、いつしかそれは忘れ去られ、学園内の案内図にすら、通称のほうが書かれるようになっている。というのも、ここが聖グロリアーナ戦車道の本拠であり、そこに集う選ばれた生徒たちが、紅茶の名前を代々受け継いでいるからであった。

その一室で、聖グロリアーナ女学院戦車道隊長のダージリンが、白い布を掛けたテーブルの前にある椅子（いす）に優雅に腰掛けていた。テーブルにはアフタヌーンティー用のティースタンドが置かれ、キュウリのサンドイッチやスコーンなどが並べられている。

手にしたカップを持ち上げ、立ち上る芳醇（ほうじゅん）な香りを楽しむとゆっくりと中身を口に含む。

「ダージリン、大洗が動いたわ」
　扉を静かに開けて、情報処理学部第６課所属であり、聖グロリアーナ女学院戦車道の隊長車、チャーチルの砲手でもあるアッサムが、書類を手に室内に入って来た。厚い絨毯が敷かれているのもあるが、猫のように足音を立てずに室内を進み、ダージリンの斜め後ろに立つと、書類を渡す。
　書類をぱらぱらとめくったダージリンは、隣に座っているオレンジペコに視線を移す。
「オレンジペコ、各校の状況は？」
　聞かれたオレンジペコは、手元のファイルに視線を落とす。
「ヨーグルト学園は島田流お膝元ですし、無理との回答が来ました」※1
「そう」
「ボンプル、ワッフル、青師団、ヴァイキング水産からは協力は厭わないが、出ても足手まといになるだけと。伯爵高校は出せるものなら出したいが、車輌の修理が終わっていない。ＢＣ自由は相変わらずお家騒動の真っ最中で、マジノもそれに駆り出されているそうです」※2
　その報告を聞いて、ダージリンがため息をつく。
「相変わらずね」
「ええ、ＢＣ自由の右舷側と左舷側の主導権争いは、設立以来の伝統ですから」

アッサムが静かに応(こた)え、オレンジペコが話を続けてもいいかと、目で確認する。
　それをダージリンが小さく頷(うなず)いて促す。
「我が校と繋(つな)がりのある所では、コアラの森は動かせる車輌がないとの事でした。ですが、南北海道のメイプル高校からは、地元なので最悪の場合はバレンタインなら何とかする、と」※3
　アッサムがため息をつく。
「結局は事前予想通りですね」
「あまり強く交渉しても、どこに情報が洩(も)れるか分からないから、これで十分」
　ダージリンがティーカップをソーサーに置いて、納得した表情を浮かべる。
「では、ポセイドン作戦開始よ！」
「了解！」

　熊本県にある戦車道西住(にしずみ)流宗家、その広大な敷地の一画には、これまた巨大な倉庫が鎮座していた。その前に立つのは西住家の長女であり、名門黒森峰(くろもりみね)女学園戦車道隊長でもある西住まほであった。まほの後ろには、影のように副隊長である逸見エリカが付き従っている。
　まほが、倉庫の側面にある小さな扉に手を掛けて力を入れると、予想外の抵抗にあって

思わず小さく声を上げる。
「っつ！」
夜間に突然招集がかかって、戦車の訓練が行われるのも珍しくない西住（にしずみ）家では、敷地内の戦車倉庫の扉は開け放してあるのが普通である。それと同時に、戦車自体もいつでも動かせるようにしてあるはずだった。
だが、その扉に鍵がかかっているのに、まほはちょっと驚いた。
家に戻って鍵を取って来るか、それとも……と考えた所に、足音がする。
そちらを振り向くと、母親の西住しほが厳しい顔をして立っていた。
「こんな時間に何をしているんですか？」
「いえ、ちょっと自主練をしようかと」
内心の動揺を押し隠し、平然を装う。
「ここの車輌（しゃりょう）は、自主練には向いてませんよ。付いて来なさい」
「……はい」
黙ってしほの後に付いていくと、敷地内の演習場を横切り、普段は全く使用されていない区画へと向かっているのに気が付く。エリカも目を丸くして、小声でまほに呟（つぶや）いた。
「こんな所があるんですね」
黙って頷（うなず）くまほ、しほは歩みを止めずに進み続ける。

視界が開けると、そこには巨大な建造物群が鎮座しており、エリカが驚愕(きょうがく)する。
「あれは」
「旧格納庫、今は使っていないはず」
だが、10階建てのオフィスビルよりも背の高そうな巨大格納庫が二つ並んでおり、その正面扉は大きく開かれていた。その前にしほが立つ。
その中を指差して、口を開いた。
「あれを使いなさい」
そこにあるのは、巨大な飛行船。
外見は旧式のツェッペリン飛行船とほぼ同様だが、フレームの大部分と外装の一部に軽量素材やカーボンを使用し、大幅に軽量化と構造の強化を図り、機体内の浮力だけではなく、更には強力なエンジンを搭載して揚力を発生させて、最大積載量120トンを実現しているハイブリッド飛行船であった。※4
黒森峰(くろもりみね)女学園が保有する戦車のうち、マウス以外は燃料と弾薬を搭載したままで運べる能力を有しており、戦闘重量が約70トンにも達するティーガーⅡも、戦闘重量が約45トンのパンターなどと組み合わせれば、その支援用機材と同時に運ぶのも可能であった。※5
西住流宗家ではこの機体を地方への遠征やデモンストレーション用に使用していたが、より大量の車輌を使うことが増えたため、めったに使われることなく、普段は格納庫の中

で眠っているような状態であった。
しかも、その下には黒森峰女学園のカラーリングを施した戦車までが置かれている。
それを見たエリカが目を丸くする。
「何で、私のティーガーⅡが」
「いや、あれは学校のと別車輌だ」
「そうよ、我が家の重練習用機材。自由に使って構わないわ」
まほがティーガーⅡの隣に並んでいるティーガーⅠに近寄って、そっと手を当てる。そこにうっすらと残る白い文字の砲塔番号の上から、赤で縁取られた番号が書かれているのに気が付いた。
はっとして、母親の方を見る。
「この車輌は」
「誰も使っていないから、ちょうどいいでしょう?」
無表情で答えるしほ。それをまほがじっと見つめる。
その様子をティーガーⅡの横から見つめるエリカ、未だに西住家のコミュニケーションは、言葉が少なすぎてよく分からない所があると思いつつも、そんな考えは敬愛する隊長とその母親に対して不敬だと軽く頭を振って、忘れようとする。
そんなエリカを、何をしているんだろうという表情を浮かべたまほが見ると、しほが話

を続けた。
「全てお父さんが整備したから」
それを聞いて、まほはぱぁっと顔を輝かせる。
まほとみほの父親は寡黙で自己主張は少ないが、戦車や機材の整備に優れ、機構が複雑で重い車輌が多いドイツ戦車を、少々振り回しても壊れないように調整するのにも長けているので、西住流の縁の下の力持ちとして欠かせない存在であった。
そんないつも機械油の匂いを漂わせた父親の大きな手が、まほは大好きだった。
しほがまほをじっと見つめて、飛行船を指差す。
「行ってきなさい、西住流の名に恥じぬよう」
「はいっ」
それにまほが力強く答える。
「西住流の戦い方というものを、存分に見せて来なさい。北海道の門下生に、係留地も既に確保させてあります」
そう告げると、しほはエリカの方を向いた。
「エリカさん」
「はっ、はい」
緊張してエリカは背筋をピンと伸ばす。
「この試合が終わったら、うちに泊まりに来なさい」

「それって」
何を言われるのかと緊張していたエリカに、しほが意外な内容を告げた。思わず、顔が緩みかけるのを、意志の力で必死にとどめる。
「ええ、二人でたっぷりと特訓してあげます」
「はいっ！」

聖グロリアーナ学園艦通信室、お茶を飲みながらダージリンが歌うように呟く。
「秋の日のヴィオロンのため息の」**※6**
その内容を、後ろでオレンジペコがモールス信号で打電している。

サンダース大学航空輸送科のマークを付けたC－5Mスーパーギャラクシーが、悠然と夜空を飛行している。
そのコクピットでは、アリサが通信を聞いて、内容のメモを取っている。
メモを取り終わると、それをケイに渡す。
「ひたぶるに身にしみてうら悲し」
電文自体が暗号になっており、最初は決行を示しており、この節では試合の内容を伝えている。

そのままならフラッグ戦だが、こうやって入れ替えてあるという事は、
「まさかの殲滅(せんめつ)戦ですか」
と、アリサがため息をついた。
「面白くなってきたわね」
内容を見て、ケイがにんまりと会心の笑みを浮かべた。

波の強い北の海を、プラウダ高校のマークを付けた、巨大なポモルニク型エアクッション揚陸艦が疾走していた。航続距離が55ノット時に540キロメートルと少々短いのが難点だが、青森から苫小牧(とまこまい)までなら、余裕で往復可能であった。※7
その艦橋では、ノンナがヘッドホンに耳を当てて、通信の内容を書き留めている。
窓際では、カチューシャがノンナ手作りのボルシチを、美味(おい)しそうに食べていた。
「北の地にて飲み交わすべし」

夜の空を、側面に黒森峰(くろもりみね)女学園のマークが入った巨大な飛行船が悠然と飛行している。
機体下のキャビン先頭にある操縦室では、エリカが舵輪を握って操縦を行っていた。
船長席にまほが立っていると、横から黒森峰の制服を着て、茶色のやや巻き毛をショートカットにした少女、赤星小梅(あかぼしこうめ)が電文を手渡す。

まほが内容を読み上げると、静かにエリカが口を開いた。
「熱い紅茶ですね」
それに何も答えず、まほは無言で飛行船が進む夜空を見つめ続けていた。

海に面した線路を、車体前面と側面に知波単学園のマークを入れた、Ｋ２型蒸気機関車改が軽快な音を立ててひた走る。※8
その後ろにはリクライニングシートとテーブルを備えた優等客車と、ボックスシートの一般客車、シートを掛けた貨車が延々と繋がり、最後尾には重連の蒸気機関車が押していた。
優等客車のボックス席では、西が電文を見つめている。
「紅茶って飲んだことないんだよな〜」
後ろの一般客席では、知波単学園の生徒たちがまるで修学旅行のように、窓にへばりついて景色を見つめていた。
カーブに差し掛かった所で、後ろに繋がる貨車が目に入って、玉田がふっと口を開く。
「あれ、そういえば持って行くのって何輌だっけ」
「覚えてない」
細見が首を傾げる。

「ま、いっか。持ち出せるの全部持ち出してきたし、足りないよりは多い方が良いよね」
「憧れの物量戦でありますな！」
福田が目をキラキラさせて、貨車をいつまでも眺めていた。

遠くから狼の遠吠えが聞こえる深い森の中で、継続高校のミカたちが、倒木を椅子代わりにしてたき火を囲んでいる。全員、横には大きなリュックを置いて、アキの後ろには開き掛けのシュラフも置いてある。
アキが電文を読み上げると、ミッコが手にしたグラスの中身を見つめた。
グラスの中には、薄いオレンジ色をした濁った液体が入っていた。
「紅茶いらないー。シマがあるし」※9
「お茶会、楽しそうですよ」
グラスを持ち上げたミッコに対し、他の学校との交流に興味津々のアキが、参加を促すように誘い水を掛ける。
それを聞いて、ミカが静かにカンテレを鳴らす。
「刹那主義には賛同できないね」
焚火の煙とカンテレの音だけが、月に向かって昇って行った。

第一章　十校十色

白い雲が多少あるが、良く晴れた空。
その天気とは裏腹に、みほの心は重く沈んでいた。
試合まで後一時間となり、パドックで各車輌の最終点検を行っている最中で、精力的に働いている各車輌の乗員を見て、暗い顔は出来ないと気を引き締める。
だが、どんなに気を引き締めても、この先の戦いを考えると陰鬱になってしまう。
圧倒的な戦力を誇る大学選抜、しかもM26パーシング重戦車を主力として、フル編成の三十輌を出してくるのは間違いなかった。
それに対して、大洗女子学園の保有する戦車は僅か八輌。
個体戦力としても、レオポンさんチームのポルシェティーガーがパーシングと互角程度で、他の車輌ではどれも苦戦するのは必至であった。あんこうチームのⅣ号やカメさんチームのヘッツァー、カバさんチームのⅢ突が装備している48口径75ミリ砲は優秀だが、100メートルまで近付いても、パーシングの114・3ミリある防盾を抜くのも、角度次第では101・6ミリの正面装甲を貫くのも難しい。
逆にパーシングの50口径90ミリ砲M3は、1000メートルの距離から通常徹甲弾でポルシェティーガーの正面装甲を貫いて来る。

相手がアウトレンジで楽々と撃破してくる車輌の集まりの上、数も4倍近いとなれば、少々の乗員の練度や作戦程度では戦力差を覆しようも無い。

極論、大学選抜が三輌がかりで大洗の車輌一輌を潰して、それが全部相討ちになったとしても、殲滅戦である以上、大学選抜側にはまだ六輌も残ってしまう。

前日の夜には他のメンバーに対して笑って見せたが、みほの脳裏では、ぐるぐると出口の無い袋小路を回り続けていた。

どうしても勝ち目を見つける事が出来ない。

隘路に持ち込んでゲリラ戦で、少しずつ戦力を削って行くのが最善の手だが、そんな見え見えの手に引っ掛かる相手では無いだろうし、それ以前に戦力の損耗を前提に力押しされると、そのまま踏み潰されてしまう可能性が大きい。

そこに遠くからエンジン音が響いて来た。

その音に、みほがはっとして顔を上げると、優花里がいち早く車輌に気が付く。

「あれはM26パーシング重戦車です！　やっぱり大学選抜の車輌はパーシングだったんですね。あれは下手をすると2000メートルからでも、うちの車輌は全部抜かれます！」

優花里の叫びに、沙織が呆れた声を出す。

「それ、昨日も聞いたから」

戦車の上には、どこかで見た少女が乗っている。

「ん？」
麻子がいち早く乗員に気が付いた。
みほも目を凝らして、淡い茶色の髪の色に気が付く。
「あっ、やっぱり……」
沙織たちも、誰か気が付いてざわざわし始める。
「あの子、ボコミュージアムで会った子だよね……」
「確かにそうです」
優花里が、手元のファイルをめくる。
「大学選抜チームの隊長は、島田流家元の娘ですよね。確かまだ13才だったかと」
「戦車に乗ると大人びて見えるな」
ボコミュージアムにいた時の子供らしさとは打って変わって真剣な表情を見て、麻子がちょっと驚いた。
パーシングはみほの前に止まり、車長席から少女が、手助けをしようとする横の乗員の手を軽く払って、身軽に飛び降りる。
みほの前に立つと、少女が名乗りを上げた。
「島田流次期家元・島田愛里寿！　西住流との長年の因縁……ここで決着を付ける！」
名乗りに、驚きのあまりみほは何も答えられない。

その間に、再びパーシングに乗って去って行く愛里寿。
黙ってみほは、その後ろ姿を見つめるしかなかった。

時間はあっという間に過ぎ、試合開始時間直前となった。
既に開始宣言地点には、審判員と大学選抜側の隊長である島田愛里寿が整列していた。
みほは歩きながら眉をしかめ、俯いてまだ作戦を考え続けている。
「相手を山岳地帯におびき寄せて、分散させて各個撃破できれば、勝機は見えるはず。多少、挑発すべきかも……。でも向こうもこっちの考えは読んでいるだろうし、裏の裏をかくしかない……。それは危険すぎる。相手の車輌は格上で経験も実力も上……。もしかすると今度ばかりは……」
目を瞑り硬い表情のまま、重苦しい雰囲気を纏わりつかせて愛里寿の前に立つ。
整列したのを見て、審判長の蝶野が声を掛ける。
「ではこれより、大洗女子学園対大学選抜チームの試合を行います」
みほが顔を上げると、愛里寿の後ろには140名を超える大学選抜のメンバーが並んでいた。それに対して、みほの後ろに並んでいるのは、大洗女子学園戦車道履修者総勢31名。
乗員の数だけでも圧倒的な違いがあり、みほは、あの全てを倒さねばならないのかと

瞬絶望的な気分に襲われる。だが、背負った31名、そして大洗女子学園全ての生徒、関係者の気持ちを思い出し、きっと顔を上げる。
「……負けるわけにはいかない」
心の中で小さく呟く。
蝶野の声が響いた。
「礼」
「よろ（しく）」
これで全てが決まる、そう思った瞬間、
「待った――っ！」
試合会場に大音声が響き渡った。
後ろから聞こえた声に、みほは思わず振り返る。
視線の先には、丘の向こうから四輌の戦車が姿を現した。
中央には見慣れたティーガーⅠ、その隣にはティーガーⅡ、更にその左右にはパンターが並んでいる。
「……お姉ちゃん!?」
突然の展開に周囲の誰もがついて行けない間に、ティーガーが整列している一同の横に停車する。
同時に、車長用のキューポラから一瞬で身を乗り出し、そのままの勢いで車体前方へと

駆け下りてくる乗員の姿。
普段の黒森峰の黒いパンツァージャケットではなく、白地に緑のセーラー服を着ているのを見て、ざわめきが上がる。
ウサギさんチームのあゆみがいち早く声を上げた。
「黒森峰の隊長じゃん！」
「え〜でも、あれ、うちの制服〜」
だが、桂利奈がツッコミを入れる。
「大洗女子学園西住まほ」
「同じく逸見エリカ」
「以下18名、試合に参戦する」
それを聞いて、大洗女子一同が更にざわつく。対して、愛里寿は平然として表情も変えない。
「短期転校の手続きはすませてきた」
言うなり、まほが手にした「交換留学のため、短期転校」と書かれた書類を見せつける。
「日本戦車道連盟の許可も取りつけてある」
横のエリカが新たな書類を取り出す。

そこには、「日本戦車道連盟　特別許可証」と書いてある。内容は、「文部科学省主催『大学選抜　対　大洗女子学園』特別試合にあたり、上記の者は在学制限規定を適用外とし、短期転校による公式試合への参加を特別に許可する」とあり、日本戦車道連盟理事長児玉七郎のサインと判が押してある。

それを見て、みほが驚きから喜びの表情を浮かべた。

「お姉ちゃん……ありがとう」

みほの言葉に、一瞬口元が緩みそうになるが、まほはそれを隠すようにことさらに無表情を装った。

観客席の大型ディスプレイに、まるで事前に準備してあったかのように、新規参加車輌が次々と表示される。

それを見てどよめく観客。

「ティーガーとパンターか！」

「一挙に戦力が1・5倍だ」

「それでもまだ戦力差は倍以上違うぞ」

来賓席では、戦車道連盟理事長が扇子で扇ぎながら、涼しい顔で大型ディスプレイを見つめていた。自分が短期転校の許可を出したのだから、当然これを知らない訳がない。

当然ながら、その隣では、文科省の辻局長が青筋を立てて怒りの声を上げる。
「戦車まで持ってくるのは反則だ！」
それにしれっと理事長が韜晦する。
「みな私物なんじゃないですか。私物がダメってルールにありましたっけ？」
辻が、理事長に食って掛かる。
「卑怯だぞ！」

都内某所。
リアルタイムで中継される映像を暗い部屋の中で見つめる一団がいた。
駆け付けて来た黒森峰女学園の車輌を見て、一人がテーブルを叩く。
「くそっ、この手があったか！」
「短期転校まで行かなくても、交流試合で底上げが可能か？」
「誰だ、誰が裏で糸を引いている？」
「これを利用して次の一手を、世界で勝てるプロリーグではなく、勝てる戦車道を作り上げるのは可能か？」
「今すぐ情報を集めろ」
「他にも来たぞ」

「何だと⁉」

静寂の中、コンチネンタルR－975空冷星形エンジンの乾いた音が響き渡る。
それを聞いて、優花里（ゆかり）がぱっと表情を明るくする。
「あの音は！」
音の先には、サンダース大学付属高校のマークを付けたM4シャーマン、M4A1、そしてシャーマン・ファイアフライが並んで走って来た。※10
無線を拾っている観客席用のスピーカーから、乗員の声が響き渡る。
「私たちも転校してきたわよ！」
「ケイさん！」
優花里が満面の笑みを浮かべると、ウサギさんチームも万歳をする。
「今からチームメイトだから！」
「覚悟なさい！」
ナオミとアリサの声も響き、アヒルさんチームの面々も大喜びをする。
「サンダースが来た！」
その瞬間、上空をC－5Mスーパーギャラクシーが轟音（ごうおん）と共に通過していく。
優花里が目をキラキラさせながら感激する。

「黒森峰とサンダースの皆さんが加わってくれるなんて！」
「鬼に金棒ね！」
「虎に翼」
沙織と麻子がそれに続ける。
その喜びの声に重なるように、今度は液冷ディーゼルエンジンの音が響く。
そこにはT－34／85を先頭に、右にIS－Ⅱ、左に同じくT－34／85、後方にはKV－2の姿があった。
車内では、カチューシャが不満そうに頬を膨らませている。
「もー、一番乗り逃しちゃったじゃない！」
優しく諭すようにノンナが問い掛ける。
「お寝坊したのは誰ですか？」
「まぁ別に来たくて来たわけじゃないんだけどね！」
カチューシャが、照れて僅かに頬を赤くすると、横を向いてごまかした。
だが、それにもノンナが追い打ちをかける。
「でも、一番乗りして、カッコイイとこ見せたかったんですよね？」
「一々うるさいわねっ！」
そでをプラプラさせながら、カチューシャが怒鳴ると、ノンナが笑みを更に大きくし

た。
今度は、チャーチルを中心に、左にマチルダII、右にクルセイダーが続く。速度がありすぎて、クルセイダーは蛇行しながら、遅い残りの車輌に合わせていた。
ダージリンがティーカップを手に、大洗の制服を着て微笑んでいる。
「やっぱり、試合にはいつものタンクジャケットで挑みますか」
「じゃあ何で、わざわざ大洗の制服揃えたんですか？」
「みんな着てみたかったんだって」
オレンジペコがとがめる様に聞くと、ダージリンが軽く肩をすくめて笑みを浮かべる。

みほはもう完全に驚きを隠せない。
「グロリアーナやプラウダの皆さんまで!?」
更にはもの凄い速度でＣＶ33が爆走してくる。※11
「大洗諸君！　ノリと勢いとパスタの国からドゥーチェ参戦だ！　畏れ入れー！」
スピーカーからは、アンチョビの声が響き渡った。
操縦席のペパロニが、アンチョビを茶化す。
「今度は間に合ってよかったっすねー」

アンチョビに一旦押しやられたカルパッチョも、アンチョビの肩を押してマイクに顔を寄せる。

「カバさんチームの貴ちゃーん、来たわよー」

「ひなちゃん‼」

カルパッチョの声を聞いて、喜ぶカエサル。それを何とも言えない優しさと生暖かさが混ざった視線で、他のカバさんチームのメンバーが見つめている。

それに気が付いて、一瞬顔を赤くすると、カエサルが慌てて真顔になる。

「カエサルだ」

だが、カバさんチームたちは、にやにやと訳知り顔な笑みを浮かべ続けた。

「何がおかしい！」

「べっつにー」

今度はカンテレの音が響き渡った。

そこには、斑のある白色塗装を施されたBT－42が走っていた。

「こんにちはみなさん、継続高校から転校してきました」

マイクを持ったアキの横で、継続高校カラーのチューリップハットを被って大洗女子学園の制服を着たミカがカンテレを弾いている。

「なんだかんだ言って、助けてあげるんだね」

「違う、風と一緒に流れて来たのさ」
驚きを通り越して、みほが感極まっていた。
優花里も指を追って台数を数えている。
「すごいです……一気に十六輌が加わりました！」
その数を聞いて、さっきまで絶望の表情を浮かべていた河嶋が、やっと理解が追い付いたのか歓声を上げる。
「これだけあれば、かなり戦える！」
カバさんチームが横でうんうんと頷き、カエサルが過去の例を挙げた。
「まるでアウァリクム包囲戦のようだ」
それにおりょうが被せる。
「いや、河井継之助のガトリング砲ぜよ」
「いや、イタリア救援のドイツ・アフリカ軍団だな」
「第一次上田合戦だな」※12
エルヴィンが続けるが、左衛門佐の意見に同調する一同。
「「「それだ！」」」
そして、今までとは違う、大量のエンジン音が響き渡った。
「お待たせしました！　昨日の敵は今日の盟友！　勇敢なる鉄獅子二十二輌、推参であり

ます」
　三色迷彩で塗られた大量の戦車、旧砲塔チハ、新砲塔チハ、九五式軽戦車、その先頭車(しゃ)輛(りょう)のキューポラからは、大洗(おおあらい)女子学園の制服を着た、知波単(ちはたん)学園隊長の西(にし)が顔を出していた。
　だが、速攻でダージリンがツッコミを入れる。
「増援は私たち全部で二十二輛だって言ったでしょう。あなたの所は六輛」
　それを聞いて、西がはっとして、やや眉(まゆ)をハの字に曲げる。そのまま全然悪びれた様子の無い、元気な声で謝罪を行った。
「すみません、心得違いをしておりましたー！」
　そう答えると、後ろの車輛に向かって叫ぶ。
「事前の取り決め通り、十六輛は待機！」
　後方の車輛が、見事なターンを決めて観客席の方へと向かって行く。
　その練度の高さに、観客が驚きを隠せない。
　だが、優花里(ゆかり)がぼそっと呟(つぶや)く。
「チハばっかり二十二輛……」
　ナカジマがアリクイさんチームの車輛をちらっと見て、呆(あき)れ声を出す。
「せめて一式とか三式とか無いのかねえ」※13

「無いんだろうねえ」
ホシノがうんうんと頷きながら返事をした。
ケイも思わず呆れ声を出す。
「チハ……」
「チハか……」
アンチョビが同感とばかりに頷くと、カチューシャが叫んだ。
「チハばっかりそんなにいらないわよ！」
だが、ペパロニがぼそっと呟く。
「うちよりましじゃないっすか？」
「それは言っちゃダメ」
空気が悪くなりそうだったので、急いでカルパッチョがペパロニの口を塞いだ。
想定外の事態に、みほが目を潤ませて見つめている。
フルメンバー揃った事で、河嶋が歓喜を隠せない。
「これは勝てるかも……」

来賓席では、辻局長が電話に向かって叫んでいる。
「試合直前での選手増員はルール違反じゃないのか⁉」

電話を受けているのは、審判長の蝶野(ちょうの)で、興奮した様子の辻局長に対し、平然と答える。
「異議を唱えられるのは相手チームだけです」
電話をしながら、蝶野(ちょうの)がちらっと愛里寿(ありす)の様子を窺(うかが)うと、愛里寿が毅然(きぜん)と答える。
「我々は構いません、受けて立ちます。試合を開始して下さい」
みほをきっと見つめる。
みほの後ろには、各校からの短期転校の車輌(しゃりょう)と元々の大洗(おおあらい)女子学園の車輌が並んでいた。
その戦車を見て、愛里寿は小さな笑みを浮かべる。
後ろを向いていてみほは笑みに気が付かなかったが、蝶野が気が付き、ちょっとだけ疑問の表情を浮かべる。だが、すぐに気を取り直し、先ほど中断された礼を再開する。
「それでは、両チーム、礼」
「よろしくお願いします！」
礼の後、大洗連合側はルールに従って10分間の作戦タイムを要求、蝶野に許可された。
試合会場横に設置された迷彩柄のテントの中で、各校の隊長が集まり、作戦会議を行っ

ている。
備品として設置されている古びた黒板に、河嶋がチーム編成を書き出していた。
そこには、

一、Ⅳ号戦車、チャーチル、マチルダⅡ、クルセイダー、BT－42、CV33、B1bis、VK4501（P）、三式中戦車、八九式中戦車
二、ティーガーⅠ、ティーガーⅡ、パンター×2、T－34／85×2、IS－Ⅱ、KV－2、Ⅲ号突撃砲、ヘッツァー
三、M4、M4A1、ファイアフライ、M3、九七式中戦車新砲塔チハ×2、九七式中戦車旧砲塔チハ×3、九五式軽戦車

と書かれている。
「ではこの通り、3個中隊の編成でいきたいと思います」
それをみほが読み上げると、すぐにケイが了承する。
「OK！」
次いで、ダージリンが紅茶を飲みながら質問する。
「中隊長は？」
「それぞれ、お姉ちゃん……西住まほ選手、ケイさん、それから私で」

それを聞いてカチューシャが不満そうにほっぺたを膨らませる。
「西側ばかりじゃない」
「ご不満？」
ダージリンがちらっとカチューシャを見る。
ノンナも自分の頭の上のカチューシャを見上げる。
「隊長、やりたいんですか？」
「私がやらなくてどうするのよ！」
それを聞いて、まほがギロリとカチューシャを睨む。
思わずその目力の強さに心が折れそうになって、冷や汗をかきながらカチューシャが目を逸らす。
「まぁ、今度でいいけど」
「カチューシャさんは副隊長をお願いします」
「あっ、そう？　仕方ないわね、やってあげるわ」
みほの言葉を聞いて、泣きそうになっていたカチューシャがぱっと顔をほころばせて、得意げな表情を浮かべた。
続いて、みほが副隊長を指名する。
「ダージリンさんと西さんも副隊長をお願いします」

「よろしいわ」
「誠心誠意、努力します！」
ダージリンと西が承諾すると、まほが書類から顔を上げた。
「大隊長はみほだな？」
「あなたについて行くわよ！」
ケイが笑顔で承諾すると、西が命令を待つ犬のような雰囲気をまとわせながら、発言する。
「大隊長殿、部隊名の下知をお願いします！」
突然の提案に、みほがちょっと戸惑いつつ、慌てて考える。
「え？　じゃあ、西住まほチームがひまわり、ケイさんのところがあさがお、うちがたんぽぽでどうでしょう」
河嶋が黒板にチーム名を書くと、ダージリンが間髪を容れずに承諾する。
「よろしいんじゃない？」
今度はアンチョビが勢い込んで質問する。
「作戦はどうする⁉」
笑みを浮かべつつ、ダージリンが作戦を提案する。
「行進間射撃しかないんじゃないかしら。常に動き続けて撃ち続けるのよ」

「楔を打ち込み、浸透突破でいくべきよ」

「優勢火力ドクトリンじゃない？　一輌に対して、十輌で攻撃ね」

「二重包囲がいいわ！　それで冬まで待って冬将軍を味方につけましょう。殲滅戦は制限時間ないんだし」

だが、エリカ、ケイ、カチューシャが自分の得意な戦術を披露する。

それを聞いていた西が、熟考したようなふりをしつつ、勢い込んでそれに乗っかった。

「わたくし、様々な可能性を鑑みましたが、ここは突撃するしかないと！」

アンチョビが右手を上げて、提案する。

「とりあえずパスタを茹でてから、考えていいか？」※14

河嶋がパスタとまでホワイトボードに書き込みかけて、内容に気が付き、いらいらして肩を震わせ始めた。

混乱の中、ミカだけがカンテレを抱えて黙って座っている。

収拾がつかなくなってきたので、まほが鋭い声を出す。

「みんな、みほに従うと言ったろう」

全員が静かになったので、みほに発言を促した。

「みほ」

「あ、はい」

みほは僅かに考えこんだが、素早く判断を下す。
「ひまわりチームを主力として、あさがおとたんぽぽが側面を固めて下さい。連携が取れる距離を保ちつつ、離れすぎないよう注意して下さい」
その内容に一同が頷く。
続いて、真剣な表情でダージリンが周囲を見回し、
「わかったわ。で、ここからが肝心なんだけど……」
その今までとはうって変わって鋭い目線に、一同が思わずごくりと息を飲み込む。
「作戦名はどうする？」
予想外の質問だったにもかかわらず、アンチョビが速攻で答える。
「三方向から攻めるんだから、三種のチーズピザ作戦！」
だが、カチューシャも負けていない。
「ビーフストロガノフ作戦がいいわ！　玉ねぎと牛肉とドミグラスソースの取り合わせは最高よ！」
「フィッシュ&チップス&ビネガー作戦と名付けましょう」
「グリューワインとアイスバイン作戦！」
「フライドチキンステーキｗｉｔｈグレービーソース作戦！」
ダージリンとエリカとケイもそれに続いた。

「あんこう・干し芋・ハマグリ作戦で～」
「会長まで乗らないで下さい！」
今まで黙って干し芋を齧(かじ)っていた角谷(かどたに)会長も意見を述べると、河嶋(かわしま)がキレる。
「間を取ってスキヤキ作戦はどうですか？」※15
すると、どこが間を取ったのか分からない作戦名を、西(にし)が述べ、その様子を再びみほが戸惑って見ていた。
その困った様子を見て取ったまほが、再び助け船を出す。
「好きな食べ物と作戦は関係ないだろう」
「じゃあ何がいいのよ」
カチューシャの問いに、冷静にまほは答える。
「ニュルンベルクのマイスタージンガー作戦はどうだ？　これは三幕からなるオペラで」
※16
「長い！」
まほは河嶋に遮られてムッとするが、みほの方へ視線をやって顔を伏せる。
「大隊長、決めてくれ」
「じゃあ、こっつん作戦で……。相手を突つき出して、えいいって攻める作戦なので」
思わずエリカが不満を漏らす。
「何それ、迫力ないわね」

「それでいこう」
「えっ」
だが、まほが間髪を容れずに同意したのに、エリカが驚愕した。
「こっつんですか、なるほど！」
「いいんじゃない？」
西とケイが賛同し、他のメンバーも納得しているのに、エリカが渋い顔で黙ってしまう。
改めてみほが作戦を伝える。
「では、右側面がたんぽぽ、左にあさがお、中央にひまわりでお願いします」
「はい！」
「こっつん作戦、開始します！　パンツァー・フォー！」

大洗連合が作戦タイムを取っている間に、大学選抜側は既に試合会場の丘陵部に整列を完了させていた。スタート地点である高台、その中でも一番高く、眺めのいい場所に大学選抜側の隊長である愛里寿のA41センチュリオンが停まっている。その手前の試合会場寄りには、メグミ中隊のM26パーシング重戦車6輌が横隊で並んで待機していた。愛里寿から見て左側には、ルミ中隊のパーシング7輌とM24チャーフィー軽戦車が1輌、そして、右側にはルミ中隊と同数のアズミ中隊が控えている。※17

大学選抜の選手は色々な大学から集められているが、車輌は戦力の平均化のために、島田流の支援によって主力はM26パーシング重戦車、偵察車輌はM24チャーフィー軽戦車に統一されている。島田流は、ドイツ戦車に偏重している西住流に対抗するためか、それともアメリカでの人気が高いためか、アメリカとイギリスの戦車を使うことが多い。そのため、大学選抜に選出されるのは、アメリカ戦車に慣れている乗員が多く、他の国の戦車を使っている大学出身の場合、色々と苦労することも珍しくない。

とはいえ、車輌の違いを気にせず、すぐに慣れる優秀な乗員もいるので、この辺りは一概には言えないのだが。

このように多くの学校から乗員を集めている以上、戦車もばらばらだと調整した行動を

行うのが難しくなりがちである。そのため、使用する戦車を安定した性能で、扱いやすく信頼性の高い車輌で揃えようとするのは、戦力を高いレベルで平均化するのに非常に有効である。そうなれば、多少練度に差があっても、隊列を組んで移動したり協調行動を取るのにも有効で、これは大学選抜のみならず、高校戦車道でも、出来るだけ近い性能の車輌で揃えようとするのが普通であった。

だが、潤沢な資金を誇るサンダース大学付属高校ですら、パーシングを揃えるのは難しい。5万輌作られたシャーマンや8万輌以上作られたT34シリーズならいざ知らず、日本以外の各国でも引く手あまたのパーシングは、2400輌程度しか生産されていない。そこで予備パーツからの再生産や、M46パットンに改造された車輌からの再改造などが行われており、島田流はアメリカへの伝手と政治力を最大限に利用して、大学選抜に行き渡るだけの車輌を用意した。

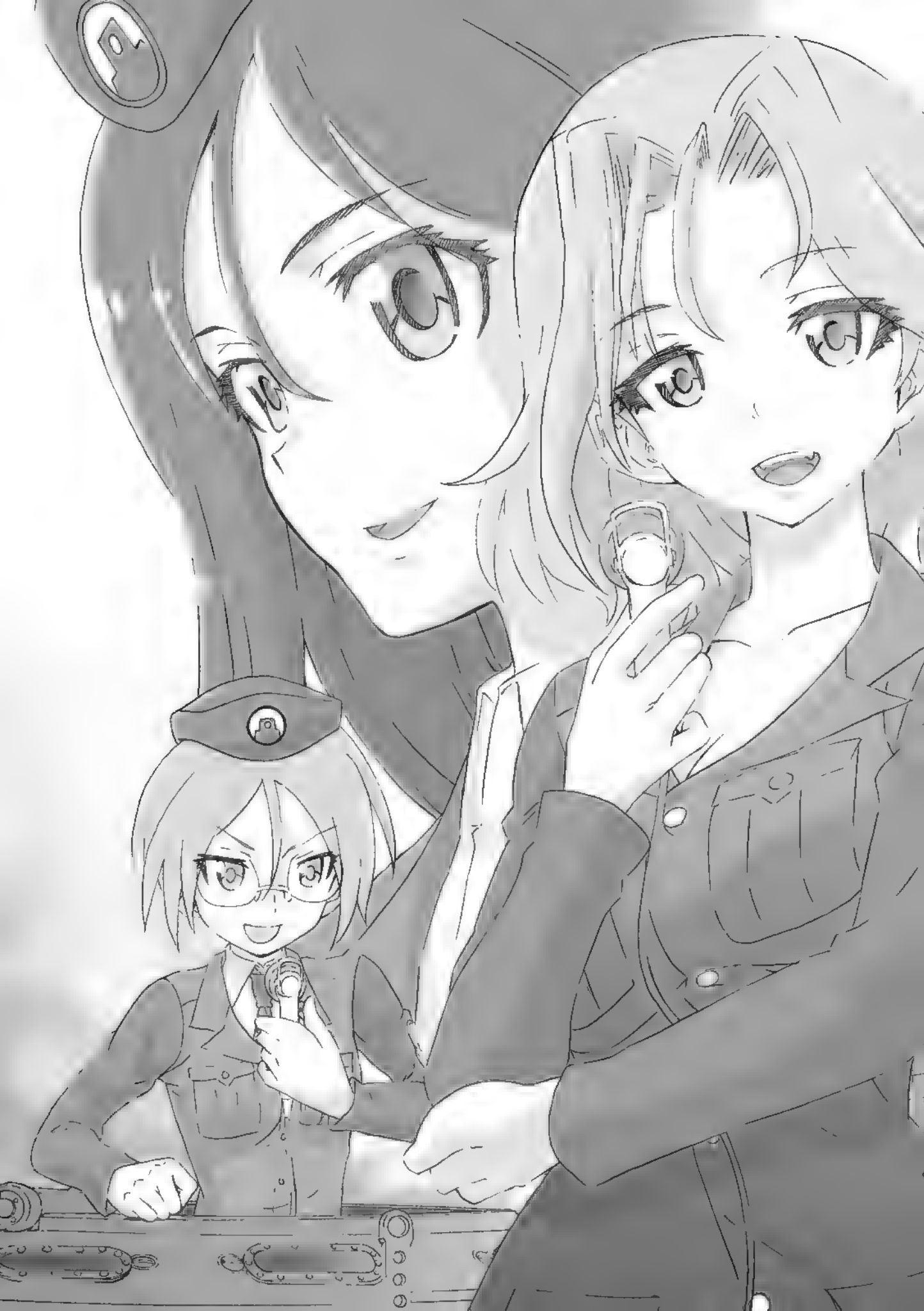
また、大学戦車道ルールでは、作戦・地形の確認用に、最低限の電子機器の使用は認められている。そのためにタブレットが配布されており、それぞれの車長が、この待機時間の間に事前に配布された地形図の確認を行っていた。

メグミが、タブレットで地形を確認した後、無線で愛里寿に連絡する。

『作戦はどうします？　隊長』

愛里寿が答える前にアズミが所感を差し挟んで来た。

『高校生とはいえ、相手はかなりの戦力を有しています』

タブレットには、事前に知らされていた戦力に加え、その場に増援として駆け付けて来た全車輌の情報も入力済みであった。それをルミが確認する。
『増援の車輌が全て分かっているので、シークレット車輌はありません』
通信を聞いて、愛里寿が一瞬考えてから、指示を下す。
「まずは、プラウダと黒森峰の重戦車を倒す」
大洗連合は雑多な戦車の寄せ集めである。殲滅戦である以上、序盤の戦力が豊富なうちに脅威度の高い車輌から潰すのは、定石中の定石であった。特に2000メートル先からでも、平気でパーシングの正面装甲を抜いて来るティーガーⅡは、その厚い装甲も含めて非常に厄介であり、そこまででなくとも、プラウダのIS－2や黒森峰のパンターやティーガーⅠも優先して撃破出来れば、一挙に戦況は有利になる。
そこで愛里寿は、タブレットに事前に作成してあった作戦図を表示し、全車長と共有した。それを見ながら、愛里寿が詳細の説明を行う。
「アズミとルミの中隊は、私と共に一列横隊を形成してゆっくり前進。メグミ中隊は私の直援。側面からの強襲に注意しろ。偵察のチャーフィーは敵に遭遇しても攻撃をするな」
『了解』
指名されたチャーフィーの車長から、承諾の通信が入って来る。

次に愛里寿は、前方の高地を見上げ、指示を出す。
「各車前進」
愛里寿の指示に従い、既にエンジンを始動させて移動準備が整っていた偵察のチャーフィーが、軽快な動きで前進を開始する。
偵察隊の前進を確認した各中隊が、それぞれ指示通りに部隊を前進させる。
「こちらルミ、了解」
「アズミ、了解しました。前進開始」
「メグミ、中隊を併進させます」
最後のメグミの通信と同時に、その後方に並んでいるパーシングが、まるで武者震いのようにエンジンの回転数を上げて車体を揺する。
偵察隊のチャーフィーは、路上最高速度は時速56キロ、不整地でも時速40キロで走行可能であり、その快速を生かして軽快に登り坂を爆走していく。その後ろでルミ中隊が左側へ、右側にメグミ中隊が展開する。愛里寿の本部中隊を扇の要として、左右にルミ中隊とメグミ中隊、中央にアズミ中隊が、まるで高地を囲む扇の様に広がって行く。実際の移動と同じように、愛里寿のタブレットにも戦況図が展開されて行く。
それを見て、愛里寿が呟いた。
「接触は早くて20分後」

大洗連合側がどのような戦術を取って来るのか、愛里寿にはそれが楽しみだった。果たして自分が出るに値するような相手なのか、それともここにいるだけで片が付く程度の相手なのか、どちらにしてもボコミュージアムのために、『流石、島田流』と周囲が納得するような戦いが出来る事を祈って、そっとポケットに手を入れて、そこにしまってあるレアボコを軽く握りしめる。

対する大洗連合は、作戦会議を終了させると、スタート位置から一斉に前進した。
高地の北側の平原を、横に並んだ多数の戦車が轍を引いて走っているのが見える。
「まるで魚鱗の陣だな」
「突撃隊形、逆V字隊形とも言うな」
「どちらかと言えば、横陣じゃない?」※18
「よくもまあ、これだけ速度の違う戦車に隊列を組ませたもんだ」
カバさんチームの面々が周囲を見回し、珍しく左衛門佐が最初に感想を述べると、エルヴィン、おりょうが続き、最後にカエサルが左右に並ぶ車輌を見て感心する。
大洗連合の二十九輌が、チームごとに緩やかな逆V字を組んで、速度を合わせて進んでいる。しかもどう見ても一部の車輌、特に聖グロリアーナ女学院のマチルダIIやチャーチルが、これらの車輌が出せる不整地での最高速度よりも速く進んでいる。確かに現在走行

中の場所は、草原で不整地とはいえ、草の下の地面は堅く締まっていて、路上に近い速度を出せるのは確かだろう。
だが、急造チームでありながら、性能の違う車輌同士でこれだけしっかりとした隊列を組めるのは、各車輌の高い練度を示すものであった。
観客席でその様子を見ている一部の観客も、その見事な隊列を見て、ざわついた声を上げる。
「高校生も意外とやるな」
「そりゃそうだ、西住流に各有名校が揃っているんだから」
観客席の大型ディスプレイに次々と参加車輌が映し出され、最後には隊列の一番右側にいるⅣ号戦車が大写しになり、更にはそのキューポラから体を出しているみほへとズームする。
咽頭マイクを押して、何事かを話しているのが映っている。
「こちら大隊指揮車、相手の動きはまだ確認出来ていません。慎重に行動して下さい」
その無線をCV33の機関銃手席に座ったカルパッチョが聞いているが、揺れるたびに目の前を何かがちょろちょろと動き回る。

そのちょろちょろする塊を手で払いのけるが、すぐにまた目の前に来て、普段冷静なカルパッチョですら、思わず眉を顰めた。

カルパッチョですらそうなのだから、気の短い操縦席のペパロニにはもっと我慢がならないはずなのだが、ペパロニはまだ何とか我慢していた。だが、カルパッチョがついに我慢が出来ずに、文句を言う。

「ドゥーチェ、ツインテールが邪魔です」

カルパッチョの文句に安心したのか、ペパロニも続ける。

「本来なら二人乗りなのに、これじゃ前見えないっすよ」

二人の視界を遮っているのは、右側のペパロニが座っている操縦席と、左側のカルパッチョの機銃手席の間に、無理やり座っているアンチョビのツインテールであった。本来、アンチョビが座っている場所は、車体後部のエンジンから伸びたドライブシャフトがあるのだが、それにカバーをかけて無理やり椅子代わりにしている。機銃手側の席が操縦席の真横ではなく、やや後ろに下がっているのと、体の小さな少女たちが乗員だから、何とか無理やり収まっているが、それでも窮屈なのには変わりはない。

カルパッチョはともかくペパロニの苦情に、思わずアンチョビも口調が厳しくなった。

「だったらペパロニ降りろ」

「そりゃないっすよ～」

「だったら耐えろ！」

「外せばいいじゃないですか、そのウィッグ」
あまりにも目の前をアンチョビの髪の毛がちらちらするのと、降りろと無茶（むちゃ）を言われたので、普段はアンチョビを心底敬愛しているペパロニも、思わず文句を口にする。
しかし、それを聞いてアンチョビが思わず激昂（げきこう）した。
「地毛だ！」
「そうだったんすか」
興味なさげに流して、ペパロニがCV33を加速させる。前が十分に見えないので、坂道の起伏で跳ね上がり、更には坂を登り切って丘の稜線（りょうせん）を越えた瞬間、激しくジャンプ、慌ててペパロニがブレーキをかけた。
「痛っ！」
アンチョビの座っている場所は掴（つか）まる所もシートベルトもないので、ジャンプで体が跳ね上がり、激しく天井に頭をぶつける。ペパロニはアンチョビの叫びをスルーして着地すると、すぐにCV33を急停止させた。
すると、アンチョビがカルパッチョの頭越しに双眼鏡を出して周囲を確認する。
直後、鋭い声を上げた。
「いたっ！」
「ドゥーチェ、二度も言わなくてもいいっすよ」

ペパロニが自分に文句を言っていると思って、ツッコミを入れるが、アンチョビが真剣な声で報告を行う。

「違う、敵集団発見！　ゆっくり横一列で進んできている！」

アンチョビの双眼鏡の視界に、丘に向かって来る大量の戦車の姿が飛び込んで来ていた。

それを聞いて、カルパッチョが慌てて無線機を取り上げ、アンチョビの報告を後続の本隊へと通信する。

カルパッチョの通信を受けて、中央を進んでいたひまわりチームを率いるまほのティーガーⅠと、その援護の位置についていたエリカのティーガーⅡが停止した。

「了解した。大隊本部、ひまわりは高地ふもとに達した。今、先遣隊を送っている」

途中から左右のチームよりも先行したひまわりチームが、大洗連合、大学選抜のスタート地点の中央にある高地のふもとに停車すると、その視線の先にかすかな土煙が見える。

それは、軽快に高地の斜面を駆け上って行くヘッツァーが上げている土煙であった。

通常のヘッツァーは、コンパクトでスマートで軽快そうな見掛けの割には、車体に似合わない大きな主砲を右側にオフセットして積んでいるためにバランスが悪く、不整地では時速15キロ程度しか出ない。更に登坂可能な斜面は37度までだが、今登っている高地の坂は、所々でそれを超えている。

こんな風に軽快に走れるのも、大洗女子学園が使用している改造ヘッツァーは、日本戦車道連盟公認の改造キットを使い、更には自動車部が徹底的に手を入れて、重量バランスを改善、エンジンも強化した38（t）戦車ベースの魔改造車輌だからである。

あっという間にヘッツァーは高地の頂上手前まで達し、そこで速度を落とすと、土煙が上がらないように気を付けて走行する。僅か2・17メートルという大人の背丈よりも僅かに高い程度の車高を活かして、高地頂上の尾根に隠れるようにして頂上の様子を探る。

そこには何の影もなく、周囲を見ても車輌が隠れている様子はない。

安全を確認すると、角谷会長がほっとしたように通信を行った。

「頂上に敵はいないみたいだよ～」

高地の下で角谷会長の通信を聞いたカチューシャが、勢い込んでまほに進言する。

「だったら、すぐ取るべきよ！」

それを聞いて、まほが真剣な顔で僅かに考え込み、咽頭マイクに手を当てた。

「大隊長の判断を請う」

高地の右側では、みほがたんぽぽチームを率いていたが、遠くに見える高地の上にヘッツァーがいるのを確認し、一瞬考え込んでから通信を行う。

「罠かもしれませんから、十分に警戒して下さい。退路を確保しつつ、散開しながら前進。敵に遭遇した場合は無理をしないようにお願いします」
その間にもⅣ号は高地の右側を進み、その後にたんぽぽチームの各車輌が続く。
まほが、通信をひまわりチームの全員向けに切り替える。
「有利だが、包囲分断される危険性がある。他のチームと連携が取れなくなるかもしれない」
「M26パーシングは登るの遅いし、ここは行くしかないわよ」
「取れれば戦術的優位に立てます」
カチューシャが自信満々に宣言すると、ノンナがそれを補強する。
戦車道において高地を確保するのは、戦術として非常に有効である。砲弾を上から下に撃ち降ろすのと、その逆に撃ち上げる場合だと、当然ながら上からの方が視界が良好で狙いやすく、位置エネルギーを有効活用も出来る。更に戦車の上面は装甲が薄いので、撃破しやすくもなる。また、下にいる車輌が上に登ろうとする時に機動力が落ちるので、狙いやすい。
こうした点からも、高地の争奪戦が戦車道での肝になることも珍しくはない。
当然それはまほも承知しており、なのにそんな有利な地形を大学選抜が確保していな

かったのが気にかかっていた。確かにM26パーシングは40トンを超える車重を、30トン程度しかないM4A3シャーマンに搭載されているのと同じ、500馬力のフォードV8エンジンで動かしているため、不整地走行能力や登坂能力に劣っている。不整地でも状況が良ければ時速28キロ程度は出せるが、悪ければ10キロも出せない。

だが、パーシングで先行するのは難しくても、大学選抜側には快速のM24チャーフィーがある。

不整地でも軽々と時速40キロを発揮し、装甲は薄いが、主砲はM4シャーマンと同じ砲弾を使用する40口径75ミリ砲を装備して、その攻撃力は侮れない。装甲の薄さは地形を利用すれば、十分対応可能であり、チャーフィーだけでも高地にいれば、大洗連合側は苦戦することは否めない。

どう考えても、チャーフィーが先行して高地を確保するのも難しくはないはずであり、報告では事実先行しているが、まだ高地の上には達していないという。

そこに何か策があるのではとの不安を、まほは言葉としてカチューシャに伝える。

「確かに優位だが、わざと山頂を空けているのかもしれない。我々が登っている間に、他が攻撃されたらどうする」

「大丈夫よ！　あなた、何だかんだ言って、妹のこと信じてないのね！」

カチューシャが得意げに言い放つと、まほが思わず言葉に詰まった。

「ノンナなんてどれだけ私のこと信じてるか！　私が雪を黒いと言えば、ノンナも黒いっ

て言うくらいよ、ねっ！」
カチューシャが得意げに見ると、ノンナは無表情のまま頷く。
「はい」
「信じるのと崇拝するのは違う」
「うっ……」
それに冷たくまほが言い放つと、カチューシャが言い負けて絶句する。
だが、まほは自分が不必要に悩んでいたのも確かだと思い直した。西住流とは、そして戦車乗りとは考える前に動く、命令の途中で前進し、どこまでも突き進むものでは無かったか。機を見るに敏にして、即断即決が信条では無かったか。
大洗女子学園を、妹のみほを守るために、必要以上に消極的になってはいなかったか、ここで悩んでいる間に重要なチャンスを逸する、それだけは避けなければならない。
ならば……。
きっと顔を上げると、決断を下す。
「試合が長引くと経験の多い相手が有利だ。序盤で戦果を上げておきたい。行くか」
「はい」
まほの決断に、間髪を容れずにエリカが答え、綱から解き放たれた猟犬のように、勢いよくティーガーⅡを前進させる。

それを見たカチューシャが、斜めに向いていた車輛を高地に正対させ、勢いよく右手を振り上げた。
「さぁ、行くわよ！　二〇三高地よ！」※19
号令と共に、カチューシャのT‐34／85も前進する。

森の中を走っているあさがおチーム、サンダース大学付属高校と知波単学園の混成チームであるが、その副隊長である西が、カチューシャの通信を聞いて笑顔を浮かべた。
「おっ、二〇三高地ですか！」
「旅順開城なんとやら、ですな」※20
玉田が一節唸るが、それを聞いてケイが首を傾げる。
「知波単の生徒は、本当に同年代なんだろうか」

高地を登るひまわりチーム、それに付き従っているⅢ突の車内で、同じように無線を聞いたエルヴィンが苦笑いする。
「プラウダはどんな戦いか知っているのか⁉」
カエサルもうんざりした表情を浮かべた。
「負ける気か？」

「プラウダ的にはせめてゼーロウ高地とか」
「それも厳しい戦いの気がする」
エルヴィンが別な例を述べるが、カエサルが否定する。
「飯盛山とか」
おりょうが呟くと、左衛門佐が答えた。
「ここは天王山だろう？」※21
「――「それだ！」――」
全員が左衛門佐に同意する。
その間にも、ひまわりチームは高地を登り続けている。ドイツ車輌、特に70トンの車重を持つティーガーⅡですら、黒森峰の整備が優れているのか比較的余裕で登って行くが、それよりは軽いとはいえ、50トン以上の車重の上に、巨大な砲塔を乗せてバランスが極めて悪いKV－2は、坂では10キロを出すのも難しく、ノロノロと登らざるを得なかった。
そのせいで、どうしても黒森峰の車列に比べてプラウダの車列が遅れ気味になっており、カチューシャがKV－2に主砲を向けて後ろから威嚇していた。
「遅いわよ、もっとサクサク動きなさい！」
「ちびっ子隊長、無理言うでないだよ」
操縦手が必死で操作しているのを見ていたKV－2の砲手であるマリーヤが、思わず文

句をこぼした。だが、カチューシャの地獄耳がそれを拾い上げる。
『何か言った？』
「な、何も言ってないだよ、であります」
マリーヤが背筋を伸ばして言い訳する。
『あっそう、ならさっさと進みなさい』
カチューシャの無線に怒りの声が無いのを聞いて、ＫＶ－２の乗員たちがほっとため息をついた。

一方、高地の左側の森をあさがおチームは進んでいたが、途中から戦車が辛うじて通れる程度の道となって、更に見通しも悪くなったため、進撃速度が低下する。
『あさがおチーム。ひまわり左翼をそのまま前進して下さい！』
「ＯＫ！」
みほの指示に、ケイが良い返事をする。
だが、進む途中で道が二股に分かれ、ケイが地図を見てちょっと首を傾げる。
「戦力分散かー、ちょっと困るね」
『偵察は私がしっかりやります』
『我々も偵察は得意です』
アリサが勢い込んで進言すると、西もそれに張り合う。

ケイはふっと小さくため息をつくと、敵と遭遇する可能性が高い谷側をサンダース側が進むように、高地側を知波単が進むように指示をする。

谷側をサンダース、丘側を知波単と別れて進む事になった。

高地の右側を回り込むように、みほが率いるたんぽぽチームが進んでいる。

「わたくしたちは？」

たんぽぽチームの副隊長であるダージリンが、みほに行動の再確認を行った。

「たんぽぽはひまわり右翼の高地脇を前進。ひまわりの援護を行います！」

それを聞いて、オレンジペコが地図を再確認する。

「この先には川があって、その周辺は湿地になっています」

「湿地は機動力が落ちるので、困りますね」

湿地と聞いて、操縦手のルフナがちょっと顔をしかめると、アッサムもPCで戦車一覧を確認してから口を開く。

「履帯の細い車輌は困るでしょう。ローズヒップのクルセイダーとか」

「ローズヒップから機動力を奪ったら、困っちゃうでしょうね」

ルフナが軽口を叩いたのを聞いて、ダージリンがオレンジペコに指示を出す。

「ペコ、渡河に適した場所も探しておいて」

「分かりました」

オレンジペコが地図を真剣に見つめて、渡河地点やその後の移動経路を探っている。
その間にダージリンが紅茶で口を湿らせると、側面のペリスコープ越しに高地を見据えた。
「成功は『大胆不敵』の子供。最初から勝負に出るのね」※22
そこには、丘を登って行くひまわりチームの姿が見えた。

観客席の大型ディスプレイに、地図と移動中の車輛（しゃりょう）の模式図が映し出されている。
双方の部隊の接触が近付いてきて、どんな戦いになるのかと期待した観客が、次第に熱狂し始めていた。
観客席の裏には、色々な屋台や物販テントが出ていてグッズや飲食物、お土産の販売を行っていた。物販テントには、大洗（おおあらい）の商店街の店も出ており、以前バイトをして好評だったアンツィオの生徒たちも応援がてらちゃっかりと手伝っていた。他にもカメラメーカーが出店していて、カメラや望遠レンズのレンタルを行っている。
観客席の秋山優花里（あきやまゆかり）の父親も、超望遠レンズをレンタルして、娘の雄姿を写そうと気合を入れていた。
「あなた、優花里は装填（そうてん）手ですよ」
「偵察に出ないとも限らないし、撮影のチャンスはきっとある」

「ですが、ここからだと試合場は遠すぎて」
「大丈夫、大丈夫」
普段は父親は割とヘタレていて、母親の方がしっかりしているイメージが強い秋山家であるが、娘の事となると時々妙に気合が入り、またそれが空回りするところもあった。そう考えると、優花里は比較的父親似の性格をしているのかもしれない。
観覧席最上段のＶＩＰ席では、西住まほと島田千代、西住流と島田流の両家元が近寄りがたいオーラを漂わせて、大型ディスプレイを見つめている。
観客席の横にある無数のアンテナが屹立した審判本部では、双眼鏡を胸からぶら下げた審判長の蝶野が、仁王立ちのまま厳しい顔で戦況を睨んでいる。
視線の先には、高地を苦労して登るひまわりチームが映し出されていた。
「果たして高地を取るのが得策か……」
ちらっと表示されている戦車リストを眺めて、苦々しい言葉を絞り出す。

そのひまわりチームの最後尾では、どうしても遅れるＫＶ－２にカチューシャがいらいらしてついに堪忍袋の緒が切れて、怒鳴り散らしていた。
「ちょっと、ニーナ！」
「ぶじょほへした」

「日本語で話しなさいよ！」
　思わず津軽弁がこぼれるニーナに、カチューシャがさらに切れる。一応津軽弁も立派な日本語なのだが、きつい訛(なま)りで「不調法しました」と言われても、カチューシャには何のことか分からなかったのも、ある意味仕方がない。
　方言があるようでないようでやっぱり微妙に方言がある北海道から来たカチューシャとしては、時々プラウダの生徒たちの会話が理解出来なくなるのが困りものであった。その上、クラーラが留学してきてからは、ノンナがクラーラとロシア語で会話することも増え、微妙にストレスが溜(た)まっていた。今まではノンナに依存することで、そのストレスを発散していたが、最近はクラーラとノンナが一緒にいる事が増えたのが、また新たなストレスの元となっていた。
　そこで必然的に他の生徒たちとの交流を増やす事になったが、これがノンナがカチューシャに他の生徒とコミュニケーションを増やさせようとする策略とはカチューシャは全く気が付いていない。
　そんなことがありつつも、黒森峰(くろもりみね)の車輛(しゃりょう)を中心としたひまわりチーム内の先行部隊は、高地頂上近くでヘッツァーが警戒している地点まであと少しの所まで来ていた。
　だが、その様子をじっと見つめる双眼鏡があった。
　溝に隠れたチャーフィーが、砲塔に緑のタープ、つまり天幕や日よけにも使える防水布

を乗せて、更に周辺の草を刈って束ねた物を乗せている。
　こんな簡単なカモフラージュでも、戦車の輪郭がはっきりしなくなるので、遠距離からは意外と見付け難く（にく）なる。
　その車輌の上では、アズミ中隊の偵察隊車長であるアサミが双眼鏡を覗い（のぞ）ていた。高校時代はアズミと同じBC自由学園で同期であったが、名前が似ていてよく間違えられることから、いつの間にか仲良くなっていて、そのまま腐れ縁で大学でも戦車道を続けている仲でもあった。また、高校時代は、BC自由学園では貴重なM4A2シャーマンに乗っていたので、大学選抜でチャーフィーに乗ることになってもさほど苦労はしなかった。※23
　そんなアサミが、双眼鏡の中に捉え（とら）た物を、やや緊張した声で報告する。
「こちらゼブラエイト、敵中隊、高地を北上中！　頂上到達まで推定5分！　攻撃しますか？　オーバー」
　その報告に愛里寿（ありす）が冷静に応える（こた）。
「……取らせておけ」
「ゼブラエイト了解、このまま観測を続けます。オーバー」
　観測されているとも気付かず、ひまわりチームは高地の一番急な所を過ぎ、頂上が近付くとやや斜面がなだらかになった場所に差し掛かる。そこで、まほがちらっと後ろを振り

向くと、最後尾のＫＶ－２が遅れているとはいえ、辛うじて急な坂を越えて来たのが見えた。全車輛を確認すると、全体に指示を出す。
「中隊、急げ！」
それを聞いたＫＶ－２のニーナが慌てて答えた。
「は～い！」
頂上が確保されていないとはいえ、有利に戦況を運ぶには、出来るだけ大学選抜が下にいる間に攻撃準備を整える必要があった。特に、左右の陣営が衝突する前に撃ち始める事が出来れば、と。

一方ゼブラエイト、ＡＺＵＭＩのＺでゼブラ、その８号車であるアズミ中隊のチャーフィーからの報告を聞いて、愛里寿が少し考える。そして視線をちらっと手にしたタブレットに落として、地形図を再確認した。
次いでタブレットをタップして、事前に立てておいた作戦計画の一つを展開すると、その計画に従って無線で指示を行う。
「アズミ中隊。高地の麓西方の森林を全速で前進」
指示と同時に、愛里寿から見て右翼に位置するアズミ中隊のマークが拡大され、右斜め前方に移動する。
「敵支隊と遭遇した場合は、これを突破し、中央集団後方を脅かせ」

そのままマークは、赤で表示された大洗連合側の部隊を突破し、大きく左へと展開すると、高地の後方へと移動、頂上の部隊を半包囲する。

アズミも愛里寿から伝えられた作戦計画をタブレットで確認し、全速で前進との連絡を受けた瞬間に、車内に移動指示を出す。
それを受けて、装填手はハッチから身を乗り出し、周囲の確認を行う。砲手は、左手を伸ばすと砲身固定装置のレバーを解除位置に移動させ、稼働状態へと移行させた。
その間にアズミが命令を最後まで確認、直ちに返信する。
「了解」
次いで、無線を中隊内通信へと切り替え、隷下の車輌に指示を行う。
「中隊各車！　全速前進！」
砲手が席に座り直し、砲塔旋回ハンドルを回す。装填手が後続の他の車輌に問題がないことを確認、アズミへと報告を行った。
それを聞くと、アズミのパーシングが前進を開始する。
次いで、愛里寿は次の部隊へと指示を出す。
「ルミ中隊。麓東方を湿原まで前進」

タブレットの作戦図横にある、R中隊と書かれているアイコンを押すと、今度はルミ中隊のマークが変形し、移動を開始した。
「接敵した場合は、突破せず相手を釘付けにしろ」
ルミ中隊のマークは湿地帯の中を流れる川を挟んで、対岸の赤の大洗連合のマークと接触すると、その進路を塞ぐように左右へと伸びる。

「了解!」
ルミも愛里寿の通信を聞くと、生き生きとして指を鳴らすと次々と指示を飛ばす。
「こちらロジャー・ワン、ロジャー中隊、隊形を横隊から斜行陣へ!」
RUMIのRからロジャーとなったルミ中隊が、指示に従って隊列を横一列に伸ばした状態から、どちらから敵が来ても柔軟に対応でき、またすぐさま他の陣形へと変更させやすい、斜めに並んだ陣形へと変更する。
その間に、一番外側に停まっていたルミ車は前進を開始し、残りの車輌も斜行陣に変更するために、少しずつスタートのタイミングを遅らせながら前進を行う。それにより、外側が前方に出て、高地側が一番後方となる隊列が完成した。
高地右側の森を進んでいる大洗連合のあさがおチームの周囲は、先ほどまでは、まだ木

がまばらで視界もある程度開けていたのだが、ますます森が深くなってきて遠くを見通せなくなっていた。
前方偵察に出ているM4A1、そのキューポラから上半身を出しているアリサが、視界が利かなくなってきたので耳も澄ますと、遠くで鳥の声が聞こえたのに反応する。
「前方から鳥の声、という事はまだ敵は近付いていない」
周囲を双眼鏡で見て、自然物以外視界に入ってこないのを確認する。
「こちらアリサ、前方に異常なし。オーバー」
アリサ車の後方やや離れた位置には、ウサギさんチームのM3リーを先頭に、中央にケイのM4シャーマン、最後尾にナオミのファイアフライが続いていた。
「了解。ケイ車より西(にし)車へ。そっちはどう？」
ケイが、並行する道路を移動中の知波単(ちはたん)へと連絡する。
「こちら知波単(ちはたん)支隊！　我が支隊は順調に進撃中！」
ケイの通信に対して、西(にし)が喜色満面で、旧砲塔チハのハッチから身を乗り出して返信する。隊列の先頭を隊長車の西が走り、残りの車輛(しゃりょう)がその後に続くという、指揮官先頭の実に知波単学園らしい隊列だった。
情報を重視し、偵察を入念に行いつつ全周警戒で進むサンダースとは対極でもある。
しかも、知波単側の後続車輛の車長は車内に籠(こも)っており、西もいちいち観測をしていて

は進撃の邪魔とばかりに、双眼鏡を使ってもいない。もっとも自分の視力に自信があり、更に肉眼の方が広い範囲を索敵可能で、そこで動く物が目に入れば双眼鏡を使えばいいというのが、西の、そして知波単学園の基本的な考え方であった。

周囲を肉眼で観測し、何も見えないのを報告する。

「右翼に敵影は無し！」

その瞬間、敵影がいないと言ったはずの右側から飛来した砲弾が、西車の前後を通過し、左側の土手に着弾する。慌てて急停車する知波単の各車輌。

「三時方向より敵襲！」

全ての車輌がその場で車体ごと旋回を開始し、砲弾の飛来する方向へと砲を向ける。すると、右側の森の中で、次々と発砲炎が光るのが見えた。

この奇襲攻撃に知波単側も慌てたが、砲弾はサンダース側にも届いていた。

「応戦！」

直ちにケイが応戦指示を出し、同時に他の部隊へと通信を行う。

「CQ！　CQ！　こちらあさがお、敵と遭遇！　繰り返すグリッド7－5にて三時方向から砲撃を受ける。数は少なくとも五輌以上！　オーバー」

傍受可能な全ての車輌に対し、注意を喚起する符号であるCQ、一説にはフランス語のSécurite ＝注意せよの発音に似ているから作られたというが、ケイはそれを送って大学選

抜と接触したことを知らせる。その間に、残りの車輌は三時方向へ向きを変えると、森の中へと発砲した。

みほの下へも、ケイの緊急通信が飛び込んで来た。その切迫した内容を確認し、慌てて対応策を指示しようとするが、そこに今度はすぐ近くから新たな急を要する無線が入った。

『こちらダージリン。敵戦車発見』

基本的にあんこうチームでは、他の車輌からの無線は沙織とみほの両方が聞けるようになっている。だが、今のように戦況が錯綜して多数の無線が飛び込んで来るような状況では、隊長であるみほは、無線対応よりも全体への作戦指示に徹するのが合理的である。そこで、沙織がコミュニケーション能力の高さを活かして、あちこちから飛び込んで来る通信を聞き分け、時には部隊ごとに周波数の切り替えを指示して混線を防ぎ、刻一刻と変化する戦況を、後でみほが一目でわかるようにホワイトボードに記していく。

更に、たんぽぽチームではみほが直接指揮を執るのではなく、副隊長のダージリンが指揮を代行し、みほは後方で全チームの状況確認と戦闘指揮を行うように要請されていた。

図らずも、大学選抜側も愛里寿がスタート地点から動かずに、後方で戦況を確認して指揮をしているのと同じ構造になっていた。

あさがおチームからの無線が入ってくる前までは、たんぽぽチームも前進を続けていた

が、ちょうど森が切れて川沿いの開けた土地に出た所で、チームの本隊は横隊を維持してその場で待機した。
その後、装甲が厚いダージリンのチャーチルが、強行偵察を兼ねて先行していた。
その先行したダージリンが手にした双眼鏡の視界の中に、反対側の森の切れ目から出て来たパーシングが、飛び込んで来る。
「方位10時、距離240ヤード」
双眼鏡のメモリから、ダージリンはパーシングが約220メートル先にいると判断した。戦車戦に取って、200メートル程度は至近距離であり、かなりの危険距離でもある。
パーシングの砲塔が自分に向かって旋回するのを確認し、砲の先端が黒い点として見える直前に、ダージリンは慌てて体を車内へと滑り込ませた。パーシングの90ミリ砲では、高速徹甲弾を使わない限りはチャーチルの正面装甲を抜くのは難しいと分かっていても、つい体は動いてしまう。
パーシングの砲弾はチャーチルの砲塔側面をかすめ、その衝撃で車体が激しく揺り動かされる。
だが、慌てて戻ったために、ちゃんと車内に入り切れなかったので、仕方なく車長席に正座したままで、ダージリンは森の縁から出かけていた後続の車輌（しゃりょう）に冷静に指示を出し続ける。

「たんぽぽ各車、微速後退しつつ応戦！」
ケイとダージリンの報告を聞いて、高地ではなく、その左右に大学選抜が出現したことに、みほは驚きを隠せない。
噂に聞く島田流の忍者戦術、変幻自在で神出鬼没となれば、高地自体が囮でそこに引き付けている間に、左右から大きく迂回して包囲殲滅する気なのか、との考えが一瞬みほの頭をよぎった。
「パーシングの登坂能力が低いから、最初から高地を捨てたんですかね？」
無線を聞いていた優花里が同じ考えに至ったのか、意見を述べる。
だが、パーシングは登坂能力だけではなく機動力にも欠けるので、包囲殲滅するには速度が足りない。だとしたら……そこまで考えてみほはハッとした。
「向こうはまず、たんぽぽとあさがおを潰しに来た？」
「上から撃たれる前に、撃てるだけ撃つ気ですね」
みほが考えている間にも、ダージリンのチャーチルが前方でパーシングに応戦しているる。アッサムの狙いすました砲弾を受けて、森の中から抜けて来たパーシングは後退したが、代わりに新たな二輛が森から出てきて砲撃を行った。
「十一時方向、パーシング二！　敵戦力増大中！」
新しいパーシングを確認したアヒルさんチームの磯辺が、慌てて報告を行う。

「各車輌、前方の上手に車体を隠しながら応戦」
ダージリンが、先ほどの指示に加えて、川の手前にある小さな上手を利用して、履帯などを守りつつ応戦する様に指示を出す。各車輌とも、前後に不規則に移動して相手に狙いを付けさせないようにしつつ、砲撃を行う。あんこうチームのⅣ号も、他の車輌に合わせて発砲した。
「みほさん！　指示を！」
ダージリンが、あんこうチームまでも目の前の敵に応戦しているのを見て、このままなし崩しに戦闘に突入するのは不利と判断して、みほの指示を請う。
ダージリンの声を聞いて冷静さを取り戻したみほは、麻子に回避運動を続け、また華に麻子と連動して独自に砲撃をするように指示を出すと、沙織のホワイトボードを確認する。それを見てから、一つ息を吸って深呼吸をすると、手を咽頭マイクのスイッチに当てた。
「大隊指揮車よりあさがお、たんぽぽの各車へ！」
みほの後ろでは優花里が新たな弾を装填し、華が前方の目標に狙いを付ける。
「前後に移動を行って、相手の射線に入らないようにして下さい！　高地の上にひまわりが到達するまで耐えましょう！」
「持久戦か」

みほの通信を聞いて、レオポンさんチームの車長であるナカジマは、ぽつりと呟いた。
それにホシノが笑いながら返す。
「いつも通りだね」
「耐えるのもレースの醍醐味さ」
「電装系が壊れないといいけど」
操縦手のツチヤもにこにこするが、装填手のスズキだけが不安を口にした。
確かにポルシェティーガーは電気配線が多いので、長期戦になるとそこに不安が出る可能性がある。
「ま、その時は修理するよ」
あっけらかんとナカジマが言い放ち、他の乗員が笑いを浮かべた。
その間にも、たんぽぽチームの前に現れたパーシング、それはルミ中隊であったのだが、何度も川に向かって渡河するかのような動きを見せつつ、前進してくる。たんぽぽ各車が応戦すると、パーシングはすっと無理をしないで後退し、別な所から次の車輌が出てきて砲撃を行って来る。
それを見て、ナカジマが眉間にしわを寄せる。
「嫌な動きだね」
なかなか射点が定まらなくて、ホシノも愚痴をこぼす。

「向こうは装甲があるんだから、一挙に突っ込んでくればいいのに」
「こっちの息切れを狙ってるのかな」
長期戦になる可能性を考えたのか、ツチヤがドリフトを諦め、柔らかい操縦にシフトさせる。
スズキも思わず残弾の数を確認する。
「殲滅戦だからね。生き残っているだけで勝ちになるし」
それを聞いて、ナカジマがあるレースを思い出して、ぽつっと呟く。
「インディゲート事件か」※24
「――「あれは実に嫌なレースだった」――」
レースを心から愛するレオポンさんチームが、参加20台中14台がレースをキャンセルした不祥事を思い出して、ため息をついた。

一方、高地の反対側で敵と遭遇したあさがおチームも、一時は混乱したが、みほの通信を受けて地形を利用しつつ応戦を行っていた。開けた所で撃ち合っているたんぽぽチームとは違って、こちらは森が深いので、相手の状況がはっきりと見えない。しかも、森の奥ではどこかで火でも出たのか、煙まで上がってますます視界が悪化している。
『西さん！　無理な突撃は極力避ける様にお願いします！』

そこに西を名指しで、みほの指示が飛び込んで来た。
「え？」
無線を聞いた西が首を傾げる。
しばし考えた後、自信なさそうだが勢いよく回答する。
「あ――、かしこまりました！」
車輌を停止させると、西のチハが発砲する。
「無理な突撃ってしたことないからなあ……」

両チームが接触したことで、観客がますますヒートアップする。だが、次第に周囲が暗くなってきて、人が目を細めて空を見上げる。
「雲が多くなってきたな」
そこにはさっきまでの青空とは違い、地平線には黒い雲が湧き上がっていた。
それを聞いて、隣の観客が大型ディスプレイの隅に出ている天気予報を指差す。
「天気崩れるかもってさ」
「雨具持って来てないぞ」
「売店でカッパ買って来い」
雨の予報を見て、売店にポンチョやカッパを買いに走る客もちらほらと出始める。

観客席の大型ディスプレイには、どちらの車輌（しゃりょう）もいない高地の頂上が映し出されていた。
そこにひょっこりと戦車の姿が現れる。
どちらの陣営かと固唾（かたず）を飲み込む観客、車輌が大写しになると、そこにいたのはまほのティーガーIであった。
観客席の大洗（おおあらい）関係者が集まっている辺りから、それを見て大きな歓声が上がる。
「こちらひまわり。高地頂上に達した！」
まほが咽頭（いんとう）マイクを押しながら、状況報告を行う。
その横にカチューシャのT－34／85が、加速してきて急停止すると横に並ぶ。
「二〇三高地奪取よ！」
「ウラ――――‼」
カチューシャの声に、一斉にプラウダの生徒たちが唱和する。それを見て、まほが小さく笑みを浮かべた。
罠（わな）はあったのかもしれないが、まずは先に高地を確保した。
「罠はありませんでしたね」
エリカがおずおずとまほに質問する。

それに対して、まほが普段は見せないような、やや獰猛な笑みを浮かべる。
「罠があれば噛み破る。覚えておけ、それが西住流だ」
「はいっ！」
大洗女子学園のため、そしてみほのためと考えて、積極性を欠いてしまっていた自分に活を入れる意味も含めて、まほは力強く言った。

「みぽりん！」
沙織が、ひまわりチームからの通信をみほへと伝える。
あんこうチームの車内に、プラウダの、まるで勝利したかのような歓声が繰り返し流れていた。
「やりましたね！　これで流れを変えられます」
それを聞いて優花里が笑みを浮かべる。
みほも嬉しそうに、新たな命令を下した。
「ひまわりは二手に分かれて、上からあさがおとたんぽぽの援護をお願いします」
『了解した』
まほの冷静な声を聞いて、みほはきっとなんとかなる、姉がなんとかしてくれるはずだと安心して、僅かに八の字にしていた眉を緩めた。

まほが高地の頂上から見回すと、前方遥か遠くに大学選抜の本隊が見えた。
「距離5000、いやもう少しあるな」
「理論上は届くかもしれませんが……」
エリカが言葉を濁す。
ティーガーⅠの照準器は徹甲弾の場合、4000メートルまで有効範囲の目盛りが切られているが、その距離ではよほど条件が良くても1割以下の命中率しか期待出来ず、装甲貫徹力もセンチュリオンの正面装甲どころか、側面に直角に当たっても抜けるかどうか怪しくなる。それもあって、ティーガーⅡでは主砲威力は向上しているのに、照準の有効範囲は3000メートルに減少している。実質上の戦闘距離は2000メートル以下で、戦車道の場合はもっと短くなる事が普通であった。
視線を下にやると、中央を進む大学選抜の部隊が見えた。だが、まだこれを狙うにはやや遠い。
更に左右には、高地の下で戦っているあさがお、たんぽぽチームとそれに対峙している大学選抜も確認できる。
「こちらひまわり。北方に南進中の敵中央集団を確認。警戒しつつ支援に当たる」
まほの指示に従って、ひまわりチームはまるでそのチームの名前になった花のように、

大きな円形に広がって行き、高地の下の敵に砲を向けた。
「攻撃開始！」
みほのひまわりチームへの指示を聞いて、ケイは積極的に反撃に出る機会だと判断する。ここで、自分たちの砲撃で大学選抜を釘付けにすれば、上からひまわりチームが的確に仕留めてくれるはずと確信して。
ケイの指示を受けて、知波単学園の各車輛も果敢に発砲する。
「えいっ！」
「おらっ！」
福田と玉田が西の発砲に合わせて、砲弾が軽いために装填速度が速いのを活かして、どんどん発砲を行っていた。
続けて、知波単の後方にいるウサギさんチームとサンダースも発砲する。
視界の悪い中、予想外の反撃の厚さを受けて、アズミ中隊はやや混乱しつつも、森の細い道で回避運動を行う。
数発がパーシングの正面に命中したが、砲塔防盾114ミリの装甲によって、軽々と弾かれてしまう。ナオミのファイアフライなら、通常徹甲弾で1000メートルの距離からでも136ミリの装甲を貫徹するので、パーシングであっても撃破可能である。アリサの

M4A1の76ミリ砲は1000メートルでは難しいが、それよりも距離を詰める事が出来れば、正面からでも撃破可能であった。

だが、それ以外の車輌では防盾はおろか、正面装甲を抜くのも難しい。その上、大学選抜側も砲弾の飛来する方向に正対せず、やや車体に角度を付けて防御にも配慮していた。

結果として、数発の砲弾が浅い角度で着弾したが、装甲で弾かれるだけであった。

更には、大洗連合のあさがおチーム側の発砲によって、その車輌位置を把握したルミ中隊は、全車輌が一瞬にして停止すると、砲弾が来た方向に全ての砲を指向させ、協調の取れた砲撃を行った。

その猛烈な射撃で、一瞬あさがおチームの砲撃は止まってしまう。

その間にアズミ中隊は速やかに隊列を組み直すと、迅速に進撃を開始した。

「こんな所で足止めされている訳にはいかないのよ」

アズミが時計をちらっと見ると、愛里寿から下された作戦計画よりも行動が遅延している。ここはがむしゃらにでも突破を図らなければと思い、部隊を急がせる。

まずは一番砲弾が飛んできた場所へと、再度砲撃を行った。

アズミ中隊の移動しながらの発砲は、知波単の車輌が密集している所に集中した。しかも、その砲弾を発射するなり、アズミ中隊は真っ直ぐに知波単の車列へと突っ込んで来

る。
「うおっ、こっち来た！」
玉田が突入して来たパーシングに驚くが、西が冷静に指示を出す。
「一歩たりとも通すな！　撃てぇ！」
自分たちの得意の突撃戦法を逆手に取られたことで、一瞬慌てた知波単の生徒たちだが、西の号令に従って一斉に砲撃を行った。
アズミ中隊が急速に接近した事で彼我の距離が詰まり、相手が目視可能となって来たこともあって、練度の高い知波単の生徒たちの砲弾は、的確にパーシングを捉える。
しかし、パーシングの砲塔側面の装甲は76・2ミリ、それに対して知波単の中で一番威力がある新砲塔チハの47ミリ砲は、通常徹甲弾では500メートルの距離から垂直に当たって60ミリ程度の装甲までしか効果がない。この砲では、車体後部ですら50・8ミリの装甲に覆われているパーシングを確実に撃破するには、上か下、もしくは履帯か可動部辺りを狙うしかなかった。
当然ながら今のように正対した状況、しかも下草が深い場所では、狙えるのは砲塔のみで、正面はもとより側面に斜めに当たっても、虚しく弾き返されるだけであった。
知波単の砲撃に対して容赦ない反撃を行うルミ中隊のパーシングだが、目の前の知波単の砲弾は脅威ではないと判断したのか、後方に並んでいるサンダースの車輌を狙っていた。立ち木を遮蔽物にして姿を隠していたサンダースだが、目の前に並んでいる木が次々

となぎ倒され、その姿を現した。
「ナオミ、アリサ、ラビット！」
「はいっ！」
ケイが率いる車輌群に指示を出すと、ラビットと言われたウサギさんチームの梓が、勢いよく返事をする。ウサギさんチームとしては、自分たちの戦車を預かってくれた上に、パーツ交換までしてくれた事から、サンダース大学付属高校に何となく親近感を抱いていたのだった。
「チハタンズの脇から突破する気よ！」
はっとして前を見ると、そこには知波単の車輌に急接近するパーシングの姿があった。先ほどまでのように、揃って停止をして砲を撃つのではなく、移動しながらそれぞれの車輌が各個に砲撃を行っている。命中精度は低いが、絶え間なく砲撃が行われるせいで、知波単の車輌は釘付けにされていた。
「前に出て。守るわよ！」
「了解！　自分が」
ケイの指示を受けて、ナオミがファイアフライで狙いを付けようとした瞬間、激しい轟音と衝撃がナオミを襲う。まるで台風に翻弄される小舟のように、ファイアフライは砲弾に乱打され、揺さぶられ続けて、砲撃を行うどころではない。
「敵火力集中！」

「エンジン停止！」
ナオミ車の操縦手からの悲鳴が上がった。
「進めません！」
ファイアフライを守ろうとしたウサギさんチームのM3リーも、倒れて来た立ち木に邪魔され、動くことが出来ない。
7輌のパーシングが、瞬時にして砲撃する相手をローテーションし、知波単もサンダースも動きを取れないようにするというアズミ中隊の連携は、流石大学選抜と思わせる実力であった。
ナオミ車とウサギさんチームは結構なピンチであったが、幸い、周囲に立ち上った土煙に隠れる事が出来た。それにより、一時的に砲撃が弱まり、ナオミが操縦手に号令を掛ける。
「エンジン再始動、ハリアップ！」
「ラジャー！」
ナオミ車に搭載された、バス用の直列6気筒エンジンを5個束ねて一つにしたという、クライスラーA57複列30気筒エンジンが、一気に轟音を上げて再始動する。
だがエンジンはかかったが、初動を邪魔され、周囲の視界は全く無くなってしまっていた。
『われ援護不能！　援護不能！』

普段は冷静なナオミの悔しげな声が飛び込んで来たのを聞いて、ケイが歯噛みをする。
「Ｓｈｉｔ！」
怒りのあまりに、やけくそのように車長用キューポラのペリスコープを動かした。

「全車照準、敵右翼へ」
火力のあるサンダースの車輌を一時的に無力化したこともあり、余裕のある表情で、アズミが隷下の車輌に指示を出す。それでも、いつ視界が回復するか分からないので、念のためにサンダース方面に砲を向けたまま、知波単の車列の前を悠々と前進していく。
その間、知波単は完全に無視された格好となっていた。
パーシングが無防備に横腹を晒し、更には自分たちを歯牙にもかけていないのを見て取って、玉田の頭に血が上る。
「おのれぇ！」
それは玉田だけではなく、旧砲塔チハの車長である細見も同じであった。いや、それどころか細見は、頭に血が上っただけではなく、問答無用で戦車を前進させる。
「突撃！」
「負けるかっ！」
細見の突撃を見て、玉田の突撃魂に火が付いた。それまで我慢に我慢を重ねていたの

が、ここに来て限界に達したのだった。

一挙に加速する玉田の車輌、それと同時に弾かれたように名倉と池田の車輌も飛び出していく。

「あ、こら！　突撃はまだ早い！」

西が慌てて制止するが、それを聞くような知波単の面々ではなかった。後にはぽつんと西と福田の車輌だけが取り残される。

「無理な突撃は避けろと言われたのに……」

道を進むパーシングに向けて、その右前の茂みを割って知波単の車輌が突撃してくる。

「まるで幌馬車を襲う先住民みたいね」

問答無用で発砲するパーシング、その砲撃で知波単の車輌は3輌が簡単に吹き飛ばされる。

「おのれ！」

残された名倉の新砲塔チハがその間に肉薄しようとするが、アズミが余裕綽々で砲手に指示を出し、砲塔が旋回する。

「これでも」

喰らえと続けたかったのだろうが、衝突前にアズミ車が砲身を名倉車に突き付けて発砲、名倉は最後まで台詞を言う事が出来なかった。そのまま、名倉車は着弾の勢いで吹き

飛ばされて横転し、側面から煙と共に白旗が上がる。
前進するアズミ中隊のパーシングは、撃破されて白旗を上げた池田の旧砲塔チハの横を通り抜けて行く。
「池田車、不覚にも被弾により行動不能！」
「名倉車、善戦するも撃破されました！」
それを見て、池田車の横で履帯を切られ動けなくなった玉田が歯噛みする。
「くそっ、履帯さえ切られていなければ！」
「チハ新旧一輌ずつ撃破されました！　面目次第もございません！」
西が砲塔から身を乗り出し、みほへ報告を行う。
その間にも砲塔は移動するパーシングを追っていて、これを捉えると同時に発砲、直後に戦車自体も前進するが、その目の前に着弾し慌てて急停止する。
「うおっ！」
西の体が激しく揺さぶられて、驚きを隠せない。
「何よ、相手にしないでどこ行く気よ！　スルーってどういう事よ！　バカにしないでよ!?」
アリサが目の前を悠々と進んで行くパーシングを見て、思わずブチ切れた。
「あさがおよりひまわりへ！　敵に突破されたわ、現在進撃中！」

ケイが、土煙で遮られていない方向にパーシングが見えたのを確認、急いで全車に追撃指示を出す。

「アリサ！　追撃の指揮は頼んだわよ！」

「イエス、マム！」

ケイの指示を聞いて、バカにされて頭に血が上っていたアリサ車の乗員のテンションが最高潮に上がった。

「動ける子はあたしについてきて！」

だが、指示を出した瞬間、アリサ車がミキサーに放り込まれたかのように激しく揺さぶられる。

「ちょっと、良い所だったのに！」

「揺れる――！」

「ああ――、薬莢(やっきょう)が！」

後続のラビットことウサギさんチームの元にも砲弾が飛来し、前に進めない。

「ぐぬぬぬぬ――」

操縦手の桂利奈(かりな)が何とか道を探そうとするが、にっちもさっちもいかなくなって、通信手の優季(ゆうき)が普段のおっとりした喋(しゃべ)りとは違い、まじめな口調で通信を行う。

「弾幕がすごくて前に出られません！」

突撃をしないで待機をしていた西と福田も、砲弾に押されるかのように、じりじりと後退を余儀なくされていた。
その間もアリサ車は、パーシングの移動しながらの砲撃に晒され、致命的な命中弾は無いものの滅多打ちにされていた。それでも何とか反撃しようと動き続けるが、ついに一弾が左の履帯に命中、切断する。だが、まだ右の履帯だけで旋回を続けたが、それも切れて動けなくなった。
「ちっくしょ――、バカにして！」
やっと動きが停まったので、アリサがペリスコープを覗くと、その中には遠ざかって行くパーシングの車列と、最後尾で砲塔を後ろに向けているチャーフィーの姿があった。
「え」
チャーフィーの75ミリ砲が、とどめとばかりにアリサ車へと撃ち込まれる。
砲弾を砲塔に受けると、その振動で、白煙を上げてエンジンが停止した。
それを見て、チャーフィーがゆうゆうと去っていく。
「最後までバカにして―――！」
動かなくなったM4A1の中でアリサが地団駄を踏みつつ、車輌の状況を確認、被害報告を行う。
「左右履帯破損、砲塔故障、エンジン不調……満身創痍ですが、修理可能です！」

「前に進めないよ――」
アリサの前向きな報告とは対照的に、倒木に挟まれた桂利奈の悲鳴が響き渡る。
報告を聞いてケイが眉を一瞬しかめるが、すぐに気を取り直して毅然と指揮を執る。
「体勢を立て直すわ！　ハリアップ！」
残存車輌をまとめ直し、修理の必要な車輌は手を貸すか、それとも後から付いて来させるかの判断をするために、各車からの報告を急がせる。特に知波単の状況を把握する必要があった。
「最悪、置いていく必要があるかもね……」
ケイが、後退してきた西車の向こうに見える横転している知波単の車輌を見て、ぽつりと呟いた。

高地の上では、その縁に着いたノンナが下を見て、戦況を報告する。
「左翼敵集団、あさがおチームを突破して、我々の後方へ侵攻中」
「あさがおを援護するわよ！　蹴り落としてやる！」
それを聞いたカチューシャが、ノリノリで悪い顔を浮かべて、攻撃指示を出す。
その指示を受けて、側面に並んでいたパンターが僅かに前進し、高地の下に砲を向けた。

「射点につきました！」
車長の赤星が報告を行うと、僚車からも返事が来る。
「準備完了です！」
それを聞いて、カチューシャが確認を行う。
「中隊長！　いいわねっ！」
「攻撃を許可する」
まほの許可を受けて、カチューシャがここが見せ場とばかりに、大きく息を吸う。
「撃て」
大声で砲撃指示を出しかけた瞬間、カチューシャの右側から猛烈な爆風が押し寄せ、号令を一瞬でかき消した。
「ええええええ――？」
高地の高さほどもあろうかと思われる爆炎が巻き起こり、爆発のやや前方に位置していたパンター一輛が吹き飛ばされる。
カチューシャのT－34／85も、その横に並んでいたカバさんチームのⅢ突も激しく揺さぶられる。
「弾着――っ！」
エルヴィンが帽子を押さえつつ、慌ててハッチから顔を出して状況の確認を行う。
「何なのよ！」

カチューシャの絶叫が響く。

「どうしたっ！」

まほの確認連絡が入るが、答えようとしたエルヴィンの上に、爆発で巻き上げられた大量の土砂が降り注いで、報告どころではない。

「ヴェスヴィオ山の噴火かっ！」

「雲仙普賢岳か？」

「浅間山だっ！」※25

「いや、これは砲撃だ！」

カエサル、おりょう、左衛門佐が口々に驚きの声を上げるが、エルヴィンが否定する。

そこに、やや離れた位置で観測を続けていたカメさんチームの角谷会長から、状況報告が入った。

『あー、こちらカメチーム。上から飛んできたっぽいぞー。すっごく大きい奴だと思うけど、気のせいかな～』

『気のせいではありません！』

河嶋の絶叫も無線に乗っかって来た。

高地の下から、まるでその頂上が吹き飛んだかのような爆発を目撃して、みほが呆然とする。

エルヴィンと角谷会長の砲撃だとの報告から、沙織が慌てて自筆の戦車ノートをめくり、あるページを見せる。
「きっとこれだよっ！　ブルムくまっ！」※26
「爆発が大きすぎます」
「え――」
せっかく調べたのに、優花里に一言で切って捨てられて、沙織がちょっとがっかりした。
「もしかして」
だが何かに気が付いた優花里が、慌ててスマホを取り出し、あちこちをタップする。
「あった！　これです！」
スマホをドヤ顔で見せる優花里、そこには巨大な砲弾に抱き付く少女とその横に笑顔で立つ母親の写真があった。
「シュトルムティーガー!?」※27
「……ナニコレ？」
写真を見て、恐らく優花里と思われる少女が抱き付いている砲弾と、その後ろにある戦車らしきものの砲の太さを見て、沙織が目を丸くする。
「弾じゃなくて、人間が飛び出すの？」

「380ミリです！」

「いや、これおかしいよ」

「損傷したティーガーIIの車体に、海軍用のロケット推進式380ミリ臼砲を搭載した自走砲ですよ。約350キロの砲弾を5キロほど飛ばすことが出来て、着弾地点の周囲にいた戦車を行動不能にしたという記録もありますし、きっとこれです！」

優花里が早口で語り続けている間も、みほはキューポラから顔を出し、聞き耳を立てている。

すると、かなり遠方から重低音の発射音が聞こえた。はっとして、音の方向を見て、更に空を見上げると、やや目を顰(ひそ)めて雲の中を見つめる。

高地でもまほが周囲を警戒、砲弾の飛来方向を探っている。

かろうじて撃破を免れて坂から落ちそうになっていたパンター2輌(りょう)が、ゆっくりと後退を行う。

「戻って大丈夫？」

「ほら、砲弾は同じところに落ちないので、一番安全なのは前の着弾点だから」

赤星(あかぼし)が言い掛けた瞬間、ほぼ前と同じ位置に着弾し、パンターが吹き飛ばされる。

「ええ――、何で――」

「だから言ったのに！」

そのまま、坂を転がり落ちる赤星のパンター、つんのめるようにひっくり返り、底面を

上にして止まる。もう一輌もその横で横転した。

「パンター一号車、撃破されました」

「二号車行動不能」

通信と同時に、両方のパンターから白旗が上がる。

「三発目が来る前に前進しろ」

急いでまほが指示を出すと、各車輌が前進を開始した。

カチューシャ車の横にいたⅢ突が、高地の頂上から降りかけると、目の前に上からのとは違う、普通の砲弾が飛来して着弾する。

「!」

この砲撃で、Ⅲ突のみならず、他の車輌も慌てて急停止した。

エリカが、急いで双眼鏡で砲弾の飛来した先を見ると、そこには横隊を組んだパーシングの姿があった。

「前方の敵、砲撃を開始!」

さっきまで、砲弾の届かない遠距離にいたはずの大学選抜、その本部中隊が目の前に迫っていた。

次々とパーシングが発砲する。

「後退!」

まほが慌てて後退指示を出すが、突出していたⅢ突の周りに砲弾が集中する。

「うおっ！」

「もったいないけど戻るぞ！」

斜め前方で陰に隠れて偵察をしていたヘッツァー、その中で河嶋が残念そうに叫ぶと、小山が一挙にヘッツァーを後退させる。

すると姿を現したヘッツァー目掛けて、パーシングの砲弾が集中した。

「ダメだ、戻れ戻れ！」

撃たれまくった事に、河嶋がパニックになる。

「あれ、これって？」

砲弾の数が多いのに気が付いた角谷会長が周囲を見て、ハッとする。

そして小山が悲鳴を上げた。

「包囲されてる！」

先ほどあさがおチームを突破したアズミ中隊のパーシングが、いつの間にか高地の後方に位置しており、その直後、高地の上に巨大な弾着の爆炎が発生した。

まほが渋い顔で地図に戦況を描いていた。

「後方からの半包囲……上から謎の砲撃。しかも前からは敵本隊」

「ここにいては全滅します！」

エリカからの進言に続き、河嶋の絶叫が無線に飛び込んで来た。
『中隊長、どうにかしろ！　やられたぁ！』
『やられてないって』
だが、すぐに小山が河嶋のセリフを否定したのを聞いて、砲弾が飛来する中、まほが作戦を決意して指示を出す。
「正面斜面をこのまま降りる！」
「「「島津の退き口だ（ぜよ！）」」」※28
それを聞いた瞬間、カバさんチームが大いに盛り上がり、珍しく全員が口を揃えた。
「中隊全速前進！　たんぽぽと合流するぞ！」
まほはそのまま高地の右側斜面を駆け下りて、湿地帯で足止めをされているが、まだ被害を受けていないみほたちのたんぽぽチームと合流するように指示した。
だが、その移動しようとするひまわりチームに向かって、前方のパーシングから次々と砲弾が飛来する。その中を自らが先頭に立って、まほのティーガーⅠが強行突破する。すぐさまエリカのティーガーⅡがその前に出る。
「装甲が厚い私が先陣を切ります」
「頼む」
「はいっ！」

加速するエリカのティーガーⅡ、すぐに左右からⅢ突とヘッツァーが合流し、その後をノンナのIS－2、KV－2、クラーラ車が続き、最後尾にカチューシャがプラウダの車輌を守るように続いた。

部装甲は、パーシングからの砲撃を楽々と跳ね返す。パーシングの53口径90ミリ砲M3は、通常徹甲弾の場合30度傾いた装甲に対し、500メートルから126ミリの貫通力であったので、ティーガーⅡを正面から抜くのは、貫通力の強い高速徹甲弾を使わなければ無理だった。なお、パーシングの主砲弾搭載数は70発で、その大部分が通常徹甲弾で、それぞれ5発程度高速徹甲弾と榴弾を搭載しているのが、大学選抜の車輌では一般的であった。

前方ではエリカが巧みに側面に敵が回らないように進み、それを破城槌として戦線を突破していたが、後方からもあさがおチームを突破した部隊が追い縋ろうとしていた。

「後方七時、パーシング三輌！」

最後尾になったカチューシャが、砲塔を後ろに向けて追撃を牽制しているが、煙の中からパーシングが姿を現したのを確認する。

「撃て！」

カチューシャが砲手に砲撃命令を下す。

当然ながら、隊長車であるカチューシャ車には、ノンナには劣るものの、プラウダでも

トップクラスの砲手が乗っている。その腕は確かで、移動しながらにもかかわらず、先頭のパーシングに砲弾を命中させた。

カチューシャ車の85ミリ砲は500メートルの距離から、120ミリのティーガーIの砲塔前面を貫通可能であり、今の距離ならばパーシングの装甲も抜ける可能性はあった。

公表されている数値では、今の距離では100ミリを貫けるかどうか程度であるが、ロシア戦車の装甲貫通力は貫通した装甲の8割の厚さに設定されているとも言われ、数値がやや低めに設定されている。もちろん戦車道では、それぞれの砲を各種装甲に対して実際に発射して独自の試験を行っており、その結果に基いて貫徹力が算出されている。

だが、斜面での砲撃のため、命中した角度が浅く、砲弾は無情にも弾かれてしまった。

それでも先頭のパーシングは思わず停止し、後続車輌がカチューシャ車を狙って砲撃を行って来た。

カチューシャ車は蛇行しながら逃走していたため、その砲弾は横を通り過ぎて、前を走るKV－2のそばに着弾した。どうしても10キロ程度しか出ないKV－2が、車列から遅れつつあり、それを守るためにもカチューシャは最後尾に位置し続けていた。

結果的にそれが、カチューシャ車に砲撃が集中する要因となっている。

更には上空からの巨大な砲撃が、再度カチューシャ車の側面に落下して、大爆発を起こす。

「見てごらんなさい！　私には当たらないわよ！」

カチューシャが砲撃に怯むことなく、キューポラから身を乗り出すと、弾着に向けて右手を高く突き上げ、威嚇する。それを聞いて、車内の乗員が一斉に歓声を上げた。
『パーシング接近！　5時の方向』
その耳に、エリカからの通信が飛び込んで来る。
5時の方向を見ると、そこには大学選抜主力部隊の3輌のパーシングが並んで、一斉に砲撃を行っていた。
「何よ、狙い撃ち!?」
慌てて車内へとカチューシャが身を躍らせると、その周囲を砲弾がかすめて行く。
前方を塞がれていた事もあり、右下の湿地帯にいるたんぽぽチームに合流するため、右へと進路を変えるひまわりチーム。それによって、前方からの砲撃は避けたが、あさがおチームを突破して半包囲を形成していた部隊、アズミ中隊からの砲撃を受ける事になった。
更には、メグミ中隊の半数の車輌が、追撃可能な距離まで到達して来た。
「こちらメグミ中隊四号車、追撃します」
「こちらメグミ中隊三号車、アズミ中隊二号車を確認次第、支援砲撃を行う」
「アズミ中隊二号車、アズミ中隊三号車と共にメグミ中隊四号車のバックアップに入る」
小さな丘を越えて来たメグミ中隊三号車から六号車は、目の前をメグミ中隊四号車が通

り過ぎるのを確認すると、その場で静止し、一斉に発砲した。続いて、アズミ中隊二号車と三号車が、走りながら前方へと砲撃を行う。

この砲弾は全て最後尾のカチューシャの周囲に降り注いだ。

戦車の中で砲弾に翻弄されつつも、カチューシャはペリスコープを覗いていたが、水滴が付いてそれが僅かに曇ったのに気が付き、そーっと僅かにハッチを開けると、直接外を覗いてみる。

「雨？」

周囲にもやが出て来ていたが、ぽつぽつと雨も降りだしていた。

「……」

雨が酷くなったら、どちらが有利になるだろうかとカチューシャは少し考える。

「少なくとも、カチューシャは泥濘は得意よ！」

他はともかく、カチューシャ自身は雨が強くなって地面が緩んでも大丈夫と思ったが、KV－2はただでも足が遅いのがもっと遅くなるのは困るとちょっと思っていた。

カチューシャの周囲に砲弾が降り注ぐのを見たクラーラが、小さく呟く。

「Катюша в опасности!」（カチューシャ様が危ない）

『Мы прорвёмся все вместе!』（全員で突破しましょう）

クラーラの通信を聞いたノンナが、返信する。それを聞いて、周囲を確認すると、クラーラが小さく首を左右に振ってから俯（うつむ）く。

「Все вместе навряд-ли. Мы станем приманкой!」（全員は無理ね　私たちが囮になります）

そう言うと、決意の表情を浮かべてクラーラが顔を上げる。

『Клара, не делай глупостей!』（無茶です、クラーラ）

ノンナが驚いて表情を厳しくすると、止めようと言葉を続ける。

『Если ты сделаешь это, Катюша тебя разлюбит!』（そんな事をしたら、カチューシャに嫌われてしまいますよ）

「Если мы прорвёмся, то пусть разлюбит, это неважно!」（この状況を打破できるなら嫌われて結構）

その間にもカチューシャ車の周囲には砲弾が降り注ぎ、しかも大学選抜側は先ほどまでの六輌（りょう）だけではなく、更には後続の車輌（しゃりょう）も合流して、全（すべ）てが、本道の最後尾を走るカチューシャ車を狙（ねら）っていた。

その間にも、段々と雨が激しくなって来る。カチューシャは車内へと頭を引っ込めたが、無線に飛び込んで来るのはノンナとクラーラのロシア語のみで、思わず、ブチ切れた。

「あなたたち！　だから日本語で喋（しゃべ）りなさいって！　何度言ったら分かるの！」

カチューシャがそう言った瞬間、先行するクラーラ車が停止する。

「え？」

『カチューシャ様、お先にどうぞ』
「ちょっと、今の誰？」
何があったのか分からないうちに、カチューシャ車はクラーラ車を追い抜いた。だが、クラーラ車が位置を入れ替えた事よりも、カチューシャは今のセリフが誰のものだったのか、一瞬理解出来なかった。
『それではごきげんよう』
「何！　その流暢な日本語！」
『クラーラは日本語が堪能なんです』
クラーラの声だとやっと理解が追い付いた所で、ノンナが追い打ちをかける。
それにいつものように怒鳴ったカチューシャだったが、やっと頭が追い付いてクラーラのセリフの内容を理解する。そして、クラーラが戦車の位置を入れ替えた意味にも。
「先に言いなさいよ！」
「うっ、何する気！」
雨が激しくなっているのも気にせず、慌ててキューポラから身を乗り出した。
「クラーラ？」
カチューシャの問いに答えず、クラーラは徐々に足元も悪くなって行く中、一本道を後から追って来るパーシングに向けて、T‐34／85の幅広の履帯を活かした軽快な走りで突進していく。

パーシングの砲撃はクラーラ車へ集中するが、操縦手へ短い指示を飛ばし、急な加減速による最低限の挙動で回避する。雨で視界が悪くなっていた事が幸いしたのか、一挙にパーシングとの距離を詰めて、更にパーシングがカーブを曲がろうとした所を狙いすまして、一瞬車体を止めると砲撃を送り込んだ。

直撃を受けて、急停止する先頭のパーシング、それを見てクラーラが悟ったような良い笑顔を浮かべる。

「カチューシャ様、一緒に戦うことが出来て光栄でした」

それを聞いて、カチューシャが叫んだ。

「クラーラ！」

「За Правду（プラウダのために）!」

クラーラが叫ぶと、その勢いに押されたようにじりじりと後退するパーシングに向けて、全速で突撃する。

この細い一本道では、左右に避（よ）けるのは無理であり、自分が撃破されてもその車体が道を塞（ふさ）ぐと信じて。

だが、空からの攻撃がそのクラーラの意思を打ち砕いた。

どこからともなく飛来した砲弾が、クラーラ車を直撃し、爆炎で包み込む。

真っ赤な炎が沸き起こり、カチューシャの視界が一瞬光で覆いつくされた。

「クラーラ！」
強くなる雨の中に、カチューシャの絶叫だけが響き渡った。
観客席の大型ディスプレイに、煙の中に翻る白旗が映し出されている。
その様子を見て、急に降り出した雨に不快感が増していた観客が、一斉に大学選抜へとブーイングを送った。観客が見たいのは、お互いが死力を尽くした戦車戦であり、知恵と知恵、実力と実力のぶつかり合い、思いがけない奇策、高い練度を生かした活躍と言った、血沸き肉躍る大活劇で、どこから撃ってくるのか分からないような砲弾で戦車が蹂躙される姿ではなかった。
ＶＩＰ席の西住しほが隣を見るが、そこにいる島田千代は、雨を避けるために手にしていた傘を開いたので、どんな表情をしているのかしほの眼には入らなかった。
雨の中、ひまわりチームが、斜面に穿たれた一本道を降り続ける。差し違えてでも足止めしようとしたクラーラ車も、砲撃で足を止められたことで道を塞ぐことは無く、大学選抜の車輌がやや遅れてひまわりチームの追撃を再開していた。そして、再び最後尾となったカチューシャ車が、また集中砲撃を受けていた。
その様子を、直前でのたのたと走っているＫＶ－２の中から、ニーナとアリーナが見ていた。

「カチューシャ様がまた狙われてるだ」
「あのちびっ子隊長にはいっつも無茶ばっかさせられてきたぎゃ。でも、ここでやられてまっては」
「それに、隊長が遅れてるの、うちらの足が遅いからだっぺ?」
KV-2の中でニーナとアリーナが顔を見合わせる。
「なぁ、うちの車、おっきいから盾になるんでないかい?」
何気ない調子でアリーナが、口に出す。
そしてニーナを見る。
「行くべか?」
言われたニーナがニッコリと笑い返した。
「いぐべ」
ニーナが今度は車内を見回す。
「みんなもいいがい?」
「仕方ないだな」
他の乗員も笑みを浮かべる。
「ん」
「いがべし」

「いぐべし」
「んだ」
斜面がやや緩やかになって、路肩に余裕が出来た場所にKV－2が停止する。その場で、ゆっくりと車体を後方へと向ける。
その横を通り過ぎる時に、カチューシャが気が付いて声を上げた。
「かーべーたん⁉」
カチューシャ車が通り過ぎる所を狙って砲弾が飛来する。しかし、KV－2が勢いよく前進した事で、その一発が右の誘導輪に命中、更に履帯も切断する。
「ああっ！」
KV－2が足を止めるが、そのままゆっくりと砲塔を動かす。
「まんだまだっ！」
「撃てるだけ撃つべ！」
KV－2が152ミリ砲を発射する。40キロもある巨大な弾頭は、装甲を貫くというよりは弾頭重量によって叩き割るという方が近く、当たり方次第ではパーシングを正面から行動不能にするのも不可能ではないと考えられていた。だが、この重い砲弾と装薬を装填するのには、極めて重労働である。
ニーナもアリーナも、どこに見どころがあったのか分からないが、カチューシャ直々にKV－2の乗員に選抜されて、それからは、「もっと早く」「そんな事では敵に撃破され

る」「シベリア送りにされたいの」などと叱咤されながらも、心の籠っているようないないような個別指導を受け、最初は心が折れそうになって、一時期は戦車道をやめようかとも思っていた。だが、カチューシャはＫＶ－２が特別にお気に入りだと聞いてからは、自分たちに期待をしているからだと理解し、寮に帰ってからも独自に厳しい特訓を行って、やっと軽々と装填できるようになったのだ。

そのため、もし高地の上を維持したままで、そこからＫＶ－２が砲撃を行った場合は、それなりの戦果を期待出来たのではと考えられる。だが、カチューシャが愛する「かーべーたん」が持つ砲よりも巨大な砲弾が高地上に降り注ぎ、尻尾を巻いて逃げるしかなかったのは、この小さな乗員たちにも結構な屈辱だった。

アリーナが自分の体重よりも重そうな巨大な砲弾を楽々と持ち上げ、砲身に装填する。続いて、ニーナが砲塔側面の薬莢置き場から薬莢を取り出し、砲弾の後ろに置く。その間にアリーナがラマー、弾込め用の棒を手に取り、薬莢ごと砲弾を薬室内に押し込んで叫ぶ。

「街道上の怪物を舐めんなよ！」

今まで守ろうとあれこれ手を尽して来たＫＶ－２が、逆に自分の盾となっているのを見て、カチューシャがぎりぎりと歯噛みする。

装填が終わったＫＶ－２がパーシングに向けて発砲するが、パーシングも撃ち返してく

る。パーシングの砲弾が砲塔側面をかすめ、車体が激しく揺れる。
それを見て、ついにカチューシャの我慢も、阻止線(そしせん)を越えて崩壊した。
「停止、反転の後、反撃!」
カチューシャの鋭い命令に、操縦手が急停止させ、その場で反転すると主砲を発砲した。
「まずい……カチューシャ、逃げて下さい!」
照準を覗(のぞ)いていたノンナがその状況を知って、慌てて通信を行うが、帰って来たのはカチューシャの怒りの声だけであった。。
『逃げるなんて隊長じゃないわ!』
「何っ?」
その無線を聞いて、先頭のまほが驚く。
『私はかーべーたんと一緒に後ろの敵を食い止める! 二輌(りょう)並べば、足止めは出来るはず!』
「停車!」
それを聞いて、形相を変えたノンナが停車命令を出し、IS-2が急ブレーキを掛けるが、坂を下っていた勢いは止められずに、車輌(しゃりょう)が横滑りしていく。
「お願いです!」

ノンナの懇願にカチューシャが言い放つ。

「来ちゃダメよ、ノンナまで失うわけにはいかないわ！」

だが、ノンナはその言葉を聞かず反転指示を出すと、IS－2の操縦手が横滑りしたのを利用して、華麗にその車体をターンをさせた。その間も、車内ではノンナが必死に、カチューシャを説得する通信を送っていた。

「あなたはこの試合に必要な方です。あなたはウラル山脈より高い理想と、バイカル湖のように深い思慮を秘めている。ですから早く撤退を！」

反転に成功すると、46トンと重戦車の割には軽量な車体を、定格は500馬力そこそこしかないV－2IS液冷12気筒ディーゼルエンジンの緊急出力まで踏み込んで、600馬力超まで叩き出し、一挙に加速させる。まるでノンナの意地と想いが乗り移ったかのように、不整地での最高速度24キロどころか、路上の最高速度以上を発揮しているのではないかと思わせるような瞬発力を見せて、カチューシャ車を追い越し、かばうようにその前に車体をスライドさせて割り込むと、主砲を発射した。

ノンナの狙いすませた一撃によって、122ミリ砲から25キロの砲弾が飛び出し、一直線に先頭のパーシングへと吸い込まれて行った。

その衝撃でパーシングは半回転して、その場で停止、煙と共に白旗を上げた。後続のパーシングがノンナ車に発砲するが、その砲弾は旋回する砲塔をかすめて弾かれた。

再加速するノンナ車、だが先ほど発砲したパーシングが驚異的な速度で砲弾を装填、再

び発砲した。
「ちっ」
僅かに車体をスライドさせていたのが功を奏し、砲弾はノンナ車の左側面をかすめて、後部予備タンクの一つをむしり取っていった。それを意に介さず、ノンナはまっすぐとパーシングへと突入していく。それに怯んだのか、パーシングは回避しようと右方向へ車体をずらす。
全速のまま、ノンナ車はパーシングの側面へ突っ込んだ。
「今です！」
ぶつかった勢いでノンナ車がパーシングを押すが、パーシングも無理やり砲塔を回し、砲塔の同軸機銃を発射した。機銃弾はノンナ車の左後方予備燃料タンクに命中し、爆発を起こさせる。
それを呆然と見送るカチューシャ、ノンナの優しい声が無線から響いて来た。
『カチューシャ』
カチューシャがハッとする。
「わたしがいなくとも、あなたは絶対に……」
ノンナが、照準に飛び込んで来た、更に後続のパーシングを睨みつける。
「勝利します！」

声と共に発砲するノンナ、パーシングも同時に砲弾を発射し、両方の砲弾が互いの砲塔へと吸い込まれて行く。

雨の中、両方の車輌から煙が立ち上り、直後に白旗が上がる。

ノンナ車と噛み合っていたパーシングは、横へと移動し追撃を再開しようとする。

「……ノ……」

呆然とするカチューシャ。

『カチューシャ、何をしている！』

まほの叱責が飛び込んで来た。

『カチューシャ様！』

『さっさと行くだ！』

それに続いて、擱座したと思われていたＫＶ－２から、ニーナとアリーナの叱責も飛んでくる。

更に、まだ動ける事を誇示するかのように砲弾を発射、ノンナ車の横を通り抜けようとしたパーシングを牽制する。

進もうとしていたパーシングが３輌が慌てて静止、ＫＶ－２に砲撃を集中させる。

その姿を見て、肩を震わせ涙をこらえて、カチューシャが呟いた。

「……撤退……」
一瞬後、きっと顔を上げ、叫ぶ。
「するわよっ！」
それを聞いて、ほっと笑みを交わすニーナとアリーナ、直後砲弾が命中し、砲塔が大爆発を起こす。
「覚えてなさい！」
取り残されていたカチューシャ車が、全速で坂を下って行く。T－34／85が全速を出せば、パーシングは追い付く事が出来ない。両者の間の距離はぐんぐん開いていき、幾つかの角を曲がるころには、パーシングの姿は雨の中に消えて行ってしまった。

雨の降り続く高地の上空を通過していく一機の銀河、煙を上げるKV－2を視認して、白旗が上がっているのを確認する。
「大洗KV－2、行動不能」
撃破された車輌がモニターに提示される。
「大洗女子学園行動不能車、九七式中戦車チハ一輌、同新砲塔チハ一輌、パンター二輌。T－34／85一輌、IS－II一輌、KV－2一輌行動不能」
続いて、履帯切断などの損傷を受けて、戦線復帰に向けて作業中の車輌の状況も表示される。

大洗側では、アリサのM4A1シャーマン、ウサギさんチームのM3リー、突撃したものの横転していた九七式中戦車チハ二輌、同新砲塔チハ一輌が既に戦線復帰と表示された。それに対して、大学選抜側はパーシングの三輌が行動不能、五輌が修理中と出た。

一挙に大洗側が七輌も減ったのに、大学選抜側は三輌だけとの差に、観客がどよめく。

VIP席で見ているしほも、思わず厳しい顔になる。

それを見て、それまで厳しい顔をしていた島田千代（しまだちよ）が、一瞬だけ薄い笑みを浮かべた。

しほもそれを視界の隅でとらえたが、勝利の笑みではなく、苦笑のように見えたのはどうしてだろうか。

第三章　蚊虻走牛（ぶんぼうそうぎゅう）

ひまわりチームが撤退に成功した事で、戦局が次の局面へと移行した。
高地に向かう斜面に張り付いて、砲塔部の天辺（てっぺん）だけを出し、車体に木の枝を乗せて偽装した旧砲塔チハ、その上では西（にし）が双眼鏡で大学選抜の本隊方面を観測していた。
丘の上から動こうとしない愛里寿（ありす）の隊長車周辺に、分散していた部隊が集まり始めているのが見える。具体的にはたんぽぽを足止めしているルミ中隊以外の、西たちのあさがおチームを突破し、高地の後部に回ったアズミ中隊と、正面から高地を攻めていたメグミ中隊であった。
動きに間違いがないのを確認すると、無線を開く。
「こちら西、あさがおを突破した部隊は、ひまわりへの追撃を中止して中央集団に合流中」
「了解。引き続き偵察宜（よろ）しく！」
西の無線を受けたケイが、満身創痍（まんしんそうい）のあさがおチームを率いて雨の中移動を行っていた。
ポンチョを着たケイが、砲塔の上に片足を出して思案している。
「それにしてもあの頭上からの砲撃は……」

同じくポンチョを着たアリサが、自信満々に答える。
「恐らくアレです」
「アレ⁉　まさか？」
坂を登るあさがおチーム、最後尾のウサギさんチームのあゆみがアリサの言葉に首を傾げる。
「何でわかるの？」
「また盗聴？」
あやが冷めた目でアリサのトラウマをえぐると、桂利奈がしれっと暴言を吐いた。
「アリサさんって彼氏のことも盗聴しそうだよね」
あゆみが妙にワクワクして答える。
「束縛し過ぎ？」
「それでタカシにフラれたんだー」
優季がニッコリと微笑んで、全車へのオープン回線で身もふたもないことを言い合う。
それを聞いたアリサが、後ろを振り向きながらブチ切れた。
「告白もしてないのにフラれるわけないじゃない！　っていうか何で知ってるのよ！」
涙を浮かべながらの激白に、梓が慰める。
「アリサさん、元気出して下さいねー」

「ひとりも楽しいですよ！」
桂利奈がカレシよりもアニメのほうがいいなぁと思いつつ、でも、誰かが録画の管理をしてくれるなら、それもいいかもとか思いながら続ける。
「ふぁいとっ！」
「ガンバ！」
あやとあゆみが全く心の籠(こも)っていない声援を送ると、自分も彼氏に逃げられたと思い込んでいる優季が、目をウルウルさせながら止めを刺した。
「戦車が恋人でいいじゃないですか！」
この一連の口撃によって、ますますアリサのキレ度が増幅された。
「うるさいわね！　あなたたちに慰められたくないわ！」
この一連の緊張感の微塵(みじん)もない、面白空間になりかけた空気を、ケイが真面目(まじめ)な口調で切って捨てる。
「それより、あの車輌(しゃりょう)は認められたの？」
ウサギさんチームの面白空間に引きずり込まれかけていたアリサが、はっとすると真顔になって前に向き直る。
「うちが導入しようとして、問い合わせたときには協議中だったんですが……」
「あれだとすれば、有効射程は意外と短い。発射方向は大体つかんだし、気軽に自走でき

る車輌ではないから……居場所の推定が出来るぞ」

ナオミが、クリップボードに挟んだ地図を取り出すと、コンパスで幾つかの円を描く。

一方、高地の反対側にいるみほたちのたんぽぽチームは、ルミ中隊に完全に足止めされて、前進も後退もままならない状況であった。

その間に沙織が全体の無線を聞いて、状況を地図にまとめ直すと、みほに見せる。

「ひまわり、脱出したけどあと五輌だって」

「戦闘を中止して、ひまわりと合流しますか？」

砲弾を発射しつつ、華が質問する。

「でも、先に頭上からの砲撃を何とかしないと……」

優花里が装填しつつ、意見を述べる。

「発射の時と弾着の音から推察すると、砲弾はおそらく1トン以上の艦砲クラス」

アンツィオのＣＶ33が小回りの利く車体を生かして、川沿いまで進出して敵を攪乱する。そこへと撃ち込まれる頭上からの巨大な砲撃。

「今度はこっちか！」

「どっから降って来るんすかね？」

「飛来方向は右前方みたいですけど」

忙しく操縦をしている割にはのんきなペパロニに対し、する事がないカルパッチョがじっと耳を澄ませて砲弾の飛来方向を確認する。
優花里が囮となったアンツィオを狙ってきた砲弾と、発射から飛翔してくる音をじっと聞いてから顔を上げた。
「明らかにどこかに弾着観測がいて撃っていますね。でもロケット推進音はなかったから、シュトルムティーガーじゃない」
砲弾を抱いて優花里が考え込む。
「とすると……」
ハッとしてみほを見る。
みほも了解したように頷きを返すと、無線に手を伸ばした。
「会長、磯辺さん、アンチョビさん、ミカさん、お願いしたいことがあります」

「どんぐり小隊全速前進！」
CV33の中でアンチョビが鞭を手に、前進指示を出す。
「だからドゥーチェ、狭いんだから暴れないで下さい」
「ツインテールが邪魔です」
「うるさい！」

怒鳴った瞬間、左右にカモさんチームの八九式と継続のBT－42が追い付いて来る。
「お待たせ～チョビー」
CV33の後ろに付いたヘッツァーから、角谷会長がのんきに告げる。
「チョビって呼ぶな――――！」
ヘッツァーがCV33を追い越し、アンチョビの怒声を後ろに引いたまま、急造のどんぐり小隊が先ほどまで激戦が続いていた高地前の斜面を登り、大学選抜の本陣目掛けて前進する。

それを再編成中のアズミが視認した。
「四輌、前進して来ます。おそらく隊長狙いかと。こちらの指揮系統を混乱させるつもりか、やぶれかぶれなのか……」
停止したパーシングが、次々と砲をどんぐり小隊に向ける。
「各車発砲！」
一斉に砲撃を行う。
「隊長に近寄らすな！」
どんぐり小隊の周りに多数の爆炎が吹き上がる。
あまりにも砲弾が集中し過ぎて、完全に煙でどんぐり小隊が隠れてしまう程であった。

これで全滅させられなくても、半分ぐらいは撃破したか、もしくは慌てて逃げだすだろうとアズミは思ったが、煙が晴れた所には、擱座した車輛どころか何も存在していなかった。
「消えた⁉」
　アズミが驚くが、そこに愛里寿からの冷静な通信が入って来る。
『陽動だ。させておけ』
「はい」
　アズミはあの戦車がどこに行ったのかやや気にはなったが、敬愛する隊長の愛里寿の指示にあえて逆らいはしない。
　もしあそこに移動するとしても、充分な戦力があり、それにあんな物に頼らずとも十分に勝てる、最悪愛里寿隊長と自分たちだけで何とでもなると、アズミには確信があった。

　砲弾の煙に紛れたどんぐり小隊は、丘を横切っているくぼみに姿を隠して、その中を通って右方向へと進路を変えた。そのまま、ナオミとアッサムが計算して出した発射想定地点へと向かう。
　崖沿いの細い道を進む間、不安そうに先頭のアンチョビが左右を見る。大きく道が左へと曲がり、視界が開けた所で、更に左側に巨大な物体が鎮座しているのが目に入った。
「何だ⁉　あれは！」

アンチョビの驚きで、ペパロニがハッチから顔を出し、CV33を急停止させる。
アンチョビが見ていた物を確認して一瞬ぎょっとすると、言葉を絞り出した。
「……カールっすよ」
「カール・ヴォルフ？」※29
「違います」
「ドイツのイタリア地域警察最高級指導者なんて、普通知りません」
アンチョビの的外れの答えに、カルパッチョもCV33から顔を出してツッコんだ。
「じゃあ、カールって何だ？」
「カール自走臼砲っす！　あれは600ミリ砲っすよ」※30
「ろっぴゃくぅ!?」
ペパロニが意外な知識を披露した事と、更にはその内容が示している戦艦よりも大きな砲にアンチョビが驚く。
その間にも、カールが新たな砲弾を自動で装填していた。
「カルロベローチェが8ミリ機銃だから、えーと、何倍だ？」※31
「割り算もできないんすか!?　7・5倍っす！」
「75倍です！」
ペパロニが自信満々に計算を間違ったのにカルパッチョがツッコんでいる間に、カールが砲身をもたげ、新たな砲弾が発射される。

「大体の位置は正解だったけど……あんな化け物使っていいのか？」
「あれがＯＫなら、うちのセモヴェンテＭ４１ＭだってＯＫですよねえ」
カルパッチョが、アンツィオでスクラップとして朽ち果てている、Ｍ14／41戦車の台車を改造し、90ミリ高射砲を搭載したオープントップの自走砲の名前を上げる。
「使えないから放置してたのにな」
ぶつぶつ文句を言っている間に、カールの砲弾はたんぽぽチーム後方に着弾したとの無線が飛び込んで来た。
「急ぐぞ！」
「了解！」

観客席の大型ディスプレイに、巨大な鉄の塊であるカールが映し出されている。その威容に観客が息を呑（の）み、次いであちこちから歓声や怒声が上がる。
それを見た戦車道連盟の児玉（こだま）理事長が、横に座っている文科省の辻（つじ）局長に軽い非難の声を浴びせる。
「これを直前になって認可させたのは、この試合のためだったんですな……」
だが、辻局長はそれをしれっと返す。
「言いがかりはよして頂きたい」
「しかし、オープントップなのに戦車と認めていいんですか？」

「考え方次第ですよ」
高校戦車道では、乗員が全身を装甲に覆われた車体の中に入れる事が出来て、露出しない事が可能な車輌のみの使用が許されている。そのため装甲、そうCV33の最大15ミリしかないようなペラペラで、ハッチも移動するだけでパカパカ開いてしまうようなのでも、それで全周が覆われていればそれで充分である。だが、装甲で閉じる事の出来ない開口部がある車輌は、安全面から使用が禁止されている。
それを考えると、カールは砲が露出しており、乗員を守る装甲が存在しないオープントップの車輌であった。にもかかわらず、役人が不敵な笑みを浮かべ、しらばっくれる。
だが、その表情とは裏腹に口の中で小さく呟く。
「あの程度、世界大会になったら、欧州の国はどんなルールの変更を行ってくるか。欧州式の戦車道は、欧州の仲良しクラブ以外は勝たせて貰えない上に、ルールの変更権は向こうが持っている。我々が世界で勝利するには、圧倒的な実力を見せつけるしかないのだ」
その声は、誰にも届くことは無かった。
どんぐり小隊が慎重に身を隠しながら前進するに従って、カールの周囲を三輌のパーシングが巡回しているのが見えてくる。
「パーシングが三輌、カールを守ってるよ」
「全車停止!」

ヘッツァーの上から河嶋が双眼鏡で観測している。
パニくった顔の河嶋が、双眼鏡を降ろし、車内に視線を飛ばす。
「会長、撤退しましょう！」
「……」
角谷会長が少し考える。
「四輌で突っ込むかぁ」
「ムリです！」
ニヤッと笑った角谷会長に対し、小山も真っ青になって反対する。
『それはパスタをナマで食べるくらい無茶だ！』
「撤退しかありません！」
アンチョビと河嶋も、角谷会長に反対する。
だが、その間も八九式の車内でバレー部のメンバーが円陣を組んで、何事かを相談していた。
意見がまとまったのか、磯辺が元気よく顔を上げる。
「待って下さい！　いい考えがあります！」
それを聞いて、アンチョビと河嶋が頭の上に巨大な疑問符を浮かべると、河嶋がぶつくさ文句を垂れ流した。

「まさか、また戦車に戦車が乗るのか⁉」
「いいね〜」
角谷（かどたに）会長が楽しそうに言い放つと、八九式のキューポラから佐々木（ささき）が顔を出して否定した。
「違います！」
次いで、前部ハッチが開き、近藤（こんどう）と河西（かわにし）が姿を見せる。
「カールに上がれる方法、無いですから！」
「私たちが考えたのは……」
「殺人レシーブ作戦です！　作戦内容は……」
最後に磯辺（いそべ）が、得意げに佐々木の前から身を乗り出して、作戦を伝える。
角谷会長は、一瞬微妙なネーミングだなと思ったが、それを口に出さないだけの良識は当然持ち合わせていた。

砲撃を受け続けているたんぽぽチームだが、まだひまわりチームも合流しておらず、閉塞した戦況を変えるには至っていなかった。
「おのれぇ」
待機しているのが耐え切れなくなったローズヒップが、先ほどまで囮（おとり）となっていたＣＶ

33を真似るかのように、川近くの場所をちょろちょろしている。
どんぐり小隊からの報告を受けて、もう囮が必要なくなったので、ダージリンが指示を出す。
「ローズヒップ、戻りなさい」
その瞬間、カールの砲弾がローズヒップ車の近くに着弾した。
それに驚いて、まるで叱られた犬のように、尻尾を巻いてローズヒップが戻って来た。

作戦を聞き終わった角谷会長が、満面の笑みを浮かべる。
「それいいね～」
「そうですかぁ？」
感心する角谷会長だが、小山と河嶋は不安そうに首を傾げる。
二人の不安をよそに、角谷会長は無線通信を行う。
「継続ちゃ～ん、聞いてた？　ちょっと手伝ってほしいんだけど」
無線を聞きながら、一瞬苦笑のような表情を浮かべて、ミカがカンテレを爪弾いた。
「……この作戦に意味があるとは思えない」
それを聞いたアキが、ミカの横で頬杖をつきながら質問してくる。
「じゃあ従わないの？」

アキに対して柔らかい笑みを浮かべたミカが、カンテレを弾(はじ)く指を止める。
そして、ふっと顔を上げた。
「しかし、彼女たちの判断を信じよう」
それを聞いて、一瞬アキが驚いたように目をぱちくりさせるが、すぐに真顔になって正面を見る。
ミカが、今までの単調な爪弾(つまび)きから、朝の鶏のように高らかにカンテレをかき鳴らした。
それを聞いて、ミッコが操縦席の前面ハッチを下げ、楽し気な満面の笑みを浮かべつつ、操向装置を握り締める。ミカが足でタイミングを取ると、ミッコがクラッチを踏んでシフトチェンジを行うと、カンテレに負けないようにエンジンを吹かす。
「行くぞ！」
落ち着いてミカが指示を伝えると、ミッコがクラッチから足を離し、猛烈な白煙をマフラーから噴き出して、BT－42が熊笹(くまざさ)の藪(やぶ)の中から飛び出した。ミカのカンテレに合わせて、道なき道を突き進む。
正面に林が開けて、明るい所が見えてくる。事前に確認していた方角からすれば、その先はカールがいる中州へと突き出た小さな岬のようになっている場所であり、問答無用で進んでそのまま崖から大ジャンプを敢行した。

BT－42が、中州へとゆっくりと落下していく。実際には、物凄い勢いで落ちているのだが、それを目撃していた護衛のパーシングの車長には、あまりの光景に思わずスローになったように感じるほどの衝撃であった

フィンランド人が得意であるラリーのようにジャンプを決め、ミッコが着地するなり急ブレーキをかけると、その場で激しく地面に履帯を叩き付けて大旋回した。

そのままの勢いで、まだ何が起こったのか理解出来ずに呆然としている一輌のパーシングの真後ろに付けると、114ミリ砲を発射した。

BT－42に搭載されているHEAT弾、モンロー／ノイマン効果を利用した対戦車榴弾は、理論上は160ミリの装甲を貫通する。実際には、そこまでの威力を発揮するのは難しかったが、それでもパーシングの50・8ミリしかない車体後部装甲を貫通するには十分だった。※32

一瞬にして一輌を撃破すると、BT－42は継続高校得意の逃げ足を見せて、脱兎のごとく素早く走り去って行った。

上がった白旗を見て、護衛のパーシング小隊の隊長が、悔しそうにキューポラの縁を叩いた。

「くそっ、やられたっ」

自車の側面を逃げて行くBT－42を見つめ、慌てて指示を出す。

「小隊、追うぞ！」

ＢＴ－42が中州から下へと降りて行く。その先には、水が枯れた人造湖の底が姿を現していた。

カールが位置していたのは、人造湖の中州で、そこにはまるで古代ローマの水道橋のようなコンクリートアーチが連なった鉄道用の橋梁が繋がっていた。線路自体は既に廃線になっているが、橋梁と線路はそのまま残されている。

逃げたＢＴ－42は、橋梁の横を湖底に向けて突き進んで行く。

その砲塔の中では、アキが砲身に装薬を握り拳で押し込み、砲尾を塞ぐ鎖栓レバーを勢いよく押して発射準備を完了させる。

「これは人生にとって、必要な戦いなの!?」

「おそらくね」

ミカは、アキの質問に反射的に答えつつ、砲塔後部の視察口から外を見ながらカンテレを弾いていた。

ＢＴ－42は、高速戦車として知られるＢＴ－７譲りの快速を発揮して、不整地での最大速度の時速50キロを楽々と発揮している。それに対して、パーシングには苦手な不整地であったが、湖底が乾いて堅く締まっているので、路上のような速度を発揮して追い掛けていた。※33

護衛小隊の車長が何事かを叫び、ハンドサインで後続の車輌へと指示を出す。それを確

認すると、後続のパーシングはすっと右へと移動し、BT－42を左右から包囲しようと試みる。
完全に護衛がカールから引きはがされ、すぐには戻れないのを確認した所で、後部の橇にCV33を乗せた八九式が爆走、急なターンを決めると中州へと向かう橋梁へと突入した。だが、橋梁と中州を繋ぐ部分のアーチは崩れており、繋がってはいない。
「くそっ、やられた！」
橋の上を走る八九式に気が付いた護衛部隊の小隊長が、悪態をつく。
「大丈夫、木端微塵にしてやるね！」
カールの車長が護衛部隊小隊長を安心させるように通信し、同時にカールの右の履帯を激しく動かし、その場で旋回して橋梁へと砲を向ける。
「あ――――っ、こっち見てるぞ――――」
アンチョビが、カールの砲が指向してくるのを見て、台詞の全てに濁点が付いているのではないかと思うほど驚きの声を上げた。逃げたいと思うが、CV33は八九式の上に乗っていて、全く動けない。
安全対策が十分に取られているとは言え、600ミリ砲の直撃を食らえば小さなCV33など軽く吹き飛ばされてしまう。その時の衝撃を考えると、ちょっと泣きたくなるのも分からなくはない

だが、その恐怖を押し殺してアンチョビは、カールの砲口を真っ直ぐと見据えた。
八九式の操縦手の河西も、その優れた動体視力を活かし、砲口を見つめる。初速が秒速３５０メートルの八九式の砲弾が飛ぶのを視認出来るバレー部のメンバーなら、せいぜい秒速２２０メートルのカールの砲弾を視認する程度、バレーボールに止まるハエを確認する程度の優しさだった。
緊張感の高まる中、カールの砲弾が発射され、その瞬間、河西は橋の幅ぎりぎりまで車体を右に寄せ、その動きに合わせてヘッツァーの操縦手の小山も車体を寄せた。砲弾はその横を通過し、橋の対岸近くの部分に着弾した。
２トンにもなる巨大な砲弾に詰められた２９０キロ近い爆薬が瞬間的に爆発し、アーチ部分が一瞬で崩落する。
それを見て、湖底を走行中のミッコが舌なめずりをして加速させる。目の前には次々と橋梁の破片が落下していたが、躊躇せずにその中へと突っ込んでいく。
そこに出来た僅かな隙間へと、ＢＴ－42の２・29メートルしかない細い車体を押し込み、側面をこすりながらも通り過ぎた。後続のパーシングは、急停止をしようとしたが間に合わず、３・51メートルもある車幅が引っ掛かる。それでも強引に通過しようとするが、上から落ちて来たがれきによって砲身が押しつぶされ、白旗が上がった。
「残り一輛！」

アキが満面の笑みを浮かべ、砲塔を回しつつミカを見つめる。その瞬間、ミカが突然顔を上げて指示を出した。
「ミッコ、左！」
驚くアキ、ミッコも反射的に左へと進路を変えるが、そこには護衛小隊長のパーシングが突っ込んできていた。ミッコの顔が引きつるが、避けようにも距離が近過ぎた。
そのまま車重が42トンもあるパーシングの側面に衝突し、僅か15トンしかないBT－42は軽々と吹き飛ばされる。その衝撃で、25・４センチしかない細い履帯が左右とも切れ、更には衝突した右の誘導輪も損傷した。そのまま激しく横転したまま転がって、切れた履帯をまき散らし、溝へと落下する。
その様子を見て、パーシングが溝へと砲を向けつつ停車する。
だが、BT－42のハッチからアキが急いで飛び出し、車体側面で何かを弄ると、直後ミッコが側面に刺してあったハンドルを引っこ抜き、操縦席の前に突き刺す。同時に倒れていたハンドル部分を起こすと、普通の車のハンドルの形へと変形させる。
BTシリーズはクリスティー式戦車をベースとしており、履帯を外して後部起動輪と転輪をチェーンで繋ぐと装輪状態でも走行可能だった。装輪状態では、BT－42の元となったBT－7は時速73キロ、速度試験では１００キロ以上を発揮したとも言う。※34
起動輪と転輪を激しく空転させ、車体後部を左右にゆすりながら、再びBT－42はロ

ケットスタートを決める。そのまま溝から飛び出し、停止中のパーシングの前を横切る。
飛び出して来た物の正体を確認した護衛小隊長が、目を丸くする。
「何⁉　履帯無しなのに⁉」
慌てて砲をBT－42に向けようとするが、コマネズミのようにくるくると動くBT－42に翻弄され、秒15度の砲塔旋回速度では、全く追い付けない。
「天下のクリスティ式なめんなよ！」
歯をむき出し笑みを浮かべたミッコが、ハンドルを激しく切りながら、パーシングの周りを旋回し、急接近していく。その間も、激しく揺れる車内でミカがカンテレを弾き、アキが主砲の照準を付ける。
爆炎の中から姿を現した八九式が加速すると、後ろにCV33の3トンの重量が掛かっているのもあり、車体前部が浮き上がる。
「いっけ────！」
河西が絶叫、急ブレーキをかける。
「「「殺人レシーブ！」」」
アヒルさんチームの全員が叫ぶと、八九式が急ブレーキによって前のめりになり、後部に乗せていたCV33が前へと発射された。
CV33はそのまま真っ直ぐ、カールへと飛んでいく。

「やった!」
「賢いね~私たち」
近藤が歓声を上げ、佐々木が自画自賛する。
「今だ! マズルを狙え!」
アンチョビがカルパッチョに攻撃指示を出す。カルパッチョが8ミリ機銃を斉射、だがカールの重厚な砲身に弾かれてしまった。600ミリもの砲弾を撃ち出す以上、砲身もその発射時の圧力に耐える必要があり、分厚い良質な鉄で作られているため、機銃弾程度では表面に傷を付ける程度であった。また、車体部分も爆風対策に、10ミリ程度の装甲は張られているので、こちらにもさほどの被害を与えられていない。
攻撃が空振りに終わった上、ジャンプをしたがCV33は中州直前の橋の崩落部分を超えることは出来ず、その手前に無様に落下、まるで仰向けにされた亀のように逆さにひっくり返ってしまった。
「ぐえっ」
アンチョビが落下の衝撃で、カエルの潰れたような声を出す。
ペパロニは何とかしようと履帯を回すが、地面に欠片も設置していないので、ただただ空回りするだけであった。当然、ハッチが塞がれているので、アンチョビ達が外に出る事も出来ない。

「あれ？」
予想と違う結果に磯辺が呆然とし、何とも言えない沈黙が流れた。
橋の上では嫌な空気が流れているが、橋の下ではユーモラスでありつつも真剣な戦いが続いていた。
何とか驚きから立ち直ったパーシングが、後ろを取られまいと逆にＢＴ－42を追撃、ＢＴ－42側も砲撃の機会を狙って橋脚の周りを走り回る。だが、速度差はいかんともしがたく、ＢＴ－42が絶好の射点に位置するのに成功する。
その瞬間、上部ハッチから顔を出したミカが指示を出した。
「用意！」
指示を受けてアキが主砲を発射したが、その砲弾は信管を作動させることもなく、パーシングの分厚い主砲防盾によって弾かれる。
それでもパーシングの車長が怯んだ隙に、ＢＴ－42はその脇すれすれを通り抜けて行こうとする。パーシングも慌てて発砲したが、その時には既にＢＴ－42はパーシングの前からいなくなっていた。

パーシングの車長は、その場で砲塔を後ろへと回して追撃を狙う。
じりじりとカールが接近してくるのを見て、近藤が落胆する。
「せっかく踏み台になったのにー！」
「作戦失敗だぁ、撤退しろ！」
河嶋もパニックを起こしつつ、後退命令を出す。
「くそ――」
ひっくり返ったＣＶ33の車内で、精神的にも物理的にも手も足も出せないアンチョビが、腕組みをして唸っていた。
『チョビ子、履帯を回転させろ！』
そこに角谷会長からの無線が飛び込んできて、その命令口調に思わずムッとした。
「命令するな！　わたしを誰だと……」
「干し芋パスタを作ってやるからさ～」
アンチョビのセリフを遮るように角谷会長が手にした干し芋を振りつつ、笑みを浮かべた。
アンチョビがそれを聞いて、目を見開いて叫ぶ。
「パスタ！」

「マジすか！」
アンチョビ以上に反応したペパロニが目をキラキラさせ、操向装置を強く握り直す。
一気に回転し、ＣＶ33の履帯がピンと張り詰める。
「よし！」
ヘッツァーが武者震いをしたように振動し、加速する。後退中の八九式の横を通過し、ＣＶ33の上に乗り上げ、回転する履帯をカタパルト代わりにしてヘッツァーが飛び出して行く。
「飛べぇぇぇぇぇぇぇぇ」
角谷会長の絶叫と共に、ヘッツァーは橋の亀裂を飛び越えた。
「会長、お願いします！」
河嶋が、砲手席の角谷会長にまるで用心棒の腕利き浪人を呼び出すかのように声を掛けると、そのテンションに乗ったのか、ニヤっと笑った角谷会長が狙いを付ける。カールもまさかの事態に大至急次弾装填（そうてん）をしようとしているが、その砲口内にヘッツァーの75ミリ砲弾が叩（たた）き込（こ）まれた。
直後爆発し、砲の前後から猛烈な火炎が噴き出す。
ヘッツァーがカールの車体前部にぶつかりつつ滑り落ちて行くが、その間に煙の中から、カールの天井から白旗が上がる。
「やった！」

撃破に成功した角谷(かどたに)会長が歓声を上げた。操縦手の小山(こやま)はもう勘弁とばかりに操行装置にもたれ掛かり、河嶋(かわしま)も着地のショックでヘロヘロになっていたが。

そして護衛のパーシングは、追う側から追われる側へとなっていた。

カールが撃破された以上ここにいる必要はなく、それとも残っている大洗(おおあらい)側の車輌(しゃりょう)を撃破するか、どちらにしてもヒルのようにへばりついているＢＴ－42を、一旦(いったん)引きはがす必要がある。

だが、その後を猟犬のようにＢＴ－42が追い続ける。

パーシングの倍近い速度で追いすがり、一挙に距離を詰めるが、パーシングもただではやられまいと急停車した。

それにミッコが反応した時には、ＢＴ－42のスピードが乗り過ぎていて一瞬で追い越し、逆にパーシングの主砲に狙(ねら)われる形となった。絶好の射線になった瞬間、パーシングが主砲を発射。地面すれすれに砲弾が飛び、旋回中のＢＴ－42の左転輪に命中する。

片輪走行になりつつも車体を旋回させ、ミッコがハンドルを小刻みに動かして微妙なバランスを取りつつ、そのままパーシングへと突っ込んでいく。

「嘘(うそ)！」

そのあまりの見事な片輪走行に、パーシングの車長も驚きの声を隠せない。というよ

り、先ほどから信じられない事が次々と起こり、パーシングの車長の精神はかなりすり減っていた。

「トゥータ！」

ミカがアキに指示を出すと、アキが発射レバーを引く。

パーシングの乗員も何とか冷静さを取り戻し、正面のＢＴ－42に主砲を発射する。

双方の砲弾はほぼ同時に発射され、避ける事も出来ない距離であったので、両車輌ともその場で爆発、煙を上げて擱座した。

一瞬後、どちらからも白旗が上がる。

吹き飛ばされた衝撃でＢＴ－42の車内はしっちゃかめっちゃかになっていたが、ミカがいい笑顔を浮かべて体を起こす。

そしてカンテレを拾い直すと、軽く弦をはじく。

「皆さんの敢闘を祈ります」

「カールがやられたですって⁉」
アズミが護衛小隊隊長からの報告を聞いて、思わず大声を上げる。その後に、隊長からの無線自体が入らなくなった。
「隊長、カールと護衛小隊が全滅した模様です」
『ほうっておけ』
愛里寿に報告を行うが、全く興味の無い声が返って来た。なおもアズミは言い募る。
「ですが……」
『あんなのはいらない』
「はい」
『第二弾作戦に移行する』
愛里寿の指示を聞いて、ルミ中隊へアズミが後退指示を出す。

たんぽぽチームにひまわりチームが合流し、更にはあさがおチームが丘の上からルミ中隊に奇襲をかけた所で後退命令が出たので、ルミ中隊は整然と後退した。
その間に、大洗連合も渡河をすると、移動を開始する。

Ⅳ号戦車を先頭に、草原を走る大洗連合の車列。
ハッチから身を乗り出した優花里が、資料を片手に戦況の報告を行っている。
「BT－42、パンター二輌、T－34／85、IS－Ⅱ、KV－2、チハ新旧一輌ずつ。合計8輌が撃破されました」
それに沙織が、手製の戦況ノートを見ながら答える。
「でもでも、こっちはカールとパーシング五輌を撃破したよ」
「これで22対24ですね」
「ずいぶん減ったね」
「いや、よく持ちこたえた方だ」
沙織がしゅんとすると、麻子がぼそっと呟く。
「継続さんががんばってくれましたよね」
優花里は、河嶋が得々と戦果を語った事で知った、どんぐり小隊の活躍ぶりに興奮を隠せない。
そこにCV33のハッチから得意げな顔をして身を乗り出したアンチョビが、すーっと後ろからやってきて、Ⅳ号戦車の横に並走する。
ふふんと鼻を鳴らすと、胸を張った。
「うちもな！」

それを聞くなり、優花里が素直に尊敬の表情を浮かべて、アンチョビを見つめる。
アンチョビの前に、車内からカルパッチョが身を乗り出して割り込んで来る。
「バレー部さんと会長さんたちのお蔭です！」
河嶋がⅣ号とＣＶ33の間の無線を聞いて、腕組みをしながらヘッツァーの砲手席でどや顔を浮かべる。
「カールを倒す判断をした我々の勝利だ」
だが、それを聞いた小山が速攻でツッコミを入れた。
「桃ちゃん、撤退って言ってたじゃない」
「覚えてない！」
河嶋が顔を真っ赤にしつつ反論するが、間に挟まった角谷会長が、マイペースで干し芋をつまんで口に運んだ。
「まーまー、芋食いねえ」
Ⅳ号を挟みＣＶ33とは反対側に、覇気のない感じで西の旧砲塔チハが並ぶ。
「西住さん、我が校は二輌も戦列を離れてしまい、誠に申し訳ございません！」
車長席の西が、言葉と同時に深々と頭を下げた。
それを見てみほが苦笑を浮かべる。
「いいえ」

「次こそは知波単学園の名にかけて、必ずお役に立ってみせます！」
それを聞いて吹き出しそうになった沙織が、車内に引っ込んで、隣の麻子にこそっと呟く。
「どんな役に立つのかなあ」
「突撃の方向性を与えてやればいい」
呆れ顔の沙織に麻子が答える。
「方向性ねぇ」
Ⅳ号車内でそんな会話が繰り広げられている頃、車列の後方にはぽつんと孤立したような雰囲気のT－34／85が続いていた。その車長席では、カチューシャが目に光を無くし、心細そうに項垂れていた。
「うちはカチューシャだけになっちゃった……」
その呟きを聞きつけたのか、隣に並んでいたチャーチルがやや車体を寄せてくる。
そして、車長席でティーカップを手にしたダージリンがにっこりと微笑んだ。
「大丈夫。まだあなたが残ってるわ、カチューシャ」
「わかってるわよ！」
弱音を吐いたのを知られたのが恥ずかしく、照れ隠しのように声を荒げ、カチューシャは正面を向いた。それを見て、ダージリンが更に笑みを大きくする。

「ふふっ」
高い草が茂っているとはいえ、見晴らしのいい原野、どこから攻撃を受けるかわからない以上、各車輛がそれぞれ決められた方向に砲塔を向け、大洗連合の車列は全周警戒をしつつ進んで行く。
先頭のⅣ号から、みほが全車輛を見渡して一つ深呼吸をすると、咽頭マイクのスイッチを入れた。
「すみません、わたしの責任です。互角に持ち込めると思ったんですけど」
最後尾で群れを守る牧羊犬のように警戒しているまほが、間髪を容れずに答える。
「定石通りやり過ぎたな。らしくもない……」
まほの指摘に、やはりそうだったか、と思ってみほは少し俯いた。
だが、まほは安心させるような口調に切り替えて諭すように言葉を続ける。
「みほの戦いをすればいいんだ」
「！」
はっとするみほ。
更に空気を変えるかのように、ケイが明るい口調で質問してくる。
「ここからの作戦は？　大隊長」
みほは少し考えると、自分の、そして大洗女子学園の得意技を述べた。

「局地戦に持ち込んで、個々の特徴を活かして、チームワークで戦いましょう」
それを聞いたエリカが、冷笑を浮かべた。
「急造チームでチームワーク？」
「急造でもチームはチームだ」
「……」
まほの言葉に、エリカも返す言葉がなく、思わずしゅんとする。
「互いに足りないところを補い合って、戦うしかない」
原野の先には、高い堰堤が聳え立っているのが見えて来た。
Ⅳ号が堰堤を乗り越えると、そこにはこんな原野には似つかわしくない幅の広い道があり、みほがその道の続いている先を指差す。
「チームを再編成して、あそこを目指します」
右側警戒を行っていたケイが、堰堤を乗り越えつつ承諾する。
「ＯＫ」
車列の外周から加速してきたＣＶ33が全速で堰堤を乗り越え、勢い余ってそのままジャンプする。
「負けませんことよ」
それを見た後続のローズヒップのクルセイダーが、加速してジャンプを試みた。

その見事な飛びっぷりを、後続のレオポンさんチームのホシノが見て納得している。
「うんうん、戦車はジャンプだよねー」
「ドリフトもいいぞ」
ツチヤが、車体を横滑りさせて進路を変更させるチャーチルを指差した。
「後でメンテナンスするのが大変だけどな」
ナカジマがしみじみと言うと、スズキが悲鳴を上げた。
「電装系がー」
それぞれの車輌がそれぞれのやり方で堰堤を乗り越えたのを見つつ、みほは再び前方を指差した。
「あの中だと遭遇戦がやりやすくなります」
みほの指差す先を、一同が見つめる。
「確かにそうね」
「でも背水の陣になるわ」
「そういう戦い得意だよ、ウチは！」
角谷会長が自信満々で言い放ったのに、アンチョビも乗っかる。
「アンツィオも得意だ」
「そっすか？」

だが、間髪を容れずにペパロニがまぜっかえしたので台無しであったが。
いい感じに全車輌の緊張感が抜け、リラックスできたのを確認して、みほは大きく右腕を振り上げ、笑顔を浮かべる。
「では」
その右腕を力強く前へと振り下ろし、前進命令を下した。
「パンツァー・フォー！」
右腕が指し示す先には巨大な観覧車、その下には広大な廃遊園地が広がっていた。
最初は60×30メートルのスケートリンクとその付帯施設が作られたが、次第に周辺に多数の遊具が作られ、最終的には南北約1150メートル、東西920メートルの楕円形をした広大な敷地にまで拡大した。結果的に、今日では回り切れない大きさとなり、宿泊施設まで併設されていたが、交通の便の悪さと市場状況の変化で次第に客足が減少して、閉鎖された後は、戦車道の市街地戦演習場の一つとして使用されるようになった。
遊園地への連絡道路からホテルの横を通り、建物を迂回しつつ正面入り口から中へと入っていくⅣ号戦車。その後には、残りの車輌が続く。
「改めて、チーム分けをします」
遊園地正面入り口を抜けた中は、戦車でも余裕で走れるほどの広い道が通っており、そ

の両側には急勾配の三角屋根を備えた欧風建築が連なっていた。オープン時には売店やキャラクターショップとして使われていたのだろうが、今はどこも完全に朽ち果てており、中もがらんどうであった。
その荒廃した様子を見て、玉田がちょっと眉をしかめる。
「こんな辺鄙な所まで撤退するとは……」
しかし、その玉田に向けて並走する西がたしなめる。
「違う玉田、これは転進だ」
それを聞いて、玉田がぱっと目を輝かせた。
「成程、転進ですか！」
そんなやり取りの横で、九五式軽戦車の車長席から顔を出した福田が、物珍しそうに建物を見つめていた。
「……」
「何だ、福田、廃墟が珍しいのか？」
「幽霊は出ないぞ」
「違うであります、あの観覧車とても大きいでありますね！」
福田の視線を追う一同。建物の奥に国内最大級には届かないものの、100メートル近くはありそうな巨大な観覧車が鎮座していた。

それを見て、カチューシャが目をキラキラさせる。
「見て見てノンナ、観覧車よ、観覧車！」
ぱっと横を向くが、そこにはいつもカチューシャの横に侍っているノンナの姿はない。
カチューシャが一瞬暗い顔になりかけたが、首を振って心を立て直す。
「ふふん、このプラウダの隊長であるカチューシャが、一人でも強いところを見せてあげないとね」
カチューシャの高笑いを聞いて、T－34／85車内で乗員たちが顔を見合わせる。
「なぁ、隊長我々がいるのを忘れてねえだか？」
「しっ、聞かれたらシベリア送りになるだよ」
ちらっと車長席のカチューシャを見上げて、声を潜めるカチューシャ車の乗員たちであった。

薄暗いチャーチル戦車の中に、エンジン音に混じってパソコンのキーボードを叩く音が響いていた。その音をＢＧＭに、車長席のダージリンが優雅に紅茶のカップを差し出すと、隣のオレンジペコが無言でポットから紅茶を注いだ。
「面白い戦いになりそうね」
一言呟くと、ダージリンが紅茶を口に含む。

「お言葉ですが」
だが、アッサムが暗い表情でＰＣの画面を見せる。そこには、大洗連合と大学選抜の戦力比グラフが表示されていた。
大学選抜の戦力として、戦車道協会公式スペックシートが表示される。
センチュリオン×１・主砲58・３口径17ポンド砲　砲弾数70　攻撃力Ａ
装甲最大１５２ミリ　車体前面76ミリ　最小17ミリ　防御力Ａ
路上速度34・６キロ　路外20キロ　機動力Ｃ
Ｍ26パーシング×20・主砲53口径90ミリ砲Ｍ３　砲弾数70　攻撃力Ａ
装甲最大１１４ミリ　車体前面１０１ミリ　最小12ミリ　防御力Ｂ
路上速度40キロ　路外８・４キロ　機動力Ｄ
Ｍ24チャーフィー×４・主砲40口径75ミリ砲Ｍ６　砲弾数48　攻撃力Ｃ
装甲最大38ミリ　車体前面25・４ミリ　最小15ミリ　防御力Ｄ
路上速度56キロ　路外40キロ　機動力Ｂ
この時アッサムは車輌数を間違えているのだが、それは情報不足であったため、仕方な

い。
「大学選抜の総合攻撃力は242、防御力は186、機動力はBマイナス。それに対してこちらは攻撃力144、防御力130、機動力C。未確定情報を除いても、戦力比は1・8倍。想定勝敗率は80パーセントで大学選抜側有利で、データの上では厳しい戦いになりそうです」
「覚悟の上じゃないですか」
オレンジペコがダージリンを見ながら、微笑む。ダージリンもそれにふっと笑みを浮かべて答えると、マイクを取り上げた。
「運命は浮気者。不利な方が負けるとは限らないわ。ね、隊長」※35
「はい。……私たちは私たちに出来る戦いをしましょう」
みほは目に力を込めると、決意を込めて顔を上げた。
ダージリンとみほの通信は全車にオープンになっており、それぞれの乗員が決意を込めて頷く。
ウサギさんチームのM3リーの中で、照準を覗きながらあやが考え込む。
「私たちに出来る戦い……」
「何だろう?」
梓も真剣な顔で悩んでいる。

西(にし)も一瞬目を閉じて、自問自答する。

「突撃？　いや、違う……」

目を開けて空を見上げるが、そこに回答はない。

大洗(おおあらい)連合側が遊園地の中に入って行った姿は、一部始終ルミによって観測されていた。

撤退命令で本体への合流をすると見せかけたルミ中隊だが、実際には林の中に入った時点で一部の車輌(しゃりょう)だけが本体へ戻り、ルミと護衛のパーシング、チャーフィーの三輌は静かに大洗連合の後をつけていた。途中パーシングとチャーフィーは、進路の目印として残り、ルミだけが最後まで追いかけていたのだった。

ルミが双眼鏡を降ろすと、本隊へ報告を行う。

「全軍、遊園地跡に移動」

遊園地からやや離れた台地の上を、土煙が起こらないようにゆっくりと進む愛里寿(ありす)の本隊。前方にはアズミ中隊とメグミ中隊が進んでいる。

そこにルミからの報告を受け、愛里寿が頷(うなず)く。

「……了解」

ルミからの報告を聞いて、アズミとメグミが後方を進んでいる愛里寿を、尊敬のまなざ

しで見つめる。
「ここまではぼ隊長が読んだ通りですね」
アズミが、愛里寿の読みを褒める。
「籠城したつもりだろうけど」
『退き先もなく、後詰のない籠城は自殺行為』
メグミのセリフに、ルミが無線で被せてくる。
それを聞いたアズミが頬に手を当てて、ニコニコする。
「高校生の思考って感じで可愛い～」
前方で観測をしていたルミが、アズミをほったらかしにして愛里寿に更なる前進を促す。
『私たちも行きましょう』
愛里寿が頷いて、進撃を促す。

遊園地跡へと向かう大洗連合と、それを追う大学選抜の様子が観客席の巨大ディスプレイに映し出されていた。続いて画面には、次の会場となる遊園地跡が映る。
「さぁ、次の戦場は遊園地跡へと移動する模様です。ここは戦車砲でも簡単には破壊できない塀で囲まれており、侵入可能な箇所は南正門、東通用門、西裏門の三か所のみ！　し

かも同時に多数の車輌が並んで入れるのは正門である南正門のみ！　他は戦車が一台ずつしか入れず防衛が容易で、南門がまず最初の激戦地となる可能性は大！　しかし、変幻自在のニンジャ戦法を使う島田流は、どこから来るかは分かりません！　陽動作戦を行うか、それとも正面突破を行うか、西住流対島田流の二大流派対決はいよいよ目が離せません！」

興奮したアナウンスが流れ、観客も今度は互いの力を尽くした試合になりそうなのと、雨が上がった事から、盛り上がっていく。

その様子を見て、観客席で小さく笑みを浮かべる島田流家元の島田千代。

「島田流の真髄は序破急。ここまでが序章」

ちらっと隣に座っている西住しほを見つめ、その目に力を籠める。

見られたしほは、平然とした顔をしているが、よく見ると僅かに眉を寄せていた。

遊園地跡の中央広場、その北側にある富士山を象った展望台の上にⅣ号戦車が止まっていた。

更にⅣ号の上に、みほと優花里が立ち、みほは双眼鏡で、優花里は私物の砲隊鏡で周囲を見張っている。先ほどの高地から続く山の麓近くにかすかな土煙があり、それとは別に遊園地から数キロ先の谷となって直接は見えない辺りに猛烈な土煙が上がっていた。

「奥のは戦車でしょうか？　それとも風の影響でしょうか？」
優花里の報告に、みほも双眼鏡をそちらに向ける。
「ちょっと遠すぎて、でも島田流なら他にまだ罠を仕込んでいるかも。みんなに注意する様に伝えて」
「了解です」
優花里が沙織へと連絡をすると、ちょうどそこに次々と、他の部隊からの報告が飛び込んできた。
「南正面入り口、配置完了」
大洗連合が入ってきた南正面入り口、そこにはまほのティーガーⅠ、エリカのティーガーⅡ、そしてカチューシャのT‐34／85が防御を固めている。
「西裏門、こちらも配置済みであります」
先ほどカールがいた場所を通っていた鉄道は、西裏門の先にある駅が終点となっていた。駅からの通路は、戦車が広く展開できる場所が少ないため、西が率いる知波単、西と細見の旧砲塔チハ、玉田の新砲塔チハ、福田の九五式が待機していた。みほとしては、攻撃力があり待ち伏せに向いているヘッツァーかⅢ突を配置したかったのだが、西からは統率が難しいとの理由で断られた。ならば同じ日本戦車の三式中戦車を提案したが、西に策があるということで結局みほが折れて、任せたのだった。

「東通用門、こちらも固めたわ」
頑丈な塀で囲まれた通用門、ここは防御戦闘に向いたダージリンのチャーチルを主軸として、ルクリリのマチルダⅡ、ローズヒップのクルセイダーが援護についている。
「中央広場、後三分で整備終わるよ～」
中央広場では、残りの車輌が臨機応変に救援に駆け付けられるように待機しており、この時間を利用して大洗の自動車部を中心としたメンバーが車輌の整備を行っていた。すでに他の車輌のチェックは終了しており、後はナカジマたちが乗っているポルシェティーガーの最終点検だけであった。
各部隊から来た通信を聞いて、Ⅳ号の中では沙織がホワイトボードに描いた遊園地の簡略図に、マグネットの戦車を置いている。
「こんな感じ？」
出来栄えを横から覗いている華に尋ねる。
「大丈夫だと思います。でも、どこから攻めて来るのでしょう？」
「多分正門じゃないかなあ……それか西裏門？」
沙織が自信なさげに答える。
華は、沙織が戦況をある程度理解するまでになっていた事を、素直に感心する。
「何？」

「いえ、ずいぶん勉強したんですね」
「みぽりんと学校のためだし」
「その努力を普段の勉強でも何故(なぜ)しない」
麻子(まこ)がぼそっと呟(つぶや)くが、沙織は答えずにむくれるだけだった。

カバさんチームたちも通信を聞きつつ、足回りの調整をしていた。

「籠城か……アレシア攻防戦だな」
「いや、セバストポリ要塞(ようさい)のようだな」
「籠城と言えば大阪冬の陣だ」
「五稜郭(ごりょうかく)ぜよ！」※36
「「「それだ！」」」
「全部守る側が負けているのばっかりで、ウィーンとかレニングラードとか上田合戦とか熊本城包囲戦じゃないんでしょうかねえ」※37
横で聞くともなしに聞いていた小山(こやま)が静かにツッコミを入れる。
「ほら、ミリオタって負け戦が大好きだから」
角谷(かどたに)会長が最近知った知識を披露すると、河嶋(かわしま)が両手を振り回して興奮する。
「負けては意味がない！　我々は勝たねばならんのだ！」

「ま、西住ちゃんにまたおんぶにだっこだけど、ここできっちりと片をつけないとね」
角谷会長が、富士山展望台の上のみほを見つめる。

他の戦車より僅かに離れた位置に止めたＴ－34／85の上で、カチューシャが周囲をの上から見るともなしに見つめている。
遊具の身長制限の看板を見て、頭に手を当ててちょっと背伸びをしてみたり、朽ち果てたアトラクションの紹介を見たりしていると、子供を肩車した親子の看板が目に入って、思わず目が潤む。
「……ノンナ」
はっと我に返り、目を強くこすると力強く宣言する。
「みんなの仇は絶対に討つから！」
その様子をこっそり見ていたアリサが何か言い掛けるが、ケイが口に人差し指を当てて黙っているように指示したので、開き掛けた口を閉じる。

急な斜面をゆっくりと登っていくＣＶ33。ハッチからはアンチョビが髪をなびかせて、正面を見つめている。
車内からはペパロニの声が響いて来る。

「ドゥーチェ～マジっすか？」
「マジだ」
「敵に見つかりませんか？」
心配そうなカルパッチョの声もする。
「タンケッテは小さいから見つかりにくい」
「見つかったら逃げ場ありませんけどね」
その瞬間、ＣＶ33は坂の頂上に姿を現した。レールが走り、左右には安全用の手すりが組まれた、ジェットコースターのコースの上に。
広大な園の北側をぐるっと回るグレート・マウンテンコースターＺ、その中央広場手前の高所にＣＶ33は止まっており、ここからは園内どころか、園に接近する全ての物が見通せる。
アンチョビは身を低くしつつ、ＣＶ33の上に四つん這いになって双眼鏡で周囲を見渡した。
東西は全く動きがなかったが、南正面に向けたとたん、三本の盛大な土煙が上がっているのが視界に飛び込んでくる。急いでカルパッチョから無線のマイクを受け取ると、全車へ通信を行う。
「敵は南正面にまとまって進撃中」
その視界の中で土煙が合流して、一つになっていく。

「どうやら合流している模様」
アンチョビの通信を受けて、みほと優花里も土煙に視線を向ける。先ほど見えていたのよりも、もっと近付いているが、それでも巧妙に地形に姿を隠し、戦車自体は見えてこない。
「土遁の術、いえ縦深突撃ですかね」
「市街地での戦力の分散を警戒しているのかも」
優花里が感想を述べると、それを足掛かりにみほが自分の考えを整理する。どんな手で来るにしても、今は南正門が最初に戦端を開くことになりそうと判断して、通信を行う。
「第一陣は南正門に移動して下さい」
みほの号令と共にポルシェティーガーを先頭に、それを追い抜きかねない勢いでT−34/85が続き、少し遅れて八九式、M3リー、Ⅲ突、そして最後尾にヘッツァーとB1bisが続いて、南正門へと移動を開始する。
「北裏門、東通用門の皆さんも警戒を怠らないようにして下さい」
指示に合わせて沙織がマグネットを動かす。
「サンダースの皆さんは機動防御のための総予備として、ここに残って下さい」
「オーケー」

ケイが了承する。

グレート・マウンテンコースターZの上で、アンチョビが双眼鏡で南正門の先を見つめている。

そこには、相変わらずこれ見よがしな盛大な土煙が上がっていた。

「あと三分くらいかな」

「にしても、あいつら随分かっとばしてますね〜」

ハッチから顔を出したペパロニが、胡散臭そうに土煙を見つめる。

カルパッチョも続いて顔を出す。

「そう言えばさっき雨が降ったから、普通に走っていたら土煙なんて上がらないですよね」

「あえて大げさに土煙を立ててるように走って、威圧感を出そうとしているのかもしれないな」

「ハッタリかましてるんスね。うちのマカロニ作戦みたいなもんだ」

「違うと思います」

アンチョビたちが観測している間に、大洗連合側の第一陣が正門裏に集まり、障害物の影に身を隠したとの報告が届いた。

その間にも土煙は近付き、先頭の車輌が双眼鏡で識別可能な距離まで入ってきた。
「来た来た」
「敵、双眼鏡視認距離に到達」
カルパッチョが報告を行い、それをみほも確認する。
大学選抜は、一旦建物の陰に隠れたが、次に現れるときは双方が直接視認可能、つまり砲撃も可能な距離になると判断、みほは双眼鏡を下して全車輌に連絡を入れる。
「戦闘準備」

ウサギさんチームの車長であるあずさが、緊張している他の乗員に向かって優しく指示を出す。
「来るよ、みんな落ち着いてね」
そう言うと、素早く車内に身を滑らせ、ハッチを勢い良く閉める。
左右の他の車輌でも、同様の光景が見られたが、正門の守備を任せられたまほは、西住流の鉄則の一つである、指揮官は戦況を確実に把握するために、キューポラから身を乗り出したままだった。
その視線に建物の影から接近してくる土煙が入り、耳には戦車のエンジン音が聞こえてくる。

エンジン音が小さくなった瞬間、土煙の中から砲弾が立て続けに一発飛来し、正門の中へと飛び込んできた。
「撃て」
発砲を確認したと同時に、まほは全車に砲撃指示を出す。
初弾に関しては事前に各車輌に狙う位置を指定してあり、正門に入ってくるためには必ず通らなければならない箇所を、ブロック分けしてそれぞれが狙うようになっていた。
だが、通れるルートが一か所に絞られる以上、それは当然ながら大学選抜も読んでいて、発砲と同時に遮蔽物に姿を隠し、致命的な被害を受けないようにしていた。
「避けたか」
初動で少しでも敵の数を減らしたいと考えての策だったが、予想以上に動きが素早かったのに、僅かにまほは違和感を覚える。
そんなまほの気持ちも知らずに、後方に位置しているヘッツァーの中では、猛攻に気分を良くした河嶋が、砲撃音にも負けないほど叫んでいた。
「いいぞー、向こうはこっちの弾幕に頭をひっこめたままだ。どんどん撃てー」
「桃ちゃんうるさい」
小山がとがめるが、河嶋は興奮したままだった。

アンチョビは、もうもうと立ち上る煙を見て苛立ちを隠せない。
「んくそー、全然見えないぞ」
やる事が無くて退屈を持て余したペパロニが、貧乏ゆすりをする。
「いーなー、うちらもド派手に戦いたいな〜」
「でも変ですね。雨が上がって間もないのに、あんなに土煙が上がるなんて」
ペパロニの肩につかまって敵勢を見ていたカルパッチョが、先ほどから雨と土煙の関係を妙に気にしている。それをアンチョビが、歌うように呟く。
「雨上がり、土煙、今は昼下がり」
「何かの歌詞っスか？」
ペパロニが聞くが、アンチョビは首を傾げて無言で考えている。

一方正門では、反撃の少なさにまほとエリカが同時に首を傾げる。
「砲弾数は？」
「相手は少なくとも20輌以上いるはずなのに、ちょっと少なすぎますね……これって」
幾ら姿を隠しながらとは言え、撃ってくる数が少なすぎる。大洗連合側も十輌が正門裏にぎちぎちに詰まっているが、ほとんどの車輌が砲撃に参加している。その数よりも反撃が少ないのは、明らかにおかしい。

まほは咽頭マイクに手を伸ばし、疑念を伝えようとする。
その時、アンチョビも風で流される煙の動きを見て、移動している車輛のものではないと気が付く。
「これは土煙じゃないぞ、くそっ騙された！」
アンチョビが慌ててマイクを取り出す。
「隊長！　陽動作戦だ。あの煙は煙幕だ！」
「兵法三十六計第六計『声東撃西』ですね」※38
「へーほー？」
カルパッチョが知識を披露するが、残念ながらペパロニには何のことやら全くちんぷんかんぷん、馬の耳に念仏、馬耳東風であった。
みほがまほとアンチョビからの連絡を受け、正門は陽動で、他の三つの門、特に手薄な西裏門に敵が回ったと判断した。
「西裏門の西さん、敵がそちらに回り込もうとしています。サンダースの皆さんが応援に向かいますので、戦闘準備お願いします」
「かしこまりました」

みほからの戦闘準備の号令を聞いて、細見が武者震いをする。
「よーし、敵が見えたら全力で突っ込んでやる」
「先ほどの面目を果たす時が来た」
玉田も気合を入れる。
「知波単名物総突撃！」
「全軍で突撃し、玉砕する、これこそ知波単魂！」
「恐れながら申し上げます！」
細見と玉田が盛り上がる中、福田が意を決して発言する。
「いたずらに突撃して全滅しては、それこそ知波単の面目に関わるかと」
「何だと‼」
「福田、伝統をないがしろにする気か⁉」
激昂する玉田と細見だが、その後ろで西が感心した表情を浮かべる。
「申し訳ございません！」
「まぁ待て。福田、何か策があるんだな？」
福田が先輩方に怒られて、慌てて頭を下げた所に、西が諭すように質問すると、福田の顔がぱぁっと輝いた。
「先ほど西住隊長は、自分たちに出来る戦いをすると仰いました」

「それが突撃だ！」
福田の発言に、玉田が勢いよく答える。
「はい、突撃ですが、我々が考えるべきは突撃のやり方ではないでしょうか」
「やり……」
「方？」
玉田と細見が首を傾げる。それを、西が頷きながら聞いている。

次いで、みほはダージリンに連絡を行う。
「東通用門のダージリンさん、そちらも注意して下さい」
みほの通信を受けたダージリンは、戦闘準備を行う。
「各自戦闘配置」
「こちらの東通用門はせいぜいチャーフィーが通り抜けられる幅しかありません。。大丈夫かと」
アッサムが、指示を聞いてダージリンを仰ぎ見る。
通用門の道幅は５ｍあるが、前方に見えるシャッターは車幅２・５ｍ以下の普通貨物車輌の通行用なので、３ｍしかない。大学選抜のチャーフィーは丁度車幅３ｍなので、ぎりぎり通行可能だが、圧力であるパーシングの車幅は３・51ｍでどう考えても両側のコンクリート製の壁に阻まれる。

アッサムが事前にその幅を測って、このルートから主力が来ることはまずあり得ないと具申しており、それがアッサムの確信の根拠でもあった。
因みにチャーチルは長大な図体をしているが、全幅は2・74ｍでこの門を通ることが可能であり、当然マチルダⅡとクルセイダーはそれよりも小さいので余裕であった。
アッサムの報告に対してダージリンが、ふっと小さく微笑む。
「一オンスの慎重は一ポンドの知恵に値する」※39
格言の内容に、オレンジペコは小さく首を傾げて、口を開こうとした。
だが、ダージリンが珍しく格言の内容を噛み砕いた。
「念には念を入れて、くれぐれも紅茶をこぼすような野蛮な戦い方をしてはダメよ、ローズヒップ」
自分に言われていたと、やっと気が付いてローズヒップがはっとして姿勢を正す。
「こぼしませんことよ！」
だが、姿勢を正した時に、すでにローズヒップは動揺してカップから紅茶がばしゃばしゃとこぼれていた。
しかも戦車もローズヒップ同様よそ見をしていたのか、東通用門に砲も戦車も向いていない。
慌てて、戦車と主砲を門に向ける様に指示を出す。

その瞬間、通用門のシャッターが大爆発と共に吹き飛んだ。
「チャーフィー、いざ尋常に勝負!」
はじかれたように加速するローズヒップ車、同時に主砲を発射して威嚇すると、門へと突撃する。
チャーフィーの装甲は最も厚い砲塔防盾でも38ミリしかなく、車体の大部分は1インチ、つまり25・4ミリしかない。
それに対して、貧弱と思われがちなクルセイダーの6ポンド砲だが、貧弱なのはドイツの化け物のような重戦車に対してであり、通常徹甲弾でも500メートルで81ミリの装甲を貫通するだけの能力があるので、相手がチャーフィーならば十分に正面から撃破可能であった。
だが、ローズヒップの砲撃は鈍い音と共に弾かれ、爆炎の中からはチャーフィーの40口径75ミリ砲とは比べ物にならない長大な主砲が姿を現す。更には、チャーフィーには付いていない砲口制退器がその主砲の先端に付いているのが、ダージリンの視界に飛び込んでくる。※40
大学選抜で砲口制退器が付いているのは、隊長車のセンチュリオンか、パーシングのどちらかである。だが、今見えるのはセンチュリオンの丸形ではなく、横に広がった角型であり、ならば、どうやって壁を一瞬で破ったのかは知らないが、あれはパーシングである。その装甲は最大で砲塔防盾の4・5インチ、つまり114・3ミリ、車体前面は4イ

ンチ、つまり101・6ミリで、絶対にローズヒップの6ポンド砲では抜けない。逆に、最大でも僅か51ミリしか装甲がないクルセイダーでは、簡単に撃破されてしまう。そんなことが一瞬にしてダージリンの脳裏を駆け巡り、同時に号令が口から飛び出した。
「戻りなさい、ローズヒップ！」
「ほ？」
ローズヒップも、ダージリンの指示を聞くと同時に、反射的に車体を滑らせる。
直後、前方の長大な砲身から砲弾が発射され、先ほどまでローズヒップ車のあった位置を通過していく。砲口制退器から噴出されたガスをまともに食らったのか、クルセイダーがよろけたように見えた。衝撃が走り、砲弾がダージリンが遮蔽物としている建物へと命中する。
よろけたのを利用し、その場で綺麗なターンを決めたローズヒップ車が、尻尾を巻いた犬のように全速でダージリンの下へと駆け戻ってきた。
その間に通用門の爆炎は治まり、また通り抜けて来た車輌が前進して来たのもあって、主砲以外の車体が徐々に見えてきた。
さっきまでは無かった瓦礫、どう見ても壁の破片に車体をのし上げる。
だが、その程度の障害物などものともせずに、瓦礫を次々と踏みつぶして巨大な戦車が姿を現した。重量級の物体が上げる金属のきしみ音を発しながら接近してくる戦車の姿を

見て、ダージリンが驚愕する。

「何てこった、T28重戦車がいるぞ！」※41

巨大な姿を双眼鏡の視界に捉えてアンチョビが叫び声を上げた。その声が無線で伝わっていたのか、視線を斜め下にいるⅣ号に向けると、みほが小さく頷き返した。

アンチョビがペパロニの首根っこを掴んで、CV33の中へと放り込むと、カルパッチョが素早くCV33の後ろに着く。そのままアンチョビと共にCV33を押して、前方のコースターの斜面へと向かう。

アンチョビの無線を聞いて、沙織が慌てて自作の戦車ノートをめくる。

「T28ってどれ～？」

パラパラとめくると、T－28と書かれたページが目に入る。※42

「これかな？」

そこには、短い主砲を砲塔に備え、更に車体前方に二つの機銃塔を備えた多砲塔戦車があった。

「重戦車だから、こちらでは？」

多砲塔戦車の方には中戦車と書いてあり、華がその隣のT28を指差す。

「ヘッツァーの大きなお兄ちゃんみたい……ちょっと、最大装甲３００ミリって何！」
　自分で書いた絵を見てのんきな事を言い掛けた沙織(さおり)だが、スペックを見た瞬間、思わずそのとんでもない性能に大声を上げた。
　華もおっとりと驚きの声を上げる。
「あらあら、黒森峰(くろもりみね)のマウスよりも装甲が厚いんですね」
「どうするのよ、こんなの」
　沙織が呆(あき)れ顔(がお)を浮かべた。
　Ｔ28と聞いた優花里(ゆかり)も、ちょっと顔をしかめる。
「１０５ミリの主砲と、戦艦の砲撃にも耐えられる３００ミリの正面装甲。４本の履帯を持つアメリカの超重戦車です！」
　みほが先を促す様に優花里を見ると、優花里が説明を続ける。
「まずいですね、あんな化け物を持ち出してくるなんて。ティーガーⅡの主砲でも抜けません」
　それを聞いて、みほは軽く眉(まゆ)を顰(ひそ)めた。

　東通用門でＴ28と撃ち合う、ダージリン以下の聖グロリアーナ女学院メンバー。まだよくは見えないが、その後ろにも車輌(しゃりょう)が続いているのが僅(わず)かに見えている。

T28に対して砲弾が全く効かないのを見て、ダージリンが軽口を叩いた。
「私たちもトータスを持って来れば良かったわ」※43
「持ってませんけど」
オレンジペコが冷静にツッコんだ。

斜面寸前でCV33に飛び乗るカルパッチョとアンチョビ。カルパッチョが車内に潜り込んだのを確認して、アンチョビがペパロニに前進指示を出す。
「うぃっす」
惰性でそのまま坂へと差し掛かるCV33、アンチョビも慌てて体を車内に潜り込ませようとした瞬間、一挙にCV33が坂を下りだした。
「うわ――――」
思わず上がったアンチョビの悲鳴をカルパッチョが手で口を塞ぎ、CV33は坂を下っていく。
何とかアンチョビは車内に入ると、ペパロニの耳に近付いて、そっと指示を出した。
「いいか、エンジンは出来るだけ絞って静かに、静かに行けよ」
坂を下った惰性を利用して、大学選抜に気が付かれないように、CV33はゆっくりとコースターのレール上を東通用門の上まで移動する。

「こちらドゥーチェ。こりゃあ間違いなくこっちが主力だぞ」
アンチョビの目には、Ｔ28の後ろに続くパーシングの群れが映っていた。
「7、8、9、……まだいます。パーシングが少なくとも10輌以上！」
カルパッチョも数を確認して、みほへと報告を行う。
カルパッチョの無線を聞いたみほは、急いで無線連絡を行う。
「サンダースの皆さん、東通用門に向かって下さい！」
中央広場を出て、西門へと向かい掛けていたサンダースの車輌は、みほの無線を聞くなり円形通路に沿って進路を東側へと変える。
「もう向かってるよ」
ケイが安心させるように応えると、僅かにみほが安心したような反応が返って来た。
「ゴーアヘッド！」
それを聞いて、全速で東通用門へと向かうサンダースの車輌。
続いてみほが南正門のまほへ連絡する。
「お姉ちゃん、Ｔ28が」
『分かっている、落ち着け』

「うん。大洗のチームも増援へ」
『了解した。ここは私たちに任せておけ』
みほが慌てかけていたが、まほが自信満々で安心させる。

無線を切るとまほが大洗の車輌に指示を出す。
「聞いた通りだ、直ちに東へ向かってくれ」
「了解！」
レオポンさんチームのナカジマが、良い返事をすると真っ先に移動を開始する。
「後は頼むね～」
その後に角谷会長が手を振って、去って行く。
次々と続く大洗の車輌を見送るまほ、その間もエリカとカチューシャが砲撃を続け、南正門の敵車輌を牽制する。

正門から続く広い道を、大洗の車輌がひた走る。
ヘッツァーの中で、角谷会長が沙織の無線を思い出して、ちょっと目を輝かせた。
「ヘッツァーのお兄ちゃんか～うちもT28改造キット欲しいなあ」
「売ってません」

だが、それを小山が勘弁してくれと言わんばかりに否定した。
ダージリンたちが東通用門を守っていると、進入してきたＴ28の１０５ミリ砲Ｔ５Ｅ１が火を噴いた。
この主砲は、通常徹甲弾でも５００ヤード、つまり４５７・２メートルの距離で30度傾斜した１７４ミリの装甲を貫通する能力を持っており、チャーチルの１５２ミリの正面装甲を貫通可能であった。これはティーガーⅡの１８０ミリの砲塔前面を除けば、大洗連合のほぼ全ての戦車を正面から撃破可能という事でもあった。
そんな化け物のような砲がチャーチル目掛けて発射され、隠れている建物の壁を大きく削り取る。
オレンジペコがその火力に驚き、思わず鏡の国のアリスに登場する伝説の怪獣に例えた。
「まるでジャバウォッキーです」
「というよりもバンダースナッチね」※44
それに対してダージリンが、同じく鏡の国のアリスに出てくる、正体不明の近付いてはいけない生物に例えた。ただ、バンダースナッチは素早く動く生物であり、その点においては当たってはいない。

また、オレンジペコの例えも原点の鏡の国のアリスからではなく、そこから派生した映像作品に登場した怪物の事だったのだろう。というのも、鏡の国のアリスに登場するのはジャバウォックで、ジャバウォッキーは映画での名前であるから。

「ならば、私たちに必要なのは希望ですね」

アッサムが、同じく鏡の国のアリスのスナーク狩りに因(ちな)んで、話を続けた。※45

それを聞いたダージリンが優雅に微笑(ほほえ)み、アッサムに反撃を指示する。

「こちらも砲撃よ」

効果はないと分かっていても、こうやって撃ち続けている事で、相手の前進速度は鈍る。そして、装甲を貫けなくとも、運が良ければ、どこかに故障を起こさせることが出来るかもしれない。

それこそアッサムの言った「希望」を祈って、ダージリンは砲撃指示を出し続けた。

『騎兵隊とうちゃーく』

そこに無線がわずかなノイズと共に、サンダースのケイの声を伝える。

ダージリンが、微笑みを浮かべた。

「来ましたわね」

「希望の到着ですね」

通信と同時に、チャーチルの後ろにナオミのファイアフライが勢いよく滑り込んできて、真後ろに付けるなり停止、その17ポンド砲を発射する。

威力の高い17ポンド砲が、高初速の装弾筒付徹甲弾を使用してもT28を正面から抜くのは不可能だが、足止めを狙って撃ち続ける。
また、チャーチルと反対側の壁際には、ルクリリのマチルダが隠れて砲撃を行っていたが、その後ろには、ケイの乗ったM4シャーマンが停止して砲撃を行っていた。
そして、通信にローズヒップの声が飛び込んで来る。
『行きますわよ――』
何事と思いつつケイがキューポラから覗くと、そこにはローズヒップのクルセイダーが、東通用門へ続く道路に飛び出して、全速でT28に向けて突撃して行った。
「え、何あれ？」
『ああいう人なんです』
驚いて誰ともなしに呟くと、オレンジペコの通信が返って来る。
その間に、ローズヒップがT28に肉薄し、その直前で主砲を発射すると、全速で後退した。
そのちょろちょろとした動きにいら立ったかのように、T28がクルセイダーを砲撃するが、後退速度があまりにも速すぎて、砲弾は地面を削るばかりであった。
T28の4・39mにも達する車幅は、通用口の通路幅ぎりぎりで、今にも左右を壁にこすりそうであった。それが障害物になって、後方に続く大学選抜の車輛は攻撃をなかなか行えない。更に下手に壁にぶつけて止まってしまっては、他の門に回らなければならないた

め、Ｔ28は慎重にゆっくりと進んでいた。
「お待たせーって、Ｔ28の本物だ」
予想以上に大学選抜側の通路突破に時間が掛かっているため、南正門にいた大洗の援軍も、ヘッツァーを先頭にして到着した。角谷会長が実物を見るなり、目を丸くする。以前、自分の好きな戦車を聞かれた際に、大きいのがいいからという理由でＴ28を選んだのだが、まさか本当にここで遭遇するとは思っていなかったのだった。
「うわ、でかい！」
二番目に到着した八九式の磯辺が、まるで通路に挟まったようになっているＴ28を見て驚愕する。砲手の佐々木も照準越しに見て、指をワキワキと動かした。
「また上に乗れそうですね」
「砲塔無いから乗っても意味ないよ」
「そっか」
だが、操縦手の近藤が冷静に諭すと、佐々木ががっかりする。磯辺もがっかりした所を見ると、どうやら二人ともＴ28の上に登りたかったのだろう。
わらわらと大洗の車輌が集まってきたが、そこにＴ28からの砲弾が飛来し、蜘蛛の子を散らすように慌てて散開する。
砲弾が、後方の看板に命中、粉々に粉砕する。お返しとばかりに大洗側も砲撃を行う

が、全ての砲弾が楽々と弾かれた。
エルヴィンですら、その装甲の厚さに驚きの声を上げる。
「何て固い戦車だ」
「どっか抜ける所無いの？」
「重戦車キラー行ってきなよ」
梓が呟くと、優季が無責任に操縦手の桂利奈を煽る。
「あいー」
流石に無理とばかりに桂利奈が首を横に振った。
そこにダージリンの指示が飛ぶ。
「履帯を狙って！」
通路の左右にみっしりと固まって、Ｔ28のあちこちを狙う各戦車。何とか履帯を狙おうとしたが、再びＴ28からの砲弾が飛来、ヘッツァーが車体を隠した街灯に命中、倒れてくる。
「2ブロック後退！」
最前列にいたダージリンが距離を見て、一時後退指示を出した。
わらわらと散る各戦車、通路からぬっとばかりにＴ28が顔を出した。
「あれが通り抜けたら、その後のパーシングが一斉に追って来るわ！」

悔し気なダージリンが、本格的な後退指示を出す。
「後退して、みほさんたちに合流するわよ」
2ブロックだけではなく、一挙にその場から全戦車が撤退する。
T28が加速し、通路から車体の全てを出すと、その後ろから満を持してパーシングが飛び出してきた。
『こちらメグミ中隊、東通用門突破。予定通りにZ地点に向かいます』
「了解」
愛里寿が丘の上から興味なさげに、観測を続けている。
我慢に我慢をしていたルミが、歓声を上げげて飛び出して行った。
「さぁ、狩りの始まりだ！」
「楽しみましょ」
アズミが静かにルミを唆す。
「簡単に撃破されないでね。命乞いしたくなるほど、かわいがってあげるわ」
メグミが逃げて行った大洗の部隊を見て、ニッコリと笑う。そして、各車輌に大洗側を追い立てる様に指示をする。
完全に忘れ去られた姿となった西門では、真っ暗な戦車の中で玉田が汗をかいていた。

「西隊長！　味方の危機ですよ。直ちに総攻撃に向かうべきでは？」
「そう言うな玉田、これも作戦だ」
西が冷静に指示を出す。作戦と聞いて玉田がおとなしくなった。
だが、相当イライラしているのか、貧乏ゆすりが激しくなっていた。

同じく陽動となった南正門では、煙幕が邪魔で門の前にいる大学選抜側の戦車の総数が分からないので、まほたちが進むにも引くにも判断の付けようが無かった。そこで、同時に発射される砲の数を数えて、何とか割り出そうとする。
カチューシャが、体を大きくキューポラから乗り出し、前のめりで正門前を見つめて、何かに気が付いたのか、ぱっと左側のまほの方を向いて、指を四本立てた。
「四輛しかいないわね。私たちを引き付けておくだけみたいだけど、どうする？」
まほが小さく頷く。
「分かった、行こう」
無線を切り替えて、エリカに指示を出す。
「エリカ、頼む」
それを聞いて、ティーガーⅡのエリカが満面の笑みを浮かべた。
「はい！」

即座にエリカが前進指示を出し、重量級の車体とは思えないほどの軽快な動きで、ティーガーⅡが正門から飛び出していく。勢いよく飛び出して行くと見せかけて、そのまま急制動、履帯を細かく動かして正門の前の壁へとスライドし、パーシングを射界に捉える。

未来位置へと砲撃を行おうとした二輌のパーシングだが、エリカの細かい動きに攪乱され、照準を合わせる暇もなく砲弾を発射、あらぬ方向へと飛び去って行った。

さらに言えば、ティーガーⅡの砲塔前面１８０ミリ、車体前面１５０ミリにも達する装甲は、パーシングの90ミリ砲では、この至近距離からでも通常徹甲弾で抜くのがほぼ不可能であった。

１００メートルの距離で直角に当たれば１５０ミリの装甲を抜けるが、ティーガーⅡの前面装甲は、50度の強い角度が付いている。

正面から撃たれる限り、パーシングに簡単に抜かれる事は無いとの安心感もあって、エリカはゆっくり着実に、照準をパーシングに合わせるように指示を出す。

尤も、エリカのティーガーⅡには、黒森峰で一番目に優秀な砲手が乗っており、静止状態でしかも相手の車体が完全に見えている以上、絶対に外しようのない状況であった。

「撃てっ」

「撃ちます！」

エリカ車の撃った砲弾は、真っ直ぐにパーシングに吸い込まれ、白旗を上げさせる。
エリカ車が発砲すると同時に、まほのティーガーⅡも加速し、撃破されたパーシングの横を通り過ぎざまに、隣のもう一輛のパーシングに砲弾を命中させ、撃破する。
そのまままほ車は僅かに減速して、撃破されたパーシングを盾にして、その陰にすっと潜り込む。
後方に隠れていたパーシングとチャーフィーが、まほ車に向けて発砲するが、その時にはすでにまほ車は視界から消えており、砲弾は撃破された味方のパーシングへと吸い込まれていく。
続いて、回り込んだカチューシャ車が、今撃ったばかりのパーシングを撃破する。
「撤退します！」
チャーフィーが慌てて加速、正門を通って遊園地跡にその快速を活かして飛び込んだ。
それを見たまほが、みほへ通信を行う。
「こちら正門、パーシング三輛撃破、チャーフィー一輛が園内に入った。これより追撃を行う」
『了解です、先ほどの情報と合わせて他の車輛に注意して下さい』
園内へと戻っていくまほたち。

まだじりじりと我慢をしている玉田（たまだ）、そのもともと短い堪忍袋の緒が、そろそろ本格的に切れそうになっていた。

来るなら早く来てほしいとの玉田の願いが通じたのか、パーシングが西裏門へと迫っていた。

「撃て」

西裏門に派遣されたパーシング分隊の隊長が、砲撃命令を下す。号令に合わせて一斉射撃を行うと、門が吹き飛んだ。

「前進」

パーシングが、ゆっくりと破壊された門内へと進む。分隊長が周囲を忙しく観測をしている。

「敵影なし」

門を抜けると、すぐに後続の車輛へ場所を譲り、次々と園内へ侵入、それぞれの車輛が砲を別々の方向へと動かし、どちらから攻撃されてもいいように、周囲を警戒する。だが、門を抜けたところの小さな広場にも、その先にも全く車輛の姿は見えなかった。

分隊長車に代わって先頭に立った二号車が、少し前進して入り口から続く桟橋の反対側を双眼鏡で観測する。

「対岸にも敵影なし」

「主力に追い立てられているのね」
分隊長車が、どうやらここにはいないと判断、各車が砲塔を前後左右に向ける全周警戒をしながら、ゆっくりとサファリゾーンへと続く一本橋を渡って行く。
逃げ場のない一本道は、奇襲に最適であり、隊列の先頭と最後尾に攻撃を集中し、身動きが取れなくなった所で残りの車輌を仕留めるのは、戦車道では定石の一つであった。当然大学選抜側もそれは十分に理解しており、あえて誘いに乗ったのであった。
橋の半ばに差し掛かった時、先頭車に向けて砲弾が飛来した。
「やっぱり！」
二番目についた分隊長が砲弾の飛来した方向を見る。
すると、駅から続く空中回廊の上に、旧砲塔チハがいるのを発見した。
「敵発見、右前方通路上、旧砲塔チハ、脅威度低」
先頭と三輌目がチハに砲身を向けようとすると、チハが慌てて後退する。
ゆっくりと進むパーシングがスワンボート乗り口の終わりに差し掛かった瞬間、突然の衝撃が右前方から伝わり、直後車体が一瞬跳ね上がった。
「何⁉」
「被弾、右前方破断音、履帯損傷の可能性！」
「停止！」
先頭車の車長が急停止を指示、慌ててキューポラから顔を出す。

それとほぼ同時に、スワンボートの間に挟まっていたアヒルが破裂し、砲弾が飛来した。
後続の車輌も左右を確認しようとした瞬間、最後尾の車輌にも着弾する。
「どこから」
砲弾の飛来した方向を見ると、そこにはひっくり返ったボートが揺れているだけであった。
「よし、今だ!」
転覆したボートが動き出し、桟橋によじ登ってくる。
「何、あれ」
「敵だ、全車応戦急げ!」
パーシングがボートに砲を向けようとするが、パーシングの砲塔旋回速度の毎秒15度は決して遅くはないにもかかわらず、じりじりとしか動いていないように乗員たちは感じてしまう。
その間に水中から桟橋によじ登ってきたチハが、ボートを振り落とし、前から二輌目のパーシングに肉薄、砲身をターレットリングに押し当てるようにして発砲した。※46
新砲塔チハの47ミリ砲は、0メートルの距離からの場合、通常徹甲弾で垂直に当たれば70ミリ程度の装甲は何とか貫通可能であり、パーシングの側面76・2ミリを抜くのは難しいが、22ミリしかない車体上部は問題なく抜ける。ターレットリングを破壊したのか、そ

れとも砲塔下部に当たり、弾かれた砲弾が車体上部を貫通して撃破判定となったのかは不明だが、撃たれたパーシングから白旗が上がった。
玉田の奇跡のような戦果に、特に空中回廊で囮となった細見が、その撃破の一部始終を目撃し、感極まって歓声を上げる。
「バンザーイ！」
「玉田、よくやった！」
素早く吶喊した玉田を西も称賛する。
そこで終わっていれば良かったのだが、玉田は調子に乗って三号車を狙おうとする。
「よし、もういっちょ」
「それ位にしておけ！」
西から注意する様に指示が飛んだ。
しかし、指示が聞こえないのか、玉田はパーシング三号車へ突撃を行おうとするが、すでに大学選抜側も砲塔を回し終えており、突っ込んでくる玉田車に長大な砲身が突きつけられた。
「あれ」
「戻れ！」
慌てて後退する玉田車、同時にパーシング三号車が発砲する。

斜めに三号車へと突っ込んだのが幸いしたのか、後退した際に玉田車は傾いて桟橋からずり落ち、パーシングの砲弾は砲塔をかすめるだけですんだ。
だが、落ちた勢いと、砲弾の衝撃でパーシングの三分の一程度の重量しかない玉田車は吹き飛ばされ、水の上をコマのように回転していく。
「後退的前進！」
次々とパーシングの砲弾が飛来する中、西が慌てて命令を下す。知波単の車輌は水柱をかいくぐって桟橋から離れて行く。途中、各車輌とも果敢に反撃を行うが、もうこの状態では貫通は不可能であり、牽制にしかならないのは分かっていた。
「こちら西、西裏門からパーシング四輌侵入、二輌の履帯を切断、一輌を撃破、無事な一輌も橋の上で立ち往生中、即時戦闘参加は困難と思われる」
西の通信を聞いたⅣ号の沙織から、合流指示が出た。
『お手柄です、直ちに我々と合流して下さい！』
それを聞いて、改めて知波単の面々に感動が湧き上がってくる。
「やったぞ、奇跡の撃破だ！」
「我々の戦術的勝利だ！」
玉田と細見が大いに盛り上がり、西と福田も嬉しそうに見つめている。

沙織の戦況図を見せられたみほが、大学選抜側の意図を読んで、全体に通信を行った。
『相手の狙いは火力で私たちをかく乱して、各個撃破することです。出来るだけ分散しないように、逆に相手を孤立させるようにして下さい！』
建物の陰に隠れて、応戦中の大洗連合。ダージリンが、後退しつつ防戦をしている。
「挑発に乗らなければよいのね」
「バラバラになんかさせないわよ」
ルクリリの手前で防戦中のケイが、回りの車輌を見回し、決意を込めて宣言する。だが、全然話を聞いていないローズヒップがちょろちょろと動き出す。
「知波単でも撃破出来たなら、私にもやれるはずですわ！」
「戻りなさい、ローズヒップ！」
分散するなと言われたのに、突っ込もうとするローズヒップの手綱を、ダージリンが強く握って制御する。

一方、愛里寿も戦況図をじっと見つめていた。
『こちら南正面、偵察班、残存車輌チャーフィー1、北目標へ移動中』
『西裏門、一号車喪失、二号車、四号車履帯修理完了。敵は予想外にも縦深防御によって遊撃戦をしかけています』

次々と飛び込んで来る報告を聞いて、少し考えると、愛里寿がマイクを取り上げる。
「作戦を変更する、分散が嫌なら望み通りにしてやろう」
『了解』
全車輌から、揃った返事が届いた。
それを聞いて、愛里寿が笑みを浮かべる。

「西隊長、まだでありますか?」
「まだまだ」
「そろそろ頃合いかと」
「まだまだ」
キリンや象などの動物の模型が大量におかれた、アフリカをイメージしたサファリゾーンから、玉田と西の声はするが姿は見えず、声の辺りからは池の中に大きく口を開けたカバと、その横に並ぶアヒルたちだけしかいなかった。
「もはや我慢の限界であります!」
玉田の声と共に、一羽のアヒルがもぞもぞと動きだす。
「こら、むやみに動くんじゃない。風船はデリケートなんだぞ」
西の声の直後、もぞもぞ動いていたアヒルが破裂すると、中から玉田の新砲塔チハが姿

を現した。
「しまった‼　撤退的前進！」
またもや、アヒルたちが蜘蛛の子を散らすように沼の中から逃げ出した。
玉田だけが前進して、さっきの撃破で気をよくしたのか、パーシングへと突撃を敢行する。至近距離から主砲を発射するが、その砲弾は砲塔側面で鈍い音と共に弾かれ、あらぬ方向へと飛んで行った。
「あれ」
全く効果が無かった事で、玉田も他の車輌を追って慌てて逃げ出した。

お化け屋敷のトゥワイライトゾーン前で、マチルダ、ファイアフライ、M3が防戦を行っている。
余談だが、トゥワイライトゾーンはライド型お化け屋敷と銘打って、乗り物で館内を移動して、左右に展開される情景を見るというものであった。だが、肝心のお化けや幽霊などはほとんど登場せず、真っ暗な中に各国の歴史的な拷問風景が延々と展開されるというものだった。大体の入園者は暗くて良く見えない上に動きが少ないので、一度乗ったら二度とは乗らないと言われていた。だが、一部マニアにとっては、その拷問風景がよく出来ているとして、カルト的な人気を誇っていた。
そんなアトラクションの中から爆発が起きて、大きく揺れるウサギさんチームのM3と

ファイアフライ。しかも、中から血まみれのマネキンの生首と手が飛んできて、ファイアフライのナオミが普段のボーイッシュな外見からは想像もつかない可愛い悲鳴を上げたのは、同車乗員のみの秘密であった。

一方、ウサギさんチームは破片の中の骸骨を見て大喜び、しかしその後に続いて出てきたT28を見て、いち早く気が付いたあやが大声を上げる。

「出た！」

「逃げろー」

桂利奈が逃走しようとするが、T28が邪魔で前進できない。

「あ、ちょっと、そっちじゃない」

慌ててUターンしたが、梓の注意も聞こえていないで、逃げ出していく。

両側に建物が並んだ通路で、一方の端からパーシングが砲撃を行っていたのが、M3のみがそれらにお尻を向けて逃げだしていく。

「気を付けて、挟まれるわよ！」

ダージリンが注意を促すと、続けて周囲を見たケイが冷静に指示を出す。

「南南東の路地に逃げ込んで！　正面ドームを逆時計回りに！」

「はい！」

「はいにゃ」

磯辺の良い返事に続いて、ねこにゃーが気の抜けた返事をする。
パーシングのいる方向に向かって加速し、トゥワイライトゾーンの建物の横を右折していく各車輌。だが、M3だけがわたわたとしながら、反対を向いて迷っていた。
桂利奈が左右を見回すが、建物が邪魔で方角が全く分からない。
「南南東ってどっち？」
「分かんない」
優季も拾った園内地図を、あっちこっちひっくり返したりしながら見ているが、東西南北が全く分かっていない。そのまま、M3のみが他の車輌が撤退するのとは反対方向でうろうろしていた。
残りは、ケイの指示通り南南東の路地に入って行く。この路地には、既にレオポンさんチームのポルシェティーガーとヘッツァーが待機していて、時々侵入して来ようとするパーシングを撃退して安全を確保していた。その二輌を先頭に残りの車輌も後に続いて、路地を抜けて建物から姿を現した瞬間、ポルシェティーガーの側面に砲弾が命中した。だが角度が浅かったのか、ポルシェティーガーの80ミリの側面装甲に弾かれた。
後続のケイのM4がその様子を目撃しており、アヒルさんチームの八九式と共に建物の陰から出るのと同時に主砲を発射、パーシングを牽制する。
追加攻撃の機会を狙っていたパーシングだが、その後に続く車輌も次々と砲撃を行うの

で、やむなく後退せざるを得なかった。
その隙に、大洗連合の車輛は、室内コースター、「ギャラクシー・トリッパー」のドームへと移動するのに成功する。※47
一方、正門側では陽動部隊の残存車輌であるチャーフィーが逃走を続けていた。だが、単純に回避運動として蛇行を続けているだけではなく、本来ならば路上で56キロの快速を出せるはずなのに、追撃のまほたちの距離が離れすぎると速度を緩める。その明らかに誘っているかのような動きに、まほは違和感を覚えていた。
「こちら正門チーム、チャーフィーの動きに仕組まれた何かを感じる。通用門組は注意せよ」
西裏門から続く通路では、三輌に減ったパーシングの隊列側面を、西が率いる知波単の部隊がアヒル頭のまま追撃を続けていた。だが、位置的に見えていてもおかしくないのだが、パーシングは中央広場方面へ急いでおり、知波単部隊への牽制すらしてこない。
その様子に、西が首を傾げる。
「うーん、気付いているのに無視されている気がしないでもないのだが、気のせいかな?」

なし崩しにケイが率いる事になった援軍は、宇宙港を模したギャラクシー・トリッパーのドーム外壁部を回り、中央広場への合流を図っていた。時々、後方から砲弾が飛来し、側面の柱などに命中する。

「こちら最後尾、追尾攻撃は散発的……。妙ね」

隊列最後で後方に砲塔を向けて、追撃の様子を確認しているダージリンだが、どうもパーシングの攻撃に統一性と積極性が無いのを訝しんでいた。あれだけの勢いでなだれ込んで来たにしては、どうも攻撃事態に連携が取れていない。

一方、隊列の先頭は、装甲が厚いレオポンさんチームのポルシェティーガーが務めていたが、その正面にパーシングが突然現れる。

「前方、パーシング!」

ナカジマの指示に従って、ツチヤがその優れた荷重移動のセンスで、車体を安定させたまま急停止させる。

ホシノが照準のど真ん中にパーシングを捉えるなり、主砲を発射した。

「ドンピシャ!」

砲弾は一直線にパーシングへと向かい、撃破に成功する。

ホシノの砲撃を受けたパーシングが白旗を上げ、その後ろから新たなパーシングが出て来る。しかし、ヘッツァーが速やかに進路を変え、その後に続いたアヒルさんチームの八

九式が砲撃を送り込むと、慌ててギャラクシー・トリッパー外壁部から柱の間を外へと出ようとした。
「貰った！」
だが、大洗連合側も既にその通路を進んでおり、ナオミのファイアフライが隙を見せたパーシングの側面目掛けて的確な砲撃を送り込む。この後、後続のローズヒップのクルセイダーが、パーシングが白旗を上げているにもかかわらず、砲撃を続け、ダージリンに叱責されるという一幕もあった。

アキが古ぼけたブラウン管式のTVで、中継を見ながら戦果に興奮する。
「すごーい、パーシングを立て続けに撃破したよ。みんな頑張ってるね」
BT－42の砲塔に腰掛けてカンテレを弾いているミカが、アキをたしなめる。
「頑張ればいいってもんじゃない」
「何でそんなにひねくれた事ばっかり言うのよ！」
アキがミカの言葉に怒って、振り向くなり食って掛かった。だが、ミカがふっと微笑む。
「よーく見てごらん」
「？」

ミカの言葉に従って、アキがＴＶを見直すと、そこには遊園地全体の動きを捉えた映像が流れていた。
「あっ」
「これって」
ＢＴ－42の後ろにある箱型の部屋から、ミッコも驚きの声を上げた。そこには大洗側の車輌が、徐々に一方向へと追いやられている様子が映っていた。
因みに、ミッコがいる箱型の部屋は船の操舵室であり、ＢＴ－42は継続高校のマークを付けた、ウイスコ型上陸用舟艇の上に乗っていた。※48

愛里寿のタブレットにも、現在の戦況を予測した作戦図が表示されている。
『こちらメグミ、大洗側はフタマルに移動中』
『こちらルミ、離散への警戒が仇になりましたね』
次々と入って来る各隊長からの報告を受けて、作戦図の上にリアルタイムの戦況が追加されて行く。
『こちらアズミ、流石隊長、予想通りです』
驚くべきことに、アズミの報告通り、その戦況は作戦図とほとんど違いはなかった。
その状況でも、眉一つ動かすことなく、愛里寿は冷静にタブレットを見つめている。

沙織が報告をもとに、ホワイトボードに敵味方の戦車を示すマグネットを置いていく。
それを華がじっと見つめ、全体の動きを見て眉をしかめる。
「……これ、まずくないですか？」
「みぽりん！」
沙織が慌てて、車外のみほへと連絡を行った。

相変わらずグレート・マウンテンコースターZのレール上から全体状況を観察している
アンツィオ勢も、状況の悪さに気が付いた。
「やっべー」
「ダメだダメだ、そっちはダメだぞ！」
ペパロニとアンチョビが興奮して、ふわっとした内容を叫んでいるが、カルパッチョが
冷静に状況をみほに報告する。
「こちらＧＰＳ。西住さん、東通用門組がＹＯ地点にて包囲されようとしています」

カルパッチョの報告にある通り、ＣＶ33の眼下では北に向かわされた東通用門チーム
が、道を塞ぐように正面からパーシング部隊が出現したことで、右へと進路を変えた所
だった。しかし、その先にあるのは、ギリシア劇場を模した、円形のステージの周りに半

円形の観客席が配置されたすり鉢型の野外劇場で、その先は遊園地の外壁となっている。

野外劇場手前で更に右に曲がって元来た方向に戻ろうとしても、そちらには既に別なパーシング部隊が道を塞いでいた。ローズヒップのクルセイダーが、そのパーシング部隊に突撃しようと前進しかけるが、砲撃を受けて隊列へと戻って行く。他の車輌も、野外劇場の中へと完全に入り、そのすり鉢の縁に大学選抜の車輌が等間隔で並んでいった。

「分かりました、すぐに向かいます」

カルパッチョの通信を聞いて、みほは急いでⅣ号の中に戻り、麻子に北へ向かうように指示をする。麻子がアイドリング状態だったⅣ号を躊躇なく後退させ、優花里の指示で左右を調節しつつ、バックで富士山展望台を降って行く。

全く視界が無いのに、平気で降りて行く麻子に、沙織が驚いた。

「よく見ないで降りれるね」

「見えない方が安心だ」

展望台を降り切ると、みほが残りのチームに集合指示を出す。

「南正面組、西裏門組、YO地点に向かって下さい。こちらも駆け付けます。包囲網の完成を阻止して下さい」

左右に欧風建築の店舗などの施設が並ぶ、正門から続く通路をチャーフィーが牽制(けんせい)しながら後退して来た。そのまま左折するが、みほの通信を受けたまほが、チャーフィーを無視して直進するように指示を出す。

「分かった」

まずはカチューシャのT－34／85、次いでまほのティーガーI、最後にエリカのティーガーIIが続く。チャーフィーが妨害しようとするが、エリカが牽制すると慌てて後退して行った。

一方、壁に満開のひまわりの絵が描かれ、あちこちに目隠しのようにひまわりが植えられた空間に、黄色に塗られた922形の新幹線電気軌道総合試験車、通称ドクターイエローが展示されていた。その横には三つの黄色いアヒル頭が止まっている。※49

だが、そのアヒル頭から焦った西(にし)の声がする。

「しまった、謀られた！　奴(やつ)らも合流する気だな!?　道理でいつまで待っても来ないわけだ！」

みほの通信を聞いて、慌てて動き出すアヒル頭、そのまま通路を右折する。

一瞬遅れて、ひまわりの造花を付けたシートの下から、玉田(たまだ)の新砲塔チハが飛び出すと、先行したアヒル頭組を追い掛けた。

知波単組の速度とは対極に、丘の途中に作られた遊歩道を、ウサギさんチームのM3リーがのろのろと移動している。
「迷っちゃった……」
無線を聞いたのはいいが、梓が現在位置を把握できずに困惑している。
優季がジェットコースターの配置から何となく場所を特定したのだが、地図の向きが上下逆さまで、反対に向かっているので、いつまでたっても目的地には近付かなかった。

そうこうしている間に、東通用門組は完全に野外劇場の中へと追い込まれてしまった。
外周にはずらりとパーシングが並び、砲を威嚇する様に向けている。
更にはゆっくりとT28が姿を現し、オレンジペコが呆然とする。
「絶体絶命……」
「逆境に勝る教育無し……でも、これは」
流石のダージリンも困り果てた瞬間、西の号令が無線に飛び込んで来た。
『行け！　包囲網にくさびを打ち込め！』
それを聞いて、一瞬オレンジペコが顔に喜びを浮かべる。
全速力で駆けこんで来たアヒル頭が主砲を発射すると、その瞬間に風船が割れて、中か

ら知波単の旧砲塔チハ二輌が姿を現した。
だが、後ろにも目があるかのように知波単前方にいたパーシングがすっと左右へと避けると、知波単の車輌は勢い余ってそのまま駆け抜けて、野外劇場の中へと転がり込んでいく。
「ああ――、このまま行ったらダメなのです――」
砲撃する機会を逸した福田が、突然前方の視界が開けたのに慌てる。
「急停止、急停止！」
操縦手に制動を掛けるように指示するが、速度が付いていたので間に合わず、他の車輌と一緒にステージの観客席を転がり落ちていく。
「やっぱり」
オレンジペコがぽつりと呟き、失望の色を濃くした。

まほが率いる南正門組もＹＯ地点、つまり野外劇場近くまで到着したが、建物の角を曲がった所で待ち構えていたパーシングの攻撃を受け、建物の陰に後退する。囮となっていたチャーフィーも、到着して包囲網の外縁で牽制を行って来る。
その間に、Ｔ28がゆっくりと野外劇場のふちから身を乗り出し、観客席の段差を利用して前傾、主砲をステージ下に集まった大洗連合へと向けた。

みほのⅣ号もまほと合流するが、手の出しようがない。
「どうしよう、ここは一挙に突撃して」
「いや、向こうが砲撃を行う瞬間、同時協調攻撃を仕掛ける。エリカ、頼むぞ」
「はいっ！」
まほが指示を出すと、エリカが満面の笑みを浮かべる。
「カチューシャも行くわよ」
「頼む」
まほが頭を下げたのに対し、カチューシャが得意満面の笑顔になった。

包囲網ではアズミがマイクを持ち上げ、報告を行う。
「包囲完了」
メグミがわざとらしく顔をしかめる。
「一方的過ぎて心苦しいわ」
「後は私たちに任せて下さい！」
ルミがアズミに続いて報告を行ったのに対し、愛里寿が小さく頷き、承諾する。
いつでも砲撃が出来る準備が整った。
丘の中腹に停まっているウサギさんチームのM3リーの上に、乗員全員が乗って、すり

鉢状の野外劇場を見下ろしていた。
「何か知らないけど先輩たち、囲まれてない？」
優季がのんきに感想を述べると、状況を理解したあやが慌てだした。
「やばーい」
「突撃して敵をやっつけよう！」
桂利奈が威勢のいいことを言うが、あゆみが冷静にたしなめる。
「一輛だけじゃ無理」
「でも助けないと！　どうすれば」
打開策が浮かばなくて、梓が困り果てていたが、その肩を誰かがつついた。
「ん？」
振り返ると、そこには何か言いたげな紗希の姿と、その周りを飛び回る真っ白な蝶がいた。
こんな時に何を、と思わず梓が声を荒らげる。
「紗希ちゃん、蝶々は後にして！」
だが、紗希はそれを気にせず、ふっと後ろを振り向いた。
その流れるような動作に、他のウサギさんチームの面々も視線の先を追い掛ける。
「観覧車」

紗希が指差していたのは、蝶ではなくその先にある観覧車だった。
「？」
一同の頭に大きな疑問符が浮かんだが、梓が紗希の言いたいことに気が付いた。
「あ、そうか！　観覧車と言えば！」
「‼」
他の面々も何を言いたいか理解する。
「そっか！」
あやも反応したが、優季だけがまだわからないで首を傾げた。
「？」
それでも、ちょっと考えてからようやく思い出した。
「……ああ！」
本当に思い出したのか、他の子に合わせたのかは定かではないが。
「全員乗車！」
梓の指示で、全員がわらわらとM３リーの中へと入って行く。
すぐにエンジンを吹かすと、観覧車に向けて蛇行しつつ丘を登り、必中距離まで近付いて停止する。
ゆっくりと主砲と副砲、両方の照準を合わせる。
「よーし、ミフネ作戦、行きます！　撃て！」

梓の号令で両方の砲が、同時に発射される。
砲弾は狙い違わず観覧車の軸に命中、一瞬後に観覧車のゴンドラを取り付けたフレームが、がくんとずり落ちた。
「やった!」
喜ぶ梓、あやが歓声を上げる。
「紗希ちゃん、天才!」
だが、M3リーは丘の中腹で真っ直ぐ観覧車に向けて止まっており、そこに向かってジワリと観覧車が転がって来るのは必然であった。
「あれ〜?」
それを見て、優季が首を傾げる。
最初はゆっくりだったが、回転するに従って観覧車は加速する。
「退却!」
慌てて桂利奈がM3リーを反転させ、丘の下へと逃げようとする。
だがさらに加速し、観覧車がどんどん迫って来る。
「ノシイカになるのはやだー!」
あやがパニックになるが、梓が慌てつつも指示を出す。
「ちょっと!　同じ方向に逃げてどうすんの!?」

「そっか」
理解した桂利奈が操向装置を動かすと、観覧車がぶつかるぎりぎりで右にターンして、何とか回避に成功した。
そのまま観覧車は、轟音（ごうおん）と共に野外劇場に向かって行く。
「？」
メグミとルミが、金属をこすり合わせるような異音に気が付く。
後ろから響く音に向かって、アズミが振り向いた。
「何ですの？」
そこには巨大な観覧車が迫って来ていた。
「回避行動！」
何であんなものがと考える暇もなく、アズミが指示を出し、包囲中のパーシングが一斉に逃げ出していく。Ｔ28も回避を行うが、鈍重な車体によってなかなか動けない。
「ツァーリタンクか⁉」
「パンジャンドラム⁉」※50
Ⅲ突のハッチから顔を出していたカエサルとエルヴィンが、迫り来る観覧車を見て、思わず叫び声を上げた。
一方、サンダース大学付属高校のケイは、その光景に歓声を上げる。
「Ｗｏｗ！」

逃げ惑うパーシングを蹴散らし、観覧車は野外劇場の中へと転がり込んできた。

急に包囲が解けたので大洗連合は気が緩んでいたが、観覧車が自分たちの方へと真っ直ぐ転がってきているのにようやく気が付き、慌て始める。

「キター！」

「こっち来るぞー」

「逃げろー！」

「逃走的前進！」

「Ｇｅｔ　ａｗａｙ」

口々に避難を叫ぶと、わらわらと逃げ出していく。

その中でローズヒップのクルセイダーだけが、観覧車に向かって機銃を撃ち続ける。

通り過ぎた観覧車が客席を登って行き、そのまま出て行くかと思われたが、ローズヒップの機銃によって大きく向きを変えた。

「あら、変ですわ？」

再び転がり落ちて来たのを見て、アリサが叫びを上げる。

「変ですわじゃない！」

「よけいな事すんな――！」

河嶋が絶叫する。

「逃げろ―――！」
角谷会長の指示に従って、全車が逃げ出した所を観覧車が再び通過していく。
「て―――っ！」
西の号令に従い、玉田が砲撃を行う。
だが、全く効果はなく、観覧車はまたもや観客席に降りてこようとする。
その動きをナオミがじっと見つめ、進路を変えようとするタイミングを見計らい、渾身の一撃を送り込んだ。
その一発で、ぐいっと動きの向きを変えた観覧車は、ステージ外周のパーシングへと向かって転がって行く。
「‼」
真っ直ぐ向かってきたのに驚愕するパーシングの車長、思わず頭を抱えたが、ステージ外周の段差で観覧車は跳ね上がり、綺麗に飛び越えて行った。

大学選抜一同は、あまりの事に呆然と観覧車を見上げていた。

その様子を見て取った角谷会長が、とっさに指示を出す。

「今だ――！　後に続け――！」

観覧車の後に続くヘッツァー、その後を他の大洗連合の車輌が、まるで笛吹男に連れられた子供たちのように連なって行く。

その様子をウサギさんチームが丘の上から見て、思い思いに感想を述べていた。

「うわー、レミングみたいだね」

だが、あやの感想を梓が冷静に訂正する。

「レミングが集団自殺するのって、嘘だって聞いたよ」

「えぇー」

「だまされた――」

それを聞いて、あゆみと桂利奈が衝撃を受ける。

しばらく呆然としていた大学選抜も、大洗連合の車輌が逃げていくのに気が付いて、追撃しようとするが、突然先行した一輌が側面を撃たれ、その隣の車輌が反射的に回避運動をしかけるが、すぐに撃破されて、ずるずると野外劇場の観客席をずり落ちていく。

Ⅳ号とまほたちの南正門組が、この機を狙って砲撃を行ったのだった。

「お騒がせしました。この後どうします、隊長」

ダージリンが落ち着き払って、みほへと作戦を尋ねる。
「相手がほぼ全部園内に侵入したので、プランＦで戦います」
「ＧＰＳ役なら任せとけ――」
ジェットコースターの軌道の上からアンチョビが手を振る。
その下を大洗連合の車列が通過していき、再びみほが指示を出す。
「相手以上にこちらが分散するので、見えない仲間の把握に心掛けて下さい」
「はい！」
大学選抜側も混乱から立ち直り、何とか態勢を整えて再び大洗側を追撃し始めた。
砲撃も散発的に行うが、両方とも高速で移動している上に、転がり続ける観覧車が邪魔になって、命中弾を出すことができない。
むしろ砲撃によって速度の低下した観覧車がふらつき、ますます射撃の邪魔になったので慌てて砲撃を中止する。
その観覧車の動きに、いち早くおりょうが気が付いた。
「お？」
「観覧車さん、力尽きそうね」
ダージリンも確認した所で、大きくふらついた観覧車が、左へと傾き、そのまま三叉路（さんさろ）の左側に進んで行く。
「観覧車先輩、お疲れ様でした！」

磯辺が観覧車に向けて深々と頭を下げると、ナカジマが手を振った。
「バイバイ、カンちゃん」
「達者でな」
「See You」
角谷会長とケイも別れを告げる。
更に進んだ先では道が左右と、直進も二股と、計4方向に分岐しており、まずはヘッツァーとその後ろに続く八九式が直進右側、直進左側にB1bis、ポルシェティーガー、三式中戦車、Ⅲ突、クルセイダー、左折方向にサンダースの3輌、チャーチル、マチルダ、右折方向に知波単学園の四輌が分かれて進んだ。
後から追い掛けてきたウサギさんチームのM3リーは、大学選抜に阻まれて合流に失敗したので、建物の陰に隠れて、パーシングが通り過ぎるのを見つめている。
それを見て、梓が呟いた。
「意外と気が付かないもんだね」
「戦車って視界悪いし」
「西住隊長みたいに身を乗り出してないとダメなんだね」
主砲砲手のあゆみが照準を覗きながら答えると、梓が納得する。
あゆみがそのままパーシングに狙いを付けようとして、ふっと考え込む。

「結局さぁ、私たちに出来ることって何だろう？」
優季が手にしていた作戦ノートから顔を上げると反射的に答える。
「重戦車キラー」
だが、桂利奈が間髪を容れずに切り捨てた。
「違うと思うな」
「もっと身の丈にあった戦い方をしようよ」
梓も続けると、あやが質問する。
「例えば？」
「うーん」
梓も明確な回答がなく、唸りながらキューポラの外を見つめる。そこには、加速している チャーフィーの姿があった。梓がハッとして、理解の表情を浮かべる。
「……！」

「おあつらえの場所が近いぞ！　例の奴発動だ！」
ジェットコースターのレール上から双眼鏡で観測を続けているアンチョビが、下を走るカモさんチームのＢ１ｂｉｓとカバさんチームのⅢ突に指示を出す。
「先に行くぜよ」

指示を聞いておりょうがⅢ突を加速させ、Ｂ１ｂｉｓに先行した。
「お色直しでござる」
ローズヒップのクルセイダーも加速して、追いすがって来る。
Ⅲ突の車内では、カエサルが園内地図を見て、左衛門佐とエルヴィンが沢山のキャンバスをひっくり返して唸っている。
「うーん、これか？」
その間にも三式中戦車がワールドランドのゲートを通り過ぎ、他の車輌も次々と通過しようとする。だが、それまでは道幅があったものの、ゲートは戦車がかろうじて通り過ぎる事ができる程度の幅しかなく、狙いが付けられやすくなった。そこに目掛けて、後ろから追撃してくるパーシングが一斉射撃を行う。
当然狙われる大洗側も分かっているので、ゲートに入る直前に急加速や急減速をして、発砲タイミングをずらさせ、一度発砲させて装填する間に次の車輌が通過するという、地味な小技を駆使してゲートを通過して行った。
最後尾で砲塔を後ろ向きにして警戒しているカチューシャが、パーシングの発砲タイミングに合わせて自車を減速させ、車輌の動揺が安定したと同時に発砲する。
「おーい、今は逃げる時だよ、カチューシャ」
それを見たレオポンさんチームのナカジマが、カチューシャに呼び掛けた。

「呼び捨てにしないでよ」
「じゃあ、カッちゃん」
操縦手のツチヤが無線に割り込んでくる。
「何略してんの⁉」
ポルシェティーガーを見て、突っ込んだカチューシャだが、そこに先行していた三式中戦車が速度を落として並走してくる。何事かとカチューシャがそちらを見ると、車長のねこにゃーが顔を出した。
「いいからカッちゃん、急ぐなりー」
「逃げるんなら、あんたたちだけ逃げなさい！」
ツンと顔を背けて、カチューシャが真後ろを振り返る。
そのまま僅(わず)かに顔を俯(うつむ)けて、厳しい表情を浮かべた。
「私はここで戦う！」
それを見て、ナカジマとスズキがハッチから出した顔を思わず見合わせた。
「力むなよ、カッちゃん」
「戦うのはみんなでだよ」
みんなと聞いて、カチューシャがはっとする。
「ノンナさんたちはいなくなったもも」
「私たちがいるぴよ」

「今は同じチームだにゃー」
「そーそー」
うんうんとレオポンさんチームの一同が頷いた。
「……」
カチューシャも、確かに一人ではみんなの敵討ちも出来ない、ならば意地を張らずにここは協力すべきだろうと自分を納得させる。
「大洗の興廃、この一戦にあり！　各人一層奮励努力せよ！」
西の訓示が流れる中、象と昆虫と鳥が融合した不思議な生き物をイメージした建物の前を通過する知波単の車輌、砲塔に被せたアヒルの頭が、微妙に生っぽくぽよんぽよんと揺れている。
「玉田、息が詰まって体がもたないであります！」
玉田車の新砲塔チハは、西などが乗っているのに比べ、砲塔が大型化し主砲も長くなったので、被せているアヒル頭が前後に伸びて、目がつり上がって悪人顔になってしまっている。
その無線を聞いた福田は、伸びたアヒルは大変そうだけど、別に戦車車内は問題ないんじゃないかなあと一瞬思ったが、それよりももっと伝えなければならない重要な事を口に

出した。

「ご安心下さい、最強の助っ人をお呼びしました！」

その福田の声と同時に、後方から急加速で接近してくる車輌がある。

「本家参上ー！」

現れたのは、アヒル頭を被ったアヒルさんチームの八九式中戦車であった。

「えっ、誰？」

「見えないであります」

玉田と細見が後ろを見ようとするが、アヒル頭が邪魔で外が見えないので、ただアヒル頭がぐにゅぐにゅとうごめくだけであった。

「大洗女子のアヒルさんチームですよ――！」

福田の絶叫が響くが、やはりアヒル頭がぐにゅぐにゅとうごめいていた。

一方、カメさんチームのヘッツァーを先頭としたグループは、園の東側にあるトータスランドへと進入していく。

トータスランドは、イギリスの人気人形劇「せんしゃトータス」をモチーフとした野外型テーマパークで、作品の世界観にひたることができるので知られていた。「せんしゃトータス」は、イギリスのボービントンを舞台とした博物館に働く、顔と意識を持った戦車たちの物語で、原作者がこだわった緻密な世界設定と、模型を使用しているにもかかわ

らずリアルな動きの戦車と、子供向けにしてはしっかりとしたドラマで、子供のみならず大人にも人気になっていた。何度も映像化されたが、新シリーズでは原作を使い切ってしまったので、戦車乗員や整備士などをアドバイザーとして招聘(しょうへい)し、実在のエピソードをモチーフとしてリアリティの強化を行うほどであった。それがまた人気となり、新たな映像化の話もあるという。

トータスランド自体も、遊園地の他の施設に行かなくとも一日が過ごせるようにするため、各種遊具だけではなく、レストランやショップが併設され、更には作品中に登場した兵舎や戦車倉庫に泊まれるのがウリの専用の宿泊施設まであり、遊園地自体の閉園が決まった時、トータスランドだけでも続けて欲しいという声もあったほどである。

そんな作品の主人公であり、ランドの象徴でもある「トータスくん」の像の横を、砲撃を回避しながらヘッツァーとⅣ号が進んで行く。

更に両車輌(しゃりょう)は、ウィッカムやシミャウィなどの装甲列車型遊具の横を抜け、ボカージュ迷路へと向かった。※51

「来ましたでございますのよ」

カモさんチームのB1bisに続いて、ローズヒップのクルセイダーが砲塔を旋回させ、後ろのパーシングを牽制(けんせい)しながら、昭和村の懐かしい街角を曲がって行く。

ローズヒップの無線に、カエサルの声が飛び込んで来た。

「オールコレクト！　マスターアーム、オン！」
その声に合わせるように、ローズヒップは突き当たりの赤レンガ倉庫の前を右折する。
直後、エルヴィンの鋭い命令が響いた。
「ファイヤー！」
後続のパーシングに向けて、正面の倉庫の壁から砲弾が飛来し、一瞬で擱座させる。
Ⅲ突に搭載された48口径75ミリＳｔｕＫ40は、通常徹甲弾でも30度傾いた装甲に対して１００メートルの距離から１０６ミリまで貫通可能であった。だが、パーシングの前面装甲は46度の角度を付けた４インチ、つまり１０１・６ミリで、砲塔防盾は１１４・３ミリなので、微妙に抜けるかどうか難しい。
そんな時のためにお守り代わりに数発のみ搭載している40式徹甲弾を使用すれば、１００メートルから１４３ミリを貫ける。カエサルは、ここで躊躇せずに40式徹甲弾を装填、見事に撃破に成功した。
この攻撃によって先頭車が道を塞ぐように急停止したため、更に続くパーシングも急停止せざるを得なかった。
「アンツィオ直伝、マカロニ作戦ツヴァイ大成功！」
そこに響くカエサルの得意げな声。
壁から上がっている煙をよく見ると、そこには倉庫によく似た絵を張り付けたⅢ突の姿があった。

撃破されたパーシングから、白旗が勢いよく上がる。
「よーし、次行ってみよう！」
カエサルが調子に乗り掛けたが、後ろのパーシングが煙に気が付き、砲弾を撃ち込んできた。
それを慌てて回避するⅢ突、擱座したパーシングを避けて残り二輌が追い掛ける。
カエサルからの報告を受けて、逃げ回っているカメさんチームのヘッツァーの中で、河嶋が腕を組んで得意げな顔を浮かべている。
「我ながら見事な作戦だ！」
「桃ちゃんじゃなくて、アヒルさんとカバさんチームが考えたんじゃない……」
ため息をついて、呆れたように小山が突っ込みを入れる。
だが、河嶋は得意げな表情を崩さない。
「アドバイスはした！」
「『がんばれ』はアドバイスじゃないよ～」
双眼鏡で戦況を見つめている愛里寿、Ⅲ突がキャンバスで偽装していたのを見て、目を丸くして、手にしたボコに語り掛ける。

「こんな戦い方初めて見たね……島田流だけが忍者戦法じゃないんだ」

ワールドランドのウェスタンゾーンを、ポルシェティーガーのレオポンさんチームが率いるグループが砂埃を巻き揚げつつ通り抜けていく。砂埃が邪魔で、直線に入っても追撃するパーシングはなかなか照準を定められない。しかも直線だと思っていると、突然道がクランクしていて、あわや建物に突っ込みそうになる事もしばしばであった。

「騎兵隊が襲って来るにゃ」

「はわわわわわ」

「はわわわわわ」

ねこにゃーが前方に着弾したのを確認して、ももがーとぴよたんがノリノリで、西部劇に出てくるネイティブアメリカンっぽい掛け声で返す。

追撃していたパーシングが、埒が明かないと判断したのか、一輌が大洗車輌の後方に位置したまま、残り二輌が建物の左右に展開し、後方車輌の通信に従って、建物の隙間から砲撃を行ってくるようになった。これによって、カチューシャたちは後方からの砲撃を避けるために、蛇行しつつの走行を余儀なくされ、それに対して撃たれる心配のない左右のパーシングは一挙に加速して、頭を塞ごうとした。

「囲まれますぜ、ジェロニモ」※52

「どうします、ジェロニモ」
ナカジマとねこにゃーが、ウェスタンゾーンに合わせてアメリカ先住民族の有名な戦士の名前を出す。しかし、それはカチューシャの気分には合わなかった模様で、思わず怒鳴り声を上げた。
「誰がジェロニモよ！　せめて書記長（ゲーエラーリヌイ・セクレターリ）か同志（タワーリシチ）と呼びなさい！」
左右をちらっと見るカチューシャ、戦車が通るたびに動く建物の扉を見て、何かを閃（ひらめ）いた。
「建物の中突っ切っちゃって！　セットみたいな物だから大丈夫！」
「How、了解！　ジェロニモ！」
「だから誰がジェロニモよ！」
カチューシャの指示に従って、ナカジマが右の建物に突入するように指示を出す。砲塔を回転させて後ろに向けると、ポルシェティーガーが、モーター音を唸（うな）らせて一挙に加速して建物をぶち破る。
先行した左右のパーシングがややドリフト気味に建物の角を曲がり、カチューシャたちが走っていたはずの通路に砲身を向ける。
しかし、そこには既に戦車の姿はなく、一瞬両パーシングの車長は呆然（ぼうぜん）として、顔を見合わせた。

その隙をついてポルシェティーガーが建物の中を通り抜けて、さっきまでパーシングが走っていた通路に飛び出してくる。

「後ろだ!」

慌ててパーシングの一輛が、車体を信地旋回させながら砲塔を回してポルシェティーガーに向き直ろうとする。だがその前に、ポルシェティーガーが華麗に車体を滑らせ、砲をパーシングへと向けて静止する。

直後、スズキが主砲の照準を定め、発砲。

ポルシェティーガーの56口径8・8センチ砲KwK36は、通常徹甲弾が100メートルで120ミリを貫徹可能であり、76・2ミリしかないパーシングの側面装甲ならば余裕であった。

白旗を上げたパーシングの後ろにいたもう一輛が、ポルシェティーガーの背後から出て来た三式中戦車に主砲を向ける。三式中戦車がいち早く発砲したが、砲弾は僅かにパーシングの左上を通過する。パーシングも直ちに発砲し返すが、そこに割り込むように入って来たカチューシャ車の前面装甲をかすめ、砲弾は空へと飛び去った。

カチューシャ車の後ろを追い掛けて来た後続のパーシングが建物の中を抜けた瞬間、カチューシャが砲撃指示を下した。

「アゴーニ!」

カチューシャ車の100メートルから120ミリを貫通可能な、つまりティーガーと同程度の攻撃力を持つ85ミリ砲弾は、真っ直ぐにパーシングへと吸い込まれ、その側面装甲を貫いた。

回収車のZiS‐151多目的トラックに乗ったプラウダのメンバーが、大型ディスプレイに映し出されたカチューシャの見事な撃破シーンに歓声を上げる。※53

「流石カチューシャ様です!」

「ハラショー!」

その間に三式中戦車はカチューシャ車を回り込み、自分の車輛を撃ったパーシングへと向かう。

パーシング側も三式中戦車を敵と定めて、これに砲塔を回して狙いを付けようとしていた。

互いに撃つが、双方の移動量を見誤ったのか、どちらの砲弾も宙を切る。

「ねこにゃっ!」

三式中戦車の車内では、ねこにゃーが特訓の成果を活かして、砲弾ラックから6キロを超える砲弾をかるがると持ち上げ、ぴよたんへと投げ渡した。

「ぴよたん！」
ぴよたんが片手で軽々と受け止めると、勢いよく砲弾を装填する。
「もも――がっ!!」
操縦手のももがーが気合を込めて、左の操行装置を引く。一気に左側の履帯がロックし、その場で三式中戦車が車体を滑らせて、パーシングへと向き直って行く。
車体が静止した瞬間、三式中戦車の三式七糎半戦車砲Ⅱ型が発射され、その１００メートルで80ミリを貫通可能な砲弾が、パーシング側面に命中、撃破に成功する。
三式中戦車の車内で、ねこにゃー、ぴよたん、ももがーの三人が謎ガッツポーズで盛り上がる。
「やったもも！」
「鍛えた甲斐があったにゃー」
「うれぴよー！」
撃破した車輌を見つめ、カチューシャがにやっと笑みを浮かべる。
「あんたたち、思ったよりやるじゃない」
「ジェロニモもね」
「だから誰がジェロニモよっ！」
ナカジマに突っ込み返すカチューシャ、その前をパーシングから吹き飛ばされた転輪

が、まるで風に流されたタンブルウィードのように虚しく転がって行った。

余談だがこのタンブルウィードは、西部劇でよく見られてアメリカ西部の象徴のように思われるが、実は原産国はロシアで、19世紀末にロシアからアメリカに偶然持ち込まれて増えた物だったという。大学選抜のアメリカ側の車輌が全滅し、カバさんチームならアラモ砦の再現とか言いそうな光景であったが、タンブルウィードだけを取れば、ある意味、カチューシャがここにいるのが相応しいとも言える。

「パーシング三輌撃破」

オペラグラスでウェスタンゾーンを見ていたカルパッチョが、戦果報告を行う。

「ドゥーチェ、戦況はどうなってるっすか？」

「何で私に聞く！　今三輌撃破して大学選抜は残り十四輌だ！」

「居場所不明の隊長車、T28、中隊長車と思われるマーキングのパーシング三輌、一般パーシング六輌、チャーフィー二輌ですね」

ペパロニの質問に律儀に答えるアンチョビ、更に大洗の全車向けに詳細な報告をカルパッチョが行った。

昭和村のゲームセンターの角を曲がるクルセイダー、その後を続いて曲がろうとしたB

1bisの砲塔を、後方からの砲弾がかすめる。
「やったわねー！」
「ダメだよ、そど子」
「今はチームプレイだよ、そど子」
衝撃で激昂したそど子が、砲塔を回して迎撃しようとするが、パゾ美とゴモ代に止められる。
『マスターアーム、オン！』
そこに、カエサルの通信が再び入って来る。
「ファイヤー！」
エルヴィンの号令と共に、銭湯の横の自動販売機から発砲炎が起こる。今度は前回で距離感が大体読めたので、ぎりぎり引き付けてからの砲撃で、パーシングが再び正面装甲を撃ち抜かれて停止した。自動販売機から煙が立ち上り、さっきのように気付かれる前に、自動販売機型の看板を付けたまま、Ⅲ突が速やかに移動する。

それを確認したペパロニが新たな報告を上げる。
「昭和ゾーン、パーシングまた一輌撃破ッスよ」
「これで残り十三輌」
アンチョビがマイクを取り上げて、全車へと連絡を行う。

「現在、敵隊長車所在不明、Ⅳ号方面はパーシング一輌、昭和ゾーンあと一輌」
ちょうどそこに、アヒルさんチームを加えたアヒル頭の知波単が、中央広場北にある巨大屋内ゲームセンターのラーテゾーンに向かっているのが、アンチョビの視界に入って来る。更にはその後方に続くパーシングの姿も。
「ラーテゾーン二輌。残りは現在確認中」
なお、ラーテとは戦艦の主砲塔を搭載した1000トン級のドイツの陸上戦艦で、当然ながら計画どまりで終わっている。そのため、形状はあくまでも想像図をもとにしており、遊園地に設置された時はその形状に関して一部のマニアからクレームが入ったともいう。

ボカージュ迷路へと進入するヘッツァー、その後にⅣ号が続く。
ボカージュは、イギリスやフランス西部などによく見られる、農地のあぜ道に植えた密度の濃い低木林の事で、農地を風から、時には視線からも遮るのに使われている。
この迷路はそれを再現しており、人の背丈よりも生け垣が高いので全く周囲の視界が無くなり、遠くを見通せなくなって、出口までたどり着くのに結構苦労すると開園当初からよく知られていた。
その視界の悪さは、2・78メートルと車高が割とあるパーシングですら、キューポラから車長が身を乗り出していても、周囲がほとんど見通せないほどであった。また迷路の幅

も一般道路よりは広いが、車幅が3・51メートルのパーシングだとほとんどぎりぎりになってしまい、砲塔を回すのもままならなかった。
大学選抜の中で、一つの部隊を任せられているルミとしては、ここで隊長車であるⅣ号を仕留めて、自分たちが敬愛する愛里寿（ありす）に良い所を見せたいと思っていた。
だが、目の前の現実は違う。
「このっ、ちょこまかと」
パーシングはM4A3中戦車に搭載されているのと大差ないエンジンを搭載しており、車体重量が10トン以上重くなったため、ややパワー不足で不整地や坂道の走行は苦手であった。だが、迷路の路面はレンガが敷き詰められており、最高速度の時速40キロ、いやエンジンに負荷を掛ければ一時的に理論値の48キロまで発揮可能だった。
それに対してⅣ号は38キロ、あんこうチームの車輌（しゃりょう）は自動車部の魔改造によって多少速度が増加しているが、それでも40キロ程度、改修型ヘッツァーの方がやや速く、42キロが出せたが、理論値ではパーシングの方が速い。
「何故（なぜ）だ、何故追い付けない」
快速戦車という程ではないが、逃げ回る大洗（おおあらい）側よりも速いとの意識が大学選抜側にはあり、それなのに翻弄（ほんろう）されまくっている事に、ルミの中に徐々にイライラが募って行った。
さらに言えば、最高速度が劣る車両の方が速いというのは、高校生の方が操縦が上手（うま）い

という事に嫌でも気が付いてしまうため、それから目を逸らそうともしていた。

動物の形をしたエア式のトランポリンの周りを通過していく福田の九五式軽戦車（アヒル頭付き）。

周囲には他にも色々な動物のトランポリンや、子供向けの遊具が沢山置かれている。

一発の砲弾がタヌキ型をしたトランポリンを貫通し、一挙に空気が抜けてしぼんでいく。

「かかった！」

「Fクイック行くよー」

磯辺の指示に西が直ぐに答える。

「敏捷作戦第6号ですね。準備完了であります！」

パーシングを引き付ける様に走っていた八九式（アヒル）の左前に福田の九五式（アヒル）、その横に玉田の九七式新砲塔チハ（アヒル）、先頭に細見の九七式旧砲塔チハ（アヒル）が並んで、パーシングの視界を遮る。パーシングが主砲の狙いを付けようと砲塔を動かした所で、突然アヒル頭の群れが左右に分かれた。

そこには、射的コーナーの景品である縫いぐるみが多数置かれており、中央にはひときわ大きいアヒルがあった。

瞬間、そのアヒルが爆発し、縫いぐるみを吹き飛ばしながら砲弾が飛び出す。
その砲弾はパーシングの砲塔基部に命中するが、残念ながら距離45メートルでも僅(わず)かに30ミリしか貫通出来ない、貧弱なチハ旧砲塔の九七式五糎(センチ)七戦車砲では、かすり傷すら負わせる事は出来なかった。
「しまった！」
慌てて射的コーナーから後退する西車、パーシングが射的コーナーに沿って左右に分かれる。一輌が西車を追い掛けると、玉田車が西車をかばう様に横から並んだ。
「おら――――！」
そのまま後ろ向きでパーシングに体当たりを行う。
「このっ！」
パーシングの操縦手が玉田車を排除しようとするが、アヒル頭がパーシングの砲身に密着しているので砲撃も難しく、玉田(たまだ)車がブレーキとなって身動きが取れない。
「構うな、前を狙(ねら)え！」
西(にし)車を狙おうとするが玉田車が邪魔で砲塔が回せないので、車体をずらすように車長が操縦手に指示を出す。その瞬間、玉田車のアヒル頭が弾(はじ)けた。
「しまった！」
てっきり玉田車の砲塔が前を向いていると思って、西車の排除を優先しようとしたパー

シングの車長であったが、それを逆手に取ってか偶然か、玉田は砲塔を後ろに回していたのだった。そのまま砲身をパーシングの砲塔下部へと差し込み、ターレットリング目掛けて一撃を加え、見事撃破に成功した。
「玉田、お見事！」
西が玉田を称賛、同時に戦果をすぐに全車へと報告する。
その間にも、八九式（アヒル）とその後に続く福田の九五式（アヒル）、細見の九七式旧砲塔チハ（アヒル）が、螺旋階段を登って上層階へと移動していた。
「アヒル殿、次はどうしたら？」
「天井からのナックルサーブでダブルブロックからの近距離スパイク！」
螺旋階段を登り切ると、外へと続く開口部が見える。
「かしこまりました！」
八九式（アヒル）がその開口部へ全速で向かうと、残りの車輛も親アヒルに続く子アヒルのようにちゅうちょなく付き従った。
外は急勾配の滑り台に繋がっており、八九式（アヒル）たちは一挙に滑り降りていく。
パーシングもその後を追うが、勾配を見て車長が慌てる。
「砲身が刺さるぞ！　旋回してダメージ回避！」
旧来のアメリカ戦車は輸送の事もあって、出来るだけ砲身が車体前部から出ないように

作られていたのだが、強力な砲を積む必要が生じて、パーシングでは大きく砲身が付き出していた。急な角度で坂を下りると、坂が終わる所で砲身が先に地面に当たってしまうので、そのような場合は砲塔を左右、もしくは後ろに向けて対処する様になっていた。流石に前に敵がいる所で後ろを向くわけにはいかないので、慌てて左へと旋回させ、何とか砲身が下の砂場にぶつかるのを回避した。

「アタック、福ちゃん！」

「了解であります！」

だが、その隙に八九式（アヒル）と九五式（アヒル）がパーシングの主砲を挟むように肉薄、そのままパーシングに密着する。

「ダブルブロック！」

パーシングも小刻みに前後進を繰り返し、アヒルたちを振りほどこうとして、アヒルたちは重戦車のパワーに振り回される。

「あわわわわ」

「根性で押せ――――！」

「はいっ！」

福田の砲手が慌てて自分の戦車の側面を押す。

「どうだ――――！」

「うーっ！」

八九式の中でも磯辺と佐々木が壁を必死で押している。
「……やっぱり意味ないと思いますよ」
操縦手の河西がジト目で磯辺たちを見つめ、近藤が冷静に突っ込んだ。
「根性があれば、何とでもなる！」
磯辺が言い切った瞬間、新たな通信が入った。
『不肖細見、参ります！』
細見車（アヒル）がパーシングの後方に接近し、自動車部のお株を奪うような見事なスピンターンを決めて、パーシングの砲塔後下部へアヒルのくちばしを突っ込んだ。
そのまま密着した状態で主砲を発射、パーシング砲塔基部の破壊に成功する。
「ナイスファイト！」
パーシングが白旗を上げたのを見て、磯辺が敢闘を称える。
その間に、西と玉田の車輌もラーテゾーンの1階から出てきて、合流した。

アンチョビが細見が撃破したパーシングを確認する。
「お、ラーテゾーンでパーシング一輌撃破」
それをカルパッチョが補足する。
「ラーテゾーン内でももう一輌撃破したそうです」

「なかなかやるっすねー」
ペパロニが素直に感心する。
「さっきまで自分も戦闘に参加したがっていたのに、どうした?」
「チームプレイっすよ、チームプレイ」
アンチョビは、ペパロニが何か悪い物でも食べたのかと心配になったが、本心から言っている様子にちょっと安心する。
「この道幅なら砲塔の旋回は出来ない。後にピッタリついたら絶対に離れるな」
ルミが指揮下にあるパーシング2号車に指示を出す。
「分かりました」
2号車が正面に走るⅣ号を捉え、主砲を発射する。その瞬間、Ⅳ号は右折し、砲弾は生け垣を貫通してしまう。慌てて2号車が後を追って右折すると、既にⅣ号はクランク部を左折していた。再び加速して左折すると、またもやⅣ号が右折している。今度こそとややオーバースピードでカーブを曲がると、そこには主砲を後ろに向けたⅣ号の姿があった。
「え⁉」
砲塔の旋回が出来ないと聞いたばかりなのに、そのあり得ない事をしているⅣ号に2号車の車長は驚愕する。しかもⅣ号は減速していたので、勢いを付けて曲がった2号車は自分から距離を詰める事になってしまった。

「撃ちます」

照準一杯に広がった2号車目掛け、華が主砲を叩き込んだ。

外れようの無い距離からの砲弾は、一瞬で弾着し、2号車を動かなくさせる。そのまま

Ⅳ号はゆっくりと前進し、次の角を左折した。

轟音に驚き、操縦手に車輌を止める様に伝えると、ルミがキューポラから顔を出して、

慌てて周囲を見回す。

『こちら2号車、すみませんルミ隊長！　撃破されちゃいました』

無線と共に、少し離れた所で煙が上がり、その煙の中に白旗が上がるのが見えた。

「一体どうやって……いや、今は」

マイクを取り上げて、ルミが本体へ通信を行う。
「こちらルミ隊隊長、迷路地点にパーシング、チャーフィー各一輌増援を要請する」
その間にⅣ号は砲塔を後ろに向けたままバックし、T字路に砲身を入れるとそのまま砲塔を回転させ、砲身が正面に向かうと一旦停止した。次いで、左折して前進する。

「ほー、あのやり方は凄いなあ」
その様子をアンチョビが見て感心する。
「うちでもやってみるッスか？」
「あんな長砲身の戦車持ってませんから」
「あ、門から新しい車輌が来ましたよ」
双眼鏡でアンチョビが確認し、マイクを持ち上げる。
「こちらアンチョビ、迷路入り口からパーシング、チャーフィー各一輌進入、Ⅳ号方面に向かう。パーシングはⅣ号の左前一つ右折先」
「数の利を生かして囲い込め！　車高の低いヘッツァーの待ち伏せに注意しつつ、まずはⅣ号だ！」

ルミが到着した増援に指示を出して、追撃を開始する。しかし、その全ての動きが上からアンチョビ達に観測されているとも知らずに。

Ⅳ号はアンチョビの指示に従い、パーシング3号車にぎりぎり見つからない速度で右折して、チャーフィーが同じ順路に入って来る前に素早く右に進路を変え、パーシングを誘導する様に僅かに速度を落とす。

その動きにパーシングが引っ掛かり、慌てて追撃を開始する。

「こちらチャーフィー、Ⅳ号発見」

ルミが正面で右折していくチャーフィーを発見、その後を追い掛ける。

「こちらルミ、3号車そのまま追撃して」

通信をしている間に、Ⅳ号に撒かれたチャーフィーが、ルミの車輌と鉢合わせし、出会い頭に発砲。砲弾がルミ車をかすめていった。

ルミが慌ててキューポラから体を乗り出し、右手を突き上げてチャーフィーの車長を叱責する。

「コラーっ！　気を付けろ！」

「あー、すいません」

慌てて停止し、バックでルミ車の進路を空けるチャーフィー。不審に思ったルミが、車

体から完全に体を出して、キューポラの上に立ち上がる。
「こちらの動きを見通しているかの様な動きだ」
立ち上がっても、生け垣が邪魔で遠くまで見通せない。つま先立ちをして、辛うじて迷路の構造は見えるが、それでも動いている戦車の姿は見えない。
「天性の勘なのか……ならば袋小路に追い詰めるか」
見つけ出した袋小路に向けて、3号車とチャーフィーにⅣ号を追い詰める様に指示を出す。
チャーフィーをわざと目立つ位置に止めさせて、袋小路へと誘導していく。その策は当たり、Ⅳ号はチャーフィーを回避して、袋小路へ続く道へと進入した。
『こちら3号車、成功です！』
「よし、追い詰めた！」
ルミが、小さくガッツポーズを浮かべて勝利を確信する。
パーシング3号車がⅣ号を追いつめようと前進した瞬間、側面からの突然の砲撃を受け、その反動で横の道のへこみ部分へと押しやられる。そのまま生け垣にぶつかって止まり、もうもうと湧(わ)き上がる黒煙の中、ひときわ目立つ白旗が上がった。
ルミが驚いて、黒煙を透かして砲弾が飛来した方向を見ると、そこには展望台の上にバックで乗り上げたヘッツァーがいるのが見えた。
呆然(ぼうぜん)としてルミは、移動するヘッツァーを見送る事しか出来なかった。

「何故だ……勘が良いってレベルじゃないぞ。これは……」
何かあると思ってあちこちを見回すルミ、ジェットコースターのレールの上に何かがあるのを見つける。
「ん？」
双眼鏡を取り出し、覗いてみるとそこには、ＣＶ33と周囲を双眼鏡で観測しているアンチョビ、足元で遊園地の地図らしきものを見ているペパロニ、マイクで指示をしているカルパッチョの姿が飛び込んで来た。
「あいつらが⁉　チャーフィー、ハリーアップ！　作戦変更だ！」
慌ててルミがチャーフィーを呼び寄せ、全体通信にすると他の車輌へと状況を伝える。

観客席の大型ディスプレイに、撃破された戦車が表示される。
「ただ今審判団の乗った観測機から、新たな情報が入りました。繋ぎます」
『こちら審判員の篠川です。現在大洗女子学園残存車輌22。大学選抜残存車輌９』
それを聞いて観客が大歓声を上げる。
「おいおい、高校生凄いぞ」
「あんなデカブツ持ち出して逆転されるとは、これはひょっとしたらひょっとして」
ＶＩＰ席の西住しほが、ちらっと隣に座っている島田千代を見るが、全く動揺した様子はない。

丘の上に止まったセンチュリオンの上では、愛里寿が小さく笑みを浮かべて、ボコに話しかけている。
「あっちのチームはボコみたいだね。どれだけボコボコになっても立ち向かってくる。決して強くはないのに諦めない」
愛里寿に相槌を打つように、ボコが愛里寿の手によって頷くように動いている。
僅かに笑みを大きくすると、遊園地を興味深げに見据えた。

ちょこまかと逃げ回るローズヒップのクルセイダーを、アズミが追撃しているが、どうしても追い切れない。

車長席ではアズミが焦って、冷や汗を垂らしていた。

「まさかここまで高校生がやるとは」

それを聞いたルミも苛立ちを隠せない。

「小賢しいったらありゃしない」

「どうする？」

解決策は、一つしかないと言いたげにアズミが聞くと、メグミが眉を顰める。

「ここで隊長に泣きつくなんて」

「でも、自分たちの面子ばかり言っていたら……」

アズミがこのままでは敗北すると言い掛けた所に、突然無線のノイズが飛び込んで来る。

「大隊指揮車⁉」

「隊長？」

そのノイズを聞いて、アズミとルミがハッとする。

『やってやるやってやるやってやる～』

愛里寿がセンチュリオンのキューポラから身を乗り出したまま、歌いながらボコを持ち上げて、そのままポケットにしまう。ちょっとだけポケットからボコが顔を覗かせているのをそっと撫でてから、手を車内に降ろし、指で前進指示を出す。それを見て、センチュリオン車内の全乗員が無言で了解する。
愛里寿の楽しそうな歌に乗せて、センチュリオンは丘を降り遊園地へと進み始めた。

ルミが驚きから喜びへと表情を変える。
「隊長が歌い出した!」
「という事は!」
アズミも満面の笑みを浮かべる。
同じようにメグミも笑みを浮かべて、マイクで今まで待機をしていた部隊に指示を出す。
「中隊前進!」
ジェットコースター上のカルパッチョが、動き出したメグミ中隊を確認する。
「ワールドゾーン方面にパーシング二輌、更にT28が移動を開始!」
アンチョビが双眼鏡をぐるっと回すと、丘の上にかすかな土煙を発見する。
「ん?」

上煙に沿って双眼鏡を降ろすと、そこには向かって来るセンチュリオンの姿があった。
急いで無線に飛び付く。
「センチュリオンだ、向こうの隊長が動いたぞ！」

それを聞いてみほがハッとする。
「ついにセンチュリオンが……」
「動き出したんですね！」
優花里(ゆかり)も表情を硬くする。

ニュルンベルクのケーニヒ門を模したワールドゾーン出入り口、その門を通り、まほ率いる別動隊はその中へと後退した。※54
『そっちに何輌か行ったぞ』
アンチョビからの通信が、まほ別動隊へ飛び込んで来る。
「こちらも視認しました、ルクリリ後退しなさい」
「了解です」
車体が小さいのを活(い)かして、ルクリリのマチルダⅡが門の横の通用口から、半分車体を出して外を窺(うかが)っていたがダージリンの指示で、車体全体を通用口の中に戻そうとする。その時、接近してくるパーシングが左右に分かれ、後方から巨大なT28が姿を現した。右側

にメグミ車、左側に同部隊の2号車が停止する。
それを確認するなり、ルクリリは通用口の中へと戻る。

「T28がやってきます」

「この門はあの車体には狭すぎるでしょう」

ダージリンが紅茶を持って微笑むと、ケイが合わせてくる。

「東通用門とは違って、壁が厚いので簡単に破壊も出来ないしね」

別動隊が僅かに後退し、門に向かって照準を合わせる。
そこに向かって、まるで無人の荒野を進むようにT28が悠々と接近してきた。
予想通り左右の履帯が門にぶつかって、進む事が出来ない。
ほっとする一同、その瞬間T28の履帯の前から後ろに向かって小爆発の閃光が走り、左右の履帯が轟音と共に外側へと倒れた。

「うそ!」

「脱いだ!?」

ダージリンも目を丸くし、ルクリリが手にした紅茶を激しくこぼした。
T28は、86トンにも達する重量を支えるために、３２８ミリの履帯の外側にもう一組の同じサイズの履帯を備えている。だが、輸送用にこの外側の履帯は外す事が出来て、その場合は外した左右を合体させ、牽引する。

大学選抜ではこの車輛に手を入れて、履帯の離脱機構として、中空になったボルトの中に爆薬を仕込んだ爆発ボルトを採用したのであった。
そのため、スイッチ一つで瞬時に分離が可能となり、不整地走破能力は大幅に低減するが、今回のような狭い場所を通過するのに必要な時間が、大幅に短縮可能となった。
門を通って来たT28を見て、まほ別動隊は慌てて二つ目の城壁の中へと後退する。

一方、昭和ゾーンの入り口では、B1bisとクルセイダーが出たり入ったりして、アズミ中隊に挑発を続けていた。※55
アズミ車が、戦闘で追撃を行い、接近してくるのを見て、B1bisとクルセイダーが慌てて逃げ出した。だが、T字路で左右に分散したのを見て、アズミが首を傾げる。
「おかしいわね、劣勢なのに何で分散するの?」
そこで、正面の定食屋にハンバーガーの看板が掲げられているのに気が付く。
『マスターアーム、オン!』
「それはない」
アズミが冷静に言い放ち、看板目掛けて主砲発射指示を出す。
「ファイヤ……」
エルヴィンが発射指示を出そうとした瞬間、アズミ車の砲弾が看板を貫通し、吹き飛ん

だ看板の後ろからⅢ突が姿を現した。
　正面装甲を貫かれ、その場で白旗が上がる。
「何故だ」
「完璧だったのに！」
　撃破された車輌の中で、カエサルと左衛門佐がぶぜんとした表情を浮かべる。
「そうかなあ……」
　おりょうが首を傾げ、小さく呟いた。
「西裏門よりセンチュリオン侵入、注意しろ」
　センチュリオンの動きを追っていたアンチョビが、園内に入って来たのを確認し、報告を行う。
『了解しました』
　みほの無線が入った後、アンチョビたちの耳に、何かがガタガタと近付いて来る音が飛び込んで来た。
「「「？」」」
　音の出所を三人揃って見ると、それはジェットコースターの軌道の下の方からだった。更に見ていると、下から棒状の物体が姿を現す。続いて、その後にチャーフィーが登って

来た。
「しまった、バレたぞ！」
「気合入ってんな～」
慌ててＣＶ33の車内に入るペパロニとカルパッチョ、最後にアンチョビが入り込み、ハッチを閉める。
「こちらアンチョビ、発見された。移動する。以後の位置情報の通報は難しい」
アンチョビが全車へ通信を行いつつ、ＣＶ33が一気に加速する。
「落ち着いて行け。この先は細いから付いて来れない」
下り坂をブレーキを掛けつつとは言え一気に下って行くが、アンチョビが後方を確認するとチャーフィーが躊躇せずに下り坂に向かい、軌道に車体をはめ込んで滑り落ちてくるのが見えた。
「なんか知らんけど、全開で逃げろ！」
アンチョビの悲鳴にも似た号令に、ペパロニがブレーキを解除、ＣＶ33が加速した。
「超気合入ってますね～」
「それから向き変えて応戦！」
「無理です」
一旦坂を下り、今度は上り坂になった所で飛び出したアンチョビの無茶な命令に、カルパッチョが冷静に言い返す。

「じゃあどうすればいいんだ」
「逃げるしかないッスよ」
「誰か気が付いてくれたらいいですね」
ペパロニの意見に従って、CV33は一目散に逃亡を続けた。
観覧車があった丘の中腹に、黄色い花が沢山咲いた生け垣がある。その花の中に、ひときわ大きい黄色い物体が二つあった。アヒルさんチームの八九式（アヒル）と福田の九五式（アヒル）であった。
「これ、すぐに見つかるような気が」
「いーのいーの」
不安そうな福田に、磯辺が安心させるように答える。
「来たぞ、戦車前進！」
そこに西の号令がかかり、丘の陰から西に先導された残りの知波単車輌が飛び出してくる。待機していたアヒル頭の車輌も、丘から飛び出し、隊列に加わる。
「ひよどり越えですな！」
玉田が嬉しそうに叫んだ後、隊列に並んで坂を下って行く。
その視線の先には、丘の下の一本道をのんきに進んでいるように見えるセンチュリオン

の姿があった。
「5対1だし、二段ダブルブロックでアタック！」
各砲の照準にセンチュリオンの車体上部が大きく見えてくる。最大では152ミリもの装甲があるセンチュリオンだが、車体上面は僅かに25ミリしかない。これは至近距離で運が良ければ、八九式の貧弱過ぎる砲弾でも貫通出来るかもしれない厚さだった。
「て――――っ！」
ここまで接近しても、センチュリオンは主砲を前に向けたままであった。西は、それを見て全く気が付いた様子がないと判断し、勢い良く攻撃命令を下す。
先行していた西、細見、玉田の三輌が一斉に発砲、確実にセンチュリオンを捉えたかに見えた。
だが、その瞬間センチュリオンは急加速で砲弾を避けると、そのままの勢いで戦車の挙動とは思えないようなスピンターンを決めて、完全に車体を反対に向けた。西車、細見車が何が起きたのか気が付くまもなく、道路上に降り立ったが、そこにセンチュリオンからの砲撃が飛来する。
ほとんど接していると言ってもおかしくない至近距離からの発砲で、細見車は撃破され、白旗を上げた。
センチュリオンの装備している17ポンド砲は、1945年までにイギリスで作られた中で、最も優秀な戦車砲であり、高校戦車道で使用される中でもドイツの88ミリ砲と並んで

優れた砲として知られている。そのような威力の砲の前では、知波単車輌の装甲は紙と大差なかった。
それでも、練度に優れた知波単車輌は果敢に肉薄し、玉田車は細見車が撃破される間にセンチュリオンの後ろから接近、車体後部を狙う。
だが、センチュリオンは砲塔を僅かに回転させると、車体自体をその場で旋回させ、玉田車の砲弾を避け、更に瞬時に再装填を行って玉田車を撃破する。西車が後ろから砲撃を行うが、これも車体を旋回させて回避した。砲塔が西車に向いても再装填が終わっていなかったので、砲身は西車に据えたまま車体の旋回を続け、車体と砲塔の向きを一致させて西車に正対した。その間に装填が完了、西車を撃破する。

その様子が観客席の大型ディスプレイに映し出されると、観客が大いにどよめいた。
「あんな挙動、見た事がないぞ！」
「あれが島田流の忍者戦法か！」
その様子を見て、島田千代がそれまで堅く引き締めていた口元を僅かに緩める。
「これからが島田流の本領発揮」
そして小さく呟いた。

センチュリオンが発砲した瞬間、磯辺が福田に号令をかける。
「今だ！」
「はいっ」
センチュリオンを両方から挟むように吶喊する八九式（アヒル）と九五式（アヒル）、完全に両側から挟み込んでアヒル頭が爆発、主砲が発射される。しかし、センチュリオンは６５０馬力のパワーを生かしてその50トンを超える巨体を軽々と後退させ、砲弾を回避した。九五式の砲弾は八九式の前面装甲をかすめ、あわや同士討ちとなる所であった。
「申し訳ありません」
「どんまい」
福田が慌てて磯辺に謝るが、磯辺はそんな小さなことを気にするような性格ではなかった。
「それよりも追撃を」
言い掛けた瞬間、福田車に着弾、勢いで吹き飛ばされる。
「うわー」
それを見た磯辺が、全速でセンチュリオンに向かうように河西に指示をする。
「ちょ――根性――――!!」
センチュリオンの砲塔が横を向いていて、それが八九式に向いて旋回するよりも肉薄す

る方が速いとの判断だったが、砲塔は回さずに車体自体を後退させつつ旋回させ、八九式の砲弾を回避して側面に回り込んで真横から撃破する。
「おーい！」
軽量の八九式が軽々と吹き飛ばされ、車長の磯辺の悲鳴と共に横転した。
そのまま何事もなかったかのように、センチュリオンはその場を立ち去る。これは、島田愛里寿の優れた指導力と戦況判断はもとより、操縦手、砲手、装填手の連携があってこそ可能となる島田流のスーパープレイであった。

撃破された戦車の中で玉田が自嘲する。
「この負けっぷり、いつもの我々ですな」
「敵ながら天晴」
西が去っていくセンチュリオン、愛里寿車を見送って称賛する。
「のんきに言わないで下さーい！」
ひっくり返った八九式の中から、磯辺がぼやいた。
八九式が撃破される前に中継していたのを聞いて、その後それが途絶えた事から、一瞬にして五輌が撃破されたのにあんこうチームの面々が震撼する。

みほも、僅かに青ざめる。
「一気に五輌……」
沙織が、五輌分のコマを外し、呆然とする。
「今までいい勝負をしてきたのに、一気に減らされていくよ～」
「センチュリオン無双……」
「まさにそうですね……」
麻子と華も口数が少なくなる。
唯一、優花里だけが相変わらず饒舌に語り始めた。
「島田流は一騎当千。ひとりの天才が戦い、指揮する流派です！」
「美人で性格もいい女の子が男子人気を全部持ってく感じ⁉」
沙織がちょっと首を傾げて、いつもの恋愛談議に話を持って行く。
「ですから、なかなか広まらないんですよね……」
優花里の軽口も耳に入らず、みほは戦況図を見つめていた。
まほ別動隊が籠っているワールドゾーン、そこの門をT28は周辺からの砲撃を弾きながら、ゆっくりと通り抜け、橋へと差し掛かる。
アッサムが、データを提示する。

「データによりますと、ウィークポイントはここです」
「優雅な勝ち方には程遠いですね」
「今回はみほさんを助けに来たのよ。私たちの勝利じゃない」
オレンジペコがやや眉を顰めるが、傾いたチャーチルの中でもダージリンは紅茶をこぼさないで、指揮を続けていた。
『17ポンド砲さん、準備はどう?』
ガムを噛みながら照準器を覗いているナオミの耳に、ダージリンの無線が入って来た。
名前ではなく、砲の名前で呼ばれた事に微妙に引っ掛かる物を感じながらも、聖グロリアーナ女学院というのはあのような持って回った物言いをする学校だったな、と思って気にするのをやめた。
「とっくに出来ている」
言葉がややぶっきらぼうになるのは、ナオミの性格もあるが、ダージリンの言葉も多少は影響したのだろう。
宣言通り、ナオミのファイアフライはケーニヒ門横の見張り塔下の建物上部に位置取り、T28の動きに合わせてゆっくりと砲塔を回していた。
T28が目標地点に差し掛かったところで、ナオミが号令をかける。
「行くぞ」
『どうぞ』

ダージリンの了承を受けて、ナオミが17ポンド砲を発射する。
装填されていたのは榴弾、狙うのはT28ではなく、その下のレンガ造りの橋だった。T28が橋のアーチ部分に差し掛かった瞬間、その直前を狙い、橋に大きな破孔を作るのに成功する。
だが、長大な車体を持つT28はこの程度の破孔では車体が落ちることもなく、僅かに速度は落としたものの、そのまま直進する。
何もなければ、そのまま橋を渡り切っただろうが、破孔の下にはその優れた登坂能力を生かしたチャーチルが、橋のアーチを支える橋脚に車体を半分乗り上げ、主砲を強引に上に向けていたのだった。アッサムの視線の先に、T28の底面部が大写しになる。
「T28の装甲が最も薄い部分は25ミリ、それがここ」
アッサムの呟きから一拍置いて、チャーチルの主砲が発射される。
T28の86トンの巨体が一瞬持ち上がり、直後に車体後部のエンジン室が大爆発を起こす。
猛烈な黒煙を吹き出し、T28は橋の上に擱座した。
「成功ね。アッサムのデータ主義もたまにはいいものね」
ほっとした顔でダージリンは紅茶を口に運んだ。
「ですが、データによりますとこの後の生還率が……」

ほぼゼロであると言い掛けて、アッサムが口籠（くちごも）る。
「みほさん、頑張って」
ダージリンが、別れを告げる様に呟（つぶや）く。その間も、操縦手のルフナが何とか橋のアーチ下から脱出しようと懸命に操縦しているが、その視界内に主砲を向けたチャーチルが入って来た。チャーチルからは見えないが、後ろからはパーシングが同じように向かって来ていた。
「勝負は最後の5分間にあるのよ」※56
ダージリンが、全体通信でみほに言葉を送ると、チャーフィーとパーシングの主砲が発射された。
橋脚の下というある意味トンネル状の場所であったため、爆発が四散しないで大きな開口部に集中し、一瞬チャーフィーとパーシングを覆いつくすほどの爆発が起こった。
メグミ中隊を表す赤の四角のマークのパーシングが橋の上に停止し、メグミが撃破されたチャーチルを見つめる。
「チマチマしているのは性に合わないわ。集まりましょうか」
アズミ中隊の黄色の菱形（ひしがた）のパーシングから、アズミが答える。
「いつも通りの」
「「「バミューダアタック！」」」

ルミ中隊の青色の三角のパーシングでは、ルミが勢いよく答えた。

ラーテゾーンの上を通るレールの上を全開で走るCV33、その後をチャーフィーが追い掛けている。CV33は先に続く坂を登って行く。車体がレールを挟み込んでいるチャーフィーは、履帯が辛うじて外側のメンテナンス用通路に乗っかっており、胴体下部がレールでこすられながらも火花を上げて加速していく。

坂を登り切ると、当然ながら次は下りになるのがジェットコースターのセオリーで、CV33も下って行く。しかもレールは途中で緩やかにカーブして、観覧車のあった丘の中を抜けるトンネルへと繋がっている。そんな中でも後続のチャーフィーは平気で発砲してきて、アンチョビたちには気の休まる暇もない。

アンチョビは無理やりペパロニとカルパッチョの間に体を押し込んで、車体後部の窓から後ろの様子を見ているが、そこにはさっきからずっと付かず離れずチャーフィーがいるのが見える。

「しつこいなー」

「無限ループですね」

トンネルを抜けると、ジェットコースターの駅があったが、CV33は止まらずにそのまま通り抜け、何とか最初の坂を登り切った。短い平らな場所を過ぎると、再び下り坂を降り、次の登りに差し掛かったところでペパロニが絶叫した。

「ドゥーチェ、前！」
「⁉」
何事かとカルパッチョとアンチョビは前を見る。そこにはもう一輌のチャーフィーが坂の上に姿を現しつつあった。それを見て、ペパロニが大慌てになる。
「挟まれたッス！」
「どうする。どうするってか撃て」
アンチョビも一瞬焦るが、後ろからもチャーフィーが迫っている以上、やれることは一つしかない。戦車に対してはほとんど気休めにしかならない8ミリ機銃だが、カルパッチョに撃つように命じる。
「はい！」
弾かれたように、カルパッチョが命令に応え、機銃を発射する。
機銃弾は真っ直ぐチャーフィーへと伸びて、次々と命中するが、いくら見掛けの割に装甲が薄いチャーフィーと言えど、機銃で抜かれるほど貧弱ではなかった。
その間にも前方のチャーフィーとの距離は詰まる。またチャーフィーも坂を下りて来ようとしており、このままだと前後から挟まれて、撃破されてしまうのは間違いなかった。
その瞬間、側面から飛来した砲弾が、前方のチャーフィーに命中、爆発する。しかも、爆発の衝撃で後退を開始し、そのまま坂を下って行ってしまった。

「よっしゃ――――!」
あやとあゆみの歓声が上がる。
丘の中腹には、まだ主砲と副砲から白煙を上げたM3リーが陣取り、その砲が狙う先には白旗を上げたチャーフィーの姿があった。
撃破に浮つく車内を梓が引き締めるように、号令を行う。
「次行くよ、次」
CV33を後ろから追っていたチャーフィーに、M3リーは狙いを変える。
あゆみとあやが照準を合わせ、指示を待つ。
それを見て、梓が発射指示を出した。
「……撃て!」
一発の砲弾はレールに当たったが、もう一発がチャーフィーに命中、白旗を上げさせるのに成功する。
「さすが軽戦車キラー」
優季が感心する。
だが、その瞬間後ろから突き飛ばされたかのごとく、M3リーが跳ね上がるように前へと進んだ。

そのまま横転し、側面から白旗が上がる。
M3リーの横を砲身から煙を上げた愛里寿（ありす）車が通過していくが、ひっくり返ったウサギさんチームは、誰もそれに気が付かない。
「え？　何々？　何があったの？」
あゆみが車内で突然の事態に大騒ぎをしている。
「わかんな――い」
「地雷？」
あゆみの胸がクッションとなって衝撃をあまり受けなかった桂利奈（かりな）が、それでも目を回していた。
「違う！　敵にやられたの！」
梓（あずさ）がキューポラから外を見て、通り過ぎる愛里寿車を確認、咽頭（いんとう）マイクに手を伸ばす。
「センチュリオンが向かっています！」
梓が慌てて全車に対して警報を発信したが、残念ながら白旗が上がった後で、その無線が誰にも届くことは無かった。
「一気に蹴散（けち）らして、隊長と合流するわよ」
メグミの号令に、その左右にアズミとルミが位置取り、横隊を組む。

反対側からはサンダースチームが、同じようにケイを中心に左右にナオミ、アリサが並ぶ横隊を組んで正面から向かって来る。

「Ｓｔｏｐ　ｔｈｅｒｅ！　Ｆｉｒｅ！」

ケイの号令で一斉に砲撃するが、滑りやすいレンガの通りを有効に利用して横スライド気味に砲弾を回避するメグミたち。そのままサンダースの後ろに回るとドリフトのように車体を滑らせ、まるで聖グロリアーナ女学院の隊列を更に華麗にしたような見事なターンを決める。

それに対して普通に方向転換をしていたサンダース側は、ぶつからないように右端のアリサが右に、残り二輛が左に展開したことで、アリサが一瞬孤立した。

「おーのれ――」

命中精度を上げるために、アリサはあえて車輛を停止させ、主砲を発射する。しかし渾身の一発は車体を滑らせながら移動するメグミたちの車輛にはかすりもしない。逆にアリサの発砲の隙に、メグミたちは三輛揃って走りながらアリサに集中砲火を加えた。

うち二発がアリサ車の側面に命中、撃破する。

不利になった事で、ナオミがケイに進言する。

「撤退しますか⁉」

だが、ケイはふっと不敵な笑みを浮かべた。

「勝利はね、危険の中に存在するのよ！」

「隊長……ダージリンさんみたいですね！」
「後で教えてやんないとね！」
ケイとナオミは後退を選ばず、劣勢になっているにもかかわらず、果敢に攻めこむ。
その様子を見て、メグミがちょっと笑みを大きくした。
「その敢闘精神や良し、でもね……」
メグミたちはアリサを撃破すると、そのままその横を通過し、車体をドリフトさせて一直線に並んだ。ナオミがそれを照準に捉えるが、ドリフトしたまま横へシフトしていく上に、次から次へと別な車輛が現れ、狭い照準器の視界の中では状況が掴み切れない。
「む……」
ナオミが標準以上の、いや超高校級の砲手だったのが仇となって、確実に狙おうとしたのが混乱の一因となった。見かけたらすぐに撃つ初心者の方が、牽制には良かったかもしれない。もっとも初心者の場合は、弾自体が当たらないのだが。
どちらにせよ、ナオミが逡巡した一瞬をついて、最後尾となったメグミ車がルミ車の背後から現れ主砲を発射した。
「えっ、あっ？」
気が付いた時には着弾しており、ナオミ車が白旗を上げる。
ケイもその間じっとしていた訳ではなく、ドリフトが終わった瞬間を狙って主砲を発射した。

だが、アズミとルミが軽々とそれを避け、その場で軽く片方の履帯をロックさせ車体を斜めにすると、そのまま横滑りでケイ車を左右から挟むように動く。そしてメグミは直進のまま、ケイ車を照準に捉える。

ケイが逃げる様に操縦手に指示を出すが、その時にはトライアングル状になったメグミたちに完全に囲まれていた。

「Ｏｏｐｓ」

あまりにも見事な挙動に呆然とするケイ、そこに向かって三方から砲撃が行われる。

オーバーキルな状態で完全にケイも撃破され、その場で白旗が上がった。

「申し訳ない！」

ケイの謝罪の言葉が白旗と共に流れて行くのを尻目に、バミューダトリオの本領を見せつけたメグミたちが次の獲物へと向かって行った。

ＺｉＳ－１５１多目的トラックの上でプラウダの生徒たちが、再び感嘆の声を上げる。

「凄いのは島田流だけかと思ったら」

「大学選抜も意外とやりますね」

同じ砲手としてナオミと色々縁があったノンナだが、そのナオミがあっさりやられた事で、自分だったらどうしただろうと思いつつ、感心する。クラーラも同意の声を上げた。

ワールドゾーンのエジプトエリアを、ヘッツァーと砲塔を後ろに向けた三式中戦車がみほへの合流を目指して、全速で爆走している。しかし、ヘッツァーが尾部に直撃を受けて、一瞬ふわっと前側が持ち上がってひっくり返り、角谷会長の悲鳴が上がった。
「やーられた――――」
三式中戦車の車内で操縦手のももがーが、勢いよく左側の操行装置を引く。
「ももがっ!!!」
あまりにも力を入れ過ぎたためではないだろうが、付け根が劣化していたのか、材質に問題があったのか、操行装置が根元からぽっきりと折れた。
「しまったもも!」
片方の履帯だけがロックされ、その場でくるくると三式中戦車が回り出す。
愛里寿車の砲手がその様子を見て、どこを撃つか一瞬悩むが、車体左側が大きくさらけ出されたので、まぁいいかと思いながら砲撃を加える。その一撃で、三式中戦車はますます回転を速めて吹き飛んでいった。
「目が回ったぴよ」
白旗を上げた三式中戦車の後ろを、センチュリオンは悠々と通過していく。
江戸ゾーンでは、堀を挟んでクルセイダーとチャーフィーが並走しながら、一昔前なら

ユーロビートがBGMになりそうな高速バトルを繰り広げていた。※57
テンションが上がったローズヒップが、紅茶をばちゃばちゃとこぼしながら叫ぶ。
「リミッター外しちゃいますわよ！」
クルセイダーは、エンジンの回転を一定以下に保つための調速機が取り付けられている。だが、それを解除して限界まで回せば、時速60キロを発揮する事も可能だった。ローズヒップ車は最初から解除されていたが、ダージリンから緊急時以外レッドゾーンまで回さないようにと指示されていた。
本当は普段からレッドゾーンに入れたくてうずうずしているのだが、アッサムのお仕置きが怖くて緊急時以外は踏み込まないようにしている。だが、今こそ緊急時と判断して、アクセルを踏み込み、一気に加速する。

「目標、中央広場」
愛里寿（ありす）が、他の車輛（しゃりょう）へ連絡を行うと、メグミたちが直ちに答えた。
「「「はい」」」

みほが、ケイたちがバミューダアタックでやられたのを知って、まほに連絡を行う。
「お姉ちゃん、こっちもコンビネーションで行こう」
「分かった」

この状態を打破するのには、仲間の力も必要だが、それと同時に、一番分かり合える、以心伝心で戦闘の組み立てがまほとのコンビネーションが必要だと判断して。

ジェットコースターの上では、前後を撃破されたチャーフィーで挟まれたため、CV33がのレール上で立ち往生している。そこに残敵掃討中だった、カモさんチームのB1bisが通り掛かった。

「ヘイ、タクシー」

「はいはーい」

そど子が気軽にレールの支柱の下に自車を停めると、支柱を伝ってB1bisの上にCV33が降りてくる。後部にCV33を乗せると、そど子は再び敵を探して走り出すように命じる。

「体当たりでもいいから、センチュリオンとの合流を阻止するわよ」

万里の長城前でカチューシャが、ティーガーII、ポルシェティーガー、マチルダを率いて、メグミたちを阻止しようとしていた。

たった三輌とは言え、楔形陣形を組んで中央広場へと向かうメグミたち。カチューシャたちはその側面から砲撃をしながら、ティーガーIIを先頭に菱形陣形で切り込んで行く。

だが、微妙に速度を増減させてメグミたちは砲弾を避けた。それに対して、全速で通過して行った大洗側は、最後尾のルクリリのマチルダが、ルミが減速したことで側面をさらけ出し、そこに攻撃を受けて撃破される。

「あ、くそっ！」

聖グロリアーナ女学院の生徒にしては、結構言葉や行動が荒っぽいルクリリだが、撃破された時も放送には流せないような下町訛りのスラングが次々と飛び出した。

「全くあの子は……」

選手用観覧席に到着したダージリンは、アッサムが持っている受信機から流れるルクリリの罵倒語に頭を抱えた。

「ローズヒップは面妖な言葉を使うし、どうしてああなったんでしょう」

何となくダージリンのせいじゃないかなと、内心オレンジペコは思ったが、流石にそれを口に出さないだけの良識はあった。

「そのローズヒップが、リミッターを外したみたいですよ」

「え？」

大型ディスプレイには、江戸ゾーンの堀を爆速するローズヒップのクルセイダーが映し出されていた。

建物を回避して、更に加速、テールを滑らせながら堀に向かって直角の進路を取り、そのまま堀をジャンプした。
「あ――」
「飛びましたね」
「飛んでるね」
ダージリンが呆然とする中、オレンジペコとアッサムもあきらめの境地に達していた。
ジャンプして砲塔をチャーフィーに向け、その前ぎりぎりを横切る瞬間に発砲、チャーフィーの砲塔正面が爆発を起こす。クルセイダーは飛び越えた先の石垣風の塀に激突、ずり落ちると同時に両戦車共に白旗が上がった。
「また無茶をして。怪我でもしたらどうするつもり?」
ダージリンがぷりぷりと怒っているのを、アッサムとオレンジペコが顔を見合わせて、小さく笑う。なんだかんだ言いながら、ダージリンがローズヒップを可愛がっているのを分かっているからだった。

B1bisの上に乗ったCV33、その上からアンチョビが周囲を観測している。というのも、B1bisの砲塔はキューポラが存在せず、車長は砲塔後ろのハッチから外を見るしかなく、周辺を見るのには向いていなかったからである。

そのアンチョビが、前方に一輌だけで移動中のパーシングを発見する。
「野良パーシング発見」
「残党狩り係でしょうか？」
カルパッチョが首を傾げると、アンチョビが作戦を提案する。
「小癪な。挟み撃ちするぞ」
「了解」
そど子が素早く反応したが、アンチョビの作戦に乗った事を、操縦手のゴモ代が心配する。
「勝手な事しちゃっていいの？　これじゃ規則違反してるみたい」
「ルールは破るためにあるのよ！」
それに対して、ドヤ顔でそど子が自信満々に言い放つ。
そんなそど子の変わりように、大きくため息をつくゴモ代とパゾ美だった。

欧風の街並みの中を中央広場に向けて突き進むメグミたちに向けて、後方から追いすがったカチューシャ隊が発砲する。しかし、後ろから撃ったにもかかわらず、左右のアズミとルミがその場で旋回をして真後ろを向いた瞬間に発砲、そのまま回転を続けて正面を向くと、何事もなかったかのように、メグミと隊列を組んで進んで行く。

その恐るべき練度に戦慄するナカジマ、ぎりっと爪を噛んで考える。
「このままじゃ追い付けないから、パワー出すよ〜！　スリップでついてきてね、宜しく」
ナカジマの無線を聞いて、エリカが首を傾げる。
「スリップ？」
「スリップストリームね。高速移動する物体の後ろは気圧が下がって、周囲の物体を吸引する効果が有るのよ」
「戦車で？」
「そう、戦車で」
エリカとカチューシャが問答を繰り広げている中、肝心のナカジマはやる気満々で腕まくりをしていた。
「壊れたらまた直せばいいんだし、フルパワー行くよ！」
ナカジマが嬉しそうに言うと、レオポンさんチームの全員が嬉しそうに笑みを浮かべる。
「「「お――！」」」
とことん車の修理が好きなメンバーであった。

Ｂ１ｂｉｓから降りたＣＶ33が野良パーシングを追い越して、その場で大きく１８０度ターンをすると、素早くバックに切り替え、パーシングと同じ速度で後退する。同時にカルパッチョが機銃をパーシングの正面全体に叩き付けていく。

撃破されないと分かっていても、目の前でちょろちょろしながら豆鉄砲を叩き付けられるのは、パーシングの車長の神経に障るものであった。いらっとして、主砲を向けようとする。

「このぉ……あれ？」

その瞬間、ＣＶ33が主砲砲身の下に潜り込んでいて、狙えないのに気が付く。パーシングの主砲は10度までしか俯角が取れない。それ以前に砲身が長過ぎて、ＣＶ33のような小さな車輌に肉薄されると、砲口よりも内側に入られてしまうのだった。

「フフン」

アンチョビが得意げに鼻で笑う。

「俯角取れないでやんの」

ペパロニが嘲笑する。それが聞こえた訳ではないだろうが、パーシングの車長がキレた。

「豆戦車を踏み潰せ！」

号令と共に加速するパーシング、だがＣＶ33もその場でターンして加速、ちょこまかと

左右に避けつつ、パーシングの前を横切って挑発を続けた。
「よぅーし、Ｔ型定規作戦だ‼」
「一回も成功した事ないッスよ」
必死で操縦しつつ、アンチョビの無茶な指示にペパロニが冷や汗を垂らす。
「いいから、行けっ」
「どうなってもしらないッスよ――」
加速して、ＣＶ33が目の前の池に突っ込む。まるで水切りの石のように、ＣＶ33は水面上を跳ねて行った。
「停止！」
ＣＶ33が加速したので、当然道があると思っていたパーシングの車長だが、まさかの光景に慌てて停止指示を出す。僅かに前方が池の上にはみ出したが、それでも何とか停止に成功して、パーシングの車長はほっと息をついた。
「ふぅ」
その瞬間、後部に一発の衝撃を受け、戦車が前へと押し出される。
「うわ――」
そのまま池の中へ転落すると、後ろに砲身から煙を出したカモさんチームのＢ１ｂｉｓが姿を現した。

「安心して、浅瀬だから」
そど子が前を見ると、まだ水の上を跳ねているＣＶ33。
「やった、成功だ！　タンケッテ最高！」
なんとそのままＣＶ33は対岸まで渡り切って、そど子が目を丸くする。だが、直後大きく跳ね飛ばされ、黒煙を上げて横転し、白旗が上がった。
「え？」
視線を周囲にさまよわせると、対岸にはセンチュリオンがいて、砲塔をそど子の方に向けようとしていた。
慌てて後退指示を出しつつ砲撃する様に伝えるそど子だが、そんな状態で撃った砲弾はあらぬ方向へと飛び去った。
「ちょ、ちょっとそんなの校則違反よっ！」
うろたえるそど子、だがセンチュリオンは平然と発砲する。
カモさんチームのＢ１ｂｉｓも正面から撃破され、白旗が上がる。
何事もなかったかのように、センチュリオンは再び中央広場へと向かった。
ルミが、後方ペリスコープで、追って来る大洗（おおあらい）側の車輌（しゃりょう）を見て鼻で笑う。
「そんなんじゃ、いつまでたっても追い付けないよ。ノロマさんたち」
レオポンさんチームのポルシェティーガーが先頭に立ち、モーターの回転数が上がる。

操縦席のナカジマが、右側面に後付けされた操作盤に手を伸ばす。そこには「ＥＰＳ」と書かれた赤いボタンがあった。

「エンジン規定はあるけど、モーターはないもんねー」

それを強く押し込むと、モーター音がさらに大きく唸り、ホイールスピンして履帯から火花が飛び散った。クンと小さく車体が揺れると、そのまま不規則振動をしながら一気に加速する。どう考えても、ポルシェティーガーの路上最高速度の35キロを大きく上回る速度を発揮していた。

自動車部全員で徹夜をしながら完全にばらして、モーターの線を丁寧にまき直し、大幅に出力アップと性能アップに成功したモーターが、予想以上の性能を叩き出していた。

ポルシェティーガーの後ろにはピッタリとカチューシャ車、エリカ車が付き従う。Ｔ－34／85の速度は路上55キロに対して、ティーガーⅡは38キロしか出ないはずなのに、本当にスリップストリームの効果なのか、40キロ以上出ているパーシングとの距離をどんどん詰めて行く。

そのあり得ない光景を見て、ルミが目を丸くする。

「え？」

「行け、超音速の貴公子！」※58

ナカジマが威勢よく掛け声をかけるが、その瞬間過負荷が掛かって限界に達したモーターが、轟音と共に爆発し、あちこちから煙を吹き出してポルシェティーガーが停止し

た。だが、左からカチューシャ車、右からエリカ車が追い抜いていき、ルミ車へと肉薄する。

「こなくそっ！」

ルミ車がその場で得意の３６０度ターンをしながら後方攻撃をしようと試みたが、そこにカチューシャが問答無用でブチかましを掛ける。それにより砲撃は外れ、更に車体の動きがぶれてしまった。それをエリカのティーガーⅡが砲身をぶつける様にして発砲、ルミ車を撃破する。

だが、アズミ車が同じように３６０度ターンでエリカ車の後方に迫り、無防備なその背後から砲撃を加えて擱座（かくざ）させた。

ぶつかったことで速度が落ちたカチューシャ車が、エリカ車を撃ったアズミ車を狙（ねら）おうと砲塔を回すが、既にそこには先頭のメグミが忍び寄っており、砲撃を側面に受けて白旗を上げる。

撃破されたルミ車を顧みもせずに、メグミとアズミはその場でターンを決めると、何事もなかったかのように、オベリスクの横を通過して中央広場へと向かった。

去り行くパーシングを見つめて、擱座（かくざ）したポルシェティーガーのキューポラから、ナカジマが体を出す。

「ここまでか……」

そう言うと、車体をポンポンと叩いていたわった。
「あとでちゃんと直してやるからな」
観客席の大型ディスプレイには、残存車輛として大洗側はⅣ号、ティーガーⅠ、大学選抜側はセンチュリオン、パーシング二輛と表示されていた。

第六章　以心伝心

　富士山型の展望台がある中央広場へと入って行くⅣ号とティーガーⅠ。左にある遊具のフライングフューリアス横の通路からはメグミ、右にある遊具のパンジャンドラムスウィンガー側の通路からはアズミが入って来たのが見えたので、みほたちはそれを避けて右側の壁面へと移動する。※59

　更にみほたちが入って来たのと同じ後方入り口からは、愛里寿のセンチュリオンが侵入してきた。

「外壁」

「うん」

　まほの指示に、みほがうなずく。

　広場の外壁などの頑丈な遮蔽物を利用して、攻撃を受ける方向を一つでも減らすのは、西住流における市街地戦での鉄則の一つであった。

　それに対して、愛里寿車は富士山展望台を背にして、背後からの攻撃を警戒し、砲塔を回すのではなく車体自体を回すことで、常に装甲の厚い側を敵に向けるという島田流の原則を守っていた。

　西住流も島田流も出来る限り動き続ける流派ではあるが、このように動きの方向性は大

きく違っている。特に島田流は優れた操縦手、砲手、装填手が車長の指示に阿吽の呼吸で従わなければ、その神髄を発揮するのが難しい。だからこそ玄人向けの流派と言われ、同時にそれだけの技量を備えた乗員の車輌を多数揃えるのが難しいので、単騎無双になりやすい。

それを考えると、大学選抜が愛里寿車の他に、メグミ、ルミ、アズミの三人とその乗員を揃えられたのは非常に稀有な事であった。いや、大学選抜という加盟全大学から最優秀の乗員を集める事が出来たからこそ、この人員を揃えられたとも言える。

平均的な技量の乗員でも、ある程度戦力化出来るようにする西住流が高校生向けで、個人の技量を追求する島田流が大学向けとなるのも、納得の行く所である。

そして島田流がニンジャ戦法として海外で人気になるのも。

歴史的な意味の忍びの者ではなく、映画的なニンジャとしてであるが。

みほのⅣ号が先導し、それにまほのティーガーⅠが続く。両車輌とも外壁に沿って主砲を中央部に向け、全速で移動しつつ、外壁からやや離れて並んだ屋台の建物の隙間から針の穴を通すような精度で砲撃を行う。この砲撃だけを見ても、両方の砲手の技量が並外れていることが分かる。※60

それに対して、愛里寿も車体を回しながら建物の隙間に砲弾を撃ち込んでいく。

同じ速度で外周を回ると、愛里寿が次の隙間に現れるタイミングを読んで砲弾を撃ち込んで来るため、みほもまほも微妙に加減速を繰り返す。この状況だと自然に外周を回る大洗側が先制して攻撃を行えるので、後手に回っている愛里寿としてもどこかで主導権を握る必要があった。

愛里寿は、それが自分が背にしている富士山展望台が鍵になると考えている。外周通路の全てに屋台が並んでいるのではなく、北側は富士山展望台が外壁に繋がるように建っており、通路自体はトンネルで展望台の中を通っている。

このトンネルに出入りする前後の部分は屋台が切れている。そして万が一トンネルの中に長居するようなら、前後からパーシングを送り込めばいい。たとえ両方のパーシングがやられたとしても、もうそこから出られなくなるので後はゆっくりと始末すればいい。当然それは相手も分かっているはずだから、狙うのはトンネル出口の一点。

Ⅳ号の後続のティーガーⅠがトンネルに迫ったのを確認すると、車体を一気に回転させ、そのままティーガーⅠの動きに車体の動きを合わせ、トンネル出口に照準を定める。

予想通り砲身がトンネルから出た瞬間、発砲する。

だが、みほもトンネル出口が危険なのは十分に判断していた。一気に加速して突破を図っても、致命的な横腹をさらしているので撃破される可能性は大きい。ならば、砲身が出た瞬間に一瞬フルブレーキングをして砲弾が通過した直後に再加速しかない、と考えて

いた。
その読み通り、ブレーキを掛けたⅣ号の直前を砲弾がかすめて行った。
みほの後を追うまほは、トンネルから出た瞬間にティーガーⅠの砲塔を旋回させ、Ⅳ号を狙った砲弾の角度からセンチュリオンの位置を推測し、まほ車の砲手の照準が捉える前に発砲させた。
その砲弾は真っ直ぐにセンチュリオンに向かう。だが、愛里寿が車体を回転させていたために、その側面の装甲スカートをかすめただけに終わった。

愛里寿は今の戦闘で相手の技量を大体読んだと判断したので、ここでそれまで待機させていたメグミとアズミを戦線に投入する。後方からパーシングに追撃させることによって、今まで相手に握られていた主導権を、今度は自分たちが手にするために。
追われる者から追う者へ。
そしてこれはこの戦いにおいて、愛里寿が初めて自ら指揮をして部隊を投入した局面でもあった。
今まで好敵手に出会えなかった愛里寿は、ここで本気で戦える相手を見つけ、がぜんやる気になったのだった。
敬愛する隊長の指示に従い、喜び勇んでメグミとアズミはみほとまほを追う。みほたちが避けたテーブルをものともせずに弾き飛ばし、どんな障害物があろうとも隊長の命じる

ままに突き進む、それが二人の想いだった。

後方からの追撃に中央の愛里寿を撃つ余裕を失ったみほとまほだが、蛇行して後方からの砲撃を避けて次の作戦へと繋ぐ。

速度差を調整して並走した瞬間、まほがちらっとみほを見つめた。その視線に対して、みほが小さく頷く。そして何事かを車内へと指示した。後方からの砲弾を回避すると、再びⅣ号が先行し、ティーガーⅠがその後に続き、一列となる。

愛里寿がその動きを見て、マイクで指示をすると、センチュリオンの旋回速度が上昇し、再び富士山展望台へと砲を向ける。

メグミとアズミからは、ティーガーⅠが邪魔でⅣ号が見えない。愛里寿からの指示を受けて、メグミはトンネルに入らず、展望台方面へ進路を変えようとする。

富士山展望台のトンネルに入る瞬間、Ⅳ号が鋭く右に進路を変えてそのまま展望台の壁面をよじ登る。それに対してティーガーⅠはトンネルへと進入して行く。Ⅳ号には気付かず、アズミはティーガーⅠを追った。

無理やり展望台の壁を斜めによじ登って行くⅣ号、だが愛里寿もそれを読んでいて展望台の階段を登り、妨害しようとする。だが、静止状態から階段を真っ直ぐ昇って行くセンチュリオンよりも、それまでに十分に速度に乗っていて壁を斜めに進むⅣ号の方が、やや

移動には有利だった。

愛里寿が砲撃しようとするのを車体をぶつけて阻止し、更にはその前を強引に横切ってトンネルの出口へと向かう。砲塔をⅣ号へ向ける愛里寿だが、Ⅳ号が射線の外に出てしまったので、そのまま展望台上部へと登って行く。

「あんな所に！」

一方、メグミもⅣ号が展望台を登って行ったのに気が付いて主砲で狙うが、パーシングの主砲最大仰角は20度で、壁を登るⅣ号を撃つのにはやや足りない。無理やりフライングフューリアスを囲む柵の台座に乗り上げ、車体前方を持ち上げて、照準の中へ捉えて発砲。そこまでしても、Ⅳ号が強引に進んだために砲弾は外れた。

「ちっ！」

その間にみほは、Ⅳ号をトンネル上の庇へと移動させる。

トンネルの中では、前を走るティーガーⅠをアズミが狙い撃つが、トンネルがカーブしているのと、照明が無くて真っ暗なため、なかなか当たらない。

トンネルを出た瞬間、まほは車体を斜めにして停止させる。

少しでも暗闇に目を慣らそうと、ハッチを閉めて車内に入っていたアズミは、外の明るさで目がくらみ、ティーガーⅠが停まっているのに気が付くのが遅れ、真っ向から衝突した。

庇からじりじりと進むⅣ号、重心バランスが取れる位置よりも進んだため、前へと傾く。僅かにキューポラから頭を出したみほが前方を確認し、パーシングが見えた瞬間、そっと砲手の華の肩に手を置く。それに華が頷き、主砲を発砲する。

気配に気が付いて、慌ててアズミが振り返るが時すでに遅し。

Ⅳ号の砲弾はアズミ車のエンジン天蓋部に命中し、撃破に成功する。そしてⅣ号自体も砲撃の反動で後方に下がり、再び庇の上に戻っていた。

その様子を見ていた観客は、一瞬静まり返る。

その後、ざわつきながら驚きの声を上げた。

「何だ、あの神業」

「西住流も化け物の集まりだな」

ＶＩＰ席では、西住しほがちょっとほっとしたのか、やや緊張をほぐすが、逆に島田千代が一瞬身を固くした。

庇から降りようとするみほの視界に、発砲後外周通路を急いで回り込んで来たメグミ車がパンジャンドラムの後ろに見える。それに対して、周辺を警戒していたまほがいち早く反応、砲弾を送り込んだ。メグミ車も急加速で砲弾を回避し、撃ち返してくる。

その間に愛里寿は展望台の上まで登り切り、Ⅳ号へ砲撃を行った。そのままでは狙えないので、展望台の手すり部分に車体を乗り上げて、傾斜させて俯角を稼いでいる。その砲撃もみほが気が付いて車体を滑らせたので外れ、みほも撃たれた直後に愛里寿に対して砲撃を行った。みほの砲弾も無理な姿勢からであったため、センチュリオンの手前に着弾する。

みほが再び展望台上に向けて攻撃をする姿勢を見せたため、愛里寿は片側の履帯を手すりに引っ掛けたまま後退する。

その間にまほは、みほと愛里寿の戦闘を邪魔させないために、メグミのパーシングへと向かう。

メグミもみほのⅣ号を狙うのは諦め、まほのティーガーⅠを相手にすることを決める。

展望台から離れるため、まほはパンジャンドラム方面に向かいかけて、大きく旋回しフライングフューリアスへと向かった。メグミのパーシングも外周通路から出てきて、まほ車を追いかける。

このフライングフューリアスは、元々はドイツの船舶用機関の修理パーツを作っていて、そこから遊園地用の大型遊具製造にシフトした会社が作ったものであった。色々な種類の船をモチーフとしたタイプが存在しているが、ディティールが凝っているとして一部マニアに大人気で、また遊園地でも係員がモチーフの船の乗員をイメージした制服を着ら

れるように、最初からパッケージされているのも人気の一因だったという。遊具自体は、宙吊りになった船型部分に客が乗って、船がスイングして急上昇と急降下を繰り返す、つまり大型ブランコであった。

正面にフライングフューリアスを捉えた所で、まほが主砲を発射する。砲弾は艦首に命中し、長年動いていなかった遊具が大きく後ろへと後退した。まほは、展望台でⅣ号とセンチュリオンが撃ち合っているのを横目で見つつ、そのまま真っ直ぐ爆炎で姿が見えなくなったフライングフューリアスの下へと潜り込んでいく。砲弾の反動で後ろに下がった船体部分だが、まほが飛び込んで行った時には下がり始めていて、その下を頭を下げて艦底部をぎりぎりですり抜けた。後ろをちらっと窺い、その場でUターンをする。

メグミもティーガーⅠに続こうとするが、爆炎の中からフューリアスの艦首が飛び出してきたのに気が付いた。

「！」

慌てて回避しようとするが、出来たのは砲塔を僅かに回して砲身を守るだけで、車体の回避は間に合わず、なすすべもなく艦首と衝突して、メグミ車は大きく弾き飛ばされた。

車体自体も僅かに左に曲がりかけていたためか、そのまま左回転しながら後方にあるキャンティーンカップの柵へと激突する。

因みに、キャンティーンカップは、多くの遊園地ではコーヒーカップとかティーカップ

と呼ばれていて、数人が座れるベンチが設置されたカップが複数あり、全体の床が動くと同時に、カップ中央のハンドルを回すとカップ自体も回転する遊具であった。カップルが相手に良い所を見せようと回し過ぎたり、グループの一人が回し過ぎて、その後に大変なことになることが多い遊具でもある。

まるでそのカップのように振り回されたメグミ車だが、乗員の三半規管は鍛えられていたのか、車体の動きが止まると同時にすぐに動き出そうとする。だが、そこにUターンを終えたまほからの砲撃を受け、擱座して白旗が上がった。まほは、撃破の確認もそこそこに、みほの援護のために直ちに展望台へと向かう。

この激戦の様子を、観客席の大洗側の応援団、華の母親と新三郎、麻子のおばあ、優花里や沙織の両親、他にも大洗の生徒たちの親族が固唾を飲んで見つめている。

そして、それは審判席の蝶野も、いやそれだけではなく、戦車道連盟の理事長、そして大洗を何とかして廃校にしようと、そして世界で勝てる戦車道の選手を育成しようとしていた文科省の辻局長までも。

島田千代が無表情のまま、西住しほに視線を投げる。

「……最後に残ったのはお互いの直系ね」

「あの子たちは今、流派のことなど考えていないでしょう。ただ戦車道の勝負をしている

だけ」
　それに対して、冷静に、だが僅かに笑みを浮かべてしほが答える。
　それを聞いた島田千代は驚きを隠せない。

　選手用の観客席でもダージリンが見つめていた。
「ついに家元対決ね……」

　ZiS－151多目的トラックの上でも、プラウダのメンバーが大型ディスプレイを固唾を飲んで見つめている。
　また別方向では、知波単学園とアヒルさんチームを乗せた九一式広軌牽引車が、レオポルド大型ディスプレイ移動用のレールを走行して、選手用観客席へと向かっていた。※61
　まだ回収されていないカチューシャが、退避ゾーンで映像を見ている。
「勝ったらカチューシャがお手製のボルシチ作ってあげるわ！」
「それは何となく食べると危険のような気がします」
　カチューシャ車の操縦手がぼそっと呟く。
「何か言った？」
「いいえ、何も」

ケイが興奮して応援する。
「センチュリオンを叩き潰してよ！」
ナオミも表情を変えて応援しているのに、アリサが驚いていた。
別な退避ゾーンでは、角谷会長が必死でディスプレイに祈っていた。
「西住ちゃん……頼む……」
「絶対にもう一度、学園艦に戻るんだ！」
河嶋の絶叫が響き渡った。
展望台の頂上で、愛里寿が不敵な笑みを浮かべている。
中腹ではみほのⅣ号が対峙、そして階段下にまほのティーガーⅠがやって来る。
みほとまほは、無言でアイコンタクトを交わす。
「――……」
同時に動き出すⅣ号とティーガーⅠ、左へ進むⅣ号、ティーガーⅠは逆に階段から右へと逸れて行く。その動きに反応して下から撃てないように、センチュリオンは頂上部の中央に後退した。その場で静止するかと思いきや、主砲を限界ぎりぎりまで上げて、旋回を開始する。

その様子を見て、何をする気なのかと、みほもまほも車輌を停止させ、主砲で狙いを付ける。
愛里寿は旋回の勢いを利用して、一挙に展望台の手すりを乗り越え、そのままの速度で展望台を下り始める。その先に待ち受けているのは、まほのティーガーIで、そちらも既に砲塔をセンチュリオンに向けていた。ティーガーIは愛里寿車が視界に入るなり発砲するが、愛里寿は僅かに速度を緩めて車体を横滑りさせることで、砲弾を回避する。そのままティーガーIの下側に付けると、側面から主砲を撃ち込もうとする。だが、まほもその場で旋回し、砲弾を避ける。
そこにみほが参戦し、センチュリオン目掛けて発砲する。だが、センチュリオンはまほと戦いつつもみほの攻撃を察知して避けると、その勢いで展望台の階段を下って行く。
それを追うまほとみほ。愛里寿が真っ直ぐに中央広場を抜けると、それを挟撃する様にまほが左から、みほが右から追い掛ける。キャンティーンカップとパンジャンドラムの間を通り抜けた愛里寿は、その場で右に進路を変えると、まほと鉢合わせした。
まほと愛里寿が同時に発砲する。
まほの砲弾は愛里寿にかわされ、愛里寿の砲弾はティーガーIの側面をかすめ、その衝撃でティーガーIは半回転して止まった。

通り過ぎた愛里寿車はティーガーIにもう一発撃ち込もうと砲塔を回転させるが、そこにみほのⅣ号が割り込んでくる。そのため、撃つのは諦めて加速して前進する。
それを追うみほ、愛里寿は加速しても砲塔は回し続け、後方を向くとすぐに発砲した。愛里寿の砲弾はⅣ号に向かって真っ直ぐ飛来するが、麻子が僅かに横へと車体をスライドさせたことで、左前方シュルツェンを吹き飛ばしただけであった。
みほもお返しとばかりに愛里寿に向かって砲弾を放つ。だが、センチュリオンは麻子が先ほどやったのと同じように車体を横にスライドさせて砲弾を避け、更にそれを予備動作として、そのまま車体を旋回させて砲塔が後ろに向いた瞬間、再び発砲する。撃ち終わってもそのまま旋回し続け、360度回転して進行方向を元に戻した。
みほは再びぎりぎりで砲弾を避けるが、今度は砲塔シュルツェンが吹き飛んだ。
まほがその隙にメリーゴーランドの隙間から攻撃のチャンスを狙うが、愛里寿が再び車体を旋回させてティーガーIに向かって砲撃を行う。メリーゴーランドの柱がその砲弾でへし折れるが、意に介さずまほも撃ち返す。愛里寿は車体を旋回させ続けて避けて行く。
旋回をし続けると、流石に履帯が切れる可能性があるので、一旦引き離したと見ると愛里寿は車体を停止させようとする。そこに全開で突入するみほ、愛里寿の旋回に合わせてその外を大きくドリフトして、センチュリオンの後部を狙おうとする。

その様子を見たアッサムがハッとする。
「あれは」
「決勝戦のドリフトね」
ダージリンが得意げに解説を行った。第63回戦車道全国高校生大会決勝戦での、みほがまほを撃破した、そして大洗女子学園と聖グロリアーナ女学院の練習試合で、ダージリンに対してみほが行った、相手の弱点を的確に狙うドリフトであった。
だが、愛里寿の方が先に車体を安定させ、目の前に来たⅣ号を撃つ。今度はそれによって右側のシュルツェンの後ろ半分が吹き飛ばされ、更に車体自体も壁際へと押しやられた。
みほはその押しやられた動きを生かして車体を後退させ、安定した所で発砲する。
再び車体を旋回させて、愛里寿は砲弾を避ける。ここでまた愛里寿の非凡な動きと読みが発揮され、回避動作と側面から進入してきたティーガーⅠを撃つのを、一つの動作にまとめ上げた。旋回した先のまほのティーガーⅠに主砲が向いた瞬間に発砲し、ティーガーⅠの砲撃を邪魔するのに成功した。
また仕切り直しとばかりに後退するまほ、それを見て愛里寿が右手を車内に入れ、握り拳から人差し指と小指を伸ばして、車内に指示を行った。
主砲に榴弾を装填する装填手、ティーガーⅠが飛行機型ゴンドラのハッピースカイの裏

に隠れた瞬間、発射する。砲弾はハッピースカイ、因みにこの遊具のフルネームは「ごらいけ！　フォッカーDr.ワンマン　ハッピースカイ」だが、それを木端微塵に粉砕する。ティーガーⅠが移動するのを支援するために、みほがパンジャンドラムスウィンガーの支柱の陰から砲撃を行う。だが、愛里寿はその砲撃を意に介さず、ロケット型の遊具アストロライナーV2の後ろに回り、噴射口を砲撃する。※62

内部で榴弾が炸裂し、その爆風は見事に噴射口へと集中し、ロケットが宙を舞った。ロケットは一瞬舞い上がるが、すぐに落下を開始し、みほが隠れているパンジャンドラムスウィンガーへと向かって行く。

「後退して！」

みほの指示に従ってⅣ号を後退させる麻子、次いで前進して砲撃位置に付けようとする。だが、ロケットがパンジャンドラムスウィンガーの支柱に命中し、その基部を完全に破壊した。倒れてくる巨大な遊具に慌てて回避するⅣ号、そのままだとぶつかると判断して、落下状況を見ながら左右に移動する様に指示をする。

麻子が指示通りに動くと、パンジャンドラムの両側の車輪の間にちょうどすっぽりとⅣ号がおさまった。車輪と速度を合わせて進むⅣ号、センチュリオンに向けて車輪の隙間から発砲する。だが、センチュリオンも撃ち返して、砲弾はパンジャンドラムの中心軸に命中して炸裂、バラバラに吹き飛んだ。

この爆発で、ぶら下がっていた多数のブランコが黒煙を引きながら吹き飛ばされ、外周の壁や自動販売機、テーブルなどにぶち当たる。そのうちの一つが、自動販売機の隣で止まっていたヴォイテクライド、砲弾を背負った熊の形をした子供用の乗り物にぶつかった。この衝撃でヴォイテクライドがのっそりと動き出す。※63

その前をまほのティーガーIが通り過ぎ、ぶつかった椅子が弾き飛ばされる。その後にみほのⅣ号が続いた。

みほが決意の表情を浮かべて車内を見る。

その語った内容に華と沙織が驚くが、すぐに優花里が笑顔を浮かべる。

「はい」

「分かりました！」

華も気合を入れる。

「大丈夫？」

まだ心配そうな沙織、

「麻子さんも宜しく」

「おうよ」

その返事を聞いて、みほが小さく微笑んで頷くと、キューポラから身を乗り出した。振り返ったまほに向かって、右手を小さく上げると、まほが頷いて前に向き直る。

先ほどアズミ車を撃破した富士山展望台の手前でまほが左折し、みほもそれに続く。目の前には正面から愛里寿(ありす)が突っ込んで来る。まほが発砲、その砲弾はセンチュリオンをかすめ、回避しようと旋回した愛里寿はティーガーIとⅣ号が邪魔で、回り切れずにティーガーIと衝突する。

みほも発砲するが、逆にセンチュリオンが強引に車体を旋回させて、ティーガーIとⅣ号の間をこじ開けて行ったために逃げられてしまう。その上、Ⅳ号に向けて砲弾を発砲してきて、またシュルツェンが吹き飛ばされた。

通り過ぎて行ったセンチュリオンは、体勢を整えると再びⅣ号を追って来る。回転木馬のシーザーのメリーチャリオットとキャンティーンカップの間を通り抜け、メリーチャリオットを盾にして、その外周を回る。※64

まほが左手で小さくみほに指示をして、そのままティーガーIはキャンティーンカップの右側へと抜けて行く。みほが左側に回りながら擱座(かくざ)したメグミのパーシングの横を通ると、目の前に突然センチュリオンが現れ、瞬間的に発砲する。だが、その砲弾をセンチュリオンはキャンティーンカップの階段を利用して片輪走行で避(よ)け、Ⅳ号の目の前を通過していった。

その挙動に観客席の観衆はますます目を丸くする。

「戦車ってあそこまで動けるのか?」

「島田流ってのはとんでもないな」
「だが、西住流のコンビネーションも凄いぞ」
「ほとんど無線が飛んでないんだろう?」
「らしい、ノイズすら入ってこないってさ」
口々に感想を言い合うが、その視線は大型ディスプレイから、時たりとも離そうとはしなかった。
瞬きすら惜しんで。

センチュリオンが車体を立て直すと同時に発砲、Ⅳ号も辛うじて島田流のように車体ごと旋回して避けた。そのままセンチュリオンがやってきた方向へと進むと、横からまほのティーガーIが出てきて、再び合流する。
それを愛里寿が追い掛ける。
まほがちらっとみほを見ると、みほは右手を開いた状態で上げて合図をする。まほは小さく頷き、上下動するライド型遊具のフロッガーの横を通過していく。その柵には、先ほど衝撃で動き出したヴォイテクライドが引っ掛かっていた。戦車が通った振動もあってか、動きながらじりじりと向きを変え、柵から外れそうになっている。※65
そんなヴォイテクには気が付かず、みほたちはフライングフューリアスへ向かい、支柱

の角を曲がってライドの後ろ側に回る。その際に、インコース側を通っていたⅣ号が自然とティーガーⅠの前に出た。これは、Ⅳ号戦車の旋回半径は５・92メートル、ティーガーⅠは７メートルで、Ⅳ号の方が小回りが利くために、まほがアウト側に出たからでもあった。

フライングフューリアスを回った瞬間、後続のまほがセンチュリオンが左へと行かないように、わざと左側にやや外して砲弾を撃ち込む。

それを受けた愛里寿は右へと進路を変えつつ、Ⅳ号目掛けて発砲する。

みほも僅かに車体をスライドさせるだけで攻撃を避け、そのまま展望台の前へと向かう。愛里寿もみほたちと並行してセンチュリオンを走らせ、砲を側面に向けて発砲する。

これも回避し、センチュリオンを見ながら前進するみほ、正面を向くと後続のまほに合図をするためにそろっと右手を上げかける。

だが意外にもメリーチャリオットの中を突き抜けて、戦車や馬を蹴散らしながらセンチュリオンが飛び出して来た。そのままⅣ号に体当たりを仕掛ける。

センチュリオンにぶつけられ、左側へと弾かれるⅣ号、しかも後続のティーガーⅠとかすった事で、無防備な後部をセンチュリオンに晒してしまう。

センチュリオンの砲塔が旋回し、Ⅳ号の後部に向かう。

みほもまほも焦った表情でセンチュリオンを見つめると、そこには決意の表情を浮かべ

た愛里寿がいた。
麻子が何とか車体を立て直そうとするが、その前にセンチュリオンの砲塔旋回が終了する。
万事休す。敗北を覚悟したその瞬間――
その瞬間、Ⅳ号とセンチュリオンの間に、ヴォイテクライドが横から割り込んで来た。
「‼」
ヴォイテクを見て、愛里寿とみほが一瞬虚を突かれ、そのまま通過していくのを、思わず見送ってしまった。
みほは顔を上げて愛里寿を見つめ、愛里寿もみほを見る。
「前進！」
麻子に指示を出し、弾かれたように飛び出すⅣ号、愛里寿も発砲するが間に合わない。
そのままみほとまほは展望台へと向かう。愛里寿は一瞬ヴォイテクを見つめ、その後に戦車を後退させて進路を変更させせると再び追い掛ける。
Ⅳ号の横へとティーガーⅠが並ぶと、みほがキューポラから身を乗り出し、身振り手振りも交えてまほに何事かを伝える。まほも同じように身を乗り出して、それを聞いている。
「本当にいいのか？」
「うん、お願い。お姉ちゃん」

まほが納得すると、展望台の前でみほは右に、まほは左へと別れた。そのまま展望台を回り込みながら左右から一気に登って行く。

登り切ると、まずはⅣ号が展望台に入り、一拍遅れてティーガーⅠがその後ろにつけた。

ここで決着を付ける気なのか、愛里寿も展望台と反対側の広場入り口へと向かう。その間も何事かを考えている愛里寿は、展望台の方へと向き直った。

その瞬間、Ⅳ号が勢いよく展望台を降る。その後にティーガーⅠも続く。

センチュリオンもゆっくりと前進を開始する。

一気に階段を下り、平地に出てもみほとまほは速度を落とさない。そして、まほのティーガーⅠがみほのⅣ号の真後ろに入り込むと、主砲の先が車体に付くほどぎりぎりまで距離を詰める。

まほが心配そうに眉を寄せてから、Ⅳ号のみほを見ると、みほが少し振り返って凛々しい表情で「大丈夫」と言わんばかりに頷く。それを見て、まほが砲手に発砲指示を出す。

ティーガーⅠの88ミリ砲が発射され、それに押されてⅣ号が一気に加速した。

その加速に愛里寿が驚愕する。

「空砲⁉」

みほのⅣ号は、戦車とは思えないような加速を見せて、愛里寿との距離を一気に詰めて

行く。
しかし愛里寿も慌てたのは一瞬で、主砲を発射した。
その砲弾は、Ⅳ号に確かに命中した。
だが、当たったのは右側の履帯であり、履帯を断ち切り、転輪を四散させたが、動きを止めるには至らなかった。そのまま滑るようにⅣ号は進み続け、センチュリオンへと正面から衝突する。
ぶつかった直後、センチュリオンの砲塔基部に砲身を差し込むようにして主砲が発射された。
Ⅳ号の勢いにセンチュリオンは押され、黒煙を上げつつよろよろと後退していく。Ⅳ号もセンチュリオンを押したことで惰性が無くなり、双方ともゆっくりと止まった。
センチュリオンから上がる白旗。そして一拍置いてⅣ号からも白旗が上がる。
「センチュリオン、Ⅳ号、走行不能!」
審判の声が会場に響き渡った。

第七章　大洗（おおあらい）勝利

会場の上空を審判機の銀河が飛行している。
審判の篠川（しのかわ）の声が、再び会場に響く。
『残存車輛（しゃりょう）確認中』
江戸ランドで擱座（かくざ）しているチャーフィーと、その横でクルセイダーが横転している。横には乗員たちが集まり、タブレットで中継を見つめていた。
ウェスタンランドでは、M25戦車運搬車ドラゴンワゴンが三輛のパーシングを回収している。※66
ワールドゾーン出入り口のケーニヒ門近くの橋では、チャーチルが戦車回収車に引き出されており、橋の上にはT28が擱座している。
そして中央広場では、センチュリオンとⅣ号が白旗を上げ、その後ろで稼働状態のティーガーIが待機している。
審判の篠川が電子的に記録された白旗のデータと、手元のファイルの今までの戦況と実際の状況に違いがないのを再確認する。
『目視確認終了！』
観客席の大型ディスプレイに戦車一覧がスクロールして表示され、中央に30から撃破さ

れた車輌の数が引かれて行く。
「大学選抜残存車輌なし。大洗女子学園残存車輌1！」
最後に表示されたのは、唯、バツが付いていないティーガーⅠ、そして大学選抜0と大洗女子学園1の文字だった。
満面の笑みを浮かべて蝶野がアナウンスをする。
「大洗女子学園の勝利！」
大興奮する観客、あちこちから歓声が沸き上がる。
「よっしゃ――――！　お嬢！」
新三郎が大喜びで両手を振り上げ、その前では麻子のおばあが踊っている。
「「「やった――――！」」」
ウサギさんチームが大喜びをするが、メガネが割れたあややだけが分かっていない。
「え、何？　勝ったの？」
「ハラショー、ピロシキー！」
自動車部に挟まれ、エリカに肩車されたカチューシャが大喜びしている。その横には、ようやく合流できた、黒森峰女学園でパンターG型の車長である赤星小梅の姿もあった。
風紀委員とアンツィオもボカージュ迷路横で喜び、ペパロニは鉄板ナポリタンを一挙に飲み込んだ。
回収車の上でカバさんチームが歓声を上げ、アリクイさんチームが勝利のポージングを

決める。
知波単学園とアヒルさんチームが、九七式広軌牽引車の上で万歳三唱をする。
ダージリンとアッサムが優雅に紅茶を飲みながら、その横ではケイとアリサが肩を組んで歓声を上げている。
江戸ゾーンでタブレットを見ていたチャーフィーの乗員たちは、ローズヒップ車の乗員に紅茶を分けて貰っているが、やはり悔しそうにため息をついた。
Z・iS－151の上でノンナが拍手をし、他のプラウダメンバーもノンアルコールウォッカを飲みながら大喜びであった。
「победа！」
「хорошо！」
クラーラもノンナのロシア語に応える。
大会本部では、戦車道連盟理事長が飛び上がって喜んでいる。
「わっはっは――」
だが、その横では、辻局長がどよーんとした表情を浮かべていた。
「ふ――っ」
そして同じタイミングで、大きく息をつく西住しほと島田千代の両家元。

泣いている小山、泣きそうな河嶋を従え、角谷会長が満面の笑みを浮かべた。
「これで廃校は無くなった！」
「んが！」
河嶋も限界が来て、片眼鏡を取ると溢れる涙をぬぐう。

その間に、全選手が観客席グランドスタンド前に集合し、その中へまほのティーガーIに台車に乗せられてけん引されたみほのⅣ号が戻って来る。
大洗連合の選手も、観客も大歓声でこれを迎える。
戦車が停まると、その両脇に大洗連合の選手が駆け寄った。
双方の戦車のハッチが開くと、それぞれ乗員が降りて来る。
夕日に照らされた傷だらけのあんこうマークがまるで泣いているようでもあり、誇らしげでもあった。
そして、Ⅳ号からは優花里、麻子、華、沙織の順に降りて来て、最後に全員が降りたのを確認したみほが降りると、角谷会長が飛び込んで来た。
「西住ちゃ――ん！」
その左右に小山と河嶋も駆け込んで来る。

「ありがとう」
「勝った、勝ったぞ！」
その横では、まほがティーガーIにそっと手を伸ばす。元みほの乗車であり、みほが黒森峰女学園から去ったために予備車輌として、西住家に戻されていた車輌に。
「隊長、お疲れ様でした」
「うん」
エリカがまほを労うと、まほも力強く応える。
「みほさん、おめでとう」
「おめでとう！」
ダージリンとケイが祝福し、それを遮るようにカチューシャが駆け込んで来る。
「ま、おめでとう！」
「いい試合だった」
アンチョビも一歩遅れて祝福する。
各校の選手に囲まれる中、みほが深々と頭を下げる。
「皆さん、本当にありがとうございました」
他のあんこうチームと生徒会も頭を下げる。
「ありがとうございました」

西が頭を下げ返す。
「こちらこそお礼を言わせていただきたいです！」
そこに突然、ヴォイテクライドが歩いてきて、思わず生徒たちが道を開ける。
ライドの上には愛里寿が乗っていて、みほの前まで来ると停止ボタンを押してゆっくりとヴォイテクが停止した。
愛里寿がヴォイテクから降りると、みほの前に立ってじっと見つめる。
おもむろにポケットに手を入れると、ボコを取り出して一旦その顔を見つめると、みほに差し出した。
「？」
みほはボコを見てから、愛里寿を不思議そうに見るが、愛里寿が不愛想な表情のままなので、何を考えているのか分からなかった。
「わたしからの勲章よ」
それを聞いて、理解したみほが笑顔を浮かべた。
「ありがとう！　大切にするね」
思わず愛里寿も照れて目線を逸らし、顔が赤くなる。
みほもボコを受け取って、大事そうに胸元に抱きしめる。

ＶＩＰ席では、西住しほと島田千代に蝶野が声を掛けた。
「お二人とも、いい後継者が出来ましたね」
少しだけしほと千代も微笑む。
「次からはわだかまりのない試合をさせて頂きたいですわね」
フッと微笑むしほが千代に手を差し出すと、千代は一瞬驚くがその手をしっかりと握り返した。
そして言葉を返す。
「よろしければこれからも交流戦、やっていきましょう」
「ええ、何があるか……わからないですから」
「これで、大学戦車道もうかうかしていられませんわね」
笑みを大きくした千代に、しほが不思議そうな顔をする。
「？」
「だって、今回活躍した子たち、来年はみんな大学生でしょう？」
「あっ」
千代の指摘に、しほが驚きの声を上げる。それを見て、千代が声もなく笑った。
「あなたの所のみほさんだって、再来年には私の所が頂きますわ」
「それはあの子たちの自主性に任せて欲しいですね」

憮然と答えるしほだが、千代は笑って釘を刺した。
「あら、まさか大学戦車道にまで西住流は手を伸ばしませんよね?」
「……」

夕日に向かって川を進むウイスコ型上陸用舟艇、その上ではアキが嬉しそうに中継を見つめて、満面の笑みを浮かべて振り返った。
「戦車道には本当に、人生の大切な事がつまってるね……」
「だろう?」
ミカが満足げな表情から静かに目を閉じ、カンテレを鳴らす。
そのままBT-42を乗せたウイスコ型上陸用舟艇は、夕日の海へと出て行き、その中へと消えて行った。

エピローグ

試合が終わって、夕日に照らされた遊園地、グレート・マウンテンコースターZのレールに観覧車が寄り掛かっている。閉会式も終わり、それぞれの学校は帰り支度を始めている。

レオポンさんチームのメンバーは、回収し忘れたパーツ類が無いか、運営から借りたダイムラー偵察車で、一通り試合会場を回っていた。本来2人乗りの小型車輌だが、ツチヤが操縦して、残りの3人はオープントップの車体から身を乗り出し、周囲を観察していた。

ナカジマが、レールに寄り掛かっている観覧車に、いち早く気が付いた。

「あっ、カンちゃん」

「あの後もずいぶん走ったみたいだなあ」

「一輪車耐久レースというのはどうだろう?」

「電装系が……」

他のメンバーが盛り上がる中、ナカジマが深々と観覧車に頭を下げる。それを見て、ホシノが腕を組んでしみじみと語る。

「あれが、勝負の分かれ目だったなあ」

「でも……雨をもっと生かしたかった」
頭を上げたナカジマが、ホシノとお互い雨での走行を得意とする同志として、雨の中ただ撤退するしか出来なかったのを残念に思いつつ、試合を振り返る。
思い思い試合の感想を述べつつ、ダイムラー偵察車は試合会場を去って行った。
苫小牧港で、フェリー「さんふらわあ」を待つ間にみほとまほが楽しそうに話している。
その様子を、沙織たちが少し離れた所から見つめていた。
「ねーねー、あれ何話してるんだろーねー?」
「黒森峰に帰って来ないか、とか?」
珍しく麻子が最初に口を開くと、優花里や華も色々と続ける。
「いいな、必ず戦車道は続けろ、ですよ」
「いい試合だったね、お姉ちゃん、じゃないですか?」
「いい友達が出来たよ、じゃないかなー、ほら、私とか」
「西住流の試合じゃなかったな、なんてのもありそうです」
一瞬、優花里が考え込んで、また口を開く。
「次の試合も出て来いよ、とか?」

「え、何々、まだ試合ってあるの？」
「はい、秋大会とかもありますよ」
「へー、でももう廃校は無いよね」
「それはもう勘弁です」
みほとまほがしっかり握手をしたのを見ながら、沙織たちも笑い合う。
その笑い声を聞いて、みほとまほがきょとんとして沙織たちを見つめた。
そこに汽笛と共に、さんふらわあが入港して来た。
お互い、時間が来たのに気が付いて、みほとまほはもう一度握手をすると、まほは飛行船の停泊地に向かって歩き出した。
みほや沙織たちが手を振ると、振り返って小さくまほも手を振り返す。
そして、今度はしっかりと前を見て、ずっと待っていたエリカ、そして他の黒森峰のメンバーの元へと進んで行く。
まほが去ると、挨拶をしようと群がっていた他の学校の隊長たちが、みほのそばへと駆け寄って行った。
「本当に来てくれて助かったよ」

角谷会長が、隣に並んでみほたちを見ているダージリンに声を掛ける。ダージリンは、優雅に手にしたカップから紅茶を飲むと、意味深な笑みを浮かべた。
「あなた方の学校に勝ったのは、私たちだけ。でも、あれは練習試合」
それを聞いて、角谷会長がニヤッと笑う。
「公式試合で勝たないと意味が無いって？」
「ふふっ、戦車道が変わるかもしれない機会を、本当に目にする事が出来るなんて」
「そんなもんかねえ？」
角谷会長が首を傾げる。
それぞれの道を貫きつつ、勝利を目指す戦い。ただ漫然と道を守り続けるのでもなく、ただ勝つためだけでもなく、己の美学と勝利をどのように融合させるか、ダージリンは大洗の、そしてみほの戦いを見て、そこにそのきっかけがあるのに気が付いた。
「ええ、お陰で卒業後の予定が決まりましたわ」
隣の角谷会長に向けて、ダージリンが満面の笑みを浮かべる。それに角谷会長も笑みで返す。
「それは良かった」
そう言いつつ、ちらっと視線を控えている小山と河嶋へと向けた。
「卒業……か」

角谷会長が物思いにふけっている間に、みほからの各校の隊長へのお礼は終わっていた。

どの学校も、大洗との再戦を期待していると告げつつ、それぞれの仲間が待つ所へと去って行った。それを見て、ダージリンがみほへと近寄って行った。

「みほさん」

「あっ、ダージリンさん。今回はありがとうございました！」

「いいえ、あなた方の努力が、勝利に繋がったの」

「でも、皆さんが来てくれなかったら、負けていたかもしれません」

「私たちが来たのも、努力の成果よ」

みほが、やや不安そうに視線を足元に泳がせた。

「……そう、でしょうか？」

「ええ、そうよ。自信を持っていいわ」

「ありがとうございます」

頭を下げたみほに、すっとダージリンが右手を突き出す。

一瞬きょとんとするみほだが、すぐに気が付いてその手を握り返した。

「次の試合を楽しみにしているわ」

その言葉を残して、ダージリンもオレンジペコやアッサム達が待つ、学園艦との連絡船

の元へと歩いていった。
その後ろ姿に、みほは深々と頭を下げた。

国道36号を北上するサンダース大学付属高校のマークを付けたＭ１５１Ａ２、そのステアリングをアリサが握り、助手席ではナオミが地図を見ていた。後部座席には、大量のハンバーガーの袋と共に、ケイが乗っている。苫小牧港から、Ｃ-５Ｍスーパーギャラクシーが駐機している新千歳空港までは、僅か十数キロ。車なら、一瞬の距離であった。
途中、黒森峰女学園のトラックを追い抜かしたが、何でも近くのゴルフ場に飛行船を止めてあるとかで、そのまま道を逸れて行ってしまった。
また、アンツィオ高校のＳＰＡ38Ｒトラックは、荷台にＣＶ33を乗せて、国道36号を反対側に走って行った。※67
恐らく函館まで２５０キロほどの陸路を走り、そこから船で移動するのだろう。
角谷会長がアンチョビに、大洗まで便乗を申し出たり、ダージリンも学園艦での移動を提案したが、断って走って行ってしまった。ＳＰＡ38Ｒの最高速度は路上で時速51キロ、函館までは大体5時間ほどかかる。そこからは青森まではプラウダ高校が船に乗せてくれるが、そこから栃木県までは約６００キロ。休憩なしでも半日は必要であり、更にはＳＰＡ38Ｒの航続距離は路上３１０キロ、路外２９０キロであり、函館で一回、青森からは念

のため二回の給油が必要であろう。

大洗のさんふらわあなら、乗る余裕もあって、しかも寝ていても着くのに、どうやらアンチョビ達は途中での買い食いや、食材探しの方に興味があるらしい。

知波単学園の西も、申し出を断り、室蘭本線経由で鉄道で帰る事になった。どうやら、この輸送自体が訓練の一環となっていたらしい。車に比べると、鉄道なら乗員の休憩もやりやすい上に、戦車道連盟を通じて運航計画も既に出してあって、途中で車輌見学会を開くのまでが予定に入っているとか。

聖グロリアーナ女学院、プラウダ高校は苫小牧港に自分たちの船が停泊している。両校とも、積み込みを始めたばかりの大洗とは違って、既に積み込みも終わり、いつでも出港可能であった。

因みに試合の後、みほたちが継続高校にお礼を言おうと探し回ったが、審判の稲富から、早退届が出ていて、そのまま北の方へ船で流れて行ったと聞いて、一同残念に思ったが、特に沙織と優花里ががっかりしていた。

沙織は新しい知り合いを増やせる機会だったのに、そして優花里は珍しいBT－42を見学する機会だったのに、と。

その優花里は、継続高校がウイスコ型上陸用舟艇を使っていたと知ったら、もうそれこそ狂喜乱舞したであろう。だが、今はどこかへと走り去って行った。

そして、みほ達が乗船準備をしていると、どこからか轟音が響いて来た。

その音を聞いて、ウサギさんチームと優花里がいち早く反応する。

「あの音は！」

「ゼネラル・エレクトリックのＣＦ６が４発、サンダースですね！」

港の上空を低空で通過していき、その後に左右へと羽を振って挨拶をしていったのは、サンダース大学付属高校のＣ－５Ｍスーパーギャラクシーであった。その少し後に、黒森峰女学園のマークを付けた巨大な飛行船が続く。

「うわー、おっきなクジラ～」

あやがそれを見て、目をキラキラさせた。

桂利奈が飛行船を追い掛けて埠頭を走って行くと、あゆみと優季がそれに続く。紗希だけが、どこからか飛んできた白い蝶を追って、別な方へと走って行った。

飛行船に向けて、見えなくなるまでみほが手を振り続ける。

夕闇の中へ飛行船が消えても、じっとそれを見続けていると、さんふらわあの上からナカジマの声がした。

「おーい、積み込み終わったよ～」

「よし、西住ちゃん、帰ろう」

「はいっ！」

角谷(かどたに)会長の号令で、埠頭に残っていた大洗の生徒たちは乗り込み、暫(しばら)くすると、夜の海にさんふらわあは一路大洗に向けて静かに出港した。夕方に苫小牧を出港すれば、翌日の午後には大洗(おおあらい)へと到着する。

船内には、エコノミーからスイートまでの色々な部屋以外にも、レストラン、展望風呂、売店、ゲームコーナー、シアターと長旅を退屈させない設備があった。

動き出すとすぐにレストランでバイキングを楽しんだが、ウサギさんチームやカモさんチームは疲れてしまったのか、いち早く部屋に戻って寝てしまった。

他の生徒たちがレストランから退出した後、こっそりと調理をしていた角谷(かどたに)会長と生徒会の面々が、遅い夕食を取りつつ、今後の作戦会議を行っていた。

「おーい、桃(もも)ちゃん、もーもーちゃー——ん」

角谷会長が隣の河嶋(かわしま)に声を掛けるが、河嶋は疲れ切っているのか、それとも勝利に気が抜けてしまったのか、完全に心ここにあらずという状況で呆(ほう)けていた。

それを見て、小山(こやま)が苦笑する。

アヒルさんチームは、展望風呂でゆっくりと汗を流し、ゲームコーナーでは、アリクイさんチームがいつものように、ヘンテコな縫いぐるみが入ったクレーンゲームや、レトロゲームに目を輝かせ、次々とコインを投入していた。

売店では、最近の歴史ブームのせいか、船の中まで充実している歴史グッズや、海洋関

係のグッズに、カバさんチームが夢中になっている。
「大洗に着くまでに全部動けるようにするぞ！」
「「「おーーー！」」」
車輌デッキでは、ナカジマの掛け声に合わせてレオポンさんチームの全員がこぶしを突き上げて、戦車の修理を開始した。一晩あれば大抵の車輌を何とかするレオポンさんチームなら、大洗に到着するまでには、各車輌を最低でも自走可能にはしてしまうだろう。
特に、角谷会長から大洗に着いたら勝利のパレードをすると聞かされているので、その気合の入り方は並大抵ではなかった。
各校各人の夜は、車輌デッキを除いて静かに更けて行く。

翌朝、専用機で一足早く戻った大学選抜の首脳陣は、大洗にあるボコミュージアムに来ていた。
その外壁が綺麗になっているのに、愛里寿が驚く。
島田流の名誉を守り、堂々とした戦いをした事で、愛里寿の母親である島田千代が約束を守ったのだった。
そして、戦車道連盟を通して廃遊園地から譲り受けたヴォイテクライドを、ボコミュー

ジアムの入り口に飾る。

愛里寿が、それを見てにっこりと微笑んだ。

大洗でそんな事が行われているとは知らず、みほはじっと海を見つめてた。

そして、さんふらわあが大洗港に近付くと、まずは麻子とそど子が何かに気が付き、次いでみほがハッとして、そして大きな笑みを浮かべる。

そこに浮かんでいるのは、懐かしの大洗女子学園の学園艦だった。

終幕

某月某日都内某所。
暗い部屋の中で会議をする人影があった。
「高校生と大学選抜が互角の試合」
「しかも戦車の総合力は格上だ」
「島田流の凄さは分かった、だがあれが西住流の神髄なのか？」
「さて、それは分からん。だが、一つだけ明確になった」
「それは？」
「高校の総合力が予想以上に上がっている。というよりも、勝てる戦車道はあそこにあった」
「勝てる戦車道」
「ああ、考えてもみたまえ。今回参加した各校の隊長クラスは近い将来卒業する。そうすれば」
「大学選抜に招聘するのも可能だな」
「その通り。高校全体の実力がここまで底上げされているとは予想外だった。それが島田愛里寿の指揮で動く、見てみたいとは思わないかね？」

「勝てる戦車道、か」

「そうだ、世界に通用する戦車道だ」

ガールズ＆パンツァー劇場版　了

解説

※1・ヨーグルト学園

群馬の学校で、港がないため木更津を母港としている。また、島田流の本拠地は群馬で主に大学生向けに活動しているので、西住流と黒森峰女学園の関係ほどではないが、ある程度の交流関係があると考えられている。

名前の通り、ブルガリアから技術導入したヨーグルトを中心とした乳製品の生産に力を入れており、そのため畜産科の生徒が一番多い。次いで農業科の生徒が多く、これらの生徒は農業用トラクターなどの運転に慣れていることもあり、戦車道履修者はこの二つの学科に所属している者がほとんどである。また、農業科ではバラの栽培に力を入れており、生徒たちはよく制服にバラを飾っている。畜産や農業が中心の学校にもかかわらず、学園艦自体はあまり大きくなく、牧場や農場に場所を取られているので、生徒数はさほど多くない。それもあって戦車道に費やせる予算も少ないが、学校のモットーが「質素、倹約、勤勉、忍耐」であり、我慢には慣れている生徒が多いので、少ないながらも努力している模様。そんな小さな学園艦だが、温泉施設が非常に多く、様々な種類のお湯を定期的に陸から輸送しているのが自慢でもある。

戦車道用の保有車輌は元々はＣＶ33と38（t）の各タイプ、また訓練用としてオチキス

H39が有り、豆戦車と軽戦車を組み合わせた快速戦術が基本であった。但し、積極的に攻勢に出るのではなく、防御中心でタイミングを見て反撃に出るのを好んでいる。近年どこからか、Ⅲ号突撃砲F／G型、Ⅳ号戦車G／H型、ヘッツァー、Ⅳ号駆逐戦車／L70、そしてパンターD／G型を入手、戦力の拡充を図り、他の学校を驚かせた。これらの新たに入手した車輌は、完全な純正品ではなく、色々なタイプの部品の寄せ集めであり、便宜的にF／G型などと呼ばれている。通常、戦車道連盟が車輌登録の際のシャシーナンバーで型番を判断するのだが、記録台帳に載っていない事からスクラップなどからパーツを寄せ集めて作られた再生車輌と判断、主要構成パーツは十分に連盟の基準を満たしていたので、問題なしとして登録が行われた。再生車輌であっても、バランスの取れた優秀車輌が揃っており、一部の戦車道評論家からは、運用と練度の向上次第では、今後の台風の目になるのではとの意見も出ている。

※2・ポンプル、ワッフル、青師団、ヴァイキング水産、伯爵高校、BC自由、マジノ

ポンプル高校

昔、シベリアから日本に渡ったポーランドの子どもたちが、祖国へ帰ってから当時知り合った日本人のために、改めて提携校として作った学校。最初は、神奈川県に医療系の学校として設立されたが、規模が大きくなったため、福井県の敦賀港を母港とした。この

時、同じ県内にあった聖グロリアーナ女学院から、旧式になった学園艦を譲り受けている。この時から聖グロリアーナとの友好関係は続いており、交換留学を積極的に行っている。

独自の戦車を運用しており、豆戦車のTKS、軽戦車の7TP双砲塔型、単砲塔型、7TP改、また珍しい所では、試作車だけしか存在しないと考えられていた10TPを保有しているが、どのように入手したのか不明である。他には、ルノーFTやR35なども保有しているが、レストア中である。そのため、豆戦車と軽戦車中心で、機動力を活かした戦闘を行うが、砲力と装甲の不足はいかんともしがたい。本来、ボンプル学園の戦術は、ヤン・タルノフスキの伝統に従った支援用の横隊が前進しながら間断なく射撃を続け、同時に散開状態にあった高速部隊が敵陣に向けて突撃を敢行、徐々に速度を上げながら密集隊形を組み、敵陣に突入する際に最高速かつ最も密集した状態になる、というものであった。そのため、支援用の車輌と、機動力が高く快速で、機銃を搭載した車輌を大量に配備する必要があった。快速部隊は当初安価な豆戦車であったが、戦車の発達に伴い大型化し、軽戦車が中心となった。しかし、支援用車輌は機銃だけでは不十分で、大型砲を搭載した新戦車の早期導入が望まれており、他校に協力要請を行った。結果として、多数の学校から協力を受け入れる回答があり、どこの学校から購入するかで学内で混乱が発生している。

このように、重要な決断を迫られる局面では優柔不断な所があるが、生徒は真面目で勤

勉、おとなしくて礼儀正しく、非常に勉強熱心である。成績も優秀で、一流大学への進学率も高く、意外にもサンダース大学への入学者も多い。ただ、頑固で堅実路線を好むため、いざという時に勝負に出るのを嫌がり、変化を避ける癖がある。結果的に、戦車も戦術も新しい物の導入は先延ばしになっている。食事はゆで卵が好物で、ソースかつ丼とゆで卵のセットが名物料理となっている。また、学校は戦車道よりも音楽の方が有名で、馬術部も世界大会クラスである。

ワッフル学院

神戸港を母校とする学校で、1873年に岩倉使節団がベルギーを公式訪問して以来、ベルギーが大国と互角に伍している姿に当時の日本の進むべき姿を感じた日本人が、神戸にベルギーとの友好協会を設立した。この友好協会が関西圏の企業の支援を受け、ベルギーの文化を学ぶ学校へと発展したのが始まりである。ベルギーは資源が少ない貿易国家で、海外から輸入した原料を半製品や製品に加工して輸出する加工業が発達しており、これらを学ぶために、創設時には繊維産業、鉄鋼、各種工業の技術習得と、加工物の欧州への輸出の窓口となっていた。だが、日本国内の工業が発展し、また欧州情勢の変化とベルギーの混乱に伴い、ベルギーと日本の交流が一時途絶えたことで、学校も自然と縮小されていった。それでも学校の縮小を惜しんだ一部の学校関係者が、ベルギーの料理とビールを中心としたレストランを展開、特にベルギーワッフルとチョコレートは大人気となった

ので、新たに調理科を設置、同時にワッフル学院に改名した。これにより大量の学生の獲得に成功するが、学校の敷地不足から解体予定だったアメリカの特設学園艦をオーバーホールと改装の上、学園艦として購入している。調理科が人気になると料理の材料が不足し、そのたびにベルギーから運び込むのも手間で、製パンやビール醸造やフライドポテト用のジャガイモのために農業科、肉類の確保に畜産科、ムール貝などのために水産科が新設された。また、芸術科も同時に設置され、生徒数の増大に伴い、休止していた戦車道も再開された。

保有車輌（しゃりょう）は、ルノーAMC35に独自の砲塔を搭載したタイプと、ビッカースT-15軽戦車がそれぞれ数輌だけで、他はダイムラー装甲車のみであった。そこで各国との交渉の結果、105榴弾（りゅうだん）砲装備のM4中戦車を複数入手、戦車道大会に参加可能となった。この時M24チャーフィー軽戦車の車体も入手したが、載せる砲塔がないため訓練用に使用されている。

生徒の気質としては、比較的勤勉で保守的な生徒が多いが、例外も多い。ただ、共通して美食家であり、食事に関してアンツィオ校と積極的な交流をしている。

青師団高校

スペインと日本の関係は、16世紀半ばから南蛮貿易や天正遣欧使節団の派遣など古くから交流は行われていた。その縁もあり、スペイン系の学園設立が決定された時も、多くの

地域が名乗りを上げ、特に三重県と宮城県が強く誘致を主張したが、最終的には和歌山下津港が母港となった。但し、母校は和歌山でも、三重県と宮城県の一部が支援を行っており、毎年定期的に学園艦が三重県の志摩半島や宮城県の石巻に立ち寄っている。

戦車道はそれなりに活発で、黒森峰と定期的に交流戦を行っている。保有している戦車は、軽戦車が中心で、I号戦車、II号戦車、CV35、T－26、BT－5で、T－26とBT－5が主力であった。他にも、スペインの国産軽戦車ヴェルデハを保有していたが、どこから入手したのか、H型を中心としたIV号戦車と、雑多な型のIII号戦車、III号突撃砲を入手、戦力を大幅に強化した。軽戦車中心の頃から、優れた操縦手が多いのを活かして、機動突破戦術を好み、とにかく速度を重視している。足を止めるのを好まず、新たに入手したIII号突撃砲も待ち伏せではなく、正面装甲の厚さと主砲攻撃力の高さを活かして、突破戦力の中心に据えているほどであった。時々独創的すぎる作戦が立案され、ノリで実施されることが多く、上手くはまった時は快進撃を行うが、堅実で粘り強い戦いをする相手には弱い。ただ、意外なことにあきらめが悪いというか、切り替えが早いというか、一つの作戦にこだわらず、次の作戦に柔軟に移行して、何としても勝利しようとする粘り強さもある。

生徒の気質としては、陽気で好奇心旺盛で開放的、会話を好み、全体的におしゃれである。学園艦自体はあまり予算がないのに、それをほとんど気にしていない。芸術家気質も多く、美術や芸術、音楽、演劇に関してはアンツィオと双璧をなす活発さで、同様に学園

艦の建築物にもこだわっている。また、美食家でありつつ、会話を楽しむので食事にとても時間をかける上に、マイペースで時間にルーズなので、約束の時間に遅れてくるのは珍しくない。好き嫌いがはっきりしており、その違いから喧嘩（けんか）になることも。ただ、喧嘩をしていたはずなのに、いつのまにか仲良くなっていることは珍しくなく、後まで引っ張らないで、細かいことに拘らない。食事からの繋（つな）がりで、ワッフルやアンツィオとは交流が行われ、三校合同の食のイベントが行われた際は、非常に盛り上がり、定期開催が内外から望まれている。

ヴァイキング水産高校

岩手を母港にしており、校風は真面目（まじめ）で勤勉、平等を愛し、清潔を好む。更には、無口で控えめ、全員が黙って一言も口を利かないのに意思疎通が出来ているとして、他校からは不思議に思われている。実際は最小限の会話は行っているのだが、それだけ連帯感が高いということでもある。周囲との協調性を非常に大事にしており、会話も率直なことを好むが、相手を思いやるために、相手に都合が悪い内容になると口をつぐみがちであり、自然と無口になる事が多いとも。それだけに、他校の生徒と打ち解けるのが得意ではなく、合同パーティーなども壁の花になることが多い。

　また、極めて時間に正確であり、5分前行動どころか15分前行動を当たり前としている。決められた計画通りに動くことを非常に重視しており、戦車道でも事前の作戦を秒刻

みに実行する。その動きは完全に調和がとれており、練度の高さが窺える。そのことから、他校からは、ヴァイキング高校の作戦計画書には、「何号車何分何秒にどこどこで敵発見、敵正面装甲砲身から右○○糎、下○○糎に命中するも敵装甲によって弾かれ、反撃を受けどこどこに被弾、戦闘不能によって白旗」とまで書かれていると、しばしば冗談で言われるほどである。それほど計画通りに動くことを重視しており、作戦通りに行っている時はいいが、作戦外の突発事態に対処するのは大変苦手で、臨機応変に行動する学校にはきわめて相性が悪い。

保有戦車は各国の混成車輛からなっており、ソミュアS35、オチキスH35などのフランス戦車に、I号戦車B型、II号B型、III号N型などのドイツ戦車を保有している。変わり種としては、多砲塔戦車のNbFzも有しているが、使い方に苦慮している模様。それもあって、最近はM24チャーフィー軽戦車の導入を検討している。山岳や雪中での試合にはきわめて強く、また海岸での試合などでは海上からの奇襲攻撃も好んで行う。但し、それに適した戦車がないため、潜水戦車か水上移動可能な戦車の購入も検討している模様。

自然が大好きで、学園艦も甲板上は広大な森林となっており、ぽつんぽつんとその中に建物が見え隠れしているほどである。それらの建物の多くはサマーハウス（シンプルな別荘）で、ヴァイキング校の生徒は夏休みの間、ここでごろごろするのが最大の楽しみである。自然環境を少しでも広くとるために、大部分の施設は艦内にあるのも特徴のひとつで

ある。
　ありとあらゆる材料を使用して、多種多様な種類のパンを作ることでも知られており、時に猛烈にチャレンジングなパンも作られる。スモーガスボードと呼ばれる、テーブルに色々な種類の料理を並べて、これを少しずつ自分で取って食べるのが好まれている。特に沢山の皿を重ねるほどいいとされており、僅かずつ皿に載せて何度もテーブルに取りに行く。また、他の学園艦では金曜日にカレーを食べることが多いが、ヴァイキング校では木曜日がスープの日となっている。特に、伝統的な黄色いえんどう豆のスープ、アートソッパをパンケーキと共に食べるのが好まれている。シーフード好きでも知られ、特にニシンや鮭は特産物である。

伯爵高校

　福島県の相馬港を母港とする学校。ルーマニアから亡命してきた裕福な貴族が、福島の温泉を気に入り、リゾート施設を建設したのが学校の始まりである。福島の地形が山に囲まれ、東側が海に面しているのがルーマニアに似ていたので、この地を選んだという説もある。創設者は公もしくは公爵であったというが、なぜ校名を伯爵としたのかは不明である。当初はリゾート施設であったが、ルーマニアから訪れる人間が増えたので、その子供のための教育施設として学園艦を購入した。地域がらか農業科が人気で、特にとうもろこしの栽培と品種改良が活発である。珍しい学科として魔女学科があり、占い師を目指す女

子には大変人気である。そのせいか、戦車道も占いで作戦を決める事が多く、とんでもない作戦を選択することも珍しくない。主力戦車は、Ⅲ号N型、Ⅳ号G型、Ⅲ号突撃砲G型とドイツ戦車で揃えているが、台数は多くない。他にLT－38やLT－35（R2中戦車）など各種チェコ製の戦車を保有している。珍しい車輌として、マレシャル駆逐戦車がレストア中でもある。

BC自由学園

元々は陸上の登録拠点が岡山県内の津山市のBC高校と、岡山市の自由学園という別々の学校であったが、双方の学園艦が老朽化し、学園艦を新造する際に、行政側の指導によって同じ県の学校という理由で統合され、BC自由学園となった。そのため、学園内は旧BC側と旧自由側の人間で主導権争いが続けられており、極めてまとまりが悪い。本来、両校ともマジノ女学院が、良質なワイン造りの原材料となるブドウを求めて、その栽培のために岡山に作った学校が元となっている。自由学園周辺ではブドウ栽培は成功し、徐々に規模が大きくなっていったので、栽培地域も次第に拡大していった。それと共に工業科、そして家政科に力を入れ、学校の規模も拡大していく。それに対してBC高校周辺地域ではブドウ栽培がうまく行かず、他の道を模索する必要があったので、生徒獲得のために普通科や商業科に力を入れた。行政側としては、主力となっている科が異なるので、一つの学校になればより魅力が増えて生徒も増加すると踏んだのだろうが、結果的には学

内での主導権争いと反目が酷くなるだけの大失敗であった。学園艦内が左舷側が旧自由学園、右舷側が旧BC高校という区分けになっており、学内商店街や住宅も分れているほどである。それでも、統合して時間が経っているので、一般生徒の中には気にしない層も増えているのも確かである。

戦車道では、二つの学校が合わさったために、雑多な戦車を保有しており、主に使用しているのは軽戦車のオチキスH－39、中戦車はソミュアS－35、M4A2シャーマン、パンターG型である。また、超重量級多砲塔戦車であるFCM F1を保有しているが、実戦には参加したことが無いので、非稼働状態にあると考えられている。他にも新たな戦車を入手、レストア中とあるが、詳細は不明。戦法は、BC側はナポレオン以来の練度の高い騎兵部隊（後に快速戦車部隊に発展する）を集中運用し、その速度と突破力で敵を粉砕するという戦術、いわば機動戦を採用していた。一方、自由側は機動戦には優秀な指揮官、生徒たちの高い士気と練度が必要で、また一度目論見が誤った瞬間に全軍壊滅する危険性があるとして、その戦術は採用せず、マジノ同等の防御戦術を得意としていた。だが、どちらの戦術を採用するにしても、もう一方の勢力が足を引っ張るので、保有している戦車がそんなに悪くない割には、結果を出せていない。生徒たちの気質はマジノに近い所があるが、全体的に教育熱心で、特に女子の教育に力を入れているので、良妻賢母を育てる（という触れ込みの）戦車道には大変熱心である。

マジノ女学院

山梨県にあり、フランスでワイン醸造を学んだ学院の創立者が帰国した後、ワイン醸造のために作った農学校が元となっている。特に伝統的な製法である足踏みワインを行うために、わざわざ女子高として設立した。後に学園艦を建造するが、山梨には港がないため静岡県の港を借りている。

この学園艦は特殊で潜水艦型をしているが、これは酒類を海中で貯蔵すると熟成する速度が向上することが知られており、安定して海中熟成を行うために作られた施設を転用したからである。

保有車輛は提携先のフランスから導入しており、ルノーFT、ルノーR35などの軽戦車に、ソミュアS35騎兵戦車（中戦車）、ルノーB1重戦車と比較的バランスの取れた車輛を揃えているが、全体に性能不足なのは否めない。また、本来無線機を搭載していなかった車輛が多く、戦車道連盟から安全対策として無線機を搭載するように命じられたが、そもそも無線手が乗っていない車輛もあり、車輛同士の無線での意思疎通は良くない。

戦術としても、比較的優秀な性能のソミュアS35をまとめて部隊の中心に据えることなく、軽戦車と組み合わせ、小さな戦闘集団単位で行動させるのが基本になっている。これらの戦闘集団を要塞代わりの重戦車の周囲に配置し、そこに接近する敵戦車を迎撃するというものであった。また、出来るだけ戦車による横隊の戦線を維持し、そこを突破させせな

いことに拘り、機動力の高い部隊に戦線を突破されると直ちに混乱するという欠点を持っていた。この戦術から、ある程度砲力のある車輌を集中運用し、機動力を活かして敵陣へと浸透する戦術へ移行を試みているが、練度が足りずにまだ効果的な運用が出来ていない。

学園全体もそうだが、戦車道においてもマナーを非常に重んじ、礼儀正しいことが尊重されている。そのため、勝つためには手段を選ばないような学校に対しては、非常に冷淡である。教育にも熱心だが、生徒の創造性は求められておらず、豊富な知識と、その知識を十分に披露するような会話が重視されているので、戦車道でも作戦の柔軟性に欠けている。また、集団での規律を重視する割には、時間にルーズ気味で個人主義に走りがちという相反する性質を持っていて、規律を守るのには長けているが、集団行動には向いていないという特徴がある。

学校全体としては創造性を求めない教育方針となっているが、例外的に芸術学科や映像学科、被服科の生徒には徹底した創造性が要求され、これらの分野で優れた才能を発揮する生徒も多い。それは料理でも同様で、調理科の料理の繊細さと独創性の高さは有名である。小麦やそば粉を使った料理が得意であり、学食では素材の良さを生かしたジビエや野菜類、豊富なキノコなどを使った料理も多く、食事を目当てにこの学校へとくる生徒もいるほどである。

※3・コアラの森、メイプル高校
コアラの森学園

　鳥取港を母港としている学校で、イギリスから購入した学園艦を使用している。
　保有車輌はマチルダⅡ、M3軽戦車、M3中戦車の色々なタイプを揃えている。それ以外にオーストラリアが独自開発したセンチネル巡航戦車も保有しており、その中でも、25ポンド砲を二門搭載した試験用車輌を保有していることでも有名である。連装砲が実戦で有効かどうかは何とも言えないが、その特異な形状からファンも多いものの、運用に苦慮している模様でめったに見掛けない。最近はM4シャーマン中戦車の購入を検討しているとの噂もあり、イギリス戦車からアメリカ戦車中心にシフトするのではないかとも言われている。それもあってか、過去には色々と協力関係にあった聖グロリアーナ女学院との仲は悪化しており、むしろサンダース高校に接近しているとか。変わったところでは、一部のイタリア戦車も保有していたが、近年アンツィオ高校に売却したとも言われている。
　校風は比較的開放的でフレンドリー、どこかのんびりした所がありつつも、効率主義である。すぐに友人になりたがり、相手と対等で平等でありたがる。そのため、上下関係が緩く、上級生と下級生の間でも対等に話そうとするので、時々新入生が苦労している姿が見られる。戦車道でも、隊長と部下という関係よりも対等な仲間同士であろうとして、全員が一斉に行動することが多い。それもあってか、戦法は勇猛果敢で、立ち塞がる全てを蹂躙して前進するのをモットーとしている。全体の士気も高いので、上手く勢いに乗った

時は極めて高い突破力を有している。生徒たちは精強で粘り強いが、突破力が失われた時は意外と脆い。また、損害を顧みずに突進するために、より強力な戦力と当たった際は、一方的に殲滅されることもある。考える前にまず試してみるのが好きで、失敗しても色々と手法を変えて成功するまで試すような柔軟さがある。その気質によって、風変わりな作戦を採用することも珍しくない。これもうまくはまると良い試合をすることがあるが、明らかに格下の相手に大敗北することも。特に乾燥した砂漠地域での戦闘に優れており、そのような地形での試合になると、同じく砂漠に慣れているはずのアンツィオ高校よりも強いことも。

また、何かあるたびにバーベキューをすることでも知られており、サンダースの生徒たちとはバーベキュー友達である。但し、食に関しては必ず独特な風味のあるベジマイトが出てくるため、苦手な人は極力逃げようとする。だが、特産のカレーは大人気で、学食では日替わりカレーが3種類あるほど。元々のメニューと合わせると1か月毎日別なカレーを食べることができる。また、カニと白イカも特産で、これらを使ったカレーもある。時間にかなりルーズなので、過去には危うく開始時間に間に合わないで失格となりかけたこともある。

メイプル高校

苫小牧港を母港とする南北海道の学校。1877年に永野万蔵がカナダに移住して以

来、日本とカナダは交流が深く、特にカナダから訪れた使節団は、西洋思想を日本の教育に持ち込み、いくつもの学校設立に協力している。日本からカナダへの移民も多く、1889年にバンクーバーに領事館を設置、カナダ側も1929年に公使館を東京に設置して、様々な分野において相互に緊密な協力関係を築いて行った。その中で気候風土がカナダに似ている北海道はカナダ側も注目し、農業、林業、文化的な面での交流を進め、特に漁場が被っている北洋での漁業における相互協力体制の構築から、苫小牧に教育施設を設立した。それがメイプル高校で、南北海道地域（北海道は北と南の二地域制度を採用）の担当となっている。その際に、イギリスで未成状態だった学園艦を購入して、空いていた場所に大量の森林を設置、全学園艦の中でも有数の自然が多い艦となっている。戦車道は活発で、機動戦術を得意としており、使用車輛はラム巡航戦車、グリズリー巡航戦車がその主力となっている。他にもバレンタイン歩兵戦車や雑多な軽戦車などを保有しているが、それらはほとんど使われていない模様。

※4・ツェッペリン飛行船

飛行船は、船体に浮揚用のガスを詰めて、船体をガス圧で膨らませる軟式と、フレームに外皮を貼って、その中にガスを詰めた気嚢を入れる硬式がある。20世紀初頭にドイツでツェッペリン伯爵が作った硬式飛行船が有名となったので、その後は硬式飛行船をツェッペリンと呼ぶようになった。飛行船は事故の影響や運用上の問題などから一時廃れたが、

近年は浮力を気嚢で、高出力のエンジンで揚力を発生させるハイブリッド飛行船が再注目されている。

※5・ティーガーⅡ

ティーガーⅠは極めて強力な重戦車であったが、傾斜装甲を使用することで高い機動力と防御力を兼ね備えたT34と遭遇した事は、その後のドイツ戦車の設計思想にも大きく影響を与えた。まず傾斜装甲を採用した新型主力戦車として、Ⅴ号中戦車パンターが開発される。また、ティーガーⅠに長砲身のラインメタル社の新型74口径88ミリ砲Ｆ１ａＫ41の搭載が可能か検討されたが、無理があったため、ポルシェ社とヘンシェル社は新型戦車の開発に着手した。しかし、砲自体のトラブルから、クルップ社が新たに開発した71口径88ミリ砲に変更される。両社とも傾斜装甲を取り入れ、駆動方式は、ポルシェ社はハイブリッド式を、ヘンシェル社はオーソドックスなガソリンエンジンを採用した。結果、ヘンシェル社案が採用され、ポルシェ社案は中止となったが、既にポルシェ社向けの砲塔が発注済みで、後にヘンシェル社の車体に組み合わされて、初期量産型の50輛に使用された。エンジンは、ティーガーⅠやパンターと同じ物を使用したが、整備や補給の面からは効果的であったが、70トン近くもある車輛(しゃりょう)を動かすのには非力で、機動性を大きく損なう事になった。問題は多かったが、砲塔前面180ミリ、50度の傾斜が付いた車体前面の150ミリ装甲を撃破可能な車輛は、他国に存在していなかった。だが、燃費の悪さに、出力不

足や過大な重量による機動性の悪さ、故障や路面崩壊などで放棄されることが多かった。防御戦闘では圧倒的な威力を発揮するので、戦車道においては使い方次第で優劣が分れる車輌である。

※6・秋の日のヴィオロンの

フランスの詩人ヴェルレーヌの「Chanson d'automne（秋の歌）」と呼ばれる詩の一節で、日本では文学者で翻訳家の上田敏が詩集「海潮音」で、海外の詩の翻訳として紹介している。その際の翻訳が、「秋の日のギオロンのためいきの　身にしみてひたぶるにうら悲し」である。また、ノルマンディー上陸作戦の際に、BBC放送がこの節の前半分を放送すると、これはヨーロッパのレジスタンスに対して、「連合軍の上陸が近い。準備せよ」と知らせる暗号であった。

英国文化に親しんでいるダージリンは、これを発信する事で、事前に根回しをしていた各校に、援軍の送り先と試合の内容を指定している。

※7・ポモルニク型エアクッション揚陸艦

ロシアのホバークラフト型（エアクッション）の揚陸艦で、このタイプとしては世界最大である。

最高速度は63ノットで、55ノットの巡航速度で航続距離は540キロとかなり短い。1

50トンの積載量を持ち、プラウダ高校は多少重量超過したが、無理やり戦車四輌を搭載して苫小牧まで移動した。

※8・K2型蒸気機関車改

川崎車輌が製造した日本陸軍鉄道連隊用の蒸気機関車。線路幅が狭く、軽量なレールで素早く設置できる野戦軽便鉄道向けの機関車で、速度は出ないが牽引力に優れている。軌間（レール間隔）は600ミリだが、一部の車輌は日本で一般的だった1067ミリに改造されている。

※9・シマ

フィンランドの、バップと呼ばれる5月1日の春祭りに飲まれるレモン風味の発酵飲料で、沸騰させた水にブラウンシュガー、砂糖、レモンを入れて、イーストなどを入れて発酵させ、漉した物に砂糖と干しブドウを入れて冷暗所にしばらく置いておく。干しブドウが浮いてきたら完成。

※10・M4A1、シャーマン・ファイアフライM4A1

M4シャーマンは色々なタイプが生産されたが、鋳造車体と溶接車体があった。制式採用時に、鋳造車体がM4、溶接車体がM4A1として同時に生産が行われている。溶接車体の方がやや防御力が高く、形状も曲線が多用されていたが、車内は狭くなった。初期型は37・5口径75ミリ砲を備えていたが、威力不足からより強力な砲が要求され、3インチM1918高射砲を元に改良した52口径76ミリ戦車砲M1が搭載された。この砲は、タングステンを芯にしたHVAP（高速徹甲弾）を使用した場合、500メートルで139ミリ、1000メートルで127ミリの貫徹力を持っていたので、対戦車戦にも十分な威力を持つと考えられていた。弾薬庫が炎上しやすかったので、弾薬庫を車体左右から床に降ろし、更には弾薬庫全体をグリセリン溶液の不凍液で満たした湿式弾薬庫を装備した、M4A1（76）Wへと改良されている。後期型では主砲にマズルブレーキ（主砲の先に取り付けられ、主砲の反動を低減させる装置）が取り付けられ、装填手用のハッチが一枚開きとなるが、サンダース校の車輛はマズルブレーキ無し、装填手用ハッチが二枚開きの前期型である。なお、イギリスではシャーマンⅡと呼ばれた。

シャーマン・ファイアフライ

イギリスでは、多くの車輛の主砲として使用していた2ポンド砲や6ポンド砲では、威力不足として、新しい対戦車砲の開発を急ピッチで進め、1941年末には17ポンド砲が完成、翌年から量産が開始された。この砲を戦車に搭載する計画が立てられたが、従来の

イギリス戦車は国内での鉄道輸送のために車幅制限があり、ターレットリングが小さかったので搭載不可能であった。そこでアメリカから供与されたシャーマン戦車に搭載する計画が立てられた。イギリス軍需省は、クロムウェル巡航戦車の車体に、17ポンド砲を載せる新車輌（後のチャレンジャー巡航戦車）の開発を進めており、この計画を却下する。しかし、クロムウェルの性能不足から、シャーマン戦車に17ポンド砲を搭載する計画が推進され、試験結果も良好で採用が決定、シャーマン・ファイアフライと命名された。当初、M4A4戦車を改修したVC型が作られたが、その時にはアメリカでのA4型の生産は終了しており、M4やM4A1がベース車輌に使用された。M4を改修したタイプがIC、M4A1がIICと命名されている。一方アメリカ側でも、M4A3を元に17ポンド砲を搭載した試験車輌が完成、試験が行われたが76ミリ砲搭載型の開発目途が立ったのもあって、キャンセルとなっている。構造的には基本的な部分はM4シャーマン戦車と同一で、機動力や防御力はほぼ同一である。但し、17ポンド砲の後座（発射によって砲身が後退すること）が大きいので砲塔後部を切欠き、そこに砲のカウンターウェイト代わりに装甲板で作った箱を搭載、その中に無線機を搭載した。また大型装填手用ハッチを設置、直接照準器をイギリス製に交換するなど、イギリス仕様に変更がされている。

※11・CV33
アンツィオ高校の主力戦車の一つ。

イギリスで生産された豆戦車のカーデン・ロイドMk・Ⅳを輸入したイタリアは、ライセンス生産権も取得し、その発展型として作られたのがフィアット＝アンサルドCV33である。CVは、CarroVeloce＝快速戦車の略で、日本語に訳すと33年式快速戦車となる。軽自動車ほどのサイズに5～15ミリと小銃弾を防げる程度の装甲を施し、8ミリ機関銃2丁を装備した貧弱な性能であったが、その安価さと簡易さから、イタリアが保有する装甲車輌の大部分を占めていた。

※12・アウァリクム包囲戦、河井継之助のガトリング砲、イタリア救援のドイツ・アフリカ軍団、第一次上田合戦

アウァリクム包囲戦

紀元前58年から8年に渡るユリウス・カエサルのガリア征服戦争において、紀元前52年にウェルキンゲトリクスが反ローマのガリア人をまとめ上げて、蜂起した。カエサルは各所でウェルキンゲトリクスの軍勢を破り、それに対してガリア側は焦土戦術で対抗する。天然の要害であるアウァリクムはローマ軍が攻略するのは不可能と判断し、焦土戦術から逃れていたが、そこをカエサルは包囲、食糧不足に悩みつつも攻城兵器を作り上げ、嵐に紛れて攻略に成功する。これによって、食糧不足から解放されたローマ軍は、ゲルゴウィアへと進軍するが、ここでカエサルは自身の数少ない敗北を喫する事となる。

河井継之助のガトリング砲

河井継之助は幕末の越後長岡藩の家臣で、群奉行に就任して藩政改革と兵制改革を行った。フランス式近代軍隊を設立し、戊辰戦争では家老として幕府側、新政府側双方に対して中立を宣言する。しかし、新政府側は長岡藩を幕府側と決め付け、北越戦争が勃発する。長岡藩はアームストロング砲、ガトリング砲に加え、エンフィールド銃、スナイドル銃２０００丁の近代兵器を保有しており、新政府側も一度奪った榎峠や長岡城を奪い返されるほど苦戦した。更には新発田藩が新政府側に寝返り、長岡城は再陥落する。河井も長岡城を奪取する戦いで負傷していたが、そこから破傷風を併発し、死去した。河井自身がガトリング砲を操り、新政府軍を悩ませた記録が残っているが、戦況を変えるには至っていない。

イタリア救援のドイツ・アフリカ軍団

１９４０年9月にイタリア軍は、イギリス領エジプトに向けてイタリア第10軍8万人を侵攻させるが、機械化装備が不十分で補給が滞り、機械化された3万のイギリス軍によって包囲殲滅され、最終的に捕虜13万人を出した。イタリアはドイツに援軍要請を行い、エルヴィン・ロンメル率いるドイツ・アフリカ軍団が編成され、リビアに派遣されている。アフリカ軍団とイギリス軍は一進一退の戦いを行うが、最終的にはドイツ側の補給線が崩壊し、43年5月に北アフリカ戦線は終結した。

第一次上田合戦

織田信長亡き後、織田領となっていた甲斐、信濃、上野の土地を巡って上杉、北条、徳川勢が争っていた。調略の結果、真田勢は北条から徳川に寝返る。その後、徳川・北条間で和睦が成立した際に、真田勢が保有していた沼田と北条氏が押さえていた佐久の交換が条件の一つとなった。しかし、真田側は沼田は徳川の領地ではないので引き渡しを拒否、1585年に徳川家康は真田攻めを決意、7～8000の軍勢を送った。これに対して、真田側は約2000の戦力で上田城とその周辺の支城に籠城し、奮戦によって徳川方を撤退させるのに成功している。これによって、徳川側は真田側の本格的な引き込みを図り、徳川家重臣の本多忠勝の娘小松を真田信之へと嫁がせている。

※13・一式とか三式

日本の一式中戦車チへと三式中戦車チヌの事。

一式中戦車は九七式中戦車新砲塔と同じ47ミリ砲を装備し、より機動力と防御力を向上させた車輌で、三式中戦車は一式中戦車の車体を改良、九〇式野砲を改良した75ミリ砲を主砲として搭載した。三式中戦車は大洗女子学園のアリクイさんチームが使用している。

※14・行進間射撃、浸透突破、優勢火力ドクトリン、二重包囲、突撃、パスタ

行進間射撃

戦車などが走行中に射撃を行う事。車体が動き、また揺れる事で命中させるのは難しいが、敵弾に当たる可能性も低くなる。イギリスでは戦車を陸上戦艦として誕生させ、戦艦と同じような運用を考えていた。これは、戦艦に相当する大型戦車が砲を撃ちながら動き回り、身動きを取れなくさせる事で相手の攻撃を阻止し、駆逐艦や巡洋艦に相当する高速車輌が肉薄して敵を仕留めるというものであった。戦車の発達によってこの戦術は変化して行ったが、聖グロリアーナ女学院の戦車道では基本的な戦術として扱われている。

浸透突破

ドイツ軍の戦術として、事前に大規模な砲撃を行い、敵が混乱している間に有力拠点を迂回して、防御の隙間を通過、後方の司令部や補給拠点などの弱点を破壊し、士気を喪失させるやり方。高校戦車道のフラッグ戦では極めて有利な戦い方で、場合によっては一瞬で試合を終了させるのが可能だが、殲滅戦においてはメリットは少ない。これが、西住流が高校向けと言われる所以の一つでもあろうか。

優勢火力ドクトリン

ドクトリンは、軍事用語としては戦闘教義の事。部隊の基本的な運用思想を指し、アメリカでは、通信や情報に重きを置いて、事前に入念に相手の戦力を調べ上げ、大量の物資

を輸送し、諸兵科が密接な通信で連携し、常に相手に大きな火力をぶつけるのが基本とされている。残念ながら同数の戦力がぶつかるのが基本の高校戦車道では、実力を発揮する機会が限られる。それでも、通信の有機的な利用と、局所的な戦力集中による各個撃破は、使い方次第では非常に有効である。

二重包囲

敵陣を浸透突破し、可能ならば目標を左右から包囲し、その外側にもう一つ包囲線を構築する、ソ連が得意とする戦術。但し、膨大な戦力が必要であり、戦車道において行うのはかなり難しい。

突撃

文字通りである。知波単学園の基本的戦術であり、人生でもある。

パスタ

戦いよりも美食が優先するのは、アンツィオ高校の基本ドクトリンである。人生を謳歌せずに何の戦車道か、と言ったとか言わなかったとか。

要するに各校とも自分たちの得意分野を語っているが、この時黒板に板書している河嶋は、どうやら半分以上理解出来なかった模様で、「冬将軍」「突撃」「パスタ」のみ書か

れていた。

※15・作戦名

三種のチーズピザ作戦

イタリアではクワトロフォルマッジ＝四つのチーズという名のピッツァがある。店ごとによって色々なチーズを使い分け、その上にハチミツをかけて食べるが、某映画館のカフェではこれを元に一つ減らして三種のチーズピザ作戦を実施したとか。食べてみたかった。

ビーフストロガノフ作戦

ロシアで筆者が聞かされた話では、サンクトペテルブルクの大貴族アレクサンドル・ストロガノフは若い頃はプレイボーイで、ステーキが大好物であったが、老齢になって食べられなくなったのを嘆くと、お抱えの料理人が牛肉を細かく切って煮込んだ料理を作ったのが始まりとなっていた。

発祥には諸説ある模様だが、日本では代表的なロシア料理の一つとして知られている。また、カチューシャの言う通り、ドミグラスソースを使用したのが日本では一般的だが、ペテルブルクで食べたのは白いビーフストロガノフであった。

フィッシュ&チップス&ビネガー作戦

白身魚のフライにフライドポテトはイギリスの伝統的ファストフードである。これに酢と塩を掛けるのが伝統的な食べ方。かつては新聞紙で包んで提供するのが一般的であり、どこの新聞で包まれているのが美味(おい)しいかという説もあったとか無かったとか。

グリューワインとアイスバイン作戦

ドイツではクリスマスシーズンに、スパイスを入れたホットワインを飲むが、アルコールを抜いたソフトドリンクも作られている。アイスバインはベルリンなどドイツ北東部でよく食べられる、豚すね肉の塩漬けを野菜と共に煮込んだ料理である。日本では代表的なドイツ料理として知られているが、ドイツ南部などでは観光客向けの店にしかない事もあるので要注意。

フライドチキンステーキwithグレービーソース作戦

てっきり鳥料理だと思っていたのだが、フライドチキンの衣を牛肉に付けて焼いたアメリカの伝統的家庭料理。それに肉汁から作られたソースをかけた物。

あんこう・干し芋・ハマグリ作戦

言わずと知れた大洗(おおあらい)の特産品。角谷(かどたに)会長の好物を並べた可能性もある。

スキヤキ作戦

上を向いて突撃しよう。

※16・ニュルンベルクのマイスタージンガー

リヒャルト・ワーグナーの音楽劇で、三幕からなり、第一幕80分、第二幕60分、第三幕120分である。16世紀中ごろのドイツ、ニュルンベルクにやってきた騎士ヴァルターが、金細工師ポーグナーの娘エーファと出会い、お互いに一目ぼれする。ポーグナーは自分の財産と娘を歌合戦で優勝した者に贈ると宣言、ヴァルターは急いで歌を学び、参加する。だが、エーファとの結婚を狙って(ねら)いた書記官ベックメッサーが歌合戦の試験官として、ヴァルターの歌を失格にした。だが、その歌を聞いた靴屋の親方ザックスは、新しい可能性を感じとり、自分もエーファを狙っていたのを諦めて(あきら)、ヴァルターを支援する。ザックスの支援でヴァルターは歌を完成させるが、ベックメッサーがこの歌をザックス作と勘違いし、貰い(もら)受ける。新たな歌合戦でベックメッサーはこの歌を歌うが、大失敗に終わる。ザックスがヴァルターを呼び出し、真の作者として紹介、高らかに歌い上げて見事優勝を勝ち取り、エーファとの結婚にこぎつける。ポーグナーがヴァルターをマイスター組合に受け入れようとするが、ヴァルターは一度はこれを拒否する。だが、ザックスが芸術を重んじる様に説き伏せ、ヴァルターは受け入れた。

長く続く伝統の世界に、革新の機運を持つ人間を受け入れようとする題材の作品をまほが出したのは、西住流におけるまほとみほの立場が、一瞬頭をよぎったからなのかもしれない。

※17・A41センチュリオン

大学選抜の隊長である島田愛里寿の乗車。

イギリスでは軽装甲高速の巡航戦車と、重装甲低速の歩兵戦車の二本柱であったが、戦車の急速な進歩に伴い、戦車は重装甲重武装でありつつも機動力が必要と分かった。今まではイギリス国内での鉄道輸送を考慮して、重量と車幅制限があったが、それでは必要な性能を満たせないとして、それらを撤廃した、より大型の重巡航戦車としてＡ41が開発された。チャーチルの優れた変速操向装置に、航空機用のマーリンエンジンを改良したミーティアエンジンを組み合わせ、高速性能は劣るが地形把握性と整備に優れたホルストマン式サスペンションを搭載した。こうしたカタログスペックよりも、不整地での活動を重視した足回りによって、優れた機動性を発揮できた。また、車体の大型化に伴い余裕があったので、後に１０５ミリ砲を搭載するような改造も容易となっている。

当初は様々な武装を組み合わせ、砲塔形状も多少異なる試作型が20輌作られ、これらの試作をテストした結果、作られたのが量産型のＭｋ．Ⅰである。高校戦車道では、試作型とＭｋ．Ⅰのみが使用可能となっているが、１００輌分の砲塔からレストアが行われ、少

ないとはいえ多少流通もしている。

※18・魚鱗の陣、突撃隊形、逆V字隊形、横陣

魚鱗の陣

幾つかの部隊を△になるように配置し、最後尾の中央に全体指揮官を置く陣形。正面突破に強い。

突撃隊形・逆V字隊形

戦車小隊の隊形の一つで、逆V字型に戦車を配置して正面や側面への攻撃力を維持したまま、突撃するのに向いている。

横陣

部隊を横一列に並べた陣形。

※19・二〇三高地

中国遼東半島の最西部にある、天然の良港である旅順近くの標高203メートルの丘陵。日露戦争において激戦区となったが、旅順要塞の主要防御網からは離れており、ロシア側もそれほど本格的に防衛は行っていなかった。だが、日本海軍側からの旅順港にいる

ロシア海軍攻撃の観測点として、他にもっと適した地点があるにもかかわらず、防備が薄いと判断して攻撃が要請され、一進一退の戦いが行われて兵力を大幅に消耗する事になった。5000人の死者と1万人以上の負傷者を出して奪取に成功するが、旅順港内のロシア艦艇はそれまでの戦いでほぼ戦力を喪失していた。最終的に旅順要塞攻略では両軍ともそれぞれ15000人以上の死者を出し、数万人の負傷者を出している。

※20・旅順開城なんとやら

恐らく、過去に文部省唱歌だった「水師営の会見」ではないかと思われる。二〇三高地があった旅順攻囲戦の後、日露双方の司令官が水師営で双方の敢闘を称えあった様子を歌っている。

※21・ゼーロウ高地、飯盛山、天王山

ゼーロウ高地

ドイツ東部のポーランド国境との間に流れるオーデル川、その河畔の都市キュストリンからオーデル川西岸の沼地地域の端にある都市ゼーロウの辺りは、なだらかな平地の様だが高い所では標高50メートルほどになっていた。ここが、オーデル川を渡河する軍勢を見渡すのに適しており、防衛線が築かれていた。ドイツ軍はここを10万の軍勢で守っており、それに10倍する戦力のソ連軍に攻められたが、2日間守り切って、多大な損害をソ連

に与えている。だが、結果的には多勢に無勢、防衛部隊は後退し、ベルリンも陥落した。

飯盛山

福島県会津若松市の東部にある標高314メートルの山。戊辰戦争の際に、藩士子弟で作られた白虎隊が敗走し、自刃した場所。

天王山

京都にある山で、昔は摂津国と山城国の国境が通っていた。昔から交通の要衝であり、何度も争奪戦が行われたが、特に1582年に羽柴秀吉と明智光秀が争った山崎の戦いは、後に天王山を争奪する戦いが勝負の帰趨を決したと誤解されるようになり、天王山の戦いとも呼ばれるようになった。だが、実際は天王山自体での戦いはほとんど行われておらず、さほど戦局にも影響はなかったと言われている。

※22・成功は『大胆不敵』の子供

政治家であり小説家でもあった、イギリスのベンジャミン・ディズレーリの言葉。

※23・M4A2シャーマン

M4シャーマンの中で、溶接車体に民間トラック用の直列6気筒ディーゼルエンジンを

2基搭載したタイプ。アメリカ陸軍はガソリンエンジンに統一されていたので、アメリカ海兵隊や、イギリス、自由フランス、ソ連などにレンドリースされた。

※24・インディゲート事件

2005年、インディアナポリス・モータースピードウェイで行われたF1GP第9戦で、エントリーしていた20台のうち、14台がフォーメーションラップで自主的にリタイヤした事件。

※25・ヴェスヴィオ山、雲仙普賢岳、浅間山

ヴェスヴィオ山はイタリア南部のナポリ湾岸にある火山で、古代ローマのポンペイを埋め尽くしたので知られている。また、この火山への登山電車のためのCMソングが「フニクリ・フニクラ」だが、登山電車自体は1944年の噴火で破壊された。

雲仙普賢岳は長崎県島原半島中央部の火山で、普賢岳、国見岳、妙見岳の三峰、野岳、九千部岳、矢岳、高岩山、絹笠山の五岳の総称を雲仙岳と呼ぶ。有史以前から噴火が続き、1792年には普賢岳の噴火と地震が発生、次いで眉山の山体崩壊が発生して、大量の土砂が有明海へとなだれ込み、大津波が発生して、死者行方不明者15000人の「島原大変肥後迷惑」と呼ばれる大災害が発生している。

浅間山は長野と群馬の県境にある活発な火山で、有史以前から噴火を繰り返し、特に1

783年の大噴火は、天明噴火と呼ばれ、一時期は天明の飢饉の原因だったと考えられていたが、この頃は世界的に大噴火が続き、それらが北半球に冷害をもたらした模様。

※26・ブルムくまっ

Ⅳ号戦車の車台をもとに、15センチ43式突撃榴弾砲を搭載した支援用自走砲、4号突撃戦車ブルムベアの事。ブルムベアは灰色熊の意味。

※27・シュトルムティーガー

ティーガーIの車体をもとに、爆雷投射機を改良した38センチロケット臼砲を搭載した自走臼砲。修理に戻されたティーガーIから砲塔を撤去し、エンジンや足回りを交換、箱型の戦闘室を載せている。重量350キロ前後、全長1・5メートルのロケット弾を5650メートル先まで飛ばす事が可能だった。

※28・島津の退き口

1600年に行われた関ヶ原の戦いにおいて、西軍に属した島津義弘の部隊約1500は、戦線が崩壊後、敵中突破をして徳川家康の本陣に向かうそぶりを見せつつ、伊勢街道から薩摩まで帰還した。この戦法が成功したのは、東軍が勝利が確定して無理を避けたの

と、捨てがまりと呼ばれる小部隊が全滅するまで足止めに残り続けるたためであろう。一族や重臣も討ち死にし、結果的に薩摩へ帰還したのは80名程度だったという。だが、追手の松平忠吉や井伊直政も重傷を負い、一説には直政はこの傷が元で亡くなったという。

※29・カール・ヴォルフ

フルネームはカール・フリードリヒ・オットー・ヴォルフで、ドイツ親衛隊大将。１９４３年２月からイタリア地域の親衛隊及び警察高級指導者に任命され、同年７月には同最高指導者に昇進している。45年には実質的なイタリア防衛の最高司令官であった。

※30・カール自走臼砲

１９３７年にドイツでは、要塞攻略用の超巨大な榴弾砲の開発計画が立案されたが、分解して牽引するのでは輸送と設置には手間がかかり過ぎるとして、自走砲化が望まれた。各種試験を行った結果、超巨大な砲を自走砲化するのは可能と判断され、試作車一輌に次いで１９４０年には六輌の量産が決定した。これがカール自走臼砲である。この六輌には聖書や神話から名前が取られ、アダム、エーファ、トール、オーディン、ロキ、ツィウと命名されている。アダムとエーファは他の車輌が北欧神話に因んでいるのに、この二輌だけ違うとして、後にバルドル、ヴォータンに改名されている。だが２トンもある砲弾が、

僅か4000メートル程度しか飛ばないのは危険であり、後に口径を伸ばした54センチ砲が作られ、砲弾重量は1250キロに減ったが、射程は10000メートルまで伸びている。但し、扱うために21名の人員が必要で、更には弾薬輸送と装填用にⅣ号戦車を改良した車輌が必要だった。また、操作するための人員が外に出ているので、オープントップとして戦車道に参加するのは難しいと考えられていた。だが、文科省の肝いりで操縦席を拡大して操縦と砲手席を作り、更には車体内部に砲弾、自動装填装置を搭載する改造が行われ、乗員が全て装甲に覆われているのでオープントップではないとして、文科省が日本戦車道連盟に戦車道ルールに適合していると認めさせた。ただ、これで改造オープントップ車の参加が増えるかと言えば、この文科省のごり押しに反対する者は多く、むしろ審査が厳格になり、難しくなるのではないかと考えられている。

※31・カルロベローチェ

ＣＶ33の事。

※32・ＨＥＡＴ弾

Ｈｉｇｈ‐Ｅｘｐｌｏｓｉｖｅ Ａｎｔｉ‐Ｔａｎｋ弾の略で、対戦車榴弾とも。運動エネルギーを利用する徹甲弾に対し、すり鉢状に成型した炸薬を爆発させると、その衝撃波

はすり鉢の中心軸に集中し、すり鉢底部の反対側に強い穿孔力が発生するというモンロー効果を利用した、化学エネルギー弾。すり鉢のくぼみに金属の円錐をはめ込むと穿孔力が強化されるノイマン効果と合わせて、モンロー／ノイマン効果とも。当然ながら戦車道で使用されているのは、実際のHEAT弾ではなく、それ相当の攻撃力があると判定される榴弾である。また、Ⅳ号戦車などに取り付けられているシュルツェンは、モンロー効果が発揮される距離は数十センチなので、HEAT弾を防ぐ効果もある。

※33・BT-7

BTはロシア語のБыстроходный танк＝快速戦車の略で、クリスティー戦車を購入し、それを改造したBT-2が最初の量産型として作られた。その後、改良型のBT-3、双砲塔型のBT-4が試作され、主砲を37ミリ砲から45ミリ砲に、それに伴って砲塔を拡大したBT-5が作られた。更に装甲とエンジンを強化、溶接構造になったのがBT-7である。5000輌ほど生産され、エンジンをガソリンからディーゼルにしたのがBT-7Mで、こちらは700輌ほど生産された。13・8トンの車体に最大装甲は20〜22ミリで、450馬力のV型12気筒エンジンによって装軌状態で時速52キロ、装輪状態で時速72キロを発揮可能であった。だが、装甲が薄く、戦車の発達に従ってすぐに陳腐化した。また、履帯が滑り止め構造になっていないので、雪中での行動は苦手であった。継続高校のBT-42は、この車輌を改造したものである。

※34・クリスティー式戦車

ジョン・W・クリスティーが設計し、1928年に製造されたクリスティーM1928は、クリスティー式サスペンションを装備した無砲塔の車輌であった。このサスペンションは、縦置きされた長いスプリングに繋（つな）がれたアームに大型転輪を装着し、上部転輪が無いためにスプリングのストロークを大きく出来るため、当時としては画期的な高速走行が可能だった。更に、航空機用エンジンを改良した馬力の大きなエンジンを搭載した事で、更に性能が向上した。アメリカも多少興味を持ち、改良して砲塔を搭載してT3中戦車として少数採用している。それ以上に妙味を示したのが、ソ連とイギリスとポーランドで、ソ連は実際の車輌（しゃりょう）と製造権を購入し、BTシリーズ、そしてT34シリーズなどの参考とした。イギリスも購入しようとしてアメリカからの妨害を受けたが、何とか入手、クルセイダー巡航戦車などの参考となった。ポーランドは結局購入せず、その分はアメリカ陸軍が購入している。

※35・運命は浮気者

恐らく、シェイクスピアのロミオとジュリエットから。

※36・アレシア攻防戦、セバストポリ要塞（ようさい）、大阪冬の陣、五稜郭（ごりょうかく）

アレシア攻防戦

※12のアウァリクムの戦いに勝利したカエサルだが、次のゲルゴウィアで敗北する。一旦撤退したカエサルは、ゲルマン人騎兵を傭兵として雇い入れ、ゲルマン騎兵の貧弱な馬をローマの屈強な馬と交換してまで即戦力化を図った。その甲斐もあって、追撃して来たウェルキンゲトリクスの軍勢は撃退され、アレシアへと逃亡した。それをローマ軍12個軍団と傭兵などを合わせて6万の軍勢で、アレシアを包囲した。総延長18キロにも及ぶ高さ4メートルの土塁で都市を包囲し、更に二重の壕で囲み、多数の逆茂木を植えるなど徹底した包囲網を、僅か三週間で作っている。更に外からのガリアの援軍に備え、更に21キロにも及ぶ土塁を構築し、両方の土塁の間に6万の兵力が30日食べられるだけの食料を運び込んでいる。26万近くの援軍が到着するが、この土塁によってなすすべなく、またアレシアも食料が尽きかけ、外と中からの同時攻撃を仕掛けるが、カエサルが自ら出撃して敵を引き付け、アレシア側の脱出作戦を粉砕する。これにより、援軍も士気喪失して後退した。結果、ウェルキンゲトリクスはローマに降伏し、全ガリアはカエサルに平定された。

セバストポリ要塞

黒海北岸にあるクリミア半島、その南西部の都市がセバストポリである。昔から港湾都市として発達しており、ロシアの黒海艦隊もここが拠点で、後に要塞化された。クリミア半島に進むのも幅僅か7キロしかないペレコープ地峡しか通行できず、半島自体が堅固な

要塞であった。ここを突破しても、セバストポリ要塞には戦艦の砲塔を陸揚げした砲台や、多数のトーチカがあり、非常に堅固だった。そのため、ドイツがここを攻略した際は、80センチ列車砲グスタフやカール自走臼砲など多数の火砲を投入し、徹底的に砲撃して辛うじて攻略している。

大阪冬の陣

1614年に大阪城に籠城する豊臣方と、幕府軍との間に起きた戦闘で、真田(さなだ)丸に籠(こも)った真田信繁(のぶしげ)が奮戦したのは説明するまでもない。

五稜郭(ごりょうかく)

戊辰(ぼしん)戦争の最後の戦いで、旧幕府軍は蝦夷(えぞ)地を平定し箱館（現函館(はこだて)）に新たな政権を樹立したが、新政府側も直ちに軍隊を送り、乙部に上陸した1500名は箱館へと進軍する。それに対して、旧幕府軍も迎撃を行い、二股口の戦いでは土方歳三指揮の300名が奮戦、16時間に渡る銃撃戦の末、新政府軍の撃退に成功している。だが、別な方面で突破され、五稜郭へと撤退することになった。その後函館市街での戦闘となり、各所で旧幕府軍は分断され、土方歳三も狙撃(そげき)によって死亡、五稜郭への艦砲射撃も行われ、旧幕府軍は降伏した。

※37・ウィーン、レニングラード、上田合戦、熊本城包囲戦

ウィーン

ウィーンは、1529年にオスマン帝国のスレイマン1世による包囲と、1683年にカラ・ムスタファ・パシャによる包囲を受けたが、どちらの包囲戦も失敗し撤退している。

レニングラード

ドイツ軍は、レニングラード（現サンクトペテルブルク）を1941年9月8日から44年1月18日まで、約900日包囲したが、多数の死者を出しつつも占領する事が出来なかった。

上田合戦

※12で第一次の説明があるが、1600年に第二次が発生している。徳川(とくがわ)秀忠率いる38000の軍勢が、関ヶ原の戦いに参戦するために中山道を進んだが、真田昌幸の挑発に引っ掛かり、上田城を攻め、よけいな時間を食ったのと悪天候によって関ヶ原の戦いには間に合わなかった。

熊本城包囲戦

1877年に、西郷隆盛を総指揮官として九州南部の士族が反乱を起こした西南戦争で、西郷側14000は、官軍4000が籠る熊本城を包囲した。しかし、官軍側は多数の大砲と小銃を持ち、それが堅城に籠っていたため、攻撃はことごとく失敗し陥落させる事は出来なかった。

とにかく、歴女たちが小山のこのセリフを聞いたら、間違いなく仲間に引きずり込もうとしたに違いない。

※38・兵法三十六計第六計『声東撃西』

兵法三十六計は、成立年不明の中国の兵法書。そのうちの6番目が声東撃西で、東で鬨の声を上げて、西から攻撃する陽動作戦の事。

※39・一オンスの慎重は一ポンドの知恵に値する

英語のことわざ。

※40・砲口制退器

マズルブレーキとも。砲の先に取り付ける、側面や上下に穴の開いた部品で、ここから

発射ガスが出る事で砲の反動を抑制する。だが、弾道に悪影響を与えるのと、地面近くで発射した場合、側面などに噴出するガスと、それによって土煙が上がる事で視界が悪化するので、次第に使われなくなった。

※41・T28重戦車

アメリカから欧州に戦車を運ぶのには輸送船に乗せる必要があり、少しでも効率的に搭載するために、主砲も車体に収まる長さで、側面も出来るだけ真っ直ぐに作られていた。結果として輸送効率は高かったが、戦車単体としての性能は凡庸で、M4中戦車の生産が軌道に乗ると、より強力な中戦車の開発が開始された。これがT20系列で、最初に完成したのがT23中戦車である。その構造を流用し、単体でドイツの重戦車に対抗可能な車輌として試作された車輌が本車であった。最大で305ミリという戦艦並みの重装甲と、105ミリ砲を装備したが砲塔は無く、戦車というよりは戦車駆逐車で、後にT95戦車駆逐車と改名されている。また、86トンもの重量を支えるために履帯が片側2列となったが、外側は輸送のために外すのが可能で、外した後は組み合わせて牽引可能であった。これだけ重量がある割にはエンジン出力は低く、路外での機動力や超壕能力は低かった。そのため、5輛の試作に加え最終的に25輛を製造する予定だったが、2輛の試作で終了した。ただ、車輌の部材は確保されていたので、後にアメリカ国内のアルティメットルールでの戦車道用に、少なくとも5~10輛程度が再生産された。これらの車輌にガスタービンエンジ

ンを搭載し、高速で走行するT28がアメリカの戦車雑誌の表紙を飾ったのは有名である。恐らく大学戦車道が使用したのは、こうした車輌の1輌であろう。

※42・T—28

1933年にソ連で制式化された多砲塔式の中戦車。1925年にイギリスで多砲塔のインディペンデント重戦車が作られたのが、世界各国に影響を与えた。だが、多砲塔戦車は見かけの割に装甲も薄く、コストも高かったので、ソ連以外は開発を中止した。ソ連ではT－35重戦車と共に開発を続け、どちらも量産されている。T－28は503輌も量産されたが、複雑な構造によってトラブルが多く、実用性は低かった。

※43・トータス

イギリスでは機動力よりも防御力を優先した、突破用の車輌の開発が複数行われ、その一つが228ミリという重装甲に、3・7インチ高射砲を改良した強力な32ポンド砲（94ミリ砲）を搭載したトータス重駆逐戦車である。79トンの重量を600馬力のロールスロイス・ミーティアエンジンで動かし、最高速度19キロを発揮した。移動砲台として十分な性能で、25輌の生産命令が出されたが、実際には6輌の生産で終わっている。

※44・ジャバウォッキー、バンダースナッチ

どちらもルイス・キャロルの「鏡の国のアリス」に登場する架空の生物。正体や形状は不明であり、よく分からない物である。「鏡の国のアリス」ではジャバウォックとして登場し、映画などでは「ジャバウォッキー」と表記された。

※45・スナーク狩り

同じくルイス・キャロルの作品で、スナークと呼ばれる謎(なぞ)の生物を捕獲しようとする冒険者を描いたナンセンス詩。この作品中にもジャバウォックやバンダースナッチの名が出ている。

※46・ターレットリング

戦車の車体に、砲塔=ターレットをはめ込み、旋回させるための機構。

※47・ギャラクシー・トリッパー

遊園地跡に設置されていた、室内型のジェットコースターで、最新鋭の宇宙船に乗って銀河を旅するというストーリー仕立てとなっている。建物自体は宇宙港という設定で、入り口や通路にそのような装飾が施されている。

※48・ウイスコ型上陸用舟艇

フィンランドのマリン・アルテック社製の上陸用舟艇。ウォータージェット推進で、最大35ノットを発揮可能。但し、継続高校が保有するのはBT・42が搭載可能に大型化された改良型で、その代わりに速力がやや低下している。

※49・ドクターイエロー

新幹線の0系をベースとして黄色く塗られた、線路や架線の状況や電気や信号設備の点検を行うための車輌。

※50・ツァーリタンク、パンジャンドラム

ツァーリタンクは、ロシア帝国が独自に開発した巨大塹壕突破用戦車で、その形状は昔の自転車ように、直径9メートルのスポーク式の巨大な車輪が左右に並んで前輪となっていて、その後ろに伸びた胴体の最後尾に操縦用の車輪があるという三輪車形状をしていた。胴体に砲塔があり、塹壕を乗り越えて上から攻撃をするというコンセプトだが、壊れやすい上に、塹壕を突破するだけの不整地走行能力も持たなかったので、スクラップとなった。

パンジャンドラムは、直径3メートルの車輪の間に筒があるという糸巻きのような形状をしており、筒の部分に1・8トンの炸薬を詰め、車輪のリムに固体燃料ロケットを付けてあった。このロケットによって車輪を回転させ、上陸用舟艇から発進させて、上陸作戦

の時に海岸の陣地を破壊するという計画だった。だが、誘導装置も姿勢安定用のジャイロもないので、当然まともに目標に向かう事もなく、計画は放棄された。

※51・ウィッカム、シミャウィ

ウィッカムはイギリスのウィッカム社が作った小型装甲鉄道車輌で、単体で走行可能であった。

シミャウィはポーランドの装甲列車で、意味は「勇敢な」。9輌編成で、100ミリ砲2門、75ミリ砲2門と機関銃に加え、ルノーFTとTKS豆戦車をそれぞれ2輌ずつ搭載していた。

※52・ジェロニモ

アメリカ先住民族のアパッチ族の戦士で、家族をメキシコ人に騙し討ちで皆殺しにされたので、メキシコに対する戦争のために、各部族から戦士を集める役割を行った。ジェロニモという名は、襲撃を受けたメキシコ人が恐ろしさのあまりに、守護聖人の名を叫んだことから、そう名乗るようになったという。その後、メキシコ、アメリカ双方と戦い、アパッチ族は最後までアメリカと戦ったアメリカ先住民族の一つとなった。ジェロニモは最終的にアメリカ軍の捕虜となる。

※53・ZiS－151多目的トラック

ソ連に1947年から製造された多目的6輪トラックで、ZiSは製造工場の名前。6輪全てに動力が繋がっており、駆動輪になっているので、不整地走破能力に長けている。但し、最高速度は時速60キロと低速である。

※54・ニュルンベルクのケーニヒ門を模したワールドゾーン

ドイツ南部バイエルン州の都市ニュルンベルクは、何度か戦火を浴びて破壊されたが、現在は旧市街を城壁で囲まれた中世の姿に復元してあり、観光都市となっている。ケーニヒ門はその象徴ともいえる巨大な丸い塔で、この遊園地のワールドゾーン出入り口周辺は、ケーニヒ門とその周辺地域をイメージして再現されている。中は中世風の都市や世界各国の遺跡や名所、西部開拓時代のアメリカをイメージしたウェスタンゾーン、時代劇の撮影などにも使われていた江戸ゾーンなどがある。

※55・昭和ゾーン

昭和30年代をイメージした、古き良き東京の街並みが再現されたゾーン。遊園地の開業時は、食堂や休憩所、駄菓子店などがメインであった。アトラクションとしては、懐かしの東京に因んだ映像コーナーがメイン。

※56・勝負は最後の5分間にある

ナポレオン・ボナパルトの名言で、最後まで気を抜くな、もしくは最後まで諦めるなという意味。

※57・江戸ゾーン

遊園地のワールドゾーンの一画にある、江戸時代の建築や文化を集めたゾーン。堀と石垣に囲まれた巨大な大名庭園が作られている。

※58・超音速の貴公子

80〜90年代を代表するF1パイロット、アイルトン・セナに古舘伊知郎が付けた愛称が音速の貴公子であった。セナは1987年には、ロータス・ホンダでF1デビューの中嶋悟のチームメイトにもなり、日本GPでホンダエンジンの母国初表彰台をもたらした。また、自動車部のツナギの色は、黄色のキャメルカラーだったこの当時のロータスを彷彿させる。

※59・フライングフューリアス、パンジャンドラムスウィンガー

フライングフューリアスは、本文中にある通り動力式の巨大なブランコ。

パンジャンドラムスウィンガーは、中央タワーが上下動する巨大な回転ブランコで、回

転中にパンジャンドラムのロケット部から火花と煙が出る。

※60・屋台

中央広場には全部で23台の屋台が並んでおり、代表的な店舗は以下の通りである。名物あんこう鍋、カーネルスッーカ・フライドチキン、SHOP88、フィッシュベッド（海鮮食堂）、フライング・パンケーキ（パンケーキショップ）、ナースホルンのなす焼き、マンシュタイン・バーガー、たいやき、寿司屋、小籠包屋、クレープ屋、ドネルケバブ、もんじゃ焼き。

また、その屋台の前にはエスケイプハウス、マジノハウスというアトラクションが並んでいる。

エスケイプハウスは捕虜（ほりょ）収容所の体感アトラクションで、収容所を脱出した後、飛行機の座席に座ると周辺の景色がぐるぐると回って、まるで墜落しているかのような体験が出来る。またマジノハウスはマジノ要塞（ようさい）をイメージしたミラーハウスで、中に入るとどこまでも要塞が広がっているかのように見えるという。

※61・九一式広軌牽引車（きゅういちしきこうきけんいんしゃ）

日本陸軍が、鉄道部隊用の装輪装甲車として1931年に採用した車輌（しゃりょう）。トラックを

ベース車輌として、ガソリンエンジンで動く装甲車だが、車輪を交換することで鉄道路線上も移動可能だった。

※62・ハッピースカイ、アストロライナーV2

ハッピースカイは、飛行機をイメージしたゴンドラに乗って、ゆっくりと横へと移動するタイプの観覧車。

アストロライナーV2は、ロケット型の遊具の中に入って、中で流れる映像に合わせて遊具自体が振動や上下動を行う体感アトラクション。

※63・ヴォイテクライド

ヴォイテクは、中東でポーランド軍に引き取られたシリアヒグマで、兵士たちに可愛がられて正式にポーランド第2軍団第22弾薬歩兵中隊の一員となった。更に輸送船に乗せるために伍長の階級を得て、正式の軍隊手帳と軍籍番号を得ている。中東から南イタリアまで部隊と共に転戦し、実際に弾薬箱を運んで働いた。ビールやシロップ、タバコが大好き。同部隊のマークは砲弾を担ぐヴォイテクであったが、戦後はスコットランドに部隊と共に移動した。その後は、エディンバラ動物園で余生を過ごし、1963年に22歳で死去。なお、現在でもポーランドではこの部隊のマークを使用したグッズが販売されている。

このライドはヴォイテクをイメージした熊の乗り物で、シートが弾薬箱になっている。

※64・シーザーのメリーチャリオット

回転木馬だが、イメージとなっているのが古代ローマの戦車競技であった。恐らく全体としては、ユリウス・カエサルが再建したローマの大競技場（キルクス・マクシムス）をイメージしているのであろう。一つの戦車の上には、黄金色のカエサルの像が、戦車の上で観衆に右手を上げている。

※65・フロッガー

ライドが上下して跳ね回るアトラクションで、設定としてはMiG23に乗って大空を縦横に飛行（ライドの上下）して、最後に墜落して射出座席で脱出してパラシュートで降下（ライドが一番上まで急に上がって、そこから急降下）するという流れになっている。

※66・M25戦車運搬車ドラゴンワゴン

1944年より生産された、60トンの牽引力を持つ戦車運搬車。戦後も各国で使用され、民間でも重量物運搬車として使用された。

※67・SPA38Rトラック

イタリアのフィアット社傘下にあるＳＰＡ（Società Piemontese Automobili）社が、1933年に設計した軽トラック。35年にはイタリア軍に採用されるが、フランスにも輸出された。55馬力のフィアット18T液冷4気筒ガソリンエンジンを搭載し、最高時速は51キロ。救急車や無線車、自走対空砲などにも改造されている。

著者
鈴木貴昭（すずき・たかあき）
北海道出身
北海道大学文学部哲学科卒業
脚本家、各種考証
代表作は
「ガールズ&パンツァー」シリーズ
スーパーバイザー・OVA脚本
「ストライクウィッチーズ」シリーズ
世界観設定・軍事考証・脚本
「ハイスクール・フリート」原案・脚本など

イラストレーター
才谷屋龍一（さいたにや・りょういち）
ガルパンの新しいPVが公開されると、次の日から模型屋さんの店頭から何か一種、戦車の模型が消えるといった現象が起こってます（笑）ちょっと昔のガンプラの人気が爆発した時の現象に似てる気がして、ガルパンの人気とファンの方の熱意って凄いな～と思ってます。その後、自分の資料探しに毎回涙目になるんですが…

協力／株式会社アクタス
原画／杉本功
仕上／原田幸子
特効／古市裕一
ＣＧ／柳野啓一郎（グラフィニカ）

扉・本文イラスト／才谷屋龍一

装丁／cao.(*PetitBrain)

原作／ガールズ＆パンツァー劇場版製作委員会

ガールズ&パンツァー　劇場版（下）

鈴木貴昭

2018年8月25日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
ＭＦ文庫Ｊ『ガールズ&パンツァー　劇場版（下）』
2018年8月25日初版第一刷発行

発行者　三坂泰二
発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

メディアファクトリー　カスタマーサポート
［WEB］https://www.kadokawa.co.jp/
（「お問い合わせ」へお進みください）